
大乱闘スマッシュブラザーズX ～亜空の使者・本編～

知蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱闘スマッシュブラザーズX〜亜空の使者・本編〜

【Nコード】

N9955E

【作者名】

知蔵

【あらすじ】

大乱闘スマッシュブラザーズXの亜空の使者を小説化した作品。序章編の続編でもあるので本作を読む前に序章編を読む事をオススメします。あとネタバレがありますので、避けたい人にはオススメできません。

第一話　強襲されしスタジアム

ここは空中に浮かぶスタジアム。ここで今まさに闘いが始まろうとしていた。

？

「そろそろ始まりそうね。」

？

「楽しみですね。」

ある観客席にピンク色のドレスを着た女性と装飾品の衣装を身に纏った女性が楽しくお喋りをしていた。

？

「マリオが勝つといいですね、ピーチ。」

？

「フフフ、そうなのいいわねゼルダ。」

ピンク色のドレスの女性はキノコ王国の姫・ピーチで、装飾品の衣装の女性はハイラル王国の姫・ゼルダであった。

アナウンス

「それでは選手の入場です！」

アナウンスの声と共に二つのフィギュアが現れる。

アナウンス

「最初の選手はマリオ選手です！」

アナウンスの紹介が終わると、赤い帽子に青いオーバーオールを着て髭を生やした男・マリオのフィギュアが実体化し動き出す。

アナウンス

「そして、その対戦相手は……カービィ選手です！」

再び紹介が終わると、ピンク色で全体が丸いボールのような生物・カービィのフィギュアも実体化し動き出す。

マリオ

「正々堂々と闘おうぜ！」

カービィ

「ぽよー！」

アナウンス

「それでは開始します！レディー……………ゴー！！」

マリオ

「いくぞー！！」

カービィ

「ぽよーっ！！」

マリオとカービィはアナウンスの合図と共に、お互い駆け出してゆく。

？

「いけっ！そこだ！いいぞー！！」

一方この天空界と呼ばれる世界のとある神殿に天使の姿をした少年が小さな泉に映っているマリオとカービィの試合を観戦していた。

？

「この二人強いなあ……………僕のパルテナ親衛隊に入隊させたいくらいだ。」

少年の名はピット。この天空界を治める女神・パルテナを守るパルテナ親衛隊の若き隊長である。

ピット

「よしっ！その調子だ！やれーっ！！」

ピットは試合に夢中になって叫び続ける。

アナウンス

「勝者はマリオ選手!!」

アナウンスの声が響き、観客から歓声が沸き起こる中マリオはフィギュアになったカービィのプレートに触れる。

パアアアッ。

カービィ

「……………ぽよ?」

カービィは元に戻り、ゆっくりと立ち上がる。

マリオ

「お前カービィって言ったか、なかなか強かったぞ。」

カービィ

「ぽよ?」

カービィは顔を傾ける。

マリオ

「また勝負しようぜ！」

マリオはカービィに右手を差し出す。

カービィ

「ぽよっ！」

カービィは小さな右手を差し出し、マリオと握手を交わす。

ゼルダ

「いい勝負でしたね。」

ピーチ

「ええ、あのカービィって子もマリオと互角に闘ってたわ。」

ピーチとゼルダはマリオ達に拍手を送りながら両者を讃えていた。

カービィ

「ぽよっ！？」

マリオ

「ん？あれは……………」

突然赤みがかった雲と共に巨大な戦艦らしき物がスタジアムの上空を浮上していた。

マリオ

「な、何だアレは！？」

カービィ

「ぽ！？ぽよぽよっ！！」

マリオ

「カービィ、あの戦艦を知ってるのか？」

カービィ

「ぽよ！ぽよぽよっ！！」

カービィは激しく頷く。

ゼルダ

「アレは一体……………」

ピーチ

「あ！アレを見て！！」

ピーチの指さす方を見ると、戦艦のハッチが開きスタジアム内に黒い物体を巻き散らす。

マリオ

「この黒い物体は何だ？」

カービィ

「ぽよ？」

すると黒い物体は一ヶ所に集結し、人型の姿へと変化する。

マリオ

「なっ！？」

カービィ

「ぽよっ！？」

ピーチ

「な、何なのアレは！？」

ゼルダ

「私にも分かりません…………でも何だか怪しい感じがします。」

そう言うとゼルダは席を立ち上がる。

ピーチ

「どうしたのゼルダ？」

ゼルダ

「私達もマリオ達の所へ行きましょう！」

ピーチ

「え！？そ、そうね！」

ゼルダとピーチは急いでマリオ達の元まで駆け出す。

マリオ

「こりゃあ、やるしかないな…………。」

カービィ

「ぼよ…………。」

シュッ！！

ゼルダ

「待ってマリオ！」

マリオ

「ゼ、ゼルダ姫！？」

ピーチ

「私達も加勢するわ！」

マリオ

「ピーチ姫まで！？」

ゼルダはフロルの風で、ピーチはパラソルでフワフワとマリオ達の元へやってきた。

マリオ

「でも二人には危険すぎます！」

ピーチ

「大丈夫よ！いつもクッパに拐われて少し鍛えてるから！」

ゼルダ

「私も魔法が使えますから。」

マリオ

「いや、そういう問題じゃ……………」

カービィ

「ぽよぽよっ！…！」

マリオはカービィの声に反応すると、人型の生物達はどんどん増えてマリオ達に近づいてゆく。

ゼルダ

「どうやら話をしてる暇はないようですね。」

ピーチ

「そのようね。」

マリオ

「よし、みんなでやっつけよう！…！」

カービィ

「ぽよっ！…！」

四人は一斉に人型の生物まで駆け出す。

マリオ

「ファイアーボール!!」

ボツ!ボツ!ボツ!

カービィ

「ファイナルカッター!!」

ザシュツ!!

ピーチ

「ピーチボンバー!!」

ボンツ!!

ゼルダ

「デインの炎!!」

ボワツ!!

四人の攻撃が人型の生物達を一掃させる。

ピーチ

「ふう……………何とか片付いたようね。」

カービィ

「ぽ、ぽよ……………」

ゼルダ

「それにしても、さっきのは一体……………」

？

「プリム達を一掃するとは中々やるな。」

マリオ

「！？だ、誰だ！？」

マリオ達は声のする方を見ると、全身に緑色のフードを纏った者が巨大な丸い物をぶら下げて現れた。

マリオ

「お前は何者だ！？」

？

「我が名はエインシャント卿……………亜空軍の幹部だ。」

ゼルダ

「エインシャント卿？」

ピーチ

「貴方がこんな事をした張本人ね！！」

エインシャント卿

「……………答える義務はない。」

ポイツ。

ドスン！

エインシャント卿はぶら下げてる巨大な丸い物を落下させる。

カービィ

「ぼよっ！？」

すると二体のロボットが現れて、丸い物の両端をお互い引っ張るとゲートが開かれてカウントが開始される。

マリオ

「何をするつもりだ？」

エインシャント卿

「今に分かる………それより早く逃げた方がいいぞ………この亜空間爆弾が発動する前にな。」

そう言い残すと、エインシャント卿は戦艦に向かって飛んでゆく。

ゼルダ

「どうゆう意味でしょう？」

マリオ

「とにかく、あの機械を止めなくては………。」

マリオは丸い物に向かって走り出すが………。

ドスン！！

マリオ

「な、何だ!？」

突然後ろから何かが落下した音が大きく響く。

ピーチ

「今度は何なの？」

ヒュユツ。

ドカアアツ!!

マリオ

「うわあああつ!!」

マリオに向かって巨大な弾が発射され、マリオはスタジアムの外まで飛ばされてしまった。

カービィ

「ぽよよっ!!」

カービィは慌ててマリオの後を追おうとするが……。

ピーチ
「キヤーーツ!!」

カービィ
「ぽよっ!？」

ピーチの叫び声にカービィは後ろを向くと、ゼルダとピーチが巨大な花の怪物・ボスパックンの持つ二つのカゴに閉じ込められていた。

カービィ
「ぽよ……………」

ゼルダ
「しまった……………」

ピーチ
「カービィ! 貴方は早く逃げて!!」

ボスパックン
「グワアアアッ。」

ボスパックンはピーチとゼルダが入ってるカゴを乱暴に振り回す。

カービィ

「ぽよ！ぽよぽよっ！ー！」

カービィは怒りに身を任せて、ボスパックンに向かって突進する。

ボスパックン

「グオオオオッ。」

ボスパックンは勢い良くジャンプする。

カービィ

「ぽよ！？」

ドッスウウンー！

カービィ

「ぽよっ！ー！」

カービィはボスパックンの落下した時の衝撃を受けてしまう。

ゼルダ

「カービィ!!」

ピーチ

「大丈夫!？」

カービィ

「ぽ……ぽよ……。」

カービィはゆっくりと立ち上がる。

ボスパックン

「ウオオオオツ。」

ボスパックンはカービィに向かってゼルダが入ってるカゴを振り回すが……。

カービィ

「ファイナルカッター!!」

ザクッ!!

ボスパックン

「グギャアアッ!!」

カービィはファイナルカッターでボスパックンの腕を切り裂いた。

ガシャーーン!!

ゼルダの入ったカゴはボスパックンの手から離れ、床に落下する。

カービィ

「ぽよぽよっ!」

更にカービィはボスパックンの頭上まで浮かび上がると……。

カービィ

「ストーン!!」

ゴオオオオン!!

ボスパックン

「ギャアアアッ!!」

カービィはボスパックンの頭上でストーンになり、ボスパックンの頭に直撃させる。

ボスパックン

「ガアアアッ！」

ボスパックンは頭から湯気を出しながらカービィを踏み潰そうとするが……。

ゼルダ

「デインの炎!!」

ボオオオオン!!

ボスパックン

「グギヤアアア!!」

ボスパックンの体が突然爆発し、全身炎に被われてしまう。

カービィ

「ぼよっ?」

ゼルダ

「間に合ったようね。」

カービィが後ろを向くと、ゼルダがカゴから出ていた。

ゼルダ

「貴方のお陰で脱出できました……………本当にありがとう。」

カービィ

「ぽよ、ぽよぽよ！」

ゼルダに頭を撫でられたカービィは顔を赤く染める。

？

「おっと、それ以上動くな！」

カービィ

「ぽよっ！？」

ゼルダ

「っ！？」

カービィとゼルダは声のした方を向くと、バイカー風の服装にジグザグ型の髭に大きな鼻が特徴の中年男が巨大な銃のような物を二人に向けていた。

カービィ

「ぽ、ぽよ……………」

ゼルダ

「あ、貴方は……………」

？

「俺様か？俺様はワリオ様だ！」

ゼルダ

「ワリオ……………もしかして貴方も亜空軍とやらの一員！？」

ワリオ

「さあな、お前らにや関係ないね！今からこのダークキャノンの餌食になってもらうんだからな！！」

そう言つとワリオはダークキャノンの引き金に手をやる。

ゼルダ

「くっ…………。」

カービィ

「ぽよ…………。」

ガシャン！

ワリオ

「…………ん？」

ピーチ

「いたたた…………。」

壊れたカゴからピーチが頭を抑えながら出てくる。

ワリオ

「ピーチ姫か、よし！まずは…………。」

カチャッ！！

ワリオはダークキャノンをピーチに向ける。

カービィ

「ぽよ!?!」

ゼルダ

「ピーチ! 逃げて!」

ピーチ

「え?」

ワリオ

「もう遅い!」

ドキュユyun!!

ピーチ

「きゃっ…………。」

ゴトツ!

ピーチはダークキャノンから放たれた矢印の弾に貫かれ、一瞬にしてフィギュアとなってしまった。

カービィ

「ぽ、ぽよ!?!」

ゼルダ

「ど、どうして……。」

ワリオ

「知りたいか?このダークキャノンに撃たれた奴は一瞬でフィギュアになっちまうんだよ。」

ゼルダ

「そ、そんな物が……。」

ワリオ

「よいしょっと!」

ワリオはピーチのフィギュアを持ち上げる。

ワリオ

「ピーチ姫のフィギュアは貰ってくぜ!」

ゼルダ

「あ！お待ちなさい！！」

カービィ

「ぽよーっ！！」

ゼルダとカービィは慌ててワリオの後を追うが……………。

カービィ

「ぽよっ？」

カービィは亜空間爆弾と呼ばれる機械のカウントに目を奪われる。

カービィ

「ぽよ……………」

ふとカービィはエインシャント卿の言葉を思い出す。

エインシャント卿

『それより早く逃げた方がいいぞ……………この亜空間爆弾が発動する前にな。』

カービィ

「ぽよっ!!」

そして亜空間爆弾のカウントが1秒を切った時……。

カービィ

「ぽよっ!」

ゼルダ

「ちよっとかービィ!?!」

カービィはゼルダの手を引っ張ると……。。

ゴオオオツ!!

スタジアムは黒い物体に被われてしまう。

カービィ

「……………ぽよっ。」

ゼルダ

「ありがとうカービィ、また助けられたわね。」

ゼルダとカービィはワープスターに乗り、間髪逃げて出していた。

ゼルダ

「それより、一体何が起きているの?」

カービィ

「ぽよ。」

ゼルダ

「ともかく、今はこの場から離れましょう。」

カービィ

「ぽよっ！」

二人を乗せたワープスターはスタジアムから遠ざかる。

ピット

「こゝこれは!？」

スタジアムで起こった出来事を一部始終見ていたピットは驚愕する。

ピット

「一体何が起こっているんだ？」

？

「ピット。」

ピット

「!?!……………パ、パルテナ様!？」

ピットが後ろを向くと、緑色の長い髪に黄金に輝く女神・パルテナが立っていた。

パルテナ

「ピット、こちらへ……………」

ピット

「は、はい！」

ピットはパルテナに近づくと、急いで跪く。

ピット

「パルテナ様……………一体地上では何が起きているのでしょうか？」

パルテナ

「私にも分かりません……………ですが、何か良くない事が起きようとしているのは確かです。」

ピット

「そうですか……………」

パルテナ

「ピット、貴方にこれを……………」

そう言うとパルテナはピットに弓のような物を渡す。

ピット

「これは？」

パルテナ

「それはパルテナの神弓といって、弓だけでなく双剣として使う事も出来る武器です。」

ピット

「そんな凄い物を何故僕に……………？」

パルテナ

「その武器を使って地上へ降り立ち、起ころりうる災いから人々を救うのです！」

ピット

「……………分かりました！このパルテナ親衛隊隊長ピット、名に恥じぬよう頑張ります！！」

ピットはそう宣言すると、急ぐように神殿の出口まで駆け出す。

ピット

「パルテナ様！行って来まーす！！」

パルテナ

「気をつけてね、ピット……………」

パルテナに見送られる中、ピットは階段を駆け上がり扉の前に立ち扉に背を向けると……………。

ギイイイッ。

扉はゆっくり開くと同時にピットは後ろから外へダイブし、そのまま下降する。

ピット

「……………よし！いざ地上へ！ー！」

ピットは体勢を整えて雲海を飛翔する。

ピット

「まずは、あの巨大戦艦を追わないと……………ん!？」

しばらく飛翔してたピットは何かの気配に気づき、足場に着地する。

ピット

「ア、アレは!?!」

ピットの目の前をスタジアムを強襲した戦艦が通過する。

ピット

「見つけたぞ！巨大戦艦め……………あっ！？」

戦艦のハッチが開かれ、黒い物体を巻き散らし、プリムと呼ばれる生物達が次々と現れる。

ピット

「コイツら、スタジアムを襲った奴ら……………よし！僕が相手だ
！！」

ピットはすぐに神弓を双剣にして構えると同時に、プリム達に駆け寄る。

ピット

「そりゃあー!!」

ザシュッ! ザシュッ!

ピットは双剣を振り回し、プリム達を切り裂く。

ピット

「!!.....後ろか!!」

シュッ!

ザクッ!!

そして、後ろから襲いかかるプリムをパルテナアローで倒す。

ピット

「ふう……………何とか全員やつけたようだ。」

ピットは再び飛翔しようとした時……………。

ピット

「ん?……………あ!あの人は!!」

雲海の中にマリオのフィギュアが埋もれていた。

ピット

「早く助けてあげないと……………!!」

ピットは急いでマリオのフィギュアに近づく。

パアアアッ。

マリオ

「うっっん……………」

ピットがプレート部分に触れると、マリオは元に戻る。

ピット

「あの……………大丈夫ですか？」

マリオ

「ああ、何とか……………それより君は？」

ピット

「あ！僕はピット、パルテナ親衛隊の隊長です。」

マリオ

「ピットか……………俺はマリオ、宜しく！」

ピット

「こゝ、こちらこそ……………」

マリオとピットは握手を交わす。

マリオ

「あーそれよりピーチ姫達が……。」

ピット

「じ、実はその事なんですが……。」

マリオはピットに全てを聞いた。

マリオ

「そうか……………ピーチ姫が……………」

ピット

「はい、でも残りの二人は何とか脱出できたようです。」

マリオ

「そうか！良かった……………」

マリオはそれを聞いて少し安心した。

マリオ

「でも何故ワリオがそんな事を……………」

ピット

「分かっているのは、あの戦艦と何か関係がありそうって事ですな。」

マリオ

「ああ………よし！俺もあの戦艦を追っぞ！！」

ピット

「じゃあ、目的は同じですね。」

マリオ

「ああ！そうと決まれば出発だ！！」

ピット

「はい！！」

マリオとピットは雲海の中を勢い良く走り出す。

ピット

「マリオさん！戦艦を発見しました！！」

マリオ

「何！本当か！？」

ピット

「はい！彼処に……………」

ピットが指さす方向に戦艦が浮上していた。

マリオ

「やっと見つけた！」

ピット

「でも、あんな遠くに……………」

ブオオオオツ。

マリオ

「ん！？」

突然一機の戦闘機がマリオ達の頭上を横切る。

ピット

「アレは……………」

マリオ

「あの戦闘機、戦艦に向かって飛んでいる？」

マリオの言う通り、戦闘機は戦艦に向かって一直線に飛んでゆく。

ゼルダ

「ここまで来れば、もう大丈夫ね。」

カービィ

「ぽよつ。」

一方ゼルダとカービィはワープスターで雲海を浮上していた。

ゼルダ

「それにしてもここは……………ん!？」

カービィ

「ぽよつ!？」

二人がふと後ろを見ると、例の戦艦が浮上していた。

ゼルダ

「あの戦艦だわ！」

ゴツツ！！

カービィ

「ぽよっ！？」

ゼルダ

「きゃあっ！？」

ワープスターが戦艦にぶつかり、カービィとゼルダは弾き飛ばされるが…………。

カービィ

「ぽよー！ぽよぽよー！」

カービィはゼルダに足を掴ませて、顔を風船のように膨らませ、手を激しく上下に振りながら戦艦の甲板上まで飛行する。

カービィ

「ぽ…………ぽよ…………ぽよ…………ぽよ…………。」

カービィは甲板に着くなり激しく息をする。

ゼルダ

「これで貴方に助けてもらったのは何度目かしら。」

カービィ

「ぽよ〜?」

ドドドドドッ！

カービィ

「ぽよっ!?!」

戦艦が近づいてきた戦闘機に向かって発泡してきた。

ゼルダ

「アレは一体……………」

戦闘機は戦艦の攻撃を難無く避けるが…………。

ウィィィン。

ドガッ!!

突然伸びたロボットアームに激突してしまった。

カービィ

「ぽよ!?!」

ゼルダ

「こ、こっちに墜ちて来るわ!!」

戦闘機は墜落し、二人がいる甲板に向かって墜ちてくる。

ブワアアアッ!!

ゼルダ

「きゃあああつ!!」

カービィ

「ぽよ~~~~っ!!」

二人は巻き添えを食らって戦艦から放り出されてしまった……。

第二話　ジャングルで大事件

あるジャングルにバナナを大量に積んだ乗り物が駆け出してゆく。

？

「ウホーッ！！」

ボカツ！！

？

「ぐわっ！！」

バキッ！！

？

「ぐえっ！！」

ジャングルの奥で赤いネクタイを着けたゴリラがキノコや亀の姿をした怪物を蹴散らしていた。

？

「バナナを返せー!!」

ゴリラは胸を叩きながらジャングルの外へと出る。

?

「ウホッ!? あそこか!!」

ゴリラは崖の上からバナナを積んだ乗り物を発見する。

?

「クリボー! キラーを発射しろ!!」

クリボー

「よーし! 発射ー!!」

ドカン! ドカン! ドカン!

クリボーと呼ばれたキノコは大砲を発射させると、キラーと呼ばれる弾がドンキーに向かって飛んでくる。

?

「ドンキー! オイラに任せて!!」

ドンキーコングと呼ばれたゴリラから、赤い帽子に赤い服を着た小猿が飛び出す。

パン！パン！

小猿は木製の二丁拳銃を取り出し二つ同時に発射すると、ピーナッツが飛び出る。

ボン！ボン！

ピーナッツはキラーに命中し、爆発する。

ドンキー

「デイディー！もう一発くるぞ！！」

デイディー

「分かってるよ！」

パン！パン！

更にディディーは、残りのキラーにピーナッツを命中させた。

ボカーン!!

そして、ディディーが着地した同時にキラーは二匹の背後へ転がり、爆発を起こす。

ディディー

「どう？オイラのピーナッツ・ポップガンの威力は？」

ドンキー

「流石だよ、ディディー。」

ディディー

「えへへ、やっぱり？」

ディディーは照れ臭そうに頭をかく。

ドンキー

「あ！バナナを取り返せさなきゃ!!」

ディディー

「そ、そうだった!」

ドンキーとディディーは慌てて崖から飛び上がる。

ドンキー

「ジャイアントパンーチ!!」

ドカアアツ!!

デイディー

「くらえ!ピーナッツ・ポップガン!!」

パン!パン!

ドンキーとデイディーは次々と現れるクリボーやノコノコを蹴散らしていった。

デイディー

「何かドンキーと一緒に冒険するなんて 随分久しぶりだね。」

ドンキー

「確かに、クレムリンにバナナを盗まれて以来だな。」

デイディー

「そう言えばそうだよね……………あ!また続々現れた!!」

ディディーがそう叫ぶと、クリボーやノコノコが沢山現れる。

ドンキー

「よし、こうなったら……………ハンドスラップ!!」

バン!バン!バン!バン!バン!バン!バン!

クリボー

「あわわっ!!」

ノコノコ

「う、動けない!!」

ドンキーは地面を連続でおもいきり叩くと地面が揺れて、クリボー達は動けなくなってしまう。

ドンキー

「続いてスピニングコング!!」

ドガガガガッ!!

クリボー

「ぐわゝゝっ!!」

ノコノコ

「ひえゝゝっ!!」

ドンキーは高速回転しながらクリボー達に体当たりする。

デイデー

「やったー!流石ドンキー!!」

ドンキー

「……………め、目が回るゝゝっ。」

デイデー

「えー!?……………まったく、肝心な所が抜けてるんだから。」

ドンキー

「……………だいぶ奥まで来たな。」

ディディー

「あ！アレを見て！！」

ディディーの指さす方を見ると、大量のバナナが置かれてあった。

ドンキー

「ウホー！遂にバナナを見つけたぞー！！」

デイディー

「やったやったー!!」

ドンキーとデイディーは嬉しさのあまり胸を叩く。

ドスン!!

デイディー

「んっ？」

？

「まんまと罾に掛かりおつたな、猿共め！」

ドンキー

「その声は……………」

二匹は足音の方を向くと、背中の甲羅にトゲを付けて頭に角を生やした亀がいた。

ドンキー

「やっぱりクッパか！」

ディディー

「お前が手下達にバナナを盗ませたのか!!」

クツパ

「そつだ、お前達をおびき寄せる為にな!」

ディディー

「何だところ!?!お前なんかオイラがやつつけてやる!」

ディディーはドンキーの前に出て、クツパに向かって構える。

クツパ

「ほお、姿勢のいいチビだな……………いいだろう!まずお前からコイツをくらわせてやる!」

クツパはダークキャノンを構える。

ドンキー

(ウホ!?!あれは一体……………。)

クツパ

「くらえー!!」

ドキユユユン!!

クツパはダークキャノンを放つと、矢印の弾がディディーに一直線に飛ぶ。

ドンキー

「ディディー! 逃げろ!!」

ディディー

「え?」

ボカアアアツ!!

ディディー

「ウキヤッ!?!」

ドンキーはディディーを逃がすべく、協力なパンチでディディーを遠くへぶっ飛ばす。

ディディー

「ドンキー!!」

ディディーはドンキーが矢印の弾に貫かれる様子を見ながら遠くへ
吹っ飛ぶ。

マリオ

「待てー！エインシャント卿ー！」

マリオとピットは平地でエインシャント卿を追いかけていた。

エインシャント卿

「フン、しつこい奴らだ。」

マリオ

「マリオジャンプー！」

ピョーン！

マリオはエインシャント卿に向かってジャンプするが届かない。

マリオ

「もうちょっとなのに……………」

ピット

「それっー！」

マリオ

「うおっ!？」

ピットはマリオの頭を踏み台にしてジャンプするが、エインシャント卿は更に上昇して届かなくなる。

ドスン。

マリオ

「ムギユ！」

ピット

「くそっ!逃がしたか……………」。

エインシャント卿はそのまま空の彼方へと飛び去ってゆく。

ピット

「マリオさん、後を追いかけま……………」。

マリオ

「ピット、酷いじゃないか……………人を踏み台にするなんて……………」。

ピット

「あ、すみません！つい……………」

ピットは倒れてるマリオに慌てて近寄る。

その頃、ディディーはドンキーの元へ行こうと枝から枝へ飛び移っていた。

ディディー

「早くドンキーの元へ行かなきゃ……………ん？」

湖の所まで着くと、一機の戦闘機が煙を上げて墜落していた。

ディディー

「ありゃ何だろ？」

ディディーは戦闘機に近づこうとするが……………。

ザッパーン！

？

「グウウウツ。」

湖から竜の姿に緑色の体の天空ポケモン・レックウザが現れる。

ディディー

「へ、蛇の化け物だ!!」

レックウザ

「グワアアツ。」

ドカーン!!

ディディー

「うわぁっ!!」

レックウザは口から電気の塊を吐き出し、戦闘機を破壊する。

レックウザ

「ガアアツ!」

ディディー

「うわっ! 助けてっ!」

レックウザは大きな手で素早くディディーを捕まえる。

ディディー

「オ、オイラを食べても美味しくないよ!!」

レックウザは大きな口を開けながら、ディディーを近づけるが……

バツ！

燃え上がる戦闘機から何物かが飛び出てくる。

？

「フォックスイリジョン！」

レックウザ

「ゲウツ！？」

その者は素早い動きでディディーをレックウザの手から引きはがす。

？

「怪我は無いかい？小猿くん。」

白いジャケットに戦闘機のパイロットの服装をした狐がディディーを心配そうに尋ねる。

ディディー

「あ、ありがとう狐さん……………」。

？

「き、狐……………俺の名はフォックス！雇われ遊撃隊・スターフォックスのリーダーだ。」

ディディー

「すたーぶおつくす？」

フォックス

「小猿くんには分からないかな？」

ディディー

「ムッ、小猿じゃない！オイラはディディーコングだい！！」

フォックス

「これは悪かった、宜しうなディディー……………」。

レックウザ

「ガアアアッ！」

レックウザは再び口から電気の塊を吐き出す。

ディディー

「あ！危ない！！」

フォックス

「ムッ！リフレクター！！」

フォックスは腰に付けてる機械のスイッチを押すと、六角形のバリ
アがフォックスを包む。

ドカアアッ！！

レックウザ

「グワアアアッ！！」

レックウザは跳ね返った電気の塊を喰らってしまった。

ディディー

「やった！やっつけたぞー！！」

フォックス

「いや、まだだ!！」

ザパーン!!

レックウザ

「ガアアッ!！」

再びレックウザが湖から出てきた。

ディディー

「わっ!しぶといな〜!！」

フォックス

「闘いはこれからって事だな!！」

レックウザ

「ゲガアアッ!！」

レックウザは空へ舞い上がると、フォックスの頭上で止まる。

ディディー

「な、何だ?」

レックウザ

「ガアアアッ！」

レックウザは物凄いスピードでフォックス目掛けて落下してくる。

フォックス

「は、速い！……このスピードじゃ避けられない！！」

デイディー

「危ない！！」

ボオオオン！！

フォックス

「……………た、助かった……………わっ！？」

フォックスが目を開けると、背中にジェットがついている二つの樽を背負ってるデイディーに掴まれていた。

デイディー

「ふうっつ、危機一髪だったな。」

フォックス

「デイ、デイディー！？その背中に背負ってる物は……………」

デイディー

「これ？バレルジェットといって、クランキー爺さんが作ってくれたんだ！」

デイディーはフォックスを掴みながら、自慢げに説明する。

フォックス

（ジェット機か……………俺もスリッピーに頼んで作ってもらおうかな……………」

レックウザ

「ガアアアッ！！」

フォックスが考えている中、レックウザが地面から突き出てきて、そのままデイディーに向かってくる。

デイディー

「わっっ！こっちへ来たっ！！」

フォックス

「ディディー、俺にいい考えがある。」

ディディー

「え、何々？」

フォックス

「それはな……………」

フォックスとディディーはレックウザから逃げながら、ヒソヒソ話を始めた。

ディディー

「分かった！それでいこう！！」

フォックス

「よし！それじゃ、頼むぞディディー！！」

ディディー

「OK！！！」

フォックスの掛け声と共に、ディディーは真上に上昇する。

レックウザ

「ウガアアッ。」

レックウザもディディーの後を追いつながら上昇する。

ピカーッ!!

レックウザ

「ゲウウッ!？」

レックウザは太陽の光に目を奪われる。

フォックス

「今だ!ディディー!!」

ディディー

「よーし!そりゃー!!」

ディディーはフォックスをレックウザに向けて投げた。

フォックス

「ファイアー!!」

ドオオオオン!!

レックウザ

「グワアアッ!!」

フォックスの体が炎に包まれ、そのままレックウザに体当たりする。

レックウザ

「ウ…………ガ…………。」

ザッパーーン!!

レックウザはそのまま湖の中へ倒れていった。

フォックス

「よっしゃ!!」

ディディー

「やったやった!!」

二人は無事に地面に到着する。

ディディー

「あれ？オイラ何か大事な事を忘れてるような……………」

ディディーは腕を組みながら考え込む。

フォックス

「こちらフォックス、誰か応答せよ。」

一方フォックスは無線で仲間に連絡をとろうとしていた。

ディディー

「あっ！思い出した！！」

ぐいつ！！

フォックス

「うおっ！？」

ディディーはフォックスの襟を引っ張る。

ディディー

「ねえねえ！フォックスにちょっと頼みがあるんだけど……………」。

フォックス

「悪いけど、後にしてくれ。」

ディディー

「ちよっ、ちよっと！！」

フォックスはその場から立ち去ろうとするが……………。

ぐいっ！！

フォックス

「ぐおっ！？」

ディディー

「いいから一緒に来てってば！！！」

フォックス

「お、おい……………」

ディディーは再びフォックスの襟を掴み、強引に引っ張り何処かへ連れゆく。

フォックスはイカダの上でディディーにこれまでの事を聞いた。

フォックス

「……………成程、そのクッパって奴に君の相棒が捕らえられたって訳か。」

ディディー

「そうなんだ……………」

ディディーは下に俯いたまま答える。

フォックス

「元気出せよ！俺もそのクッパって奴を懲らしめてやるからさ！」

ディディー

「本当！？ありがとうフォックス！！！」

フォックス

「ちよっ、苦しい……………」

ディディーはフォックスにおもいつきり抱き着く。

ディディー

「さて、そろそろ上陸しよう。」

そう言うと、ディディーはイカダを陸へ近づけて、二人はイカダから降りる。

ディディー

「確かこの辺りに盗まれたバナナがあつたハズだけど……………」

フォックス

「……………この辺りには何もないな。」

ドスン！ドスン！

フォックス

「だ、誰だ！？」

フォックスが足音に反応し後ろへ振り向くと、全身真っ黒なクツパが現れた。

ディディー

「フォックス！アイツがクツパだ！！」

フォックス

「コイツが……………」

クツパ？

「ガアアッ！」

クツパは突然フォックスに向かって走り出した。

フォックス

「ムッ！」

クツパ？

「ゲガアアッ！」

クツパはフォックスに向かって口から炎を吐いた。

フォックス

「おっと！」

フォックスは難無く避ける。

クツパ？

「ガアアアッ！」

更にクツパは鋭い爪をフォックスに向かって振り回す。

フォックス

（くっ、意外と素早いな……………。）

フォックスはギリギリ避ける。

ディディー

（大変だ、オイラも何とかしなきゃ……………そうだ！！）

ディディーは何処からかバナナを取り出すと、一思いに食べる。

ディディー

「ムシャムシャ……………あゝ、美味しかったゝ。」

ディディーはバナナを食べた後、クツパの所まで走る。

クツパ？

「ガアアアッ！」

フォックス

（ハアッハアッ……………くそ、避けるのが精一杯だ。）

フォックスの息が段々荒くなる。

ディディー

「おゝい！クツパ！！」

クツパ？

「グウウツ？」

フォックス

（ディ、ディディー！？）

ディディーの声にクツパの攻撃が止まる。

ディディー

「やゝい、ノロマの亀〜！ここまでおいで〜！！」

ディディーは舌を出しながら、クツパを挑発する。

クッパ？

「グアアアッ！！」

クッパはディディーに向かって走り出した。

フォックス

「ディディー！逃げる！！」

ディディー

「へへっ、引つ掛かったな。」

ディディーはクッパに後を追われながら辺りに逃げ回る。

フォックス

（一体何をするつもりだ？）

フォックスはただディディーの様子を伺っていた。

ディディー

「今だ！それっ！！」

ディディーはバナナの皮を捨てる。

フォックス

（ま、まさかあのバナナの皮で奴を転ばせようとして……………幾
ら何でも古典的すぎる……………。）

フォックスは頭を抱えるが……………。

ツルツ。

クッパ？

「グッ!？」

ドッスーン ！！

クッパはバナナの皮を踏んで、滑って転んでしまった。

ディディー

「やったー！作戦大成功だー！！」

フォックス

（い、今時バナナの皮で転ぶとは……………。）

ディディーが喜ぶ中、フォックスは啞然となる。

ディディー

「フォックス！今のうちだ！！」

フォックス

「お、おう！……………フォックスイリレーション！！」

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

クツパ？

「ゲガアアッ！！」

フォックスは高速でクツパに連続で体当たりを繰り返す。

フォックス

「ディディー！とどめだ！！」

ディディー

「よし！ダブルリアット！！」

ドガガッ！！

クツパ？

「グワアアッ！！」

ディディーの攻撃が決まり、クツパは吹っ飛ばされると同時にフィギュアになってしまう。

ディディー

「やったー！クツパをやっつけたぞー！！」

フォックス

「やったな、ディディー。」

二人はクツパを倒し、喜びを分かち合う。

ディディー

「あ、そうだ！」

ディディーはクツパのフィギュアに近づく。

デイデー

「このっ！ドンキーを何処へやった!!」

デイデーはクッパのフィギュアに軽く突いたり体当たりしたりするが……。

シュウウウツ。

デイデー

「ウキヤッ!？」

フォックス

「なっ!？」

突然クッパのフィギュアが溶けてしまった。

デイデー

「と、溶けちゃった!？」

フォックス

「どうゆう事だ?」

クツパ

「こつゆつ事だ!!」

ドキュユン!!

フォックス

「危ない!!」

デイディー

「うわぁ!!」

突然矢印の弾が二人に向かってくるが、間髪を避ける。

フォックス

「誰だ!？」

フォックスが弾が飛んできた方に怒鳴ると……………。

クツパ

「ガハハハ!よく避けられたな!!」

そこには、ダークキャノンを構えたクツパがいた。

ディディー

「ク、クツパ！？さっきやつつけたのに……………」

クツパ

「残念だったな、お前達が倒したのは影虫で作った我輩の偽物だ。」

フォックス

「影虫？」

クツパ

「もう一発くらえ！！」

ドキュユン！！

ボカーン！！

クツパの放った弾が地面に命中し、爆発が起きる。

ディディー

「ケホツケホツ……………くそ！よくもやったな！！」

ディディーは煙から出ようとするが……………。

フォックス

「ディディー！逃げるぞ！！」

ディディー

「ウキヤッ！？」

フォックスはディディーの腕を引っ張りながら、煙に紛れて走り出す。

ディディー

「な、何すんだよ！？離してよ！！！」

フォックス

「このままでは俺達もやられてしまっ！ここは一旦退くぞ！！！」

ディディー

「ちくしょー！覚えてろよ！！！」

ディディーは叫びながらフォックスに引っ張られ、フォックスは崖から飛び降りる。

クツパ

「逃げたか……だが、我輩から逃げられると思うなよ。」

クツパは怪しい笑みを浮かべる。

第二話〱ジャングルで大事件〱（後書き）

書いてて思ったのですが、小説に戦闘物の話を書くのは大変です。でもそこは上手く書きたいと思います！感想や意見をお待ちします。

第三話〜二人のPSI少年とポケモントレーナー〜（前書き）

今回の話にはリュカ達が登場します。口調は原作のイメージに合わせてたつもりです。自分は原作基準でキャラの口調を合わせていますので、宜しくお願いします！

第三話　二人のPSI少年とポケモントレーナー

カラン……。

今はもう使われていない動物園に空き缶を蹴る音だけが響く。

？

「……………みんな……………どうしてるかな……………」

金髪の髪に寝癖が目立つ少年が呟く。

？

「心配すんなよリユカ、アイツらならきつと大丈夫だって！」

リユカと呼ばれた少年の肩から赤い蛇が顔を出す。

リユカ

「でもヒモヘビ、僕だけ逃げてきちゃったから……………」

ヒモヘビ

「あの状況じゃ、しょうがないって！」

リュカ

「でも…………でも…………。」

リュカは今にも泣き出しそうである。

ヒモヘビ

「お、おい！泣くなよー！」

ヒモヘビは慌ててリュカを宥めようとした時……………。

シュユユツ。

リュカ

「な、何！？」

リュカの周りに影虫が集まり、プリムが次々と現れる。

リュカ

「こ、この人達……………ノーウェア島にも出てきた……………」

ヒモヘビ

「ちっ、しつこい奴らだ！」

ドスン！ドスン！

リュカ

「こ、今度は何！？」

リュカは大きな音がした方を向くと、子供の姿をした巨大な石像が立ち塞がる。

ヒモヘビ

「お、おい！あれってニューポークシティーにあったキングの像じゃねえか！？」

リュカ

「そ、そう言えば……………でも、何でここに……………」

ドスン！ドスン！

キングの像はリュカに向かって歩いてくる。

ヒモヘビ

「と、とにかく逃げろー!!」

リュカ

「う、うん……!!」

リュカは猛ダッシュでキングの像から逃げ出す。

リュカ

「ハアッハアッ……………」。

リュカは息を切らしながらも、キングの像から逃げていた。

リュカ

「あっ!!」

ドサッ!!

リュカが落ちてた金具に躓いて、転んでしまった。

ヒモヘビ

「リュカ!大丈夫か!?!」

リュカ

「う、うん……………何とか……………」。

ドスン!ドスン!

キングの像はどんどんリュカへと迫る。

ヒモヘビ

「ヤバイ！早く逃げないと……………」

リュカ

「し、しまった！金具が足に引っ掛かって動けない……………」

ヒモヘビ

「何だって！？」

ドスン！ドスン！

そして、キングの像はリュカの目の前まで迫ってくる。

リュカ

（だ、誰か助けて！！）

リュカが頭を伏せた時……………。

バリバリッ!!

「PKサンダー!!」?

ドッスーン！！

突然電気の塊がキングの像に命中し、そのまま倒されてしまった。

リュカ

「……………え？」

ヒモヘビ

「な、何が起こったんだ……………？」

？

「君、大丈夫？」

リュカが顔を上げると、赤い帽子を被った少年が立っていた。

リュカ

「き、君は……………？」

？

「僕はネス、君の名前は？」

リュカ

「ぼ、僕？……僕はリュカ。」

ネス

「リュカか……リュカ、君が僕を呼んだんだね？」

リュカ

「え？」

ヒモヘビ

「お、おい！？そりゃ一体どうゆう事だ！？」

ヒモヘビはネスの顔の前まで体を伸ばす。

ネス

「い、いや……頭の中でリュカの声が聞こえたから……。」

リュカ

「ぼ、僕の声が？」

ドッスン！！

二人が話をしてる中、倒れていたキングの像が起き上がる。

ネス

「おっと！話は後でね。」

そう言うと、ネスはキングの像の方を向く。

バッ！！

キングの像は高くジャンプする。

ネス

「それっ！！」

ネスも高くジャンプする。

ネス

「PKフラッシュ！！」

ネスは緑色の光を発生させ、キングの像の中へと侵入させる。

ネス

「ハッ！！」

ボツカーン！！

ネスが手を下ろした後、キングの像は爆発し、粉々になっていった。

リュカ

「あ、あの力は……。」

ヒモヘビ

「ああ、間違いねえ……あの小僧はリュカと同じPSIの持ち主だ。」

リュカとヒモヘビは驚きを隠せなかった。

？

「あは、あは、あはははは……このポーカー様の石像を壊したのは一体誰だ？」

粉々になったキングの像から、真ん中に少年が入った移動用の機械が現れた。

リュカ

「あ、あの人は――！」

ネス

「やっぱり……ポークー――！」

ポークー

「ゴホッゴホッ………ん？誰かと思えば僕の家隣に住んでた弱虫ネスじゃないか。」

リュカ

「え………ネス君はあの人を知ってるの？」

ネス

「う、うん………昔、僕の家隣に住んでた悪友なんだ。」

ヒモヘビ

「そう言えばあのネスって小僧………何処かで見たことあると思ったら、ニューポークシティの映画に出ていた小僧だ！」

リュカ

「あ！そう言えば………。」

ネス

「え？何の話？」

ヒモヘビ

「い、いや！こっちの話だ！！」

ヒモヘビは左右に激しく首を降る。

リユカ

「それよりあの人、確かアンドーナッツ博士が作った絶対安全カプセルに入って出れなくなったんじゃ……………」。

ネス

「アンドーナッツ博士って、ジェフのお父さんか。」

ポーキー

「あ、あは、あははははは……………マスターがこのポーキー様を解放してくださったのさ！」

ネス

「マスター？」

ポーキー

「マスターは亜空軍とゆう軍団を設立し、この世界を支配しようとお考えになっているのさ…………ハアハアツ…………。」

ネス

「またギーグの時のように、そのマスターって奴の手下になったって訳か…………。」

ポーキー

「ケホツケホツ……………このポーキー様は強い者の味方なのさ！」

そう言うと、ポーキーの移動用の機械が動き出す。

ポーキー

「ここで会ったが100年目！お前ら二人共やつつけてやる！！」

ビイイイツ！！

ポーキーは頭上に火球を作ると、そこからレーザーを照射する。

リユカ

「あ、危ない！！」

ネス

「よつと！」

ネスは空中ジャンプでレーザーを避ける。

ポーキー

「ハアハアツ……………ネスのくせに……………じゃあ、次はこれだー！」

次にポーキーは機械から自分の姿のロボットをばらまく。

ネス

「こ、これは？」

ネスが戸惑う中、ポーキーロボ達はリュカに向かって走り出す。

リュカ

「な、何？何なの！？」

リュカはポーキーロボに囲まれて、オロオロする。

ネス

（ん？あの頭の上のライトは……………まさか！？）

ネスはポーキーロボの頭上のライトがチカチカと点滅している事に気づく。

ネス

「リュカ！逃げて！！」

ドンッ！！

リュカ

「うわっ！！」

ネスは猛ダッシュで走り出し、リュカを押し出すと……………。

ボツカーン！！

ネス

「うわああっ！！」

ポーキーロボは一斉に爆発し、ネスは爆風に吹き飛ばされる。

ヒモヘビ

「あ、あ、爆弾だったのか……………」

リュカ

「ネス君!!」

リュカは倒れているネスに近づく。

リュカ

「だ、大丈夫!？」

ネス

「う、うん……………何とか……………」

ネスはゆっくりと立ち上がる。

リュカ

「ごめんね、僕なんかの為に……………」

ネス

「いいよ……………僕は君の声でここまで来て……………助けに来たんだから……………」

リュカ

「ネス君……………」

ネスの言葉にリュカは泣き出しそうになる。

ポーキー

「あは、あはは、あはははは……………感動の場面の所で悪いけど……………そろそろ終わりにしてやるよー!!」

ポーキーは空中に浮かび上がり、ネスの頭上で止まるとサーチライトを照らす。

ポーキー

「これでとどめだー!!」

バリバリバリッ!!

リュカ

「ネス君!!」

ポーキーはそのまま電撃を放つが……………。

ポーキー

「な、何っ!？」

リュカ

「えっ?.....あ!」

リユカは目を覆っていた手を退けると、ネスが回りにバリアーを出していた。

ヒモヘビ

「あれは敵の攻撃を吸収して自分の体力を回復させるP S I、サイマグネットだ！」

ネス

「ふう、間一髪だった……………」

ポーキー

「ケホツケホツ……………しづとい奴め……………今度こそやつつけてやる……！」

ドッスン！

ポーキーは地上へ着陸する。

ポーキー

「踏み潰してやる……！」

ポーキーはそのまま突っ込んでくる。

ネス

「PKファイアー!!」

ボオオオツ!!

ポーキー

「あちゃちゃちゃー!!」

ネスはポーキーに向けて念動力を放つと、ポーキーの回りが炎に包まれる。

ネス

「それっ!!」

ガツン!!

ポーキー

「いてっ!!」

ネスはヨーヨーをポーキーにぶつける。

リュカ

「っ、強い…………。」

ヒモヘビ

「お前やクマトラやダスターが束になって懸かって来ても苦戦したアイツと互角に闘っているぞ。」

リュカとヒモヘビは、ただネスとポーキーの闘いを観戦していた。

ポーキー

「ハアッハアッ……………もう頭きたぞっ!!」

ババババババツ!!

ポーキーは機械の脚をネスに向けて連続で突き出すが……。

ネス

「PKサンダー!!」

バリバリッ!

ネスは頭上に電気の球を出すと、自らの背後へと方向を変える。

ヒモヘビ

「おいおい、何処狙ってんだ？」

リュカ

「ま、まさか……。」

バリイイツ！！

ネス

「うおおおっ！！」

ドガアアアッ！！

電気の球はネスの背中に直撃すると、ネスは電気に包まれながら勢い良く当たりすると、突き出した機械の脚を破壊する。

ポーキー

「く、くそ……………これじゃ動けないじゃないか……………ケホツケホツ。」

ポーキーの乗る機械は左側の脚を無くし、バランスを崩す。

ネス

「これで終わりだ、ポーキー……………PKフラッシュュ!!」

ネスは再びPKフラッシュュを発動させ、ポーキーの中へ侵入させる。

ポーキー

「あは、あはははは……………僕は死なない……………僕は絶対死なない……………だから僕を倒しても……………僕は何度でも……………」

ネス

「……………ハッ!!」

ドッカーン!!

ポーキー

「うわあああつ!!」

ネスが手を下ろすと、ポーキーの乗った機械は爆発する。

ネス

「ポーキー……………出来れば、また昔みたいに……………」

ネスは煙が上がってる機械を見ながら呟く。

リュカ

「ネ、ネス君……。」

リュカはゆっくりとネスに近づく。

ネス

「あ、ごめん……それより、大丈夫？」

リュカ

「う、うん……た、助けてくれて……ありがとう。」

ネス

「えへへ、どう致しまして。」

ネスは照れ臭そうに頭を掻く。

？

「フン！騒がしいから来てみたら、あのポーキーってガキはやられたみたいだな。」

リュカ
「!？」

ネス
「だ、誰!？」

ネスとリュカが声のした方を見上げると、大きなモニュメントの上でワリオがダークキャノンを構えていた。

ワリオ

「お前らが倒したのか？」

ネス

「だ、だったら何？」

ネスは恐る恐る答える。

ワリオ

「このダークキャノンの餌食になってもらおうか!！」

ワリオはダークキャノンの標準をネスに定める。

ドキユユン！！

ネス

「おっと！」

ネスは矢印の弾を間一髪避ける。

ワリオ

「ほう、ガキのくせになかなかやるな……………」

ドキユユン！！

ドキユユン！！

ワリオはダークキャノンを連射するが、ネスは難無く避ける。

ワリオ

「ちっ、すばしっこいガキだ……………ん？」

ワリオはリュカに目をやる。

ワリオ

「まあいい！まずはお前からだ！！」

ワリオはリュカにダークキャノンを構える。

ネス

「！！リュカ！避けて！！」

リュカ

「え？」

ドキユユユン！！

ワリオはダークキャノンを放った……。。

ドンッ！！

リュカ

「うわっ！？」

ネス

「ぐっ……………」

ネスはリュカを押し出し、矢印の弾はネスに命中する。

ゴトツ！

ネスのフィギュアが地面に転がる。

リュカ

「あ……………あぁ……………」

ヒモヘビ

「な、何が起こったんだ……………」

ドスン！

リュカとヒモヘビが啞然とする中、ワリオが地面に着地する。

ワリオ

「へへへ、さぁどうする？」

ワリオは段々近づいてくる。

ヒモヘビ

「リュカ！ここは一先ず逃げろ！！」

リュカ

「でも……………」

ヒモヘビ

「このままじゃ、お前もやられちまうぞ！」

リュカ

「うつ……………ごめん!!」

リュカはその場から走り出していった。

ワリオ

「フツ、逃げ出したか……………まあいい、獲物は手に入れたからな！ガハハハハハハハハハハ！」

リュカ

（ネス君……………ごめん……………本当にごめん……………。）

ワリオの笑い声が響き、雨が降り注ぐ中、リュカはネスのフィギュアを覗き込むワリオを走りながら見ているしかなかった……………。

雨は止んでおり、リュカはまだ荒廃した動物園にいた。

リュカ

「ハアッ……………僕は最低だ……………」

ヒモヘビ

「だからあの状況じゃ、しょうがないって。」

リュカ

「でも、ネス君は僕を助けてくれた……………それなのに僕は逃げたばかり……………」

ヒモヘビ

「リュカ……………」

リュカ

（ネス君……………」

ドンッ！

リュカ

「痛っ！」

リュカは後ろを向きながら歩いていると、前から何かにぶつかる。

？

「ん？大丈夫かい？」

リュカ

「え？は、はい……。」

リュカが見上げると、帽子を被りリュックサックを背負った少年が立っていた。

リュカ

「あ、あの……どうかしたんですか？」

？

「実は今、とんでもない事になってね……。」

少年の指さす方を見ると、プリムが沢山通せん坊していた。

リュカ

「ま、また出た……。」

ポンッ。

？

「大丈夫、僕に任せて！」

少年はリュカの肩を叩くと、赤と白の色をしたボールを取り出す。

？

「行け、ゼニガメ！」

ポオオオン！

ゼニガメ

「ゼニーツ！」

少年がボールが投げると、中から亀の姿をした生物が現れた。

リュカ

「そ、それは……………キマイラ？」

？

「君はポケモンを見るのは初めてかい？」

リュカ

「ポケ……………モン？」

ヒモヘビ

「聞いた事ねえな……。」

？

「！？そ、それはアーボの新種！？しかも喋った！！」

少年はリュカの肩から出てきたヒモヘビを見て驚く。

ヒモヘビ

「おい小僧！俺はお前の言うポケモンじゃねえぞ！！」

リュカ

「ヒ、ヒモヘビ………少し落ち着いて。」

リュカはヒモヘビを宥める。

？

「よ、よく分からないけど………ポケモンは最低でも491種類以上生息している生き物なんだ、また火や水など様々なタイプのポケモンが存在している。」

リュカ

「へえーっ、知らなかった………。」

ヒモヘビ

「俺も……………少なくともノーウェア島には生息してないようだからな。」

リュカ

「ドラゴとかは違うのかな？」

ヒモヘビ

「うゝん……………微妙だな。」

リュカとヒモヘビは首を傾げる。

？

「そのポケモンをゲットして闘わせてポケモンマスターを目指すのが僕達ポケモントレーナーなんだ！」

リュカ

「ポケモン……………トレーナー……………」

リュカとポケモントレーナーが話の最中、プリム達が近づいてくる。

トレーナー

「おっと、お喋りはここまでのようだ……………ゼニガメ！水鉄砲だ！！」

ゼニガメ

「ゼツニー！！」

ブシュユツ！！

トレーナーの指示でゼニガメは口から勢い良く水を放水し、プリム達は怯む。

リュカ

「す、凄い…………。」

トレーナー

「まだまだ！次は殻に籠るで攻撃だ！！」

ゼニガメ

「ガメーッ！！」

ドガガガガッ！！

次にゼニガメは甲羅の中に手足を引っ込めて、そのまま勢い良くプリム達に体当たりする。

ヒモヘビ

「息がピッタリ合ってる……………まるで一心同体だな。」

トレーナー

「よし、数も減ってきたな……………ゼニガメ！滝登りでとどめだ！
！」

ゼニガメ

「ゼニゼニー！！」

バシャヤヤン！！

更にゼニガメは水流を起こし、巨大な滝を作り出しプリム達を巻き込む。

リュカ

「……………全員やつつけちゃった。」

ヒモヘビ

「ああ、ほとんど秒殺だな……………」

トレーナー

「よくやった！戻れ、ゼニガメ！」

パアアアツ。

トレーナーがボールを投げると、ゼニガメはボールの中へ入っていた。

リユカ

「そのボールは？」

トレーナー

「ああ、これはモンスターボールといって、ポケモンをゲットできるアイテムなんだ。」

ヒモヘビ

「へえ〜っ、俺の次に便利だな。」

リユカ

「そ、そうだね……。」

リュカは苦笑いする。

トレーナー

「それじゃ、僕はこれで……………」

トレーナーはリュカに手を振りながら立ち去ろうとする。

リュカ

「あ……………」

ヒモヘビ

「どうした？リュカ。」

リュカはネスがフィギュアになった光景を思い浮かべる。

リュカ

「あの……………待って！！」

リュカはトレーナーに近づく。

トレーナー

「ん？どうしたの？」

リユカ
「じ、実は……。」

リュカはトレーナーに全てを話した。

トレーナー

「そんな事が……。」

リュカ

「うん……でも迷惑だよね……急に友達を助けるのを手伝ってなんて……。」

リュカは下に俯く。

トレーナー

「いや、実は僕も君と同じ状況なんだ。」

リュカ

「え!?!」

トレーナーの言葉にリュカは驚く。

トレーナー

「僕にはゼニガメの他にもう二匹ポケモンがいたんだけど……
アイツらに取られたんだ。」

リュカ

「ア、アイツらって…………さっきの？」

トレーナー

「そう、だから僕はここまで来たんだ。」

リュカ

「そうだったんだ…………。」

トレーナー

「それに、君の友達をフィギュアにしたその男は多分奴らの仲間だ
と思うよ。」

ヒモヘビ

「うゝん、そう考えるのが自然だな…………。」

リュカ

「それじゃあ…………。」

トレーナー

「うん！目的や敵が一緒な訳だから、お互い協力しよう！-！」

リュカ

「あ、ありがとう!!」

トレーナーとリュカは笑顔になる。

トレーナー

「あ!そう言えばまだ君の名前を聞いてなかったね。」

リュカ

「僕はリュカ!宜しく、トレーナーさん!!」

トレーナー

「宜しく、リュカ。」

リュカとトレーナーはお互い握手を交わす。

トレーナー

(トレーナーって名前じゃないんだけど……………まあいいか。)

ヒモヘビ

「俺はヒモヘビ、宜しくな!」

トレーナー

「あ……………宜しく、ヒモヘビ。」

お互い自己紹介が終わると、二人はその場から立ち去る。

第三話〜二人のPSI少年とポケモントレーナー〜（後書き）

キャラ口調の方はいかがでしょうか？自分なりに頑張りました！もしご不満でしたら感想や意見をお待ちしております。

第四話　亜空軍を追う三剣士

今は誰もいない寂れた砦の離れた場所に亜空間爆弾とロボットが二体いた。

ロボットA

「……………」。

ロボットB

「……………」。

ロボット達はゆっくりと亜空間爆弾を起動させる。

ロボットA

「ますた……………」。

ロボットB

「ドウカゴ無事デ……………」。

ロボット達の目がゆっくりと閉じ、カウントが0になった時……………。

ドオオオオツ!!

亜空間爆弾が発動し、辺り一面に亜空間が広がる。

？

「アレは一体……………」

砦の頂上から青色の短髪にマントを羽織った青年が広がる亜空間を眺めていた。

？

「……………ん？」

青年は亜空間爆弾をぶら下げて宙に浮くエインシャント卿と地面から次々と現れる数えきれないプリム達を発見する。

？

「まさか、シードが言ってた怪物達か？」

そう言う青年は腰に納めていた剣を抜き、上へ掲げる。

？

「このマルスが退治してくれる！」

そして、マルスと名乗った青年は砦の頂上から飛び降りる。

マルス

「とうっ！せやっ！」

マルスは走りながら、襲ってくるプリム達を切り掛かる。

マルス

「これじゃ、キリがないな……………」

プリム達は次々と現れ、マルスは一旦足を止める。

マルス

「それにしても、これは何々だ？」

マルスがどんどん広がる亜空間に目を奪われた時……………。

？

「ハアアアツ！！」

マルス

「！？」

カン！カン！キン！キン！

突然何物かが上空からマルスに切り掛かるが、マルスは相手の攻撃を全て剣で防ぐ。

マルス

「い、いきなり何の真似ですか!!」

マルスは背中に蝙蝠のような翼をして、仮面を被り雷状の剣を構えた者に怒鳴りつけた。

?

「黙れ! 亜空軍の一味め!!」

マルス

「亜空軍? 何の事ですか?」

?

「問答無用!!」

仮面の男は再びマルスに襲い掛かる。

マルス

「くっ!!」

キン!カン!キン!カン!カン!カン!キン!

互いの剣が激しくぶつかり合う。

マルス

（っ、強い…………。）

？

（フッ、なかなかの腕だな…………。）

二人が闘っている最中、プリム達が襲い掛かる。

マルス

「ハッ!？」

？

「ムッ!？」

ザシュユツッ!!

二人の剣がプリム達を切り裂いた。

？

「……………どうやらお前は敵ではないようだ。」

マルス

「そう言う貴方こそ……………」

？

「すまない、私の勘違いだったようだ。」

マルス

「いいえ、それより貴方の名は？」

？

「私はメタナイト、その方は？」

マルス

「僕はマルス、アリティア王国の王子です。」

メタナイト

「マルスカ…………マルス、詳しい話は後だ。」

マルス

「そうですね…………まずコイツらを何とかしないと…………。」

いつの間にか二人の周りはプリム達に囲まれていた。

メタナイト

「行くぞー！！」

マルス

「はい!!」

二人は別々にプリムの群れに突っ込む。

メタナイト

「マッハトルネイド!!」

ズバババババツ!!

メタナイトは竜巻のように高速で回転しながらプリム達を切り裂いてゆく。

マルス

「マーベラスコンビネーション!!」

ザッ!ザシュ!バシュツ!ザアアッ!

マルスは素早い剣裁きでプリム達を次々と切り裂いてゆく。

プリム達を一匹残らず倒した二人は剣を納める。

マルス

「ふう、何とか凌いだようですね……。」

メタナイト

「ああ、それより大丈夫か？」

マルス

「ええ、これくらい平気ですよ。」

メタナイト

「そうか……さっきは本当にすまなかった。」

マルス

「もういいですよ……ところで、メタナイトさんはどうしてここへ？」

マルスの質問にメタナイトは少し俯く。

メタナイト

「私は奴らを追っている……私の戦艦ハルバードを奪った亜空軍を……。」

マルス

「戦艦……ハルバード？」

メタナイト

「そう……だから私はここまで来た。」

マルス

「そうだったんですか……………あっ!!」

メタナイト

「ど、どうした!？」

マルス

「アレを!」

メタナイトはマルスの指刺した方を見ると、遠くでエインシャント卿を発見する。

メタナイト

「アレは……………」

マルス

「確か怪物と一緒に現れた奴です!」

メタナイト

「何だって!？」

マルスの言葉でメタナイトは剣を抜く。

メタナイト

「奴を追う!!」

マルス

「あ!ちよつと……。」

メタナイトは背中から翼を生やし、エインシャント卿を追いかける。その後からマルスも付いていく。

エインシャント卿
「……………ん？」

エインシャント卿は後ろから追いかけてくるマルスとメタナイトに
気づく。

エインシャント卿
「フン、また何物かが私を追って来たか……………」

マルス
「ドルフィンスラッシュー!!」

マルスは下から剣で斬り上げ、そのままエインシャント卿に向かって
飛び上がるが……………。

エインシャント卿

「無駄だ……………」

エインシャント卿は難無く避ける。

メタナイト

「逃がすか！」

メタナイトが滑降しながらエインシャント卿に近づくが…………。

ビィィッ！！

メタナイト

「くっ！！」

エインシャント卿が乗る機械からビームが発射され、メタナイトの翼部分が霞む。

メタナイト

「迂闊に近づけんな……………」

メタナイトは地面に着地し、翼を引っ込める。

エインシャント卿

「お前達では私を止められん……………んっ!？」

エインシャント卿がふと振り向くと、後ろに巨大な剣が浮いていた。

エインシャント卿

「……………剣？」

？

「天・空!！」

ズガアアアッ!!

エインシャント卿

「うおっ!？」

何物かが跳び上がり剣を構えると、そのまま亜空爆弾に切り付ける。

エインシャント卿

「お、おのれ……………」

エインシャント卿はそのまま逃げ出していった。

ドッスン！！

？

「チッ、本体を狙ったつもりなんだが……。」

破壊された亜空爆弾が地面に落ちると同時に、赤いマントを羽織った青年が着地する。

マルス

「あ、あの……。」「

？

「ん？」「

青年はマルスとメタナイトに気づく。

？

「アンタ達は？」「

メタナイト

「私はメタナイトだ。」

マルス

「僕はマルスです……………貴方は？」

？

「俺か？俺はアイク、グレイル傭兵団の団長だ。」

マルス

「グレイル傭兵団……………確かクリミア王国を復興させた団体と聞いた事が……………」

アイク

「フツ、察しの通りだ。」

メタナイト

「それより、貴公はどうしてここへ？」

アイク

「……………俺も奴を追っていた……………クリミア王国を目茶苦茶にしたアイツを……………」

アイクは剣を握る力を強める。

マルス

「どうやら君も訳ありのようですね。」

メタナイト

「アイクとやら、良ければ我々と一緒に奴を追ってもらえないだろうか？」

アイク

「……………別に構わない、お互い敵は同じだからな。」

マルス

「では、決まりですね。」

メタナイト

「それでは早速、出発するぞ！」

アイク

「ああ！」

三人は素早く駆け出していった。

マルス

「たあっ!!」

ザシュッ!ズバッ!

メタナイト

「うりやりやりやりやー!!」

ズババババツ!!

アイク

「せりやつ!!」

ズツドオオオン!!

三剣士は襲い掛かるプリム達を剣で薙ぎ払いながら進んでゆく。

マルス

「二人共、かなりの剣の腕ですね。」

アイク

「ああ、俺がまだ傭兵団の見習いの頃、散々鍛えたからな。」

メタナイト

「……………鍛えただけで、あの巨大な剣を片手で振り回すとは……………」

「

アイク

「そう言うアンタ達も、なかなかの腕だな。」

マルス

「いえ、僕なんかまだまだですよ。」

メタナイト

「話の最中で悪いが、アレを見る!」

マルス

「えっ? あっ!」

三剣士は遠く離れた空からエインシャント卿を発見する。

アイク

「やっと見つけた。」

マルス

「行きましょう!」

メタナイト

「よしっ!」

三剣士はエインシャント卿に向かって駆け出すが…………。

マルス

「あつ！崖が…………。」

崖によって三剣士の行く手を阻む。

アイク

「くそつ、また逃げられたか…………。」

メタナイト

「まあいい、奴の飛んでいった方角を覚えていれば問題ない。」

マルス

「そうですね…………焦ってはいけませんね。」

三剣士はその場でエインシャント卿が飛んでゆくのをしているしかなかった…………。

第四話、亜空軍を追う三剣士（後書き）

………なんか今までの話より短めになりました………次からはもう少し長めに書きます。

第五話〜緑の勇者と緑の恐竜〜（前書き）

この話にはリンクが登場しますが……リンクのキャラ設定はトワイライトプリンセスの後のリンクとなっていますが、時のオカリナ
のナビィも登場するので、若干時オカのリンクっぽくなるかも知れ
ません……。

第五話　緑の勇者と緑の恐竜

ある平原に20cm位の大きさの丸い体格の生物が歩いていた。

？

「お、おい！そこのお前……………こ、このルイージが相手だ！」

ルイージと名乗る緑色の帽子に青いオーバーオールを着た髭の男が震えながら構える。

？

「……………」

ルイージ

「さ、さあ……………どこからでも掛かって来い！」

そう言いながら、ルイージは丸い生物に道を譲ってしまう。

ルイージ

「ふう、助かった……………兄さん達がいないと不安だな。」

ルイージはため息をついた時……………。

？

「？」

ルイージ

「ん？……うわっ！！」

ルイージの後ろから、同じ生物が現れてルイージは驚く。

ルイージ

「な、なんだお前……この僕とやる気が？」

ルイージが再び怯えながら構えた時……。

？

「ジェットハンマーぞい！！」

ドカアアッ！！

ルイージ

「うわあああっ！！」

ルイージは後ろから何物かにハンマーで上空へぶっ飛ばされる。

ヒュユッ。

トコッ。

ルイージはフィギュアになって落下し、それを何物かがハンマーで受け止める。

？

「ほいつ！」

更にその者は、ルイージのフィギュアを後ろに向かって軽く投げると、ルイージのフィギュアは地面へと置かれる。

？

「フン、たわいもないぞい。」

赤い帽子とガウンに腹巻きを着用したペンギンのような者はハンマーを抱えながら呟く。

トトトトトトッー！

？

「やりましたな、デデデ陛下！」

丸い生物が大量に集まる中、一人だけ顔の部分に目がある生物はデデデという者に尋ねる。

デデデ

「当たり前ぞい、わしが本気を出せばこれくらい楽勝ぞい。」

デデデはルイージのフィギュアを払いながら自慢げに話す。

？

「ところで陛下、こんな弱々しい男なんかで大丈夫でしょうか？」

デデデ

「ワドルドゥ隊長、それにお前達ワドルディも人の事は言えんぞい。」

デデデは苦笑いしながら言う。

デデデ

「まあ、この男は罠に使うぞい。」

ワドルドゥ

「罠……………ですか？」

ワドルドゥが顔を傾げる中、一匹のワドルディがワドルドゥの手を引く張る。

ワドルドゥ

「ん？どうした……………何っ！？二体のフィギュアを持った男がこっちへ近づいてくるだど！？」

耳打ちで会話したワドルドゥは驚く。

デデデ

「フフ、早速コイツの出番ぞい……………隠れるぞい！」

ワドルドゥ

「ハハッ！全員待避ー！！！」

ブブブブブブブッ……

デデデとワドルドゥの掛け声でワドルディ軍団はルイージのフィギ
ユアを残して、その場から離れた。

ワリオ

「へへっ、今日も大量だぜ。」

ワリオは乗り物にピーチとネスのフィギュアを乗せて、上機嫌で進んでいた。

ワリオ

「おっ!？」

ワリオは道の真ん中に置かれたルイージのフィギュアに気づき、乗り物を止める。

ワリオ

「こんな道の真ん中にフィギュアがあるじゃねえか。」

ワリオは乗り物から降りると、ルイージのフィギュアに近づく。

ワリオ

「……………って、よく見たらルイージじゃねえか……………まあいいや!こんな目立たない奴でもないよりはマシだ!」

ワリオがルイージのフィギュアを持ち上げた時……………。

ワドルドゥ

「全員掛かれー!!」

ドドドドドドッ!!

ワリオ

「なっ、何だお前らは!?!」

ワドルドウの掛け声でワドルディ軍団はワリオに群がる。

ポイツ!

ドスッ!

デデデ

「よし! 一気に二つも手に入れたぞい!」

ワリオはルイージのフィギュアを乗り物に投げ出し、デデデは三体のフィギュアを乗せた乗り物の操縦席に乗り込む。

デデデ

「ワドルドウ隊長、もうよい! 引き上げるぞーい!」

ワドルドウ

「ハハッ！全員退却ー！！」

ドドドドドドッ！

ワドルドウの掛け声でワドルディ軍団はその場から去ろうとする。

ワリオ

「うっっ……………ひでえ目にあつたぜ……………ああっ！！」

ワリオは頭を抱えながら起き上がると、乗り物が無い事に気づく。

ワリオ

「こらー！俺様のカーゴとフィギュアを返せー！この泥棒がー！！」

ワリオは逃げてくワドルディ軍団に向かって叫ぶ。

一方この森に、蛍のように光る妖精を連れた緑色の衣装に盾を背中に掲げた青年が森を歩いていた。

？

「ほらリンク、もう少しだから頑張って！」

？

「わ、分かってるさ！ナビィ。」

ナビィという妖精はリンクという名前の青年を急がす。

ナビィ

「あ！リンク見て！！」

ナビィの声に反応し、リンクは先を見ると台座らしき床から剣が刺さっていた。

リンク

「ついに見つけた……………退魔の剣・マスターソードを。」

そう言いながらリンクはマスターソードに近づく。

ナビィ

「さあリンク、マスターソードを抜いて。」

リンク

「ああ……………」

リンクはマスターソードに手を掛けると、リンクの左手の甲から三つの黄金の正三角形が浮かび上がる。

パァアァッ！

リンクがマスターソードを引き抜いた時、台座から光が差し込む。

リンク

「まさかまたこの剣を使う事になるとはな……………」。

リンクはマスターソードを掲げながら呟く。

ナビィ

「文句言わないの！貴方は勇者なんだから。」

リンク

「そうだな……………それじゃ、行こうかナビィ！」

ナビィ

「あ！待ってよリンクー！！」

リンクはマスターソードをしまい、その場から立ち去る。

丁度同じ森で一匹の恐竜らしき生物が切り株の上で気持ち良さそうに眠っていた。

？

「うん、ムニャムニャ……………もつ食べられない……………」。

恐竜は寝言を囁く。

リンク

「後はこの森から抜けるだけだな。」

ナビィ

「そうね、急ぎましょう。」

その頃、リンクが通り掛かる。

ナビィ

「ん？ねえリンク、アレを見て！」

リンク

「どうしたナビィ？」

ナビィの声に反応したリンクは、切り株の上で眠っている恐竜に気づく。

ナビィ

「あの生き物は何かしら？モンスターかな？」

リンク

「でも、気持ち良そうに眠っているから、そっとしておこす。」

ナビィ

「それもそうね。」

リンクが再び歩き出した時……………。

ゴオオオオッ!!

ナビィ

「リ、リンク！上を見て！！」

リンク

「今度は何……………こ、これは！？」

リンクは上空で浮上していた戦艦ハルバードを見て驚愕した。

リンク

「こんな巨大な乗り物は見た事がない……………」

ナビィ

「リンク！あの船から何か黒い物体が落ちてくるわ！！」

ナビィの言う通り、ハルバードから影虫が撒かれて、影虫はプリムを次々と生み出す。

リンク

「コ、コイツら……………モンスターか!?!」

リンクはマスターソードを構える。

ナビィ

「リンク! 気をつけてね!!」

リンク

「任せとけ! ハアアッ!!」

リンクはプリム達に切り掛かる。

リンク

「回転斬り!!」

ズババババツ!!

リンクは回転しながらプリム達を切り裂く。

？

「ふあゝっ……………何か騒々しいなあ……………」

すると、切り株の上で眠っていた恐竜が目を覚ました。

リンク

「くそっ！次から次へと……………」。

ナビィ

「リンク！頑張って！！」

リンクは段々疲れ始める。

？

「何かお腹がすいてきちゃったなあ……………ん？」

恐竜はリンク達の近くまで来ると、プリム達に目をやる。

？

「アレ、美味しそう……………いただきます！！」

リンク

「な、何だ！？」

恐竜はリンクを横切ると、プリム達の前に立った瞬間……………。

パクパク！ムシャムシャ！モグモグ！

恐竜は長い舌でプリムを巻き取り、次々とプリムを丸呑みにする。

ナビィ

「す、凄い……………」

リンク

「ああ、モンスターがモンスターを食べてる……………」

リンクとナビィはただ啞然と見ていた。

？

「ふう〜っ、お腹一杯だ〜。」

恐竜はプリムを一匹残らず食べ尽くし、膨らんだお腹をゆっくり撫でる。

リンク

「なあナビィ、アイツはモンスターじゃないんじゃないか？」

ナビィ

「そう？私は十分モンスターに見えるけど……。」

リンク

「でも、何か悪い奴には見えないし……。」

？

「ん？」

恐竜はリンク達に気がつき、ゆっくりと近づいてくる。

？

「君は誰？」

リンク

「えっ！？えっ……俺はリンク、こっちは妖精のナビィ。」

ナビィ

「よ、宜しく……。」

？

「……………」

恐竜はナビィをジューツと見つめる。

ナビィ

「な、何？」

？

「何か丸くてキラキラして美味しそう。」

ナビィ

「きゃーっ!!」

恐竜は舌を出してナビィを舐めようとしたが、ナビィは素早くリンクの後ろへ隠れる。

ナビィ

「ちよっ、ちよっと!私を食べる気!？」

？

「ごめんごめん、ついいつものクセで……………」

リンク

（何でも食べちゃいそうだな……………。）

リンクは苦笑いしながら恐竜を見つめる。

？

「あっ！僕はヨッシー、こつ見えても恐竜なんだ。」

リンク

「恐………竜？」

ナビィ

「よく分からないけど、ドドンゴとかの仲間じゃないの？」

リンク

「うーん………とにかく、さっきは助けてくれてありがとうとヨッシー！」

ヨッシー

「え？なんの事？」

ヨッシーという恐竜は首を傾げる。

ナビィ

「アンタさっき、あのモンスターを食べたでしょ？そのお陰で私達は助かったって訳よ。」

ヨッシー

「あーそついう事かゝ、どう致しまして。」

ヨッシーは頬を掻きながら照れる。

ナビィ

「それよりリンク、あの船を追いかけていいの？」

リンク

「あーそつだ……………確かあつちの方角へ飛んでいったな。」

ヨッシー

「あゝっ、ちょっと待ってよゝ！！」

リンクが慌てて駆け出した後、ヨッシーも後からついてゆく。

リンク

「ハアハアッ……………もうあんな所に……………」

リンクは森を抜けると、戦艦ハルバードは遠くで浮上していた。

ヨッシー

「リ、リンク〜。君って足早いね〜。」

後からヨッシーも到着する。

リンク

「い、急いで後を追わないと……………」。

リンクは息を荒くしながら再び走り出そうとする。

ナビィ

「ちょっとリンク、少し休んだ方が……………」。

リンク

「で、でも……………あの船に奴が乗っているかも……………」。

ヨッシー

「ねえリンク、僕の背中に乗る?」

リンク

「えっ!?」

ヨッシーの言葉でリンクは足を止める。

リンク

「俺、結構重いよ?」

ヨッシー

「リンクの体格だったら大丈夫だよ、いいから乗って乗って！」

ナビィ

「リンク、お言葉に甘えて乗らせてもらえば？」

リンク

「あ、ああ………それじゃあ遠慮なく………」

リンクは恐る恐るヨッシーに跨がる。

ヨッシー

「それじゃ、早速出発〜！！」

ヨッシーはリンクを乗せたまま走り出す。

リンク

「お〜っ！結構速いなあ。」

ヨッシー

「もっと飛ばせるよ？」

リンク

「いや、これ位のスピードでいいよ……。」

ナビィ

「何かエポナと同じ位の速さね。」

リンク

「そうだな……。」

ヨッシー

「エポナって?」

リンク

「俺が飼ってる馬の名前さ……よく俺に懐くんだ。」

ナビィ

「……………リンク、トアル村が恋しくなった?」

リンク

「そ、そんな事ないさ!アイツを倒すまで絶対帰らないって約束したんだ!」

ナビィ

「誰に約束したの？もしかしてイリア？」

リンク

「……………」。

リンクは顔を赤く染める。

ヨッシー

「イリアって誰？」

ナビィ

「イリアはリンクの彼女なんだ。」

リンク

「ち、違っって！アイツは……………ただの幼なじみだよ。」

ヨッシー

「でも、リンクにとっては大切な人なんですよ？」

リンク

「えっ……………ああ、勿論！」

ヨッシー

「僕もマリオやルイージにピーチ姫とか、大切な人はいっぱいいるんだ!」

リンク

「そうか………お互い頑張ろう、ヨッシー!」

ヨッシー

「こちらこそ!」

ナビィ

「フッフ、すっかり意気投合ね。」

ヨッシーはリンクを乗せたまま更に進んでゆく。

第六話　金髪美女と黄色いネズミ（前書き）

何かタイトルが第五と被ってますが……この話はサムスとピカチ
ユウが中心の話です。正直サムスがどんな女性なのか分かりません
が、母性的という事なのでクールで優しい女性として描いたつもり
です……。

第六話　金髪美女と黄色いネズミ

ガシャン！！

とある研究施設の倉庫の天井の鉄板が内側から何物かに蹴破られる。

シュタツ。

そして、その穴から全身青いタイツ状のスーツを着た金髪碧眼の美女が降りてきた。

？

「何とかここまでは侵入出来たわ……でも、アレは一体何処へ……」

そう呟くと、美女は銃のような物を構えながら歩きだす。

？

「それにしても、このサムス・アランが大事なパスワードスーツを盗まれてしまうなんて……迂闊だったわ。」

サムスと名乗る美女は頭を抱える。

サムス

「それに、こんなに広い研究所でパワードスーツを捜すのは骨が折れるわね……………」

そう言いながらサムスは降りてきたエレベーターに乗り込む。

サムス

「それでも、まだ内部の者には見つからないのが不幸中の幸いね……………」

ガーーツ。

しばらく上へ進み、エレベーターの扉が開いた時……。

サムス

「あっ!?!」

ロボットA

「侵入者発見!!!」

ロボットB

「直ちに捕らえろ!!」

ロボットC

「了解!!」

サムスはエレベーターの外でロボット三体と遭遇する。

サムス

「しまった!!」

バシュッ!

ロボットA

「ガガッ!?!」

サムスは持っていた銃をロボットAに向けて放つと見事に命中させた。

ロボットA

「ア、アレ?.....力、体ガ動ケナイ!?!」

ロボットAは体を震わせながら言う。

サムス

「このパラライザーに撃たれたら、体が麻痺して動けなくなるのよ！」

ロボットB

「何ダッテ!？」

ロボットC

「小癪ナ!!」

残りのロボット二体がアームを振り回しながらサムスに近づく。

サムス

「プラズマウィップ!!」

バシイイッ!!

ロボットB

「グワアアッ!!」

ロボットC

「ガアアッ!!」

サムスはパラライザーからムチのような光線を二体のロボットに向けて振り回し、ロボット達を破壊する。

ロボットA

「オ、オノレ……ヨクモ仲間ヲ!!」

ロボットAは体の麻痺がまると、サムスに向かって突進してくる。

サムス

「フリップジャンプ!!」

シュッ!!

ロボットA

「ナッ!？」

サムスは宙返りしてロボットの突進を避ける。

サムス

「たあつ!!」

ドガッ!!

ロボットA

「ガッ……………」

サムスはロボットの後ろへ回り込み、ロボットに回し蹴りを食らわす
と頭部だけが吹っ飛ぶ。

サムス

「ふう、何とか凌げたわ……………でもロボット達が見張りしてるな
んで、ここはかなり高度な技術を持っているようね。」

そう言うと、サムスは再び歩き出す。

サムス

「ん?この扉は……………」

サムスは扉の前で足を止める。

サムス

「取り敢えず入ってみよう……もしかしたらパワードスーツがあるかも……。」

ガーーーーッ。

サムスが扉に近づくと、ドアが自動的に開き、パラライザーを構えながら入る。

サムス

「中は真っ暗ね……。」

サムスがどんどん中へ進んでゆくと……。

ビカーーーーーッ!!

サムス

「!?!」

?

「チャーーーーッ!!」

突然緑色の光が照らされてサムスは前方を見ると、発電機と書かれたカプセルの中で黄色い大きなネズミのような生き物が電気に被わ

れながら苦しんでいた。

？

「ピ……カ……。」

サマス

（この子、この機械に閉じ込められてるの？）

発電機が一旦停止すると、ネズミはサマスと目を合わせる。

ビカーーッ！！

サマス

「！！」

？

「チャーッ！！」

突然発電機が再び機能し、ネズミの体が再び電気に被われる。

サマス

「酷い………待ってて！今出してあげる！！」

シュッ!!

ガシャーン!!

サムスはパラライザーをムチ状にし、カプセルを破壊する。

プー!プー!プー!プー!

ガーンッ。

するとサイレンが鳴り響き、ロボット軍団が次々と入ってくる。

ロボットA

「誰だ!? 発電機室ヲ荒ラスノハ!!」

ロボットB

「ムッ!? セツカク捕マエタ電気ほけもんノぴかちゅうヲ逃ガシタナ!!」

ピカチュウ

「ピカ………。」

サムス

（ピカチュウって……………この子の事？）

ピカチュウと呼ばれたネズミは、真っ赤な頬つぺたから電気を放ちながらロボット軍団に睨みつける。

ロボットC

「マタ生ケ捕リニシロー！」

ロボットD

「今度ハ逃ゲラレナイヨウニシナクテハ……。」

ロボット軍団はピカチュウに近づこうとする。

サムス

「させない！」

バシユッ！！

ロボットE

「ガガッ!？」

サムスが近づいてきたロボット一体にムチで攻撃する。

ロボットA

「オノレ! 邪魔スル気力!？」

ロボットC

「ナラバ排除スルノミ!！」

ロボット軍団はサムスに狙いを定める。

サムス

(くっ…………流石に数が多いわね…………。)

サムスがパラライザーを撃とうとした時…………。

ピカチュウ

「ピ…………ッカア!！」

ドガアアッ!!

ロボットB

「グガアッ!!」

ロボットD

「ギギャッ!!」

ピカチュウの強力な突進で二体のロボットが吹っ飛ぶ。

サムス

（す、凄い……………。）

ロボットA

「ナ、ナンテ石頭ダ!!」

ロボットC

「仲間ヲ二人モ吹ッ飛ばシタ!!」

ロボット達が驚いている中……………。

ピカチュウ

「ピ~~~~カ~~~~チュ~~~~!!」

バリバリバリッ！！

ロボット一同

「ガガガガガッ！！」

ピカチュウの放った電撃が残りのロボット達を一掃する。

サムス

「あ、あっという間に倒したわ……………」

サムスは破壊されたロボット達を見ながら啞然とする。

ピカチュウ

「ピッカア！」

するとピカチュウがサムスに近づく。

サムス

「た、助けてくれてありがとう。」

ピカチュウ

「ピカピカッ！」

ピカチュウは首を横に振る。

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカッ。」

サムス

「え？こちらこそありがとっって言ってるの？」

ピカチュウ

「ピッカチュ！」

ピカチュウは激しく頷く。

サムス

「べ、別にいいのよ……………貴方の苦しんでいる姿を見てられなかったから。」

ピカチュウ

「ピカ……………ピッカア~~~~ッ!!」

サムス

「おっと！」

ピカチュウは勢い良くサムスの胸に飛び込む。

ピカチュウ

「ピカ〜、ピカピカ！」

サムス

「フッフ、すっかり私に懐いたみたい。」

サムスは自分の胸にほお擦りしてるピカチュウの頭を撫でる。

サムス

「ところでピカチュウ、少し私に付き合ってくれない？」

ピカチュウ

「ピカア？」

ピカチュウは首を傾げる。

サムス

「実は私、この施設でとても大事な物を探しているの……………協力してくれる？」

ピカチュウ

「ピカ……………ピッカチュー!!」

ピカチュウは少し考えた後、嬉しそうに返事をする。

サムス

「ありがとうピカチュウ……………それじゃ早速行きましょう!!」

ピカチュウ

「ピカチュー!!」

サムスとピカチュウは発電機室から出る。

サムス

「またロボットに見つかったら厄介だから慎重に……………」

ピカチュウ

「ピカッ。」

ガーーーーッ。

サムス

「ちよっ、ちよっと!？」

ピカチュウは別の部屋へと入っていった。

サムス

「やれやれ……。」

サムスも少し呆れながら部屋へ入る。

サムス

「ここは……モニタールームのようね。」

ピカチュウ

「ピカ……。」

サムスは部屋の中にある沢山の画面を見渡す。

サムス

「あっ!！」

するとサムスは、赤いロボットのようなスーツが映った画面に目を奪われる。

サムス

「パワードスーツはあの部屋に……………」。

ピカチュウ

「ピカア？」

ピカチュウは再び首を傾げる。

サムス

「これが私の大事な物よ……………」。

ピカチュウ

「ピカ……………」。

サムス

「急ぎましょうー!!」

ピカチュウ

「ピカッ!」

サムスとピカチュウは急いで部屋から出ていく。

その頃、カービィとゼルダは湖畔にいた。

ゼルダ

「あの戦艦から放り出された時はどうなるかと思ったけど………また貴方に助けてもらいましたね。」

カービィ

「ぽよっ？」

カービィは顔を傾ける。

ゼルダ

「それより、ここは一体何処でしょう？」

カービィ

「ぽよぽよっ。」

カービィは道をまっすぐと歩き出す。

ゼルダ

「あ、待って！この見知らぬ地を宛ても無く歩くのは危険よー！」

ゼルダはカービィを引き止めようとしたが……。

？

「フン！人の心配より自分の心配をしたらどうだ？」

ゼルダ

「！？……だ、誰！？」

ゼルダが慌てて振り向くと、ダークキャノンを構えたクツパがいた。

クツパ

「いきなりで悪いが、フィギュアになってもらうぞ！」

ゼルダ

「そ、それは……ワリオという男が持っていた……。」

ドキュユユンー！

ゼルダ

「うつ……。」「

コトッ。

ゼルダはクッパの持つダークキャノンを見て驚愕する中、放たれた矢印の弾丸に貫かれてフィギュアとなってしまう。

クッパ

「フツ、たわいない……………来い、影虫よ!」

そう言うと、クッパの後ろから影虫によって作られた偽クッパが現れる。

クッパ

「この女のデータをコピーするのだ!」

クッパの言葉で偽クッパは頷き、溶けていきゼルダのフィギュアに集まる。

シュユユウ。

すると次第に真つ黒な偽ゼルダが生み出された。

クッパ

「よし、では早速お前もこのダークキャノンで誰でもいいからフィ

ギョアにするのだ！」

偽ゼルダはゆっくりと頷き、ダークキャノンを持って何処かへ去っていく。

クツパ

「フッフ、これで一石二鳥だな……。」

そう言いながらクツパは怪しいを浮かべる。

第七話　勘違いによる大乱闘

リンク

「急ごう、ヨッシー！」

ヨッシー

「待ってよう、リンク。」

リンクとヨッシーは湖畔の近くの道を走っていた。

ガチャッ！

少し離れた所から偽ゼルダがダークキャノンをリンク達に向けていた。

偽ゼルダ

「……………」

偽ゼルダがダークキャノンの引き金を引こうとした時……。

ピット

「やめろーっ！！」

ザシュツツ！！

偽ゼルダ

「！？」

ボカーーーン！！

ピットが双剣でダークキャノンを真つ二つにし、ダークキャノンは爆発する。

マリオ

「ハアハアッ……………ぜ、ゼルダ姫！？」

偽ゼルダ

「……………。」

偽ゼルダは後から来たマリオとピットを睨みつける。

ピット

「マリオさん、この人は確かスタジアムでマリオさん達と闘った…」

「……。」

マリオ

「ああ、ピーチ姫と同じ姫様のゼルダ姫だ。」

ピット

「でもこの人、さっき銃みたいな物で通行人を狙ってましたよ。」

マリオ

「何だって!?!」

偽ゼルダ

「……………」。

マリオはピットの言葉に耳を疑った。

マリオ

「本当ですか!?!ゼルダ姫!」

偽ゼルダ

「……………ハッ!」

ボンッ！！

マリオ

「うわっ！！」

偽ゼルダはデインの炎でマリオを吹っ飛ばす。

ピット

「マリオさん！大丈夫ですか！？」

ピットは慌ててマリオに近づく。

マリオ

「だ、大丈夫だ……。」

そう言うと、マリオはゆっくりと立ち上がる。

マリオ

「ア、アイツは……………ゼルダ姫じゃない。」

ピット

「えっ!？」

マリオ

「本物のゼルダ姫はこんな事しない……………ピット!あの偽者を倒すぞ!」

ピット

「は、はい!」

マリオの言葉でピットは双剣を構える。

偽ゼルダ

「ハッ!」

マリオ

「逃げろ、ピット!」

ピット

「はいっ!」

ボンッ!!

デインの炎が発動する前に二人はその場から避ける。

マリオ

「同じ手は喰わん！ファイアーボール！！」

ボツ！ボツ！ボツ！

マリオはファイアーボールを三発放つが……………。

偽ゼルダ

「ネールの愛！！」

偽ゼルダは自分自身が魔法のバリアに包み、マリオのファイアーボールを全て跳ね返す。

マリオ

「バリアか……………」

ピット

「次は僕が……………パルテナアロー！！」

シュツ！

ピットはパルテナの神弓から矢を放つが……。

偽ゼルダ

「フロルの風!!」

シュユツ!!

偽ゼルダは回転した後、緑色の光に包まれながらその場から消えてしまった。

ピット

「き、消えた!?!」

マリオ

「気をつける! 何処かにいるハズだ!!」

マリオとピットは辺りを見渡す。

ピット

「……………そこか!!」

シュッ!!

偽ゼルダ

「ぐっ!!」

ピットはすぐに偽ゼルダの気配に気づき、パルテナの神弓を命中させた。

ピット

「マリオさん!今です!!」

マリオ

「よし……………」

マリオは猛ダッシュで偽ゼルダに近づく。

マリオ

「スーパージャンプパンチ!!」

ボカカカッ!!

偽ゼルダ

「キャアアッ!」

マリオの強力なジャンプパンチで偽ゼルダは吹っ飛ぶ。

。シッ。

リンク

「……………ん!？」

リンクは遠くから聞こえた物音に気づき、その場で立ち止まる。

ヨッシー

「どうしたの?リンク。」

リンク

「今何か物音がしたような……………」

リンクは物音がした方を見上げると……………。

リンク

「あ、あれは……………ゼルダ姫!？」

ヨッシー

「え?……………あ!マリオだ!!!」

リンクとヨッシーはフィギュアになった偽ゼルダとマリオとピットの姿を発見する。

シュユユツ。

次の瞬間、偽ゼルダのフィギュアは溶けてしまった。

リンク

「！！そ、そんな……………」

リンクは偽ゼルダのフィギュアが溶けていく光景を見て驚愕する。

ヨッシー

「な、何で溶けちゃったんだろ……………」

ダッ！！

ヨッシー

「リ、リンク！？」

リンクは物凄い速さでマリオ達に向かって走り出す。

マリオ

「やはり偽物だったか……………」

ピット

「しかし、今のは一体何だったんでしょっ？」

二人が話をしてる時……。

リンク

「うおおおおっ!!」

マリオ

「な、何だ!？」

マリオは声がした方を向くと、高くジャンプして剣をマリオに向けてるリンクがいた。

ドスン!!

マリオ

「うわあっ!!」

マリオは間一髪避けて、剣は地面に突き刺さる。

ピット

「マリオさん!!」

マリオ

「い、いきなり何をする!？」

マリオはリンクに怒鳴る。

リンク

「黙れ!よくもゼルダ姫を……………!!」

マリオ

「何??ゼルダ姫を知ってるのか!？」

リンク

「だったらどうした!？」

リンクは地面に刺さった剣を抜くと、再びマリオに向かって走り出す。

マリオ

「ま、待ってくれ!あのゼルダ姫は偽物なんだ!」

リンク

「何を訳の分からない事を……………たああっ!」

マリオ

「うわっ!!」

リンクはマリオに切り掛かるが、マリオは間一髪避ける。

ヨッシー

「落ちていてリンク! マリオはいい人だよ!!」

後から来たヨッシーが制止しようとしたが……。

ピット

「ハアアッ!!」

ヨッシー

「あわわっ!?!」

パルテナの神弓を双剣にして奇襲してきたピットに驚き、慌てて避ける。

ピット

「お前の相手は僕だ! トカゲ!!」

ヨッシー

「ト、トカゲ!?.....僕は恐竜だ〜!!」

ヨッシーはカンカンになりながらピットに向かって卵を投げつける。

ピット

「当たるか!」

ポン!ポン!

ピットは鏡の盾を取り出し、ヨッシーが投げた卵を防ぐ。

マリオ

「頼む!少し俺の話を聞いてくれ!」

リンク

「聞く耳持たん!!」

一方マリオはリンクの剣から逃れるので精一杯だった。

マリオ

「くっ、聞き分けのない奴め……。」

リンク

「そりゃっ！！」

リンクはマリオに向かって爆弾を投げ付けた。

マリオ

「なんの！」

マリオは爆弾を見事にキャッチする。

マリオ

「それっ！お返しだ！！」

マリオは爆弾をリンクに投げ返した。

リンク

「フン！また投げ返してやる！！」

リンクが爆弾をキャッチした瞬間……。

マリオ

「今だ！ファイアーボール！！」

ボン！！

マリオが爆弾に向かってファイアーボールを放った。

リンク

「し、しまっ……………」

ボカーーーン！！

爆弾がファイアーボールに引火し、その場で爆発が起きる。

ゴトツ！

爆風が消えた後、リンクのフィギュアが地面に横たわる。

マリオ

「ハアハアツ……………手強い相手だった。」

ピット

「マリオさ〜ん！」

マリオが息を切らす中、ピットが近づいてくる。

ピット

「こっちも何とか片付けました！」

そう言いながら、フィギュアになったヨッシーに向かって指をさす。

マリオ

「いや……ヨッシーは倒さなくて良かったんだけど……。」

マリオはヨッシーのフィギュアを見つめながら苦笑いする。

ブオオオッ！

ピット

「な、何だ！？」

突然二人の背後からワリオから盗んだカーゴを操縦してるデデデが横切る。

マリオ

（あれは……………ピーチ姫！？）

マリオはカーゴの上に乗ってるピーチのフィギュアに目を奪われる。

デデデ

「おっ！あそこにフィギュアが二体も転がってるぞい。」

デデデはUターンして、引き返してくる。

デデデ

「頂きぞい！！」

ガシッ！！

デデデは走り出しながらマジックハンドを操作し、見事にリンクとヨッシーのフィギュアをキャッチする。

デデデ

「よっしゃ！上手くいったぞい！！」

デデデがガッツポーズをとった時……。

カービィ

「ぽよっ！」

デデデ

「げっ！カービィ！？」

カービィがリンクのフィギュアにぶら下がっていた。

カービィ

「ファイナルカッター！！」

ザシュッ！！

カービィはファイナルカッターでマジックハンドを切断する。

カービィ

「ぽよー！ぽよー！」

パアアアツ。

二つのフィギュアがマジックハンドから離れた瞬間、カービィはリンクとヨッシーのフィギュアのプレート部分に素早く触れる。

デデデ

「おのれ……………」

デデデが乗るカーゴは再びUターンし、リンク達に向かって突っ込む。

ヨッシー

「うーん、あれ……………」

リンク

「一体何がどうなって……………」

リンクとヨッシーは頭を抱えながら起き上がる。

カービィ

「ぼよぼよっ……………」

リンク

「え？何だって？」

ヨッシー

「あ！リンク、前！！」

カービィが指（手？）の刺した方を見ると、デデデを乗せたカーゴが勢い良くこちらへ突っ込んでくる。

リンク

「何かよく分からないけど……………」

そう言うと、リンクは弓矢を取り出し、デデデに向けて構える。

シュッ！

ザクッ！！

リンクが弓矢を弾くと見事カーゴに命中し……………。

ボンッ！！

デデデ

「のわっ！な、何ぞい！？」

カーゴがリンク達を横切った瞬間、カーゴは煙を上げながら進む。

リンク

「ちっ、急所を外したか……………」

ピット

「あの人、剣だけじゃなく弓の腕も凄い……………」

マリオ

「ああ、俺もよくアイツに勝てたな……………」

リンク

「あ、そっだ！まだ勝負は……………」

リンクは再びマリオ達に向かって剣を振り上げるが……………。

ヨッシー

「リンク！マリオは悪い人じゃないってば——！」

ヨッシーの怒声にリンクは剣を掴む腕を下ろす。

リンク

「で、でも…………この男はゼルダ姫を…………。」

マリオ

「だから、あのゼルダ姫は偽物なんだよ。」

リンク

「偽物…………？」

リンクはマリオの言葉に耳を傾ける。

マリオ

「いいか？今から俺の説明をよく聞いてくれ…………。」

マリオはリンクにこれまでの事を全て説明した。

リンク

「では、貴方はゼルダ姫と一緒にスタジアムを強襲した亜空軍という奴らと闘い、それっきり姫には会っていないと……………」

マリオ

「ああ、俺は突然発射された大砲みたいな物で吹っ飛ばされたんだが……………このピットが助けてくれたんだ。」

ピット

「い、いえ……僕もマリオさん達の試合を観戦してて、その後でフィギュアになってたマリオさんを偶然発見したんです。」

ヨッシー

「そうだったんだ。」

リンク

「それにしても、ゼルダ姫は何処に……。」

リンクは腕を組みながら考え込む。

ピット

「あ！確かこのカービィって子と一緒に逃げたハズ……。」

リンク

「何だって!？」

マリオ

「そうなのか？カービィ。」

カービィ

「ぼよっ!」

カービィは激しく頷く。

リンク

「そ、それでゼルダ姫は!？」

カービィ

「ぽ?ぽよ……………」

カービィは辺りを見渡す。

マリオ

「どうやら途中ではぐれたみたいだな……………」

リンク

「そんな……………」

リンクは下に俯く。

ヨッシー

「元気出してリンク!そのゼルダ姫はきっと元気でいるって。」

リンク

「ヨッシー……………」

ヨッシーの言葉でリンクは顔を上げる。

マリオ

「ところで、ヨッシーはどうしてリンクと一緒にいるんだ？」

ヨッシー

「あ、えつゝとね……………少し話が長くなるけどいい？」

ヨッシーはリンクと出会った経緯をマリオ達に話した。

ピット

「そんな事があつたんですか……………ところで、ヨッシーさん達が発見した船って……………」

マリオ

「ああ、間違いない……………俺達が追っている戦艦と同じだ。」

ヨッシー

「え？マリオ達もあの船を追ってたの？」

マリオ

「勿論！あの戦艦を野放しにしてたら、大変な事になるからな。」

ピット

「そうですね、あの戦艦は各地で黒い物体を撒き散らしているようですから……。」

ヨッシー

「それじゃ、マリオ達も一緒にあの船を追っかけようよ!」

マリオ

「その前に、さっきのペンギンみたいな奴からピーチ姫を救出しないと……。」「

ピット

「ピーチ姫って確かワリオという男にさらわれたハズじゃ……。」「

マリオ

「もしかして、あのペンギンも亜空軍の一員かもな……。」「

カービィ

「ぽよっ?」「

ヨッシー

「どっちにしても、まずはピーチ姫の救出が先だね。」「

マリオ

「そうだな……よし！みんなであのペンギンを追いかけるぞ！」

ピット

「はいっ！！」

ヨッシー

「オツケー！！！」

カービィ

「ぽよっ！！！」

マリオの掛け声で一同は走り出そうとするが……。

リンク

「……………」。

ヨッシー

「あれ？どうしたのリンク。」

ヨッシーが立ち止まったままのリンクに気がつく。

リンク

「あ、あの……マリオさん。」

マリオ

「ん？何だい？」

リンク

「さ、さっきはすみませんでした……俺の勘違いでマリオさんに酷い事を……。」

リンクはマリオに向かって深く頭を下げる。

マリオ

「ああ、あの事が……もう気にするなよ！」

リンク

「で、でも……。」

マリオ

「それに、君の気持ちも分かる気がするんだ……。」

リンク

「えっ！？」

マリオの言葉にリンクは顔を上げる。

マリオ

「君はゼルダ姫の事を大切に思っているように、俺もピーチ姫の事を大切に思っている……もし俺がリンクの立場だったら、俺もリンクに攻撃していたと思う……。」

リンク

「マリオさん……。」

ヨッシー

「流石はマリオ、良い事言っねえ。」

ピット

「あの……ヨッシーさん……。」

ヨッシー

「ん〜?」

ヨッシーはピットに呼ばれて振り返る。

ピット

「ごめんなさい！トカゲなんて酷い事言ってしまったて……………」。

ピットはヨッシーに向かって頭を下げる。

ヨッシー

「い、いって！もう何とも思っていないから……………」。

ヨッシーは慌てふためく。

マリオ

「よし、お互い和解した所で出発するぞ！！」

一同

「は————い——！」

五人は一斉に駆け出して行った。

マリオ

「ファイアーボール!!」

ボンッ!ボンッ!

リンク

「回転斬り!!」

ザシユユッ!!

ピット

「パルテナアロー!!」

グサツ!ザクツ!

ヨッシー

「卵投げ!!」

ポン!ポン!ポン!

カービィ

「ハンマー!!」

ボコッ!!バコッ!!

マリオ一行は途中で遭遇するプリム達を蹴散らしながら進んでいく。

リンク

「それにしても、コイツらは一体何物なんだ?」

マリオ

「分かっているのは、亜空軍と関係があるって事だけだな。」

カービィ

「ぽよ…………ぽよっ。」

ピット

「あー皆さん、アレを見て下さいー!!」

ピットが指をさす方を見ると、洞窟の入口の前にデデデが操縦していたカーゴが放置されていた。

リンク

「これは…………アイツが乗ってた乗り物だ。」

マリオ

「じゃあ、奴はこの中に…………。」

カービィ

「ぽよ…………。」

ピット

「…………入りますか?」

マリオ

「ああ、勿論！」

マリオ達が洞窟に入ろうとした時……………。

ヨッシー

「ハアハアツ……………ちょっと待ってよ。」

後からヨッシーが息を荒くしながら駆け寄る。

マリオ

「遅いぞ、ヨッシー。」

ヨッシー

「だ、だってみんな足が早いんだもん。」

リンク

（ヨッシーの方が俺達より足が早いと思うけど……………。）

ピット

「と、とにかく全員揃った事ですし……………入りましようか。」

マリオ

「そうだな……………みんな！行くぞ！！」

カービィ

「ぽよーっ！！」

マリオの掛け声で一行は洞窟へと入っていく。

？

「クツパ、応答しろ。」

モニタールームのような部屋から赤い髪にマントを纏った大男がクツパに呼び掛けていた。

クツパ

「何だ？ガノンドロフ。」

ガノンドロフと呼ばれた大男の前の大きな画面からクツパが映る。

ガノンドロフ

「ワリオが捕獲したフィギュアを何物かに奪われたらしい………そこで、お前がフィギュアを取り返してくるんだ。」

クツパ

「何っ！？何故我輩が奴の失敗を……。」

ガノンドロフ

「これはお前達行動班の失敗だ……………だからお前の失敗でもある。」

クツパ

「し、しかし……………」

ガノンドロフ

「それに、これはあの方の命令でもあるのだぞ……………」

クツパ

「うつ……………」

ガノンドロフの言葉でクツパは口を濁らせる。

クツパ

「わ、分かった……………それで場所は何？」

ガノンドロフ

「ここから真つすぐの場所にフィギュアを奪った者がいる。」

クツパ

「そうか……………お前達！行くぞ！！」

クリボー

「へーい！」

クツパはクリボーやノコノコやハンマーブロスなど引き連れて目的地に向かう。

ガノンドロフ

「フン、最初から素直に従っていればいいのだ。」

ガノンドロフはクツパが映った画面が消えた瞬間に呟く。

第七話　勘違いによる大乱闘（後書き）

やっぱり小説で戦闘物を書くのは難しいですね……それでも上手くまとめたつもりなので感想や意見をお待ちします。

第八話　遺跡前の決闘とデデデ城敵襲

雲まで届く位の巨大な岩の塔が見える所までやって来たリュカとポケモントレーナー。

リュカ

「あの岩、凄く高いね……………」

ヒモヘビ

「ああ、雲まで届いてるぜ……………」

トレーナー

「こんな所には伝説のポケモンがいそうなの……………ん!？」

リュカ

「トレーナーさん、どうしたの?」

トレーナー

「ア、アレは……………」

トレーナーは上空で橙色のドラゴンのような姿をしたポケモンを発見した。

ヒモヘビ

「ありや何だ？ノーウェア島のドラゴとは違うな……………」。

リュカ

「ひょっとして、あれもポケモン？」

トレーナー

「アレは火炎ポケモンのリザードン……………僕のポケモンなんだ……………」。

リュカ

「え！？本当？」

ヒモヘビ

「でも、何でこんな所にいるんだ？」

トレーナー

「とにかく、あの塔まで行ってみよう！」

そう言つと、トレーナーは塔に向かって駆け出していった。

リュカ

「あ！待って〜。」

リュカも慌ててトレーナーの後を追いかける。

トレーナーとリュカは塔の入口辺りまで辿り着いた。

リュカ

「何とかここまで来たけど……………」

ヒモヘビ

「まるで遺跡だな……………」

リュカとヒモヘビは入口を見渡しながら呟く。

トレーナー

「よし、早速中へ入ろう!!」

トレーナーが歩み出した時……………。

?

「ちょっと待ちな!!」

リュカ

「!?!この声は……………」

トレーナー

「誰だ！？」

何物かの声にリュカとトレーナーは辺りを警戒する。

ドゥスーーン！！

トレーナー

「！？」

ワリオ

「俺だよ、ワリオだよ！」

二人の前でワリオが着地しながら登場する。

リュカ

「や、やっぱり……。」

ヒモヘビ

「ああ、間違いねえ！あの時ネスをフィギュアにしたオッサンだ！
！」

トレーナー

「えっ！？じゃあ、リュカが言ってたオッサンって……………」

ワリオ

「オッサン言っくな！俺様は今、獲物を全部盗まれて最高にイライラしてんだー！」

ワリオはカンカンしながら二人に向かって怒鳴りつける。

ワリオ

「そこで、変わりにお前らをぶっ倒して、フィギュアにして連れてってやる……………」

ワリオは怪しい笑みを浮かべながら二人に近づく。

トレーナー

「ふざけるな！お前なんかの好き勝手にさせてたまるかー！」

トレーナーはワリオに怒鳴りつけると、モンスターボールを構える。

ワリオ

「ほう、威勢のいいガキだな……………だが。」

リュカ
「!？」

ワリオはリュカを睨みつける。

ワリオ

「そっちのチビは俺様にビビって動けないんじゃないか？」

リュカ
「うう……………」

リュカは足を震わせる。

ヒモヘビ
「おいリュカ、しっかりしろ！フィギュアにされたネスを取り返すんだろ!？」

リュカ
「あ……………」

リュカはネスがワリオによってフィギュアにされたシーンを思い出す。

トレーナー

「リュカ……………」

ワリオ

「どうした？ またあの時みたいに尻尾巻いて逃げ出すか？」

リュカ

「僕は……………」

トレーナー

「え？」

ワリオ

「あ？」

リュカ

「僕はもう逃げない！！」

そう言うと、リュカは指先を光らせながら構える。

リュカ

「僕はもう逃げ出したり、友達を見捨てたりなんかしない……………」

またそんな事したら、天国にいる母さんやクラウド兄ちゃんに怒られちゃう……………だから……………だから僕は……………僕はもう絶対逃げない！！」

トレーナー

「リュカ……………」

ヒモヘビ

「よく言った！それでこそリュカだ！！」

リュカ

「えへへ、そうかな……………」

リュカは照れ臭そうに頭をかく。

ワリオ

「へっ、面白い……………だったら俺様が逃げ出すようにしてやるっか！？」

ワリオはそう言うと、バイクに乗り込む。

ワリオ

「この俺様の愛用バイクでお前らを叩きのめしてやる!!」

ブオオオツ!!

ワリオはバイクを発進させた。

リュカ

「わあっ、来た〜。」

ヒモヘビ

「おいおい、さっきの威勢はどうしたんだ?」

ヒモヘビはオドオドするリュカを見て呆れる。

トレーナー

「行け!ゼニガメ!!」

パアアアツ。

ゼニガメ

「ゼニーツ。」

トレーナーはモンスターボールからゼニガメを出す。

トレーナー

「ゼニガメ！あのオッサンのバイクに向かって体当たりだ！！」

ゼニガメ

「ゼニゼニーツ！」

トレーナーに指示されたゼニガメは、顔と手足を甲羅の中へ引っ込める。

ゼニガメ

「ゼツニー！！」

そして、そのままワリオが乗るバイクに向かって突っ込む。

ワリオ

「へっ！こんなチビ亀なんか踏み潰してやるー！！」

ワリオはバイクの前車輪を上げながらゼニガメに突っ込む。

ドカアアッ！！

ワリオ

「うお~~~~っ!？」

ワリオはゼニガメの体当たりでバイクごと吹っ飛ばされる。

ドサーーーッ！！

ワリオはおもいつきり尻餅をつく。

トレーナー

「いいぞ、ゼニガメ！」

リュカ

「凄いね、ヒモヘビ……。」

ヒモヘビ

「ああ、あんな小さな体格であれだけのパワーを発揮するとはな……。」

リュカとヒモヘビはゼニガメのパワーに関心する。

ワリオ

「いてて……………もう怒ったぞー!!」

そう言うのと、ワリオはゼニガメに向かって走り出す。

トレーナー

「ゼニガメ！次は水鉄砲だ!!」

ゼニガメ

「ゼツニー!!」

ビュユユツ!!

ワリオ

「うぐっ!？」

ゼニガメは口から勢い良く水を噴射し、ワリオに命中させるが…………。

ワリオ

「こんな水でやられるかー!!」

ボカアッ!!

ゼニガメ

「ガメーッ!!」

ワリオは水鉄砲に怯む事なくビショビショになりながらゼニガメにパンチを繰り返す。

ドサッ!!

ゼニガメはそのまま地面へ倒れ込む。

トレーナー

「ゼニガメ!!」

ゼニガメ

「ゼ……ゼニ……。」

ゼニガメは起き上がろうとするが、完全にひっくり返ってしまい必死にもがく。

ワリオ

「ガッハハハハ！やはり亀は亀だな！！」

ドカツ！ドカツ！

ゼニガメ

「ゼニ……………」

ワリオはビショビショのままゼニガメを蹴りまくる。

トレーナー

「ゼニガメーッ！！」

リュカ

「ああ……………どうしよう……………」

ヒモヘビ

「このままじゃ、ゼニガメがやられちゃう。」

トレーナーが悔しそうに見守る中、リュカはある事に気づく。

リュカ

「……………そうだ!!」

ヒモヘビ

「どうした？リュカ。」

リュカ

「あのおじさんを倒す方法を思いついたんだ。」

トレーナー

「えっ！？本当？」

リュカ

「ちょっと耳を貸して……………」

リュカの言う通り、トレーナーは耳をリュカの口に近づける。

ワリオ

「オラオラー！とつとと甲羅から出てこい!!」

ゼニガメが頭と手足を引っ込めたまま、ワリオは甲羅をサッカーボールのように蹴りまくる。

リュカ

「行くよ、ヒモヘビ！」

ヒモヘビ

「おう！任せろー！」

そう言いつと、リュカはワリオの背後でヒモヘビを投げる。

ガブツ！

ワリオ

「いでーっ！！」

ヒモヘビはワリオの尻に噛み付く。

ワリオ

「こ、このー！離れやがれー！」

ワリオは必死でヒモヘビを剥がそうとする。

リュカ

「ヒモヘビー！」

ヒモヘビ

「おうよー!!」

リュカの合図でヒモヘビはワリオの尻から離れる。

リュカ

「トレーナーさん！今だよー!!」

トレーナー

「分かった……………ゼニガメ！もう一度水鉄砲を放射するんだー!!」

ゼニガメ

「……………ゼニッー!!」

ビュユユッ!!

ゼニガメはトレーナーの指示で引っ込めていた頭と手足を出すと、再びワリオに向かって水鉄砲を放水する。

ワリオ

「あぶぶっ……………こんな水で俺様は倒せないって言っただろ!!」

トレーナー

「それはどうかな？」

ヒモヘビ

「今だ！リュカ！！」

リュカ

「よーし……………PKサンダー！！」

バリバリッ！！

リュカはヒモヘビの合図と共に、PKサンダーを発動させる。

ビビビビビッ！！

ワリオ

「ぐわ〜〜〜！！」

PKサンダーはビショビショのワリオに命中すると、身体全体に電気が走る。

トレーナー

「やった！」

ヒモヘビ

「水は電気を通しやすいからな。」

リュカ

「更に……PKフリーズ！」

パアアッ！！

リュカは頭上に雪の結晶のような冷気を発生させる。

リュカ

「いつけー！！！」

ワリオ

「こ、今度は何……。」

カッチーーン！！

リュカはワリオの近くでPKフリーズを発動させ、ワリオはカチンコチンに凍ってしまう。

トレーナー

「よっしゃー！上手くいったぞー！」

ヒモヘビ

「これで奴もおしまいだろ……………」

バリーーーーン！！

ワリオ

「フンガーッ！！」

ワリオは自力で氷を破った。

リュカ

「ひ、ひい……………」

トレーナー

「じ、自力で氷を破った！？」

ヒモヘビ

「何てしぶとい生命力だ!!」

ワリオ

「貴様らー！俺様を本気で怒らせたなー!!」

ドドドドドッ!!

ワリオはリュカに向かって突っ込んでくる。

リュカ

「あ……あわわ……。」

トレーナー

「リュカ!!」

ヒモヘビ

「何してる！早く逃げろ!!」

リュカ

「う、うん……。」

リュカは逃げようとワリオに背を向けた時……。

ワリオ

「もう遅いわ！あがーっ！！」

ガブッ！！

リュカ

「うわっ！？」

ワリオはリュカの尻に思い切り噛み付いた。

トレーナー

「リュカー！！」

ヒモヘビ

「この〜！犬みたいに噛み付きやがって……。」

リュカ

「た、助けて〜！！」

ワリオ

「ガハハハハ！がばーびろー！！」

ワリオが噛み付きながら大笑いしてる時……。

ゼニガメ

「ゼニゼニッ！！」

ワリオ

「ふがつ？」

トレーナー

「どうしたゼニガメ！？」

ゼニガメがワリオの前で大声を出す。

ゼニガメ

「ゼニベ〜ッ！！」

ゼニガメはワリオに向かってアツカンベ〜をする。

ワリオ

「ムムッ！フガーッ！！」

リュカ

「わあっ！」

ワリオは頭から湯気を出しながら、リュカを吐き出す。

ヒモヘビ

「大丈夫か？リュカ。」

リュカ

「うん……少しお尻が痛いけど……。」

そう言いながら、リュカは自分の尻を撫でる。

ワリオ

「お前も噛み付いてやる！アガーッ！！」

トレーナー

「逃げろ、ゼニガメ

！」

ワリオはゼニガメにも噛み付こうとするが……。

ガキイイツ!!

ワリオ

「あが……………あがが……………」

ワリオはゼニガメが甲羅だけになった状態で噛み付いてしまった為、
歯が何本か折れる。

トレーナー

「そうか、オッサンが噛み付く瞬間に甲羅の中へ頭と手足を引っ込
ませたのか!」

ヒモヘビ

「馬鹿な奴だな……………」

リユカ

「でも……………何か痛そう……………」

ゼニガメ

「ゼニツ!」

ゼニガメは頭と手足を出すと、ワリオの口から出てくる。

ワリオ

「こ、この〜！よくも俺様をコケにしてくれたな〜！！」

ワリオはゼニガメに突っ込もうとする。

リュカ

「PKファイアー！！」

ポオオオツ！！

ワリオ

「あちゃちゃちゃちゃ〜っ！！」

リュカがPKファイアーをワリオの尻に命中させると、ワリオの尻は一気に燃え上がる。

トレーナー

「よし、チャンスだゼニガメ！もう一度殻に籠って体当たりだ！！」

ゼニガメ

「ゼニゼニーツー!!」

ゼニガメは更に頭と手足を引っ込めると、ワリオから遠くへ離れる。

ワリオ

「くそっ！全然消えないぞっ!!」

ワリオは気づかず、辺りを走り回っていた。

ギューユユツ!!

ドガアアツ!!

ワリオ

「わぁ~~~~っ!!」

ゼニガメの甲羅は物凄いスピードでワリオに突っ込み、ワリオは上空へとぶっ飛ばされる。

ゴトッ。

そして、ワリオはフィギュアになって落ちてきた。

リュカ

「やったあ!!」

トレーナー

「上手くいったね!」

リュカとトレーナーはお互いに手を合わせる。

リュカ

「あっ!そういえばネス君は……………」

リュカは遺跡の周りを見渡す。

ヒモヘビ

「確かあのオヤジ、誰かに盗まれたって言ってたな……………」

リュカ

「そ、そんな……………」

リュカは小さい肩を落とす。

トレーナー

「大丈夫！きっと無事でいるって。」

リュカ

「う、うん……そうだね……。」

トレーナーがリュカの肩を軽く叩き励ますと、リュカは少し元気を出す。

？

「グオオオツ！！」

突然遺跡の入口から獣の唸り声が響き渡る。

リュカ

「い、今の声は……。」

トレーナー

「あの声は……リザードンの声だ！！」

ヒモヘビ

「リザードンって、さっきのドラゴンみたいなやつか……。」

リュカ

「じゃあ、この中にいるの？」

トレーナー

「間違いない！入ってみよう……！」

リュカ

「あっ！待って……！」

トレーナーとリュカは遺跡の中へと入っていく。

その頃、デデデは自分の城の王室でルイージ、ネス、ピーチのフィギュアを眺めていた。

デデデ

「これだけいれば安心だぞい……………さて。」

デデデはガウンの袖の中から自分の顔を模したブローチを二つ取り出す。

デデデ

「この世界はお前達に懸かっておるからな。」

そう言いながら、デデデはルイージとネスのフィギュアにブローチを付ける。

デデデ

「ぬお？一個足りんぞい……………」

デデデはビーチにもブローチを付けようとしたが、一個足りない事に気づく。

デデデ

「…………やむを得んな。」

そう呟きながら、自分の胸に付けてたブローチをビーチのフィギュアに付ける。

デデデ

「後でまた作れば問題無いぞい！」

ドオオオオン！！

デデデ

「な、何事ぞい！？」

突然大きな音が城中に響き渡る。

ワドルドウ

「た、大変です陛下！何物かがこの城に奇襲を仕掛けて来ました！
！」

デデデ

「な、何じゃと！？」

急いで駆け付けて来たワドルドウの言葉にデデデは驚愕する。

デデデ

「ワドルドウ隊長！急いで城にいるワドルディ達を避難させるぞい
！！」

ワドルドウ

「ハハッ！直ちに……………」

デデデの言葉を聞いたワドルドウは勢い良く王室から出ていく。

デデデ

「まさか奴らがここまで……………」

ゴツッ！！

デデデ

「ふがつ！？」

突然天井が割れて、天井の破片がデデデの頭を直撃した。

デデデ

「うっっん……………」

そのままデデデは倒れてしまった。

ドゴッ！！ドガッ！！

次々と破片が落下してくる。

クッパ

「よし！入るぞ！！」

更に天井の穴からクッパとその手下達が次々と侵入してくる。

クツパ

「この城の中にフィギュアがあるハズだ！見つけ出すのだ！！」

ノコノコ

「了解！」

そう言うと、クツパ達は瓦礫の上から辺りを見渡す。

クツパ

「ん？これは……………」

クツパは瓦礫の中からピーチのフィギュアを発見する。

一方マリオ達は洞窟を抜けてデデデ城前にいた。

マリオ

「この城は……………」。

カービィ

「ぽー！？ぽよぽよっ！」

カービィは城を見るなり声を上げる。

ヨッシー

「カービィはあの城を知ってるの？」

ピット

「そう言えば、あのペンギンみたいな人の事も知ってたみたいだったけど……………」

リンク

「じゃあ、奴はこの城の中に……………」

マリオ

「よし！入ろう！！」

マリオの掛け声と共に全員城の中へ侵入する。

数分後、マリオ達はデデデ城の王室へ到着する。

マリオ

「これは……………」

リンク

「何があつたんだ？」

カービィ

「ぼよぼよ……！」

ヨッシー

「どうしたの？カービィ。」

カービィが指さす方を見ると、左奥の壁に隠し通路を発見する。

ピット

「アレは……隠し通路でしょうか？」

マリオ

「とにかく、入ってみよう!!」

マリオ達は隠し通路へと入っていく。

城の外の崖に向かって、クッパがピーチのフィギュアを持ちながら歩いていた。

クッパ

「まさかピーチ姫のフィギュアが手に入るとはな……………これは思わぬ掘り出し物だぞ。」

マリオ

「待てー！クッパー！！」

クッパ

「ムッ！？その声はマリオか！」

クッパが振り向くと、マリオが勢い良くここまで走ってくる。

マリオ

「あの城を荒らしたのはお前だな！！」

マリオはクッパに殴り掛かろうとするが……。

クッパ

「おっと！攻撃できるものならやってみろ！！」

クッパはピーチのフィギュアを盾にする。

マリオ

「なっ！？」

マリオは咄嗟に拳をピーチのフィギュアから避けると、後ろへ後ずさりする。

ピット

「くらえ！パルテナアロー！！」

ビビュッ！

クッパ

「おっとっと！」

ピットの放ったパルテナアローをクッパは間一髪避けた瞬間、ピ
チのフィギュアからデデデのブローチが外れる。

クッパ

「うおっ！？おわああああ……………」

クッパは崖に足を竦み、そのまま落下するが……………。

クッパ

「……………なぐんてな！」

クッパは飛行船に乗っていた。

クッパ

「ピーチ姫のフィギュアは頂いていくぞ！ガハハハハハ！！」

クッパは高笑いを上げながら戦艦ハルバードに向かって去っていく。

マリオ

「くそっ……………」

ピット

「逃げられた……………」

リンク

「！……………あの船は。」

リンクが見上げた瞬間、戦艦ハルバードは去っていく。

カービィ

「ぽよっ？」

カービィはデデデのブローチを拾い上げる。

ヨッシー

「カービィ、何それ？」

カービィ

「ぽよぽ……………」

パクッ！

ヨッシー

「あ……………食べちゃった。」

カービィがブローチを一飲みにし、ヨッシーは啞然とする。

デデデ城の前にエインシャント卿と二体のロボットが亜空間爆弾を

設置していた。

ロボットA

「ますたー、亜空間爆弾ヲ起動サセマシタ。」

ロボットB

「早くオ逃ゲ下サイ。」

エインシャント卿

「分かった……………」

そう言い残すと、エインシャント卿はゆっくりとその場から離れる。

ロボットA

「ますたー……………」

ロボットB

「オ元気デ……………」

ゴオオオオツ！！

ロボット達が頷いた時、亜空間爆弾が起動し、デデデ城は亜空間に

飲み込まれる。

「ガノンドロフよ……。」
「？」

ガノンドロフ
「ムッ？」

ガノンドロフのいるモニタールームの大きな画面に巨大な白い左手が映り出す。

ガノンドロフ
「マスターハンド様。」

Mハンド
「例の兵器は完成したか？」

ガノンドロフ
「間もなく完成致します。」

Mハンド
「そうか……一刻も早くアレを完成させるのだ！」

ガノンドロフ
「ハハッ！」

ガノンドロフは胸に手を当てて頭を下げる。

ガノンドロフ

（フフフ………今に見ているマスターハンド………世界はこの俺が支配するのだから………。）

ガノンドロフは頭を下げながら怪しい笑みを浮かべていた。

第八話　遺跡前の決闘とデデデ城敵襲　（後書き）

何だか最近ごたごたになっている気がします。が、どうでしょうか？
率直な感想と意見を待っています。

第九話　二匹のポケモン奪還

リュカとポケモントレーナーは遺跡の中を探索していた。

リュカ

「や、やっぱり結構暗いね……………」

ヒモヘビ

「何だリュカ、ひょっとして怖いのか？」

リュカ

「そ、そんな事ないよ！」

トレーナー

「大丈夫だよ、お化けなんていないさ。」

リュカ

「そ、そうだね……………ねえ、トレーナーさん。」

トレーナー

「何？」

リュカ

「ポケモンって色々な種類がいるけど………お化けみたいなポケモンっている？」

トレーナー

「うん、いるよ………僕が知ってるのはゴースやゴースト、ゲンガー位かな。」

ヒモヘビ

「………いかにもお化けっぽい名前だな。」

リュカ

「何か怖いなあ………」

トレーナー

「僕もゴースト系のポケモンは苦手だな、ゴースト系は物理的な攻撃は効かないし………あっ!!」

リュカ&ヒモヘビ

「うわっ!？」

トレーナーの上げた大きな声にリュカとヒモヘビは驚く。

ヒモヘビ

「な、何だよ！？急に大きな声出しやがって！」

リュカ

「ま、まさかゴーストポケモンが……………」

リュカはトレーナーの後ろに隠れながら問い掛ける。

トレーナー

「違う……………見つけたんだ……………僕のフシギソウを。」

リュカ

「……………え？」

リュカは先の道の方を見ると、背中に蕾を乗せたポケモンのフィギユアを発見する。

リュカ

「もしかして、アレもトレーナーさんのポケモン？」

トレーナー

「ああ……………でも、どうしてこんな所に……………」

そう言いながら、トレーナーはモンスターボールを取り出す。

トレーナー

「取り敢えず、フシギソウを戻そう！」

ポイツ！

パアアッ！！

トレーナーがモンスターボールを投げると、フシギソウはボールの中へ入る。

トレーナー

「よし！フシギソウを取り戻したぞー！」

リユカ

「良かったね。」

トレーナー

「後はリザードンだけか……………」

ヒモヘビ

「ああ、あのドラゴンみたいなポケモンか。」

トレーナー

「そう……でも、リザードンは何処にいたんだろう?。」

リュカ

「ねえ、さっきのフシギソウなら何か知ってるんじゃないかな?。」

トレーナー

「あ! そうか!。」

ヒモヘビ

「お前、冴えてるな。」

リュカ

「そ、そうかな……。」

リュカは照れ臭そうに頭をかく。

トレーナー

「よし、出てこい! フシギソウ!。」

パアアアッ!!

フシギソウ

「フシューッ!!」

トレーナーがモンスターボールを投げると、フシギソウが出てくる。

トレーナー

「フシギソウ、リザードンが何処にいるか知らないか?」

フシギソウ

「フシ? フシフッシ!」

フシギソウはムチを先へ続く道へと向ける。

ヒモヘビ

「よく分かんねえけど……この先にいるって言ってるみたいだな。」

「

フシギソウ

「ソウソウッ!」

フシギソウは頷く。

リュカ

「それじゃあ、先へ進もう！」

トレーナー

「よし！フシギソウ、道案内頼むぞ！」

フシギソウ

「フッシー！！」

フシギソウが歩き出すと、リュカとトレーナーは後から付いていく。

フシギソウ
「フシフシッ。」

リュカ
「これは……………」

トレーナー
「トロッコのようだ……………」

フシギソウが立ち止まった場所は一台の蓋付きのトロッコが置いてある線路だった。

トレーナー

「この先にリザードンがいるのか？」

フシギソウ

「ソウソウッ！」

フシギソウは再び頷く。

ヒモヘビ

「でも、先へ行くにはこれに乗らなきゃいけないよな？」

リュカ

「これ、安全かな？」

トレーナー

「大丈夫だよ！多分……………」

フシギソウ

「フシッ！」

リュカが不安で一杯の中、フシギソウがトロツコに乗り込む。

ヒモヘビ

「アイツ、お前より勇敢だな。」

リュカ

「うつ…………。」

ヒモヘビの言葉にリュカは返す言葉がない。

トレーナー

「と、とにかく僕達もトロツコに乗ろうか。」

リュカ

「う、うん…………。」

続いてリュカとトレーナーもトロツコに乗り込む。

ボタン！

リュカ

「うわっ!？」

突然トロツコに付いてた蓋が閉じる。

ヒモヘビ

「これじゃ、何も見えないじゃないか！」

ガタン！

更にトロツコが動き出す。

トレーナー

「わっ！動き出した！！」

リュカ

「何も見えないと不安だな〜。」

フシギソウ

「フシフシ〜。」

フシギソウがムチでリュカの頭を撫でる。

リュカ

「あ、ありがとう。」

ヒモへビ

「心配すんなって！そんなに時間掛からないと思うから……………」。

トロツコが発進して数時間が過ぎようとしていた。

リュカ

「ね、ねえ……………まだ着かないの？」

ヒモヘビ

「幾ら何でも長すぎるよな。」

トレーナー

「そろそろ到着すると思うけど……………」。

ドンッ！

リュカ

「わあっ！？」

突然トロツコが何かにぶつかった音が響く。

トレーナー

「どうやら着いたようだね……………」。

ヒモヘビ

「早く降りようぜ……………どうも狭苦しくて敵わん。」

リュカ

「そうだね。」

リュカ達はトロッコの蓋を開けると、トロッコから降りる。

フシギソウ

「フシフシッ。」

フシギソウは降りた途端に再び走り出す。

トレーナー

「あっ！待ってフシギソウ！！」

トレーナー達はフシギソウの後を追いかける。

リユカ

「ハアハアッ……………まだ歩くの？」

ヒモヘビ

「もう大分歩いたぜ。」

トレーナー

「う、うん……………フシギソウ、まだ着かないのか？」

フシギソウ

「フシフッシ。」

ヒモヘビ

「どうやら、まだのようだな……………」

リュカ

「……………それにしても、この遺跡は何処まで続いているのかな？」

トレーナー

「さあ……………一体誰が造ったんだろ……………」

？

「グアアアッ！！」

突然洞窟内に獣の雄叫びが響き渡る。

リュカ

「じ、この声は確か……………」

トレーナー

「リザードンだ！」

ヒモヘビ

「そう遠くはないな。」

フシギソウ

「フシッ！！」

リザードンの雄叫びを聞いたフシギソウは走り出す。

トレーナー

「あー！フシギソウ！！」

トレーナー達も必死でフシギソウの後を付いていく。

フシギソウ

「フシフシッ！」

突然フシギソウが立ち止まる。

リュカ

「どうしたの？フシギソウ……………あ！」

トレーナー

「リザードン！！！」

フシギソウの前にリザードンが立っていた。

リザードン

「グオオオツ!!」

トレーナー

「無事で良かった。」

リユカ

「ねえ、何か様子が変わらない?」

トレーナー

「え?」

トレーナーがリユカの方を向いた時……………。

リザードン

「グワアアツ!!」

ポオオオオツ!!

リザードンがトレーナーに向かって口から炎を吐いた。

トレーナー

「なっ!?!」

リュカ

「危ない!サイマグネット!」

リュカが急いでトレーナーの前に出てきて、サイマグネットでリザードンの炎を吸収する。

リュカ

「あ、危なかった……………」

ヒモヘビ

「まさに間一髪だったな……………」

トレーナー

「あ、ありがとうリュカ……………」

リュカ

「いや……………それより怪我はない?」

トレーナー

「うん、大丈夫……………」

リュカ

「そう、良かった……。」

リュカはホッと胸を撫で下ろす。

リザードン

「グガアアッ！」

リザードンは相手に向かって威嚇する。

トレーナー

「やめろリザードン！僕が分からないのか！？」

リザードン

「ガアアッ！！」

リザードンはトレーナーの言葉に耳を貸さず、巨大な岩を持ち上げる。

ヒモヘビ

「聞く耳持たずって感じだな……。」

トレーナー

「くっ！一体どうすれば……………」

トレーナーは拳を強く握りながら考え込む。

リュカ

「あのさ、モンスターボールの中に入ればリザードンも大人しくなるんじゃないかな？」

トレーナー

「あ！それだ！！」

ヒモヘビ

「リュカ、お前今日は本当に冴えてるな。」

リュカ

「そ、そうかな……………」

リュカは再び照れ臭そうに頭を掻く。

リザードン

「グオオオツ!!」

ドゴオオツ!!

リザードンは巨大な岩を頭で砕き、岩の破片がリュカとトレーナーに向かって飛び散る。

トレーナー

「まずい!!岩砕きだ!!」

リュカ

「ど、どうしよう……………」

フシギソウ

「ソウツ!!」

ドカツ!バキツ!

フシギソウはムチを振り回し、岩を薙ぎ払う。

リュカ

「た、助かった……………」

トレーナー

「ありがとう、フシギソウ。」

フシギソウ

「フシッ。」

フシギソウの顔が真っ赤になる。

リザードン

「グガアッ!!」

リザードンはじだんだを踏む。

ヒモヘビ

「おい、アイツ怒ってるみたいだぞ……。」

トレーナー

「これじゃあ、ボールに戻せない……。」「

リュカ

「ねえ、僕にいい考えがあるんだけど……。」「

トレーナー

「えっ？」

リュカ

「ちょっと耳貸して……………」

トレーナーはリュカに耳を傾ける。

トレーナー

「分かった！やってみよう！！」

トレーナーはリュカの作戦を聞いて、勢い良く立ち上がる。

リザードン

「グオオオッ！！」

リザードンはトレーナー達に向かって飛行しながら突進してくる。

トレーナー

「フシギソウ！葉っぱカッターだ！！」

フシギソウ

「フシーツ!!」

バシユツ!!

フシギソウは葉っぱを手裏剣のように発射する。

リザードン

「ガアアッ!!」

ポオオオッ!!

リザードン一旦飛行をやめて、その場で火炎放射を放出しフシギソウの葉っぱカッターを燃やす。

トレーナー

「今だフシギソウ! つるのムチでリザードンの動きを止めるんだ!!」

フシギソウ

「フシフシツ!!」

フシギソウはムチで宙に浮いてるリザードンの首や手足を縛る。

リザードン

「ガアアッ!」

ボオオオオッ!!

リザードンはフシギソウに向かって火炎放射するが……………。

リュカ

「サイマグネット!」

リュカがフシギソウの前に出てきて、サイマグネットを発動させて炎を吸収する。

トレーナー

「よし! タネマシンガンでとどめだ!」

フシギソウ

「フシフッシー!」

ズドドドドッ！

リザードン

「ガアアッ……………」

フシギソウはリザードンの真下まで移動すると、蕾からタネが連続で発射してリザードンの腹に命中する。

トレーナー

「リュカ！頼む！！」

リュカ

「分かった！PKフリーズ！！」

パアアアッ。

カチーン！！

リザードン

「ガアアアッ！！」

リュカ

「それっ!!」

パリーーン!!

リュカはPKフリーズを発動させ、リザードンを凍らせてリュカが手を下ろすと、リザードンの凍った氷が割れる。

ゴトッ!

リザードンはフィギュアになり、地面へと転がる。

トレーナー

「それっ!」

ポイツ!

パアアアッ。

トレーナーはモンスターボールを投げると、リザードンはボールの中へ入る。

トレーナー

「やった！リザードンも取り戻したぞ！！」

リュカ

「これでトレーナーさんのポケモンは全部戻ったんだね。」

トレーナー

「ああ、この三匹が僕の手持ちのポケモンなんだ。」

ヒモヘビ

「みんな強そうだな。」

トレーナー

「そりゃあ、ポケモンリーグを目指してるからね。」

リュカ

「ポケモンリーグ？」

トレーナー

「要するに強いポケモントレーナー達が集まる所かな。」

リュカ

「トレーナーさんならきつとポケモンリーグに行けるよ！」

トレーナー

「ありがとう、リュカにそう言われると何か頑張れる気がするよ。」

ヒモヘビ

「なあ、和んでる所で悪いが……そろそろ戻らないか？」

リュカ

「そ、そうだね……でも、此処って何処？」

トレーナー

「……………え？」

リュカの言葉に一同は静寂になる。

ヒモヘビ

「どうやら迷ったみたいだな……………」

リュカ

「ど、どうしよう……………」

トレーナー

「仕方ない、先へ進もう……………先に出口があるかもしれない。」

リュカ

「そうだね…………じゃあ、行こう。」

トレーナー

「よし…………戻れ！フシギソウ。」

ポイツ！

パアアアツ。

フシギソウはトレーナーの投げたモンスターボールへ入る。

トレーナー

「それじゃ、改めて出発しようか！」

リュカ

「うん！」

トレーナーとリュカは歩き出す。

その頃マルス、アイク、メタナイトの三剣士は荒野にいた。

マルス

「奴を追って此処まで来たけど……………」。

メタナイト

「完全に見失ってしまったな……………」

アイク

「おい、アレを見る。」

アイクの言葉にマルスとメタナイトは近づく。

メタナイト

「どうした？ 奴を見つけたのか？」

マルス

「ん！？ アレは……………」

三剣士は荒野の方を見渡すと、巨大な戦車のような物体が物凄いスピードで走行していた。

メタナイト

「アレは一体何だ？」

アイク

「何でもいい、行くぞ！」

マルス

「あ！ちよつと……。」

アイクは勢い良く崖から飛び降りる。

メタナイト

「マルス、私達も行こう。」

続いてメタナイトも崖から飛び降りる。

マルス

「やれやれ……。」「

マルスも頭を掻いた後、崖から飛び降りる。

第十話　少年達の友情バトル

マルス、アイク、メタナイトの三剣士は荒野を走行する巨大戦車を追跡していた。

マルス

「それにしても、アレは一体何だろう？」

アイク

「さあな、でも何か怪しいな……。」

メタナイト

「確かに……もしかしたら亜空軍と関係があるかもしれん。」

三剣士が話をしながら追跡して数分、巨大戦車は立ち止まる。

アイク

「やっと追い詰めたぞ！」

三剣士が巨大戦車に近づくと……。

ウィーン！ガチャーン！

マルス

「な、何だ！？」

巨大戦車は段々変形していく。

メタナイト

「戦車がどんどん人型へと変形していく……。」

ガシャーン！！

そして、巨大戦車は巨大な人型ロボットへと完全に変形した。

？

「ウガガ……………俺ガレオム……………才前ラ……………倒ス！！」

ガレオムと名乗る巨大ロボは大きな腕を豪快に振り回す。

マルス

「かなり厄介な相手のようですね……………」

アイク

「相手がどんな奴だろうと関係ない！悪い奴は倒すのみ！！」

メタナイト

「その通り！行くぞ！！」

三剣士はガレオムに向かって剣を構える。

ガレオム

「ウガーーッ！！」

ドッシーーン！！

ガレオムは左右の拳を振り下ろすが、三剣士は難無く避ける。

アイク

「フッ、やはり動きはそんなに速くないな。」

マルス

「でも、一発でも当たったら一たまりもない。」

メタナイト

「よし、こちらでも反撃しよう！」

そう言うと、メタナイトは背中に翼を生やし、滑空しながらガレオムに近づく。

ガレオム

「潰シテヤル！！」

バツシーン！！

ガレオムは両手でメタナイトを挟み込むが……。

ガレオム

「……………アレ？」

ガレオムが手の平を確認するとメタナイトの姿はなかった。

メタナイト

「ここだ！」

メタナイトはガレオムの頭上を浮上していた。

メタナイト

「ドリルラッシュ!!」

ガシャッ!!

ガレオム

「グガッ!?!」

メタナイトはガレオムの頭上で剣を突き出して回転しながら突進する。

マルス

「は、速い……。」

アイク

「それに、あれは人間技じゃない……。」

マルスとアイクは関心していた。

ガレオム

「ムガーッ!!」

ガレオムは体を捻って独楽のように回転させる。

メタナイト

「ムッ!? ひ、引き寄せられる……………」

メタナイトはどんどん回転するガレオムに引き寄せられる。

マルス

「メタナイトさん!!」

アイク

「くそっ……………」

アイクは神剣ラグネルを構えながらガレオムに向かって走り出す。

アイク

「とうっ!!」

ガキィイツ!!

ガレオム

「グガッ!？」

アイクが投げたラグネルがガレオムの腕に直撃すると、ガレオムは動きを止める。

アイク

「今だ!天・空!！」

ガキイイツ!!

ガレオム

「グオオオツ!！」

アイクは空中でラグネルをキャッチし、そのまま急降下しながらガレオムの腕を斬りつける。

マルス

「アイクも凄いな……………あんな巨大な腕を薙ぎ払うなんて……………」

メタナイト

「ふう………すまない、助かった。」

アイク

「気にするな。」

ガレオム

「ウガーッ!!」

ガレオムは肩から4発のミサイルを発射する。

メタナイト

「危ない! 避ける!!」

メタナイトの合図に三剣士は避けようとするが………。

ドオオオオン!!

マルス

「うわっ!!」

アイク

「ぐっ!!」

マルスとアイクが爆風に巻き込まれて、吹き飛ばらせる。

メタナイト

「二人とも！大丈夫か！？」

マルス

「な、何とか……………」

アイク

「これくらい平気だ……………」

メタナイトが慌てて二人に近づいて無事を確認すると、マルスとアイクは立ち上がる。

メタナイト

「それにしても、奴の多彩な攻撃が厄介だな……………」

アイク

「ならば、奴の動きを封じなければ……………」

マルス

「その事なんだけど……僕にいい考えがあるんだ。」

メタナイト

「何だ？」

マルス

「ちよつと集まって……。」「

アイクとメタナイトはマルスに近づく。

マルス

「……………どうかな？」

メタナイト

「うむ、それでいいっ！」「

アイク

「ああ、異論はない。」

ガレオム

「才前ラ！何ヲコソコソ話シテンダー！」「

メタナイト

「よし！作戦決行だ！！」

マルス

「はい！！」

アイク

「おう！！」

ガレオムの怒声を合図に三剣士はガレオムに向かって駆け出す。

ガレオム

「オラアアッ！！」

ガレオムはメタナイトに向けて左拳を降ろそうとするが……………。

メタナイト

「デイメンジョンマント！！」

フッ！

ドゥシーーン！！

ガレオムの拳が迫る中、メタナイトはマントに身を包むと同時に姿を消す。

ガレオム

「ド、何処ダ!?!」

ガレオムは拳を降ろしたまま辺りを見渡す。

メタナイト

「……………ここだ。」

ガレオム

「ッ!?!」

突然メタナイトはガレオムの目の前に現れる。

メタナイト

「マッハトルネイド!?!」

ズババババッ!?!

ガレオム

「グオオオツ!!」

メタナイトは体を高速に回転させ竜巻を作りながらガレオムの顔面を攻撃する。

アイク

「よし、今だ!」

ガレオムが怯んでいる隙にアイクはガレオムの置かれたままの左腕に立つ。

アイク

「くられ! 噴火!!」

ドオオオオン!!

ガレオム

「ガアアアツ!?!」

アイクはラグネルを逆手に持ち上段に構えると、しばらく溜めたのち炎を上げながらガレオムの腕におもいつき突き刺す。

ガレオム

「又、抜ケナイ!!」

ガレオムは必死にもがくがラグネルに打ち付けられた腕は抜けない。

アイク

「マルス! 今だ!!」

マルス

「はい!!」

アイクの合図にマルスはガレオムに向かって一直線に走る。

マルス

「たあっ!!」

更にマルスはガレオムの前まで来ると、おもいつきり高くジャンプする。

マルス

「とどめだ! シールドブレイカー!!」

ザグッ！！

ガレオム

「ガアアアッ！！」

マルスは渾身の力を込めながらガレオムの額にファルシオンを突き付ける。

ガレオム

「又オオオッ！！」

ガレオムはおもいきり遠くへジャンプする。

ドッシーーン！！

ガラガラッ！！

ガレオム

「ウワアアアッ！！」

遺跡の入口付近に着地したガレオムは足場が崩れて、そのまま落下してしまう。

マルス

「奴は何処へ……？」

アイク

「アレを見ても。」

三剣士が崖っぷちまで駆け出すと、遺跡付近に穴が開いた地面を発見する。

メタナイト

「……どうやらあの穴の中に落ちたようだな。」

マルス

「では、これで僕達の勝利ですね。」

アイク

「そうだといいいんだがな……。」

三剣士はしばらく穴を眺めている。

その頃、リュカとポケモントレーナーは遺跡の奥のホールらしき場所まで来ていた。

リュカ

「ここって、結構広いね……。」

トレーナー

「まるでホールみたいだ……。」

ヒモヘビ

「でも、ここには出口はなさそうだな。」

トレーナー

「仕方ない、引き返そう……。」

二人がホールから出ようとした時……。

ドッスーーン!!

リユカ

「うわっ!!」

トレーナー

「な、何だ!?!」

ヒモヘビ

「上から何か落ちてきたぞ!!」

ガレオム

「ウグググ……………オノレ……………」

ガレオムがホールの上から落ちてきて、ガレオムはゆっくりと起き上がる。

リュカ

「こ、今度は何……………」

トレーナー

「分からないけど、ポケモンでない事は確かだ……………」

ヒモヘビ

「お前って何でもポケモンに例えるんだな……………」

ガレオム

「ウガー―ッ! もう誰デモイイカラ、ブツ飛バシテヤル―!!」

ガレオムは雄叫びと共に腕を上げる。

ヒモヘビ

「どうやら、敵のようだな。」

トレーナー

「リュカ！行くよ！！」

リュカ

「うん！！」

トレーナーとリュカはガレオムに向かって構える。

トレーナー

「行け！リザードン！！」

パアアアッ。

リザードン

「グウウウッ！」

トレーナーがモンスターボールを投げるとリザードンが出てくる。

ガレオム

「ウガアアッ!!」

ガレオムはリザードンに向かって拳を振るうが……。

トレーナー

「リザードン!空を飛ぶで避ける!!」

リザードン

「ガアアアッ!」

ドガアアアッ!!

リザードンは上空へ浮上し、ガレオムの拳を避ける。

リュカ

「PKフリーズ!!」

パキイイッ!

ガレオム

「ムッ!?!」

リュカはPKフリーズを発動させるが、すぐに氷が割れてしまった。

リュカ

「あ、あれ？」

ヒモヘビ

「ロボットにはあまり効果がないようだ……。」

ガレオム

「マズハオ前カラダー……！」

ガレオムはそのままリュカに向かって倒れ込む。

リュカ

「うわっ……！ た、助け……。」「

ドッシーン……！！

リュカ

「……………あれ？ 僕、助かって……………あっ……！！」「

リュカが目を開けると、リザードンに掴まれていた。

トレーナー

「ふう、危なかったなあ……………」

リュカ

「あ、ありがとう。」

リザードン

「グウウッ。」

ガレオム

「オノレーーーーッ！！」

ガレオムはリザードンに向かって拳を振り上げる。

ガシッ！！

ガレオム

「ムムッ！？」

ガレオムの腕はフシギソウのムチによって止められた。

リュカ

「フシギソウ！いつの間に……。」

トレーナー

「奴がリザードンに気を取られてる隙に出したのさ！それに……。」

ゼニガメ

「ゼニーツ！！」

ブシユユツ！！

ガレオム

「又オオオツ！？」

更にゼニガメがガレオムに向かって水鉄砲を発射する。

リュカ

「ゼニガメも出てたんだ……。」

トレーナー

「リュカ！何だかサンダーをやってくれ！！」

リュカ

「え？ああ！分かった……………PKサンダー！！」

バリバリバリッ！！

ガレオム

「グガガガッ！！」

リュカのPKサンダーがガレオムに命中すると、ガレオムの体中から電気が通る。

ヒモヘビ

「ありゃあ、ワリオってオヤジにも使った攻撃法だな。」

トレーナー

「やったな！リュカ！！」

リュカ

「うん！トレーナーさんとポケモン達のおかげだよ。」

リュカはリザードンから降りて着地すると、トレーナーとお互いに

喜び合う。

ヒモヘビ

「おい、まだ喜びに浸ってる場合じゃないぜ。」

リユカ

「え？」

ガレオム

「ムガガガ……。」

ガレオムはゆっくりと動き出す。

トレーナー

「まだやる気か!？」

ガレオム

「絶対二許サーン!！」

ガレオムは肩からミサイルを連射する。

ドッカーーン!!

ゼニガメ

「ゼニーーッ!!」

フシギソウ

「フシーーッ!!」

リザードン

「グガアアッ!!」

ゼニガメ、フシギソウ、リザードンの三匹は爆風に巻き込まれてしまふ。

トレーナー

「みんな!!大丈夫か!?!」

トレーナーは慌ててゼニガメ達に近づく。

ゼニガメ

「ゼ、ゼニ……。」

フシギソウ

「フシフ……………」

リザードン

「グウウツ……………」

三匹のポケモンはゆっくりと立ち上がる。

トレーナー

「良かった……………まだ無事ようだ。」

ヒモヘビ

「にしても、あのゴリラ野郎目茶苦茶強いな。」

リュカ

「僕達に勝てるかな？」

ガレオム

「ウガーツ!!」

ガレオムはどんどんリュカ達に歩み寄る。

トレーナー

「一体どうすれば……んっ？」

トレーナーはガレオムの額から電気がバチバチ鳴っている事に気づく。

トレーナー

「……………リュカ。」

リュカ

「えっ！？何？」

トレーナー

「アイツの額をってみろよ。」

リュカ

「額？……………あっ！」

リュカもガレオムの額を見て気づく。

トレーナー

「恐らくあの額を連続で攻撃すれば……………」

リュカ

「で、でもゼニガメ達は……………」

リュカは三匹のポケモンの方を向くと……………。

ゼニガメ

「ゼニ、ガメガメ!!」

フシギソウ

「ソウ! フシフシ!!」

リザードン

「グワアッ!!」

三匹のポケモンはさっきのダメージが残っているのにも関わらず、やる気に満ち溢れていた。

トレーナー

「みんな…………… やってくれるのか?」

ゼニガメ

「ゼニツ!!」

フシギソウ

「フッシー!!」

リザードン

「ガァアッ!!」

三匹のポケモンは激しく頷く。

ヒモヘビ

「お前のポケモンは本当にすげえな。」

トレーナー

「そ、そんな事……。」

トレーナーは帽子で顔を隠す。

ガレオム

「サァ! 覚悟シロー!!」

トレーナー

「よーし! みんなで行くぞ!!」

リュカ
「うん!!」

ゼニガメ
「ゼニーツ!!」

フシギソウ
「フシフシツ!!」

リザードン
「グオオオツ!!」

トレーナーの掛け声で、リュカと三匹のポケモンは駆け出す。

トレーナー

「ゼニガメ! 殻に籠るんだ!!」

ゼニガメ
「ゼニツ!!」

ゼニガメはトレーナーの指示で頭と手足を甲羅の中へ引っ込める。

トレーナー

「次にフシギソウ！お前のムチでゼニガメを奴の額に投げ付ける！
」

フシギソウ

「フッシー！！」

シュルシュルッ。

フシギソウはゼニガメの甲羅をムチで巻き付ける。

フシギソウ

「ソウッ！！」

ビヒュッ！！

フシギソウはガレオムに向かってゼニガメの甲羅をおもいつきり投げ付ける。

ガレオム

「チヨコザイナ！！」

ガレオムは拳を振り上げるが……。

ガレオム

「ウグツ!？」

アイクに突き刺された部分から電気が走り出し、振り上げていた腕を止める。

ガツーン!!

ガレオム

「グガアッ!!」

ゼニガメの甲羅はガレオムの額に命中した。

トレーナー

「やっぱり額が弱点か……………フシギソウ! つるのムチで奴の額まで行くんだ!!」

シュルシュルシュルッ。

ガレオム
「ムムツ!？」

フシギソウはムチをガレオムの頭部周りを巻き付けて、どんどんガレオムに迫ってゆく。

トレーナー

「今だ!タネマシンガンだ!！」

フシギソウ

「フシフシュー!！」

ドドドドドツ!!

ガレオム

「ゴワアアツ!！」

丁度ガレオムの額まで辿り着いた瞬間、フシギソウはタネマシンガンをおみまいさせる。

トレーナー

「よし、いいぞ……………最後にリザードン!空を飛ぶで奴に接近するんだ!！」

リザードン

「グオオオッ！」

リザードンはトレーナーの指示により、空を飛行しながらガレオムに近づく。

ガレオム

「コ、今度八何ダ!？」

ガレオムは接近するリザードンに近づくと、

トレーナー

「いけ! 岩砕きた!！」

リザードン

「ガアアッ!！」

ドゴオオッ!!

ガレオム

「グギヤアアッ!！」

リザードンは岩砕きで岩を砕くと、岩の破片がガレオムの額にぶつかる。

トレーナー

「よし！後は頼むぞ、リュカー！」

リュカ

「任せてー！ー！」

リュカはリザードンの背中から飛び出す。

リュカ

「PKサンダーー！ー！」

バリバリッ。

リュカはPKサンダーを発動させると、自分の背後まで誘導させると……。

バァァンー！

リュカ

「うおおおっ!!」

サンダーはリュカの背中に直撃し、そのままガレオムに向かって突っ込む。

ガレオム

「ヤ、ヤメ……………」

バチバチバチッ!!

ガレオム

「ギエエエエツ!!」

見事ガレオムの額に直撃すると、ガレオムの額から全身に電気が走る。

トレーナー

「やったー!!」

リュカ

「う、上手くいった……………」

ガレオム

「ウグググ……………」

ガレオムはその場で手を地面に付ける。

トレーナー

「よくやったぞみんな！戻れ！！」

パアアアツ。

トレーナーは三匹のポケモンをモンスターボールにしまう

ガレオム

「クソ……………コウナッタラ……………」

ガシッ！！

リュカ

「わあっ！？」

トレーナー

「は、離せ!!」

ガレオムは巨大な手でリュカとトレーナーを掴む。

ガレオム

「オ前ヲ道連レニシテヤル!!」

パカッ。

ガレオムの頭部が開くと同時に亜空間爆弾のカウントが開始される。

トレーナー

「な、何をするつもりだ!?!」

リュカ

「きつと爆発するんだよ!」

ビビュユユッ!!

ガレオムは背中のエンジンを発動させ、段々上空へと上昇する。

ヒモヘビ

「畜生！空の上で自爆するつもりかー！！」

トレーナー

「も、もう駄目だ……。」

リュカ

「トレーナーさん！？」

遺跡のホールを抜けて、外まで突き出てきた時にトレーナーは力尽きる。

リュカ

「一体どうすれば……そうだ！PKサンダーー！！」

バリバリッ！！

ポカーン！！

リュカはPKサンダーでガレオムの腕を破壊する。

ドオオオオツ。

ガレオムの頭部に搭載されていた亜空間爆弾が発動し、空一面に亜空間が広がる。

リュカ

「トレーナーさん!!」

リュカは落下しながらトレーナーに近づく。

ガシッ!

そして、リュカはトレーナーを抱きしめる。

ヒモヘビ

「このままじゃ、二人共地面に激突しちまう!」

リュカ

(母さん……クラウド兄ちゃん……助けて!!)

地面まであと数cmの迫るが……。

バ
サ
ー
ー
ッ
。

リ
ュ
カ

「……………あれ？」

メタナイト

「危ないところだったな。」

リュカとトレーナーはメタナイトによって救出されていた。

リュカ

「あ、貴方は……………」

メタナイト

「私はメタナイト……………あのロボットが突然上空へ上昇したから近づいてみたら、君達が落下してきたから間一髪救出したという訳だ。」

ヒモヘビ

「とにかく、助かって良かったなリュカ。」

リュカ

「……………うん!!」

メタナイト

「さて、一刻も早く此处から離れなければ……………」

メタナイトはどんどん広がっていく亜空間から遠ざかる。

リュカとトレーナーとメタナイト達三剣士は遺跡から大分離れた場

所にいた。

アイク

「そうだったのか……………」

マルス

「君達もあのロボットと闘ってたんだね。」

リュカ

「は、はい……………」

メタナイト

「我々でさえ完全に倒せなかった奴をあそこまで追い込むとは流石だな……………」

ヒモヘビ

「どうだ！？ウチのリュカは凄いだろ？」

リュカ

「ヒモヘビったら……………」

リュカは顔を赤く染める。

トレーナー

「う、うん……。」

トレーナーは意識を取り戻すと、体だけ起き上がらせる。

リュカ

「あ、トレーナーさん……！」

トレーナー

「リュカ……？」

メタナイト

「覚えていないか？君が落下する時に、彼は君を守ろうとしていたんだ。」

トレーナー

「えっ！？本当リュカ？」

リュカ

「え？ま、まあね……。」

リュカは頬を指で掻きながら答える。

トレーナー

「ありがとう！リユカ！！」

リユカ

「いいんだ……友達を助けるのは当たり前だからね！」

リユカとトレーナーは固く握手を交わす。

マルス

「あの子達、とても仲良しだね。」

アイク

「ん？ああ……そうだな。」

メタナイト

「素晴らしい友情だ……。」

そんな様子を三剣士は和やかに眺めていた。

遺跡付近に広がる亜空間をエインシャント卿が遠くから眺めていた。

エインシャント卿

「また向こうで亜空間爆弾が発動したか……………アレが発動する度にどれだけの仲間が犠牲になっている事が…………。」

エインシャント卿は亜空間爆弾を発動させる部下のロボット達を考
えていた。

ビビュツ!!

エインシャント卿

「ムツ!？」

突然飛んできた矢をエインシャント卿は難無く避ける。

ピット

「くそっ! またかわされた……………」

マリオ

「やっと見つけたぞ! エインシャント卿!!」

リンク

「アイツがマリオさんが言ってたエインシャント卿か……………」

エインシャント卿が弓が飛んできた方を見ると、マリオ達五人が待ち伏せていた。

エインシャント卿

「全く、しつこい奴らだ……。」

エインシャント卿はそのままゆっくり去るつとする。

マリオ

「逃がすか！みんな、行こう！！」

ピット&リンク

「はいっ！！」

ヨッシー

「お〜っ！！」

カービィ

「ぽよっ！！」

マリオの掛け声で五人は一斉に駆け出す。

エインシャント卿

「それっ！それっ！！」

エインシャント卿はビームを連射するが、マリオとリンクは難無く避ける。

ロボットA

「待テ！！」

ロボットB

「ココカラハ一步モ通サナイ!!」

マリオ

「なっ!?!」

リンク

「くそっ!邪魔するな!!」

マリオとリンクの前にロボット達が立ち塞がる。

エインシャント卿

「フッフ、せいぜい部下達と遊んでいるがいい……………ムッ!?!」

突然一体のロボットが亜空間爆弾にぶら下がっている。

エインシャント卿

「な、何をしている!?!」

ボトツ。

ドガーーーーーッ!!

遂に亜空間爆弾は地面へと落下してしまう。

ロボットA

「ヨシ、起動させよう……………」。

ロボットB

「ヤムヲ得エン……………」。

ガシャッ！

ウィイイイン。

二体のロボットが亜空間爆弾を起動させる。

ピット

「ち、やめろ！」

マリオ

「いのっーいのっー」
「いのっー」

ピットとマリオはロボットを引き剥がそうとするが、びくともしない。

マリオ

「うわっ!?!」

ピット

「は、離せー!?!」

逆にマリオとピットがロボット達に引き剥がされる。

ロボットC

「ますたー、ドウカゴ無事デー!?!」

エインシャント卿

「お前達……………」

ピッ。

ドオオオオオッ。

亜空間爆弾が発動し、周りにいたロボット達は吸い込まれていく。

マリオ

「急げ、ヨッシー!!」

ヨッシー

「分かってるよ!!」

カービィ

「ぽよっ!!」

ピット

「僕達、星に乗っている……。」

リンク

「そんな呑気な事を言ってる場合じゃないって!!」

マリオはヨッシーに乗り、リンクとピットはカービィのワープスターで遠くへと逃げていた。

第十一話　青い鳥の男現る

フォックスとディディー・コングは湿地にいた。

フォックス

「そうか、そのドンキー・コングは君にとっては大切な人……………じゃなくてゴリラなのか。」

ディディー

「勿論！オイラとドンキーは兄弟みたいに大切な相棒さ。」

フォックス

「成程、それなら早くドンキーを救出しなくちゃな……………」

ディディー

「そうそう！その為にまずクツパを……………」

ドキユユユンー！

ディディー

「ウキャツ……………！？」

フォックス

「ディ、ディディー！？」

突然前方から飛んできた矢印の弾丸にディディーは貫かれてしまい、
フィギュアになってしまう。

クッパ

「ガハハハ！また会ったな。」

フォックス

「お前……………」

フォックスは前方を見ると、ダークキャノンを構えたクツパが待伏せていた。

クツパ

「次は貴様をフィギュアにしてくれるわ!!」

ドキユユユン!!

クツパは再びダークキャノンを放つが……。

フォックス

「ハッ!!」

フォックスは間一髪避ける。

クツパ

「ちっ、すばしっこい狐め……こうなったら。」

クツパはディディーのフィギュアに目をやる。

クツパ

「影虫よ！あのチビのデータを「コピー」するのだ！！」

クッパがそう言うと、影虫はディディーのフィギュアに集まる。

フォックス

「な、何だ！？」

シューウウッ。

そして影虫は偽ディディーへと変化した。

偽ディディー

「ウキ~~~~ッ！」

偽ディディーはピーナッツ・ポップガンを構えながらフォックスを睨む。

クッパ

「どうだ！これで貴様は袋の狐……………いや、袋の鼠だ！！」

フォックス

「くっ、流石に二対一はキツイな…………。」

クツパは再びフォックスに向けてダークキャノンを構えるが……。

ドキュン！ドキュン！

クツパ

「うおっ！な、何だ何だ！？」

突然上空から現れた一機の戦闘機がクツパに攻撃する。

フォックス

「あのアーウィンはまさか……………」

？

「とうっ！！！」

アーウィンと呼ばれる戦闘機から何物かが飛び出てくる。

クツパ

「な、何だ貴様は！？」

？

「へっ！ノロマの亀に名乗る名前なんてないぜ。」

クツパ

「何を！っ！鳥のくせに生意気な！！」

フォックスと同じ服装をした青い鳥の男の挑発にクツパは腹を立てる。

フォックス

「助かったよ、ファルコ！」

ファルコ

「……ったく、相変わらず世話の焼けるリーダーだぜ。」

ファルコという名前の男はため息をこぼす。

クツパ

「こうなった貴様から先に……。」

クツパはファルコに向けてダークキャノンを構え直す……。

ファルコ

「おりやつ!!」

ガシャン!!

クツパ

「ぬおっ!?!」

ファルコは素早くクツパに近づくと、ダークキャノンに回し蹴りを喰らわせ真上へと飛ばす。

パン!パン!パン!パン!パン!パン!パン!

ドッカーン!!

次にファルコは宙に浮きながら二丁拳銃にしたブラスターを使ってダークキャノンを破壊する。

クツパ

「お、おのれ!!よくも我輩のダークキャノンを……………」

クツパは悔しがりながら後ろの草むらへと飛び込む。

クツパ

「覚えてろよー!!」

そう言いながらクツパは飛行船に乗り込んで去っていく。

ファルコ

「フン!まさに悪役のお決まりな台詞だな。」

偽ディディー

「ウキ~~~~ツ!!」

偽ディディーはじだんだを踏む。

ファルコ

「さてと、後はあのチビ猿だけだな。」

フォックス

「ファルコ、あれは影虫という物体から作り出した偽物だから油断するな!」

ファルコ

「へっ！俺をあまり見くびるなよ。」

シューウウウッ。

次の瞬間、影虫が偽ディディーに集まり始める。

ファルコ

「何だ？何が起こるってんだ？」

フォックス

「まさか……………」

偽ディディー

「ウキヤーッー！！」

そして、偽ディディーはどんどん巨大化していった。

フォックス

「なっ！？巨大化した！！」

ファルコ

「おいおい、こりゃ少し骨が折れるな……………」

フォックス

「お、起きろ！ディディー！！」

パアアアツ。

フォックスはディディーのフィギュアのプレート部分に触れると同時にディディーは元に戻る。

ディディー

「うゝん、オイラ一体……って、何だぁ！？」

ディディーは巨大化した自分の偽物を見て驚愕する。

ディディー

「何々だ！？この馬鹿でつかいオイラは！？」

フォックス

「影虫が作った君の偽物さ。」

ファルコ

「そういう事だ。分かったかチビ助？」

ディディー

「チビ助じゃないやい！オイラはディディー・コングだ！！」

ディディーはファルコの言葉に腹を立てる。

フォックス

「許してやってくれ……………ファルコは口は悪いが根は良い奴なんだ。」

ディディー

「で、でも……………」

ファルコ

「お喋りはそこまでにして、そろそろ戦闘開始といこうぜ！」

フォックス

「そ、そうだな！」

ディディー

「……………何かしっくりこないなあ。」

フォックス、ファルコ、デイディーは巨大化した偽デイディーに向かって構える。

偽デイディー

「ウキーッ！」

偽デイディーは巨大なピーナッツ・ポップガンを取り出す。

デイディー

「で、でかつ!!」

フォックス

「偽物デイディーも大きいから武器も大きいという事か……。」

ファルコ

「ケッ、感心してる場合かよ!!」

パンッ!!パンッ!!

偽デイディーはピーナッツ・ポップガンを撃つと、巨大な落花生がフォックスとファルコに向かって飛んでくる。

ディディー

「うわっ！来た〜！！」

フォックス

「いかん！リフレクター！！」

パアアッ。

フォックスはリフレクターで巨大落花生を跳ね返す。

ファルコ

「こっちもリフレクターだ！」

ゲシッ！

ファルコはリフレクターを蹴り、巨大落花生を跳ね返す。

パシッ！パシッ！

偽ディディー

「ウギッ！！」

跳ね返った巨大落花生は偽ディディーに命中する。

ファルコ

「どうだ！自分の武器でやられる気分はよお。」

ディディー

「オイラ、何か複雑な気分……………」

フォックス

「まあまあ……………それよりファルコ、あまりリフレクターを乱暴に扱うなよ。」

ファルコ

「何言ってるんだ？こついう使い方もあるって事を教えてやってんだろ？」

フォックス

「スリッピーが見てたら怒るぞ……………」

偽ディディー

「ウギ〜〜ッ！！」

偽ディディーはじだんだを踏みながらフォックス達に近づく。

ファルコ

「どうやら頭にきてるようだな。」

フォックス

「よし、ブラスターで応戦だ!」

ビシュ!ビシュ!ビシュ!ビシュ!ビシュ!

フォックスとファルコはブラスターで偽ディディーを狙い撃ちする。

偽ディディー

「ウキ〜ッ?」

偽ディディーは立ち止まり、首を傾げる。

ファルコ

「チッ、やっぱりこの体格じゃ効かねえか。」

ディディー

「それだったらオイラのピーナッツ・ポップガンに任せて!」

パン！パン！パン！パン！パン！

ディディーはピーナッツ・ポップガンを撃ちまくる。

偽ディディー

「ウキヤ〜ッ。」

偽ディディーは大きな口を開けて、発射された落花生を全て飲み込む。

ディディー

「あ、あれ……………？」

ファルコ

「そんなおもちゃで倒せる訳ねーだろ。」

フォックス

「それに、敵に食べ物を与えてどうする……………」

フォックスとファルコはため息をつきながら呆れる。

偽ディディー

「ウキヤーンッ!!」

ドシューーン!!

ディディー

「うわっ!!」

フォックス

「ハッ!!」

ファルコ

「おっと!!」

偽ディディーの踏み潰し攻撃を三人は間一髪避ける。

フォックス

「あんな巨体に踏み潰されたらおしまいだぞ。」

ファルコ

「何とかして奴の動きを止めねえと……。」

ディディー

「うん……そうだ！あの手を使おう！！」

ディディーは何かを思いつくと、突然偽ディディーに向かって走り出す。

フォックス

「お、おい！ディディー！？」

ファルコ

「あのチビ、何をするつもりだ？」

ディディー

「やい！オイラの偽物！！」

偽ディディー

「ウキッ？」

偽ディディーはディディーに呼ばれて下を向く。

ディディー

「べっっ、お前の母ちゃんでーべそー！！」

偽ディディーはお尻を叩きながら偽ディディーを挑発する。

偽ディディー

「ウキヤッ!!」

偽ディディーはディディーの挑発で怒り出す。

ディディー

「やゝい、此処までおいで〜!」

更にディディーはその場から走り出す。

偽ディディー

「ウキーッ!!」

偽ディディーも後から追いかけていく。

ディディー

「引つ掛かったな……………それっ!」

ポイツ。

ディディーはバナナの皮を投げ捨てる。

フォックス

「やっぱりな……。」

ファルコ

「まさか、あんな子供だましのような手で奴を転ばそうってか？」

フォックス

「そのまさかさ……。」

ファルコ

「おいおい、幾ら何でも今時あんな幼稚なモンで……。」

ツルツ。

偽ディディー

「ウキッ!？」

ドッシーーン!!

偽ディディーはバナナの皮で滑って転んでしまっ。

ファルコ

「マジかよ……………」

フォックス

「意外と効くんだよな……………」

フォックスとファルコはただ啞然とする。

ディディー

「二人共！ボ……ッとしてないで早く攻撃してよ……！」

フォックス

「あ、ああ！フォックスイリユージョン……！」

ファルコ

「ファルコビジョン……！」

シュッ！シュッ！シュ！シュ！シュ！シュ！

偽ディディー

「ウキヤーッー!!」

フォックスとファルコは転んで倒れてる偽ディディーに高速で体当たりを繰り返す。

ディディー

「うわゝ、速すぎて全然見えないや……。」

ディディーは二人の動きを見て呆然となる。

偽ディディー

「ウ、ウキ……。。」

偽ディディーはフラフラになりながら立ち上がる。

フォックス

「今だ!行くぞファルコ!!」

ファルコ

「おうよ!!」

フォックスとファルコは動きを一旦止めると、偽ディディーの前で

構える。

フォックス&ファルコ

「「ファイアー!!」」

ゴオオオオツ!!

偽ディディー

「ウキヤ~~~~ツ!!」

フォックスとファルコの体が炎に被われると同時に偽ディディーに体当たりを食らわす。

ゴトツ。

シュユユユツ。

吹っ飛ばされた偽ディディーはフィギュアになり、そのまま溶けてしまう。

ディディー

「やったー!!」

フォックス

「やったなファルコ。」

ファルコ

「フツ、楽勝だぜ。」

ファルコはその場から立ち去ろうとする。

デイディー

「ちよつ、ちよつと待ってよ!!」

グイツ。

ファルコ

「な、何だ!？」

デイディーはファルコの襟を強引に引っ張る。

デイディー

「ファルコもフォックスの仲間なんでしょ? だったら一緒にドンキ
ーの救出に協力……………」

ファルコ

「悪いが、後にしな。」

ディディー

「ウキヤッ!？」

ファルコは再びその場から去ろうとするが……。

ディディー

「いいから一緒に来てってば!！」

グイッ!

ファルコ

「な、何しやがる!？」

ディディーは再びファルコの襟を掴むと、強引に引きずりながら進む。

フォックス

「やれやれ、お前もかファルコ……。」

フォックスは呆れながらディディーについていく。

ファルコはこれまでの出来事をフォックスとディディーから聞いた。

ファルコ

「成程なあ…………チビのクセに中々度胸があるじゃねえか。」

ディディー

「えっへん！それほどでもないよ！」

ディディーは小さく胸を張る。

ファルコ

（…………にしても、口調や性格がスリッピーにそっくりだぜ。）

そう思いながら、ファルコはディディーを見つめる。

ディディー

「何？オイラの顔に何か付いてる？」

ファルコ

「いや、別に…………。」

フォックス

「あ！アレを見るー！！」

ファルコ

「何だ？」

ディディー

「あーっ！！」

フォックスの指の刺す方を見ると、平べったい巨大な乗り物の上に手足が鎖で繋がれてるドンキーコングのフィギュアを発見する。

ディディー

「ドンキーのフィギュアがあんな所に……………」

フォックス

「アレがディディーの言ってたドンキーコングか……………」

ファルコ

「どうやら探す手間が省けたようだな。」

ディディー

「早く追いかけようよー!!」

フォックス

「でも、走って追いつくかどうか……………」

ファルコ

「へっ、あんな乗り物ヤドカリみてえなモンだろ。」

ディディー

「へっ?……………ヤ、ヤドカリ?」

ディディーはファルコの例えに目を丸くする。

フォックス

「ファルコ、それ例えが可笑いぞ……………」

ファルコ

「……………と、とにかく追っぞ!」

ファルコはそのまま走り出す。

ディディー

「ねえフォックス、ヤドカリみたいな乗り物って何?」

フォックス

「それはもういいから……………」。

ディディーとフォックスも後から走り出す。

ドンキーのフィギュアを乗せた乗り物は川の上流を進んでいた。

デイディー

「待て〜!!」

三人は必死で追いかけるが……。

ファルコ

「チツ、逃がしたか……。」

デイディー

「畜生っ!!」

滝に差し掛かったところで乗り物を取り逃がしてしまふ。

フォックス

「あの乗り物、向こうの浮き島に向かってるな……。」

フォックスの言う通り、乗り物は遠くの浮き島に向かっていた。

フォックス

「アーウィンでもあればな……。」

ファルコ

「……………フォックス、アレをしてみる。」

フォックス

「え？……………あつ！アレは！！！」

フォックスが左上を見上げると、巨大な宇宙戦艦が浮上していた。

ディディー

「な、何アレ！？」

フォックス

「アレはグレートフォックスといって、俺達スターフォックスの母艦さ。」

ファルコ

「勿論、お前のアーウィンも積んであるぜ。」

ディディー

「何かよく分からないけど……………要するにあの島へ行けるんだね？」

フォックス

「そういう事だ！じゃあ早速アーウィンで……………あ！しまった、俺のアーウィンは墜落して壊れたんだった……………」

ファルコ

「フォックス、ここは俺に任せてお前はスリッピーにアーウィンを修理してもらいな！」

フォックス

「えっ！？でも……………」

ファルコ

「俺は空に関しちゃあ最高だって事はお前が一番よく知ってんだろ？」

フォックス

「そうだったな……………じゃあ、ここは任せたぞ！」

ファルコ

「おうよー！！」

そして、グレートフォックスはゆっくりと三人の前に近づいていく。

第十一話　青い鳥の男現る（後書き）

如何でしょうか？ファルコの例え……。でも「そうめんみたいな攻撃」には敵いませんね。

第十二話　因縁の対決

サムス

「どうやら着いたようね……………」

ピカチュウ

「ピカ……………」

サムスとピカチュウはパスワードスーツがガラスの中に保管されている部屋まで辿り着いた。

サムス

「行きましょ、ピカチュウ。」

ピカチュウ

「ピカピカ。」

サムスとピカチュウはパスワードスーツまで近づく。

サムス

「これでやっとパスワードスーツが……………」

サムスがパワードスーツに触れようとした時……………。

ピカチュウ

「ピカピ！？」

サムス

「っ！？しまった！通路が……………」

突然サムス達を通った通路が段々と後ろへ下がっていく。

ガシャ！ガシャ！

ピカチュウ

「ピカツ！？」

サムス

「こ、これは！？」

すると、左右から紫色のパワードスーツが二体現れた。

サムス

「どうやら、パワードスーツをコピーしたようね……………」

ピカチュウ

「ピカ……。」

二体の偽サムスは右腕のアームキャノン砲を構える。

サムス

「来るわ……。気をつけて！ピカチュウ！」

ピカチュウ

「ピカッチュウ！」

サムスとピカチュウも身構える。

ドン！！

二体の偽サムスはアームキャノンからミサイルを発射する。

サムス

「危ない！！」

ピカチュウ

「ピカッ!」

ドカーーン!!

サ姆斯とピカチュウはミサイル攻撃を避ける。

サ姆斯

「くられ!」

バシユッ!

サ姆斯はパラライザーを撃つ。

サッ。

偽サ姆斯はボディを丸くして避ける。

サ姆斯

「性能まで同じか……。」

ピカチュウ

「ピ……カツ!!」

ピカチュウは偽サムスに向かってロケット頭突きを繰り返すが……
…。

キュルルルッ!!

ピカチュウ

「ピカーッ!!」

ピカチュウは偽サムスのスクリューアタックを喰らってしまい吹っ飛ばされてしまう。

サムス

「ピカチュウ!大丈夫!?!」

ピカチュウ

「ピ……カ……。」

サムスは慌ててピカチュウに近づくが、ピカチュウはゆっくりと立ち上がる。

サマス

（このままではやられてしまう……………何とかしなければ……………。）

サマスは辺りを見渡しながら考え込む。

ゴオオオオツ。

二体の偽サマスはアームキャノンからエネルギー弾を溜め始める。

サマス

（マズイ、チャージショットを撃つ気だ！）

ピカチュウ

「ピカ！」

サマス

「あつ！ちよつと……………！！！」

ピカチュウは一体の偽サマスに向かって走り出す。

ビシュッ！！

偽サムスはアームキャノンからビームを出してピカチュウを捕らえようとするが、ピカチュウは難無く避ける。

ピカチュウ

「ピッカツチュッ！」

ピカチュウは偽サムスに向かってお尻ペンペンをする。

ドオオオオツ！！

偽サムスはピカチュウに向けてチャージショットを放つ。

サムス

「危ない！！！」

ピカチュウ

「ピッ！！！」

シュッ！シュッ！

ピカチュウは電光石火でチャージショットをギリギリ避ける。

ポオオオオン！！

ピカチュウが避けた後から、もう一体の偽サムスにチャージショットが命中する。

サムス

「成程、誘い込みって訳ね……………」

次の瞬間、サムスはチャージショットが命中してフラフラになりながら立ち上がる偽サムスに近づく。

サムス

「どうしたの？もう終わりかしら？」

サムスが偽サムスに挑発すると…………。

ドオオオオツ！！

偽サムスはすぐさまチャージショットを放つ。

サ姆斯

「掛かったわね……………それっ!!」

ビシッ!!

サ姆斯はパラライザーをムチ状にして、もう一体の偽サ姆斯の腕を掴み引つ張り上げる。

ボオオオオン!!

すると、チャージショットが偽サ姆斯に命中する。

ピカチュウ

「ピッカ!」

サ姆斯

「もう一息ね……………」

もう一体の偽サ姆斯もゆっくりと立ち上がる。

サ姆斯

「とうっ！！」

シュルシュルッ。

サムスはパラライザーで二体の偽サムスをまとめて縛り上げる。

サムス

「そりゃっ！！」

更にサムスはそのまま偽サムス達を真上へと投げ飛ばす。

サムス

「今よ！ピカチュウ！！」

ピカチュウ

「ピッカー！！」

ドッカーン！！

ピカチュウは偽サムスの真下で雷を発動させると、空中で雷が命中する。

ガッシャーーン!!

そのまま偽サムス達は崩れ落ちる。

サムス

「どうやら倒したようね……………」

ピカチュウ

「ピカ……………」

サムスは偽サムスを倒した事を確認するとパワードスーツに近づく。

サムス

「やっとパワードスーツを取り返したわ……………」

プー! プー! プー!

ウィイイイン。

ピカチュウ

「ピカッ!?!」

突然サイレンが鳴り響き、ロボット軍団が次々と部屋へ入ってくる。

ロボットA

「侵入者発見!!」

ロボットB

「直ちに捕らえよ!!」

ロボットC

「了解!!」

ロボット軍団がどんどん部屋へ入った時……。

ドオオオオン！！

サムス

「もう貴方達なんて敵じゃないわ。」

部屋の奥から爆発が起こり、爆風の中からパワードスーツを装着したサムスが出てくる。

ピカチュウ

「ピッカ……。」

ピカチュウはサムスに近づくと、そのまま見つめる。

サムス

「さあ、後は此処から脱出するだけよ………行きましょう！」

ピカチュウ

「ピ、ピカッ！」

サムスとピカチュウは部屋を後にする。

しばらく進むと、サムスとピカチュウは天井が高い部屋へと入る。

サムス

「随分広い部屋ね……………」

ピカチュウ

「ピカピカ？」

ガシッ！！

ピカチュウ

「ピカツ！？」

突然何かがピカチュウの前を横切ると、サムスの姿が消えていた。

ガシャン！！

サ姆斯

「うぐっ!!」

巨大な翼竜の姿をした化物がサ姆斯を捕んだまま上へ上昇し、サ姆斯を壁に叩きつける。

サ姆斯

「リ、リドリー!?!何故お前が此処に……………」

リドリー

「ギャヤヤツ。」

ガガガガガッ!!

リドリーと呼ばれる翼竜はそのままサ姆斯を壁に擦りつける。

サ姆斯

「うわあああっ!!」

ピカチュウ

「ピッ!?!」

ピカチュウはサムスの叫び声に気づき上を見上げると、サムスがリドリーにやられてる光景が目映る。

ピカチュウ

「ピッカーー!!」

ドッカーーン!!

リドリー

「グガアッ!!」

ピカチュウは雷を発動させ、リドリーは雷に命中するとサムスを掴んだ手を離す。

ストッ。

サムスはそのまま床に着地する。

サムス

「あ、ありがとう……助かったわ……。」

ピカチュウ
「ピッカ！」

サムスは膝を床に着けたままピカチュウにお礼を言う。

リドリー
「グウウッ……。」

リドリーは頭を抑えながら床に着地し、ピカチュウを睨みつける。

ピカチュウ
「ピッカ……。」

ピカチュウも頬に電気を放ちながらリドリーを睨み返す。

サムス
「気をつけてピカチュウ……リドリーは強敵よ……。」

サムスはゆっくりと立ち上がると同時にアームキャノンを構える。

ザグッ！

ズシャヤヤツ!!

リドリーは先端がトゲ状になっている尻尾を床に突き刺すと、そのままピカチュウとサムスに接近してくる。

サムス

「危ない!!」

ピカチュウ

「ピカピッ!!」

サムスとピカチュウは間一髪避ける。

ピカチュウ

「ピカピツカ!?!」

サムス

「!?!?や、奴は何処に……………」

サムスとピカチュウが後ろを振り向くと、リドリーの姿が消えていた。

リドリー

「グギャヤッ！」

ドガアアッ！！

サムス

「ぐわあっ！！」

ピカチュウ

「ピカアアッ！！」

リドリーはサムス達の背後から、物凄いスピードで体当たりをおみまにする。

サムス

「……………相変わらず素早い動きね……………」

サムスがゆっくりと立ち上がった時……………。

リドリー

「ガアアアッ。」

ブオオオオッ!!

リドリーは羽根を羽ばたかせると、強風を起こす。

ピカチュウ

「ピカチュウ!!」

サムス

「ち、近づけない……………」

サムスとピカチュウは強風によって、どんどん押されていく。

リドリー

「グガアアッ!」

ドガアアッ!!

サムス

「ぐあああッ!!」

ピカチュウ

「チャーンッ!!」

サムス達は再びリドリーの体当たりを受けてしまう。

サムス

「な、何とかして奴の動きを止めなきゃ……。」

ピカチュウ

「ピカ……チュッ!!」

ピカチュウはその場から離れていくリドリーに駆け寄る。

サムス

「ピカチュウ!?!」

ピカチュウ

「チュウッ!!」

ピカチュウはリドリーの尻尾に捕まる。

サムス

「あの子ったら、またあんな無茶を……。」

リドリー

「ガアアッ！」

リドリーはピカチュウに捕まれてる事に気づかずに飛行していた。

ピカチュウ

「ピ~~~~カ~~~~チュユユッ!!」

バリバリバリッ!!

リドリー

「グギヤヤッ!!」

ピカチュウは体中から電撃を放つと、リドリーの体中から電気が走る。

サムス

「そうだ!今の内に……………」

ゴオオオオッ!!

サムスはアームキャノンからエネルギー弾を溜め始める。

リドリー

「ガアアッ！」

リドリーは必死でピカチュウから離そうと尻尾を振り回す。

ピカチュウ

「ピカアッ！！」

ドカアアッ！

ピカチュウは耐え切れなくなり、床へ落下してしまう。

サムス

「ピカチュウ！後もう少しなのに……………」

サムスはまだエネルギー弾を溜めている。

ピカチュウ

「ピッカッ！！」

シュツ！シュツ！

リドリー

「グガアアッ！！」

ピカチュウはすぐに立ち上がると、電光石火でリドリーの顔に飛び移る。

リドリー

「グワアアッ！」

リドリーは激しく首を振るうが、ピカチュウは必死にしがみつく。

サマス

「……………よし！チャージ完了！！」

サマスはチャージを終えると、アームキャノンでリドリーに向ける。

サマス

「ピカチュウ！避けて！！」

ドオオオオン！！

サムスはアームキャノンからチャージショットを放つ。

ピカチュウ

「ピツカ！」

ピカチュウは素早くリドリーから離れる。

ボオオオオン！！

リドリー

「グギヤヤツー！！」

チャージショットがリドリーに命中し、そのまま下へ落下していく。

サムス

「やった……………ついに倒した……………」

サムスはその場で座り込む。

ピカチュウ
「ピカッ。」

ピカチュウはゆっくりとサムスに近づく。

サムス

「……………アイツはね、私の両親を殺した張本人なの。」

ピカチュウ

「ピカッ!？」

ピカチュウはサムスの言葉に耳を疑う。

サムス

「私がまだ幼い頃、奴が率いる宇宙海賊によつて……………父も母も……………その後私は鳥人族によつて保護されて、彼らに育てられたの……………」

ピカチュウ

「ピカ……………」

サムスの話を聞いて、ピカチュウは耳を下げる。

サムス

「…………ごめんなさいね。暗い話をして…………さあ！早く此处から出ましよう！！」

ピカチュウ

「ピ、ピカッチュ！」

サムスとピカチュウは部屋から出ていく。

ガアアアッ。

シャッターが開かれ、サムスとピカチュウは外へと出る。

サムス

「ようやく出られたわ……………んっ？」

サムスは外の景色を見渡す。

サムス

「まるで遺跡ね……………」

ピカチュウ

「ピカピ！」

サムス

「どうしたの……………アレは？」

ピカチュウの声でサムスは振り向くと、遠くでロボット達が亜空間爆弾を運んでいる光景を見かける。

サムス

「あそこから何かを運んでいるようね。」

次にサムスはロボット達が出てきた別の入口に目を向ける。

サムス

「行くわよ！ピカチュウ！！」

ピカチュウ

「ピカッチュ！！」

サムスとピカチュウは入口に向かって走り出す。

第十三話　二人のキャプテンと二匹の猿

ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！

頭に葉っぱや蕾や花を付けた沢山の赤・青・黄・紫・白の小さな生物達が巨大ロボットに攻撃していた。

ロボット

「何だ？こいつらハ…………邪魔ダ！！」

ブオオオオン！！

巨大ロボットは頭部と腕を回転させて、小さな生物達を振り払う。

？

「きゅーっっ。」

振り払われた生物半分が死んでしまう。

？

「あわわ…………このままではピクミン達は全滅だ…………。」

宇宙服を着た3cm位の大きさの男がピクミンと呼ばれる生物がやられる光景を見てオドオドする。

？

「コイツ、今まで出会った原生生物より強いぞ……………」

男が呟く中、一匹の赤ピクミンが男の背中を突く。

？

「ん！？な、何だい？」

男は赤ピクミンの指を指す方を見ると……………。

ブオオオオツ！！

青いボディの乗り物が物凄いスピードでこちらに近づいてくる。

？

「とっつー！！」

すると、乗り物の中から何物かが飛び出してきた。

？

「ファルコンパンチ！」

ボカアアッ！！

赤いヘルメットを被り、黄色いマフラーを巻いた男は拳を炎に纏いながら巨大ロボットにパンチを繰り出す。

ザアアアッ。

ピクミン全員

「きゅうっっつ。」

赤いヘルメットの男が着地した衝撃で、その場にいたピクミンは全滅した。

？

「あ、あの人……あんな巨大な機械生物を一撃で……それにピクミン達も全滅……。」

？

「ふう、決まった……………ん？」

ヘルメットの男は宇宙服の男に近づく。

？

「あ、あの……………危ない所を助けて頂き、ありがとうございます！」

宇宙服の男は深く頭を下げる。

？

「い、いや……………別にたいした事じゃない。」

？

「あの、是非ともお名前を……………」

？

「俺はキャプテン・ファルコンだ。」

？

「ファルコンさんですか……………それより、あのマシンはF-1 ZER
Oのマシンですね？」

宇宙服の男はキャプテン・ファルコンという名前の男の乗り物に指さす。

ファルコン

「ああ、俺の愛用のブルーファルコンだ。」

？

「……………という事は、貴方はあのF I Z E R Oの出場者なんですか！？」

ファルコン

「ま、まあな…………。」

？

「す、凄いじゃないですか！だって、あの宇宙大規模の大レースですよー！！」

ファルコン

「あのレースには莫大な賞金が掛けられているからな……………俺はバウンティハンターだから狙うのは当然さ。」

？

「そうですか……………あ、失礼しました！私はこうゆう者です。」

宇宙服の男は慌てて名刺を取り出して、ファルコンに渡す。

ファルコン

「何々………ホコタテ運送会社社員キャプテン・オリマーか。」

オリマー

「は、はい………以後お見知り置きを……。」

キャプテン・オリマーと名乗る男は再び深く頭を下げる。

ファルコン

「ホコタテ星………聞いた事ない星だな……。」

オリマー

「そうですか？まあ、あまり有名な星じゃありませんから……。」

オリマーは苦笑いを浮かべる。

ファルコン

「ところで、君の後ろにいるその生き物は何だ？」

オリマー

「え？」

ファルコンはオリマーの後ろにいる赤ピクミンに指さす。

オリマー

「ああ！これはピクミンといって、私の星のピクピクニンジンから私が名付けた生物です。」

ファルコン

「ピクミン？」

ファルコンは首を傾げる。

オリマー

「ピクミンは原生生物の亡骸やペレットをオニオンと呼ばれる船へ入れると、新たなピクミンをどんどん生み出していつて増えていくのです。」

ファルコン

「そんな馬鹿な……。」

オリマー

「本当ですよ！ちょっと付いて来て下さい。」

そう言われ、ファルコンはオリマーの後を付いていく。

オリマーは古臭いロケットと赤・青・黄色の小さな宇宙船が置かれてる場所までファルコンを案内する。

ファルコン

「このロケットは君の物か？」

オリマー

「ええ……………と言ってもこれは私の会社の社長の愛船ですけどね。」

ファルコン

「成程……………ところで、あの小さな船みたいな物は？」

ファルコンは三つの小さな宇宙船に指さす。

オリマー

「アレが私が言ったオニオンですよ。」

ファルコン

「……………とゆう事は、あの中からピクミンが出てくるのか？」

オリマー

「そうですね。試してみますか？」

そう言うと、オリマーは赤いオニオンの真下まで近づく。

ピピーーーーッ!!

オリマーが笛を吹くと、オニオンから赤ピクミンが続々と出てくる。

ファルコン

「こ、これは……。」

ファルコンは絶句した。

オリマー

「大体呼び出せるのは最低でも百匹ですね。」

ファルコン

（いくら何でも百匹は呼び出しすぎじゃ……。）

オリマー

「ところで、ファルコンさんはどうして此処へ？」

ファルコン

「おお！そうだった……………この辺りが奴らの基地である事に間違いないようだな。」

ファルコンは辺りを見渡しながら呟く。

オリマー

「あ、あの…………。」

ファルコン

「……………キャプテン・オリマー！此処で会ったのも何かの縁だ……………良かったら俺に協力してくれないか？」

オリマー

「え！？どうゆう事ですか？」

ファルコン

「実は最近、何物かが各地で爆弾を設置していて被害が沢山出ているらしい……………そこで俺は奴らの基地を見つけて此処へ来たという訳だ。」

オリマー

「そうだったんですか……………でも、私なんかで役立つでしょうか？」

ファルコン

「大丈夫さ！それに、君には強い味方が付いてるじゃないか。」

そう言いながら、ファルコンはピクミン達に指さす。

オリマー

「……………分かりました！私で良ければ協力させて下さい！！」

ファルコン

「よし！では、早速出発だ！！」

ファルコンは走り出そうとするが…………。

オリマー

「あ！その前にピクミンの配列を整えないと…………。」

ファルコン

「お、おい…………。」

オリマーがオニオンに近づいた為に、ファルコンは動きを止める。

オリマー

「お待たせしました！」

オリマーは赤・青・黄・紫・白の五匹のピクミンを引き連れていた。

ファルコン

「随分少ないな……。」

オリマー

「此処は敵の本拠地……あまり沢山連れていくと敵に見つかってしまうので、やむを得ず五匹に絞りました。」

ファルコン

「そうか……それでは改めて出発だ!!」

オリマー

「みんな!ちゃんと付いて来てね!!」

ピクミン達が手を上げた後、ファルコンとピクミン&オリマーは遺跡付近を後にする。

ファルコンとピクミン&オリマーは海を見下ろせる崖付近で探索していた。

オリマー

「中々手掛かりが掴めませんね……………」

ファルコン

「ああ……………んっ!？」

ファルコンは何かに気付いたのか、崖に近づき遠くを見渡す。

オリマー

「どうしました？」

ファルコン

「アレを見てみる。」

ファルコンの指さす方を見ると、ドンキーコングのフィギュアを乗せた平べったい乗り物が飛行していた。

オリマー

「アレは一体何でしょうか？」

ファルコン

「恐らく奴らの飛行装着だろう。」

オリマー

「やっぱり……よし！あの乗り物をフライングプレートと名付けよう。」

ファルコン

「いや、何も敵の乗り物に名前を付けなくても……。」

ファルコンは少し苦笑いを浮かべる。

オリマー

「あつ！何かもう一台来ますよ！！」

ファルコン

「ん？」

今度はオリマーの指さす方を見ると、一台のアーウィンがフライングプレートに接近する。

ディディー

「ドンキー！今すぐ行くよー！！」

ファルコ

「おい！操縦席で騒ぐんじゃねえ！！」

アーウィンの操縦席にはファルコが操縦し、そこにディディーコングも乗船していた。

ファルコ

「いいかディディー！俺が今からアーウィンを反転させるから、そ

したらお前のそのタルジェットとやらであの乗り物に乗り込むんだ
」

ディディー

「うん！分かった！」

ディディーはファルコの提案に激しく頷く。

ビビュユツ！！

次の瞬間、アーウィンはフライングプレートの上で大きく反転させる。

ファルコ

「今だ！行け！！」

ディディー

「よ～～し！！」

ガパッ！

ビュウウウッ！！

操縦席のハッチが開かれると同時に、ディディーがバレルジェットを背負ったままアーウィンから飛び出る。

パン！パン！パン！パン！パン！パン！

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ディディーは両手でピーナッツ・ポップガンを構えて撃つと、フライングプレートに乗ってるプリム達を吹っ飛ばす。

ファルコン

「ふっ、やるじゃないか……よし、我々も行くぞ！キャプテン・オリマー……！」

オリマー

「えっ！？行ってくて、まさか……。」

ファルコン

「とっつー……！」

オリマー

「うわゝゝっ!!」

ファルコンはオリマーの背中を掴むと、フライングプレートに向かって勢い良くダイブする。

デイディー

「よいしょっと!!」

デイディーはフライングプレートに着地する。

デイディー

「ドンキー! 助けに来たよ!!」

そう言いながら、デイディーはドンキーのフィギュアのプレート部分に触れる。

パアアアツ。

ガシャン! ガシャン!

ドンキー

「ウッホー!!」

ドンキーのフィギュアが光に包まれると、ドンキーは手足に繋がれてる鎖を壊して勢い良く胸を叩く。

シュタツ。

それと同時に、ファルコンとオリマーがフライングプレートに着地する。

デイデュー

「だ、誰!？」

ファルコン

「心配はない!我々は君達の敵ではない。」

ファルコンがそう言った後、背後からプリム達が次々と乗り込んでくる。

オリマー

「な、何だ!？」

ファルコン

「どうやら、本当の敵が現れたようだな。」

ディディー

「何だっていいや！全員やつつけてやる！！」

ドンキー

「よく分からないけど、一丁やってやる！！」

二人と二匹は身構える。

ディディー

「モンキーフリップ!」

ドカッ!!

ディディーは前方にいるプリムに向かって勢い良く体当たりする。

オリマー

「ピ、ピクミン繋がり!!」

ビシシュッ。

ドガッ!バキッ!

オリマーは5匹のピクミンを一直線に繋げると、ムチのように伸ばしてプリム達を吹っ飛ばす。

ドンキー

「ハンドスラップ!!」

バン！バン！バン！バン！

ドンキーのハンドスラップでフライングプレートが揺れる。

オリマー

「うわぁ、落ちるゝ！」

デイディー

「ちょっとドンキー！こんな所でハンドスラップなんかやらないでよー!!」

ドンキー

「あ、ごめん……………」

ドンキーが攻撃を中断すると……………。

デイディー

「あー！危ない!!」

ドンキー

「え？」

ドンキーの背後からプリム達が飛び掛かるが……………。

ファルコン

「ファルコンキック!!」

ボガアアツ!!

ファルコンが炎に纏った足で強力なキックを繰り出し、プリム達を吹っ飛ばす。

ファルコン

「油断大敵だぜ、ゴリラ君。」

ドンキー

「あ、ありがとう。」

次の瞬間、残りのプリム達が一斉にファルコンとドンキーに向かって来る。

オリマー

「ファルコンさん！奴らが来ますよー！！」

ディディー

「ドンキーー！！」

ファルコン

「さて、そろそろ終わりにしようー！！」

ドンキー

「よーし……………ジャイアントパンチー！！」

ファルコン

「ファルコンパンチー！！」

ドカアアアッー！！

ドンキーとファルコンの強力なパンチで残りのプリム達は全員吹っ飛ぶ。

ディディー

「やったねドンキー！」

ディディーはドンキーに近づく。

ブオオオツ。

すると、ファルコが操縦するアーウィンがフライングプレートに接近する。

ファルコ

「フツ、中々やるじゃねえか……………」

ファルコはディディーに向かって親指を上げると、その場から離れていく。

ディディー

「ありがと〜！ファルコ〜！〜！」

ディディーはアーウィンに向かって手を振る。

ドンキー

「……………ん？」

全員後ろを向くと、フライングプレートが浮き島の入口らしき穴に入ろうとしていた。

オリマー

「このままでは、あの浮き島の中へ入ってしまいますね……。」

ファルコン

「丁度良い……。奴らの基地へ侵入する手間が省けた。」

ドンキー

「よし、俺達も一緒に行こう！」

ディディー

「そうだね！ドンキーをこんな目に遭わせた奴らに仕返ししよう！」

そして、二人と二匹を乗せたフライングプレートはそのまま浮き島の中へと侵入していく。

第十四話 仮面の騎士VS波導の勇者 (前書き)

いよいよメタナイトは戦艦ハルバードに接近しますが、ある者が立ち塞がる！果たして結果は？

第十四話　仮面の騎士VS波導の勇者

氷山の上空で戦艦ハルバードとグレードフォックスが激しい撃ち合いを繰り返していた。

メタナイト

「いかん、このままでは私の戦艦ハルバードが破壊されてしまう。」

メタナイト、マルス、アイク、リユカ、ポケモントレーナーの五人は渓谷で二体の船の撃ち合いを観戦していた。

アイク

「あんな物体、見た事ないな……………」

マルス

「僕も初めて見たよ……………」

マルスとアイクは初めて見る物体に目を疑う。

メタナイト

「よし！やはり乗り込むしかない！！」

そう言い残すと、メタナイトは翼を広げて山道を登っていく。

トレーナー

「あっ！メタナイトさん……………」

リユカ

「行っちゃった……………」

アイク

「まったく、何も考えずに突っ走るとは……………」

マルス

「誰かさんにそっくりだね。」

そう言いながら、マルスはアイクの顔を見る。

アイク

「何か言ったか？」

マルス

「いいや、別に……………」

マルスはアイクから目を反らす。

メタナイトは翼で飛行しながら登山していた。

メタナイト

「思ったより風が強いな……………ん？」

メタナイトはふと見上げると、どンドン登山していく二つの人影を発見する。

？

「大丈夫？ナナ。」

ナナ

「ありがとう！ポポ。」

同じような背丈でお揃いの厚着を着て、同じハンマーを持つポポという少年とナナという少女は、お互いに助け合いながら登山していた。

ポポ

「もう少しで頂上だから頑張ろう！」

ナナ

「そっだね！私達アイスクライマーだもんね。」

二人は登山を続けようと動き出すが……。

ブワッ！！

メタナイト

「失礼！」

ポポ＆ナナ

「うわっ！？」

突然メタナイトが飛行してポポとナナを横切る。

ポポ

「ムムッ、何か悔しいね……………」

ナナ

「うん……………」

ポポとナナは不機嫌になりながらメタナイトが登山する様子を見つめる。

ナナ

「行こう！ポポ！！」

ポポ

「そうだね！あんな奴に負けるもんか！！」

ポポとナナも勢い良く登山を再会する。

ポポ

「行くよ、ナナ！」

ナナ

「オツケー！」

ポポ

「それっ！！」

ポポはナナを上へ放り投げる。

ナナ

「よいしょっと！！」

ビョーーン。

ナナが長いゴムでポポを引っ張り上げる。

ポポ

「ゴムジャンプ!!」

そのままポポは高くジャンプする。

メタナイト

「ムッ!？」

ポポ

「お先に〜。」

そして、ポポはそのままメタナイトを追い抜く。

ナナ

「ポポ〜!待ってよ〜!!」

しばらくしてナナもメタナイトを追い抜く。

メタナイト

「生憎だが、私は遊んでいる暇はない。」

そう言うと、メタナイトは更にスピードをあげる。

メタナイト

「お先!!」

ポポ&ナナ

「あっ!？」

メタナイトはポポとナナを追い抜く。

ポポ

「悔しい〜!!」

ナナ

「負けるもんですか!」

ポポとナナも登るスピードをあげて、お互い一步も譲らない状況となる。

そして氷山の頂上付近で……。

ポポ

「よつと！」

ナナ

「やっと着いたね！」

ポポとナナが頂上付近へと到着する。

メタナイト

「ふう……………」

その後からメタナイトも頂上付近へと到着する。

ポポ

「やった〜！僕達が一番だ〜！！」

ナナ

「やったね、ポポ！」

ポポとナナは嬉しさのあまり跳びはねる。

メタナイト

「元気の良い子達だ……………ムッ！？」

メタナイトは氷山の頂上に何物かが立たずにいる事に気付く。

シュツ！

そして、獣人のような姿をした者はメタナイトの前まで飛び込んでくる。

メタナイト

「何物だ！？」

？

「私はルカリオ、波導を極めし者だ。」

メタナイト

「波導？」

メタナイトはルカリオと名乗る者が言った波導という言葉に耳を傾ける。

ルカリオ

「波導とは誰しもが持っている気力だ。」

メタナイト

「気力が…………その波導を極める者が私に何の用だ？」

ルカリオ

「別に用があるという訳ではないが…………お前に手合わせを願いたいと思つてな。」

そう言うと、ルカリオの手から青い波導が浮かび上がる。

メタナイト

（アレが波導か…………。）

メタナイトは波導を見ると、宝剣ギャラクシアを構える。

メタナイト

「いいだろう！相手になつてやる！！」

ルカリオ

「そう来なくては…………行くぞ！！」

メタナイトとルカリオはお互い駆け出す。

ポポ

「ど、どうしようナナ……………」

ナナ

「私達には止められないよ……………」

ポポとナナは二人の様子を見て息を飲む。

メタナイト

「……………」

ルカリオ

「……………」

両者向き合っ たまま動かない。

メタナイト

「はぁあっ！！」

先に動いたのはメタナイトである。

メタナイト
「とうっ!!」

ルカリオ
「しんそく!」

メタナイトはルカリオに切り掛かるが、ルカリオは猛スピードで避ける。

メタナイト
(速い……。)

ルカリオ
「どうした? 掛かって来い。」

メタナイト
「ムッ………ドリルラッシュ!!」

ルカリオの言葉に少し腹が立ったメタナイトはドリルラッシュを繰り出す。

ルカリオ
「かげぶんしん!」

フッ！

メタナイトの攻撃を受けたルカリオはゆっくりと消えていく。

メタナイト

（何っ！？残像か？）

ルカリオ

「とうっ！」

ドカツ。

メタナイト

「うわっ！？」

メタナイトはルカリオの姿を探している隙にルカリオが後ろからスライディングを繰り出す。

メタナイト

「おのれ……。」

メタナイトはすぐさま体勢を立て直す。

ルカリオ

「次はこちらの番だ……………はああっ!!」

ゴオオオオッ。

ルカリオは掌から青い波導を溜め始める。

メタナイト

「まさか、アレを放つつもりか!？」

ルカリオ

「くらえ!はどうだん!!」

バシュッ!!

ルカリオはメタナイトに向けて巨大な波導を放つ。

メタナイト

「ディメンジョンマント!!」

フッ。

メタナイトはすぐさまディメンジョンマントで姿を消す。

ルカリオ

「……………後ろか!!」

キィイーン!

ルカリオは素早くメタナイトの気配を感じ取ると、ギャラクシアを片手で防ぐ。

メタナイト

(コイツ、かなり出来る……………。)

メタナイトはルカリオから少し後退りする。

ルカリオ

「まだまだ行くぞ!!」

メタナイト

「負けるか!!」

メタナイトとルカリオはお互いに駆け出す。

そして数分後、メタナイトとルカリオは未だに激闘いを繰り広げていた。

ポポ

「あれから何分経ったんだろ……………」

ナナ

「さあ…………でも、あの二人強いよね……………」

ポポ

「うん、お互い一步も譲らないって感じだね……………」

ポポとナナは固唾を飲んで観戦する。

メタナイト

「ハアハア……………」

ルカリオ

「ゼエゼエ……………」

メタナイトとルカリオは息を切らしながらお互い睨み合う。

バサアッ！

ダッ！

更に二人はお互い手前まで駆け出す。

ポポ

「ま、まだやる気なの！？」

ナナ

「もうやめて……。」

ポポとナナは二人が接近していく様子を見て固唾を飲む。

ガシッ！

ポポ＆ナナ

「……………へ？」

メタナイトとルカリオはお互いに握手を交わす。

ルカリオ

「お前、中々やるな。」

メタナイト

「貴公もな。」

二人はしばらく握手をしたまま語り合う。

ポポ

「……………一体どうなってるの?」

ナナ

「よく分からないけど、仲直りしたって事じゃない?」

ポポとナナはその様子を見て安心する。

ゴゴゴゴゴッ。

メタナイト

「ムムッ!？」

ルカリオ

「アレは！？」

真つ赤な暗雲の中から戦艦ハルバードがロボットアームで捕まれた
グレードフォックスと共に氷山に接近してくる。

ガシャーーン！！

次の瞬間、グレードフォックスは氷山に激突する。

メタナイト

「今の内に……………」

メタナイトはグレードフォックスを伝っていき、そのままハルバードへと侵入する。

ルカリオ

「私も行くぞ！」

ルカリオもメタナイトのその後を付ける。

ポポ＆ナナ

「うわーっ！！」

ポポとナナは激突の衝撃で、そのまま下へと落下していく。

トレーナー

「な、何だ!？」

マルス

「何が起こってるんだ？」

マルス、アイク、リユカ、ポケモントレーナーは溪谷で待ち伏せていたが、上で何か異変が起きている事に気付く。

リユカ

「あ!何か落ちてくる!！」

アイク

「避ける!！」

リユカとアイクは何か落下してくる事に気付き、その場から避ける。

ナナ

「よいしょっと!！」

ポポ

「ふう、危なかった。」

氷山から落下してきたポポとナナは無事に着地する。

ナナ

「ねえポポ、アレ何？」

ポポ

「えっ？」

ナナの言葉でポポは後ろを向くと、影虫がハルバードからバラ撒かれてどんどん集結し、次々とプリムが生み出されていく。

ポポ

「な、何だコイツらは！？」

ナナ

「何か怖いよ。」

マルス

「またコイツらか！」

アイク

「しかも、この前より数が多いな……。」

リュカ

「や、やるしかないよね?」

トレーナー

「当然さ、出てこい!リザードン!」

パアアアッ。

リザードン

「グアアアッ。」

トレーナーがモンスターボールからリザードンを出すと同時に、全員プリムに攻撃を仕掛ける。

マルス達が闘っている場所から少し離れた高い場所から5人の人影が浮かび上がる。

マリオ

「誰かが怪物達と闘っているな……。」

ピット

「でも、敵のほうが多い……。」

カービィ

「ぼよ……。」

リンク

「助太刀しよう！」

ヨッシー

「勿論！」

マリオ

「よーし！みんな行くぞー！」

マリオの掛け声と共に、一斉に崖から飛び降りる。

マルス

「マーベラスコンビネーション!!」

ザシュ!ザシュ!

アイク

「居合い斬り!!」

ズシャヤヤツ!!

リュカ

「PKファイアー!!」

ポオオオツ!!

トレーナー

「リザードン！火炎放射だ！！」

ゴオオオツ！！

ポポ&ナナ

「トルネードハンマー！！」

ドガガガッ！！

マルス達は次々とプリム達を倒していくが、プリム達は一向に減らない。

アイク

「くそ！全然減らないぞ……………」

リュカ

「ぼ、僕……………もう力が……………」

リュカはその場で膝を地面に付ける。

ヒモヘビ

「リユカ！しっかりしろ！！」

マルス

「マズイ、このままじゃ体が持たない……………」

リザードン

「グウウ……………」

リザードンは息を荒くする。

トレーナー

「リザードンもそろそろ限界か……………」

トレーナーはリザードンをモンスターボールにしまおうとした時……。

リユカ

「あ、トレーナーさん！後ろ！！」

トレーナー

「えっ！？」

リュカの声でトレーナーは後ろを振り向くと、一匹のプリムが飛び掛かってくる。

トレーナー

「うわぁっ!!」

トレーナーはその場で頭を伏せる。

ビビュッ!!

リュカ

「……………え？」

トレーナー

「あ、あれ？」

トレーナーが顔を上げると、そこにプリムの姿がない。

アイク

「何が起こったんだ？」

マルス

「誰かが攻撃したんじゃない………あっ!!」

マルスはふと反対の方向を見ると、弓を射いた後のピットとマリオ達が立っていた。

ピット

「ふう、危なかった。」

ヨッシー

「流石ピットだね。」

マリオ

「君達!大丈夫か!」

リンク

「俺達も加勢する!!」

カービィ

「ぽよぽよ!!」

マリオ達はそのまま攻撃体勢に入る。

マルス

「どうやら彼らは敵ではないようだ。」

アイク

「そのようだな。」

リュカ

「とにかく、これなら勝てるね。」

トレーナー

「そうだね……よし！もう一踏ん張りだ！！」

ポポ

「僕達も頑張ろう！！」

ナナ

「うん！！」

こうして彼らはどんどんプリム達を一掃していく。

グレードフォックスは煙を上げながら退避していく中、戦艦ハルバードはそのまま飛行していく。

CALL!CALL!

ハルバード内の倉庫らしき場所のダンボール箱の中からコール音が響き渡る。

？

「こちらスネーク、応答せよ。」

？

「スネーク、戦艦ハルバードについての情報を伝えるぞ。」

スネーク

「頼むぞ、ロイ・キャンベル大佐。」

大佐

「戦艦ハルバードは以前メタナイトのリーダー・メタナイトがプブランドという国を侵略しようと開発した空間戦艦だが、カービイという者がハルバードに侵入して彼の計画を阻止した後にハルバードを破壊した。」

スネーク

「そのカービイという奴が以前にこのハルバード破壊したのか……
…やはりそのメタナイトを倒すしかないか。」

大佐

「だがメタナイトの剣の腕はかなりの腕前と聞いている……………気

をつけるよ。」

スネーク

「心配するな大佐、俺は不可能を可能にする男だ。」

大佐

「そうだったな……では、健闘を祈る！」

スネーク

「了解だ！任務を続行する！！」

通信を終えると、ダンボール箱の中から全身タイツの上に武装した男・スネークが現れる。

スネーク

「ショウタイムだ！」

第十五話　戦艦ハルバード奪還作戦

スネークは今、戦艦ハルバード内部を探索していた。

スネーク

（まずはこの戦艦の所有者であるメタナイトを倒さなければ……
ムッ！？）

スネークは突然立ち止まる。

スネーク

（誰かこっちに来る！）

スネークは壁の隅に隠れる。

ルカリオ

「これからどうする？」

メタナイト

「まず、ハルバードを動かしている奴を倒してハルバードを奪還する。」

ルカリオ

「成程………では目差すは操舵室だな。」

メタナイトとルカリオは操舵室へと向かって走り出している。

ルカリオ

「んっ？」

ルカリオは壁の隅に置いてあるダンボール箱まで引き返す。

メタナイト

「どうした？ルカリオ。」

ルカリオ

（この箱の中……………誰が入ってる。）

ルカリオはダンボール箱の中にいる者の波導を感じ取る。

サッ。

スネーク

「！？」

ルカリオがダンボール箱を上げると、中にはスネークが入っていた。

スネーク

（くそっ！何故バレた！？）

スネークは素早く構える。

メタナイト

「敵か！？」

メタナイトも構える。

ルカリオ

「待て！メタナイト。」

ルカリオはメタナイトを制止する。

ルカリオ

「この男は……………敵じゃない。」

メタナイト

「何！？分かるのか？」

ルカリオ

「ああ……………私は波導で相手の善悪を区別できる。」

メタナイト

「そうか……………波導というのは凄い力だな。」

スネーク

「……………おい、掛かって来ないのか？」

スネークは未だに構えていた。

ルカリオ

「お前と闘う気はない……………私達の敵は奴らだ！」

ルカリオはメタナイトの背後にいるプリムの集団に指さす。

メタナイト

「このハルバード内部にも潜んでいたか！」

ルカリオ

「一気に倒すぞ！」

スネーク

「どうやら、本当の敵が現れたようだな。」

メタナイトとルカリオはプリムの集団に向かって駆け出す。

メタナイト

「うりやりやりやりやりやー!」

ズバッ! ザシュ!

ルカリオ

「ハアアッ!」

ドガッ! バギッ!

メタナイトとルカリオは次々に襲い掛かるプリム達を薙ぎ払う。

スネーク

「あの二人、なかなかやるな……。」

スネークは二人の戦鬪を眺めていた。

スネーク

「おっと！俺も加勢しなければ……………」

そう言うと、スネークは急いで二人の元へ駆け寄る。

ルカリオ

「くっ、これじゃキリがないな……………」

ルカリオがそう呟くと、背後からプリムが近づいてくる。

スネーク

「危ない！」

スネークは咄嗟に細長いバズーカのような武器を構える。

スネーク

「リモコンミサイルをくらえ！！」

ドン！

ボガアアッ！！

スネークの構えた武器からミサイルが発射され、見事プリムに命中させる。

ルカリオ

「な、何だ!？」

ルカリオは慌てて後ろへ振り向く。

スネーク

「俺がお前さんの後ろにいた奴を吹っ飛ばしてやったのさ。」

ルカリオ

「そうか………すまない。」

スネーク

「気にするな。」

メタナイト

「また来るぞ!！」

メタナイトの言葉で後ろを向くと、沢山のプリムが近づいてくる。

ルカリオ

「まだこんなにいるのか……………」

スネーク

「俺に任せろ。」

そう言いながら、スネークは手榴弾を取り出す。

ピンッ！

スネーク

「それっ！」

スネークは手榴弾のピンを外すと、プリムの群れに向かって投げる。

ドッカーーン！！

手榴弾が爆発し、プリム達は跡形もなく吹っ飛ぶ。

メタナイト

「…………あつという間だな。」

ルカリオ

「近代兵器の勝利というやつか？」

メタナイトとルカリオは少し哑然となる。

スネーク

「ところで、お前さん達は何物だ？この戦艦で何をしている？」

ルカリオ

「申し遅れた、私の名はルカリオだ。」

メタナイト

「私はメタナイト、この戦艦ハルバードの所有者だ。」

スネーク

「何っ！？お前さんがメタナイト！？」

スネークはメタナイトの名を聞いて驚愕する。

ルカリオ

「どうかしたのか？」

スネーク

「……………一つ聞ぐが、何の為にこんな事を？」

メタナイト

「……………何の事だ？」

メタナイトはスネークの言葉が理解できなかった。

スネーク

「だから何故こんな大騒動を起こしているのかと聞いているんだ！」

メタナイト

「ま、待て！これは私の仕業ではない！」

スネーク

「何？どうゆう事だ？」

ルカリオ

「まず我々の話を聞いてくれ……………」

ルカリオとメタナイトはスネークにこれまでの事を全て話した。

スネーク

「成程……話を整理すると、この戦艦はその亜空軍っていう奴らに乗っ取られたという訳か。」

メタナイト

「そう、そして私とルカリオはやっとの思いで潜入できた訳だ。」

ルカリオ

「ところで、スネークと言ったか？お前は何故この戦艦にいるんだ？」

スネーク

「俺か？俺は任務でこの戦艦に侵入しているんだ。」

メタナイト

「任務？」

スネーク

「この戦艦から黒い物体を撒き散らして、そこからさっきの化け物が次々と被害を及ぼしていると情報を聞いてな……そこで俺の出番という訳だ。」

ルカリオ

「要するにお前も我々と目的は同じか。」

スネーク

「そういう事になるな。」

メタナイト

「スネークとやら、貴公も我々と一緒にハルバードの奪還に協力してくれないか？」

スネーク

「いいだろう！一人よりも三人のほうが効率がいいからな。」

ルカリオ

「……………決まりだな。」

メタナイト

「では、改めて操舵室へ行こう！」

スネーク

「了解！！」

メタナイト、ルカリオ、スネークの三人は操舵室へ向けて走り出す。

ルカリオ

「操舵室はまだか？」

メタナイト

「まだまだ先だ。」

スネーク

「……………ん？」

三人が進む中、スネークは鋼鉄の扉の前で止まる。

メタナイト

「どうした？スネーク。」

スネーク

「いや、ちょっと気になってな……………」

ガラガラッ。

スネークは鋼鉄の扉を開く。

ルカリオ

「おい、寄り道してる場合じゃ……………」

スネーク

「固い事を言うな。」

スネークはそのまま扉の中へと入っていく。

メタナイト

「おい……………」

ルカリオ

「まったく……………」

メタナイトとルカリオも渋々中へ入る。

スネーク

「これは……………」

扉の中には二つのカゴがぶら下がっており、その中にはフィギュアになったピーチとゼルダが閉じ込められていた。

ルカリオ

「どうやら、閉じ込められているようだな。」

スネーク

「今すぐ救出しよう。」

メタナイト

「待て！」

シューウウウツ。

メタナイトが制止した時、影虫が左右のカゴの鎖を伝ってピーチとゼルダに群がると同時に偽ピーチと偽ゼルダを生み出す。

スネーク

「これはどういう事だ？」

メタナイト

「恐らくあの黒い物体が彼女達のデータをコピーして実体化したの
だろう。」

ルカリオ

「ならば倒すのみ！」

三人は攻撃体勢に入る。

偽ゼルダ

「ハアツー！」

ドオオオン！

ルカリオ

「ぐわっ！？」

ルカリオは偽ゼルダのディンの炎をまともに喰らった。

スネーク

「な、何だ！？今の攻撃は……………」

メタナイト

「何か魔法系のような攻撃だな……………」

スネーク

「魔法か……………俄かには信じられんが……………」

スネークは少し複雑そうな顔をする。

ルカリオ

「くっ……………私とした事が油断した……………」

ルカリオはゆっくりと立ち上がる。

スネーク

「女だからといって油断は禁物って事だな。」

メタナイト

「よし、私が相手だ！」

そう言うと、メタナイトは偽ビーチに向かって駆け出す。

偽ビーチ

「ハッ！」

偽ビーチは地面から野菜を引っ抜き、そのままメタナイトに投げ付ける。

メタナイト

「なんのー!!」

スパパパパッ！

メタナイトはギャラクシアで野菜を木っ端みじんにする。

ルカリオ

「お見事！」

スネーク

「しかし、野菜で攻撃するっていうのはどうかと思うが……………」。

ルカリオはメタナイトの剣裁きに感心し、スネークは偽ピーチの攻撃に苦笑いする。

ルカリオ

「私達も加勢しなければ……………」。

ルカリオはメタナイトの元へ駆け出そうとするが……………。

スネーク

「待て！」

ルカリオ

「な、何だ急に？」

スネークに止められ、ルカリオは立ち止まる。

スネーク

「俺にいい考えがあるんだが……………」

スネークはルカリオの耳元で話す。

ルカリオ

「……………分かった、任せておけ。」

そう言い残すと、ルカリオは再びメタナイトの元まで駆け出す。

スネーク

「さて、早速アレを仕掛けるか……………」

そう言うと、スネークは床に伏せながら何かを設置する。

ルカリオ

「ハアアッ!!」

ルカリオは偽ゼルダに攻撃を仕掛けるが……………。

偽ゼルダ

「ハッ！！」

フッ。

偽ゼルダはフロルの風で姿を消す。

ルカリオ

「き、消えた！？」

ルカリオは慌てて辺りを見渡す。

メタナイト

「ルカリオ！後ろだ！！」

ルカリオ

「ムッ、しんそく！！」

ドオオオン！！

ルカリオはメタナイトの声に反応し、しんそくで偽ゼルダのディンの炎を避ける。

ルカリオ

「同じ手は喰わん！」

偽ゼルダ

「……………」。

偽ゼルダは悔しそうに拳を握り閉める。

スネーク

「ルカリオ！用意出来たぞ！！」

ルカリオ

「よし！」

スネークの言葉を聞いたルカリオは尽かさず構え直す。

ルカリオ

「ウオオオツ！！」

ルカリオは偽ゼルダに猛攻を仕掛ける。

偽ゼルダ

「ハッ！！」

パアアアッ！！

ルカリオ

「うぐっ！？」

偽ゼルダのネールの愛でルカリオは怯む。

ルカリオ

「ま、まだまだ……………はっけい！！」

偽ゼルダ

「グッ！！」

ルカリオのはっけいで偽ゼルダは吹っ飛ばされる。

ドッスン！！

偽ゼルダは地面へと叩き付けられる。

スネーク

「そこだ！C4爆弾発動！！」

カチッ。

ドッカーン！！

スネークがボタンを押すと、偽ゼルダの足元に設置したC4爆弾が爆発する。

シューウウウッ。

偽ゼルダはフィギュアに戻り、そのまま溶けてしまう。

スネーク

「まず一人目……。」

ルカリオ

「メタナイト、そっちはどうだ？」

スネークとルカリオはメタナイトの方を向く。

シュウウウッ。

メタナイト

「たった今片付いた。」

偽ピーチはメタナイトによってフィギュアにされて溶けていった。

メタナイト

「それでは、改めて本物の彼女達を救出するか。」

ズバアアッ!!

メタナイトはギャラクシアでカゴの鎖を切り裂く。

ピーチ

「あら？ここは……。」

ゼルダ

「私達は今まで何を？」

ピーチとゼルダは今の状況を理解出来ずにいた。

ルカリオ

「これで一安心だな。」

メタナイト

「よし、我々は先へ進もう！」

スネーク

「そうだな……………」

三人は扉から出ようとする。

スネーク

「おっと！お前さん達は此処で待っていてくれ。」

ゼルダ

「え？あの……………」

スネークがそう言うと、部屋から出ていき扉が閉まっていく。

ガラッ。

？

「誰もいないようだな。」

扉の中から口元や頭に包帯を巻いた青年が出てくる。

ピーチ

「あ、貴方………ゼルダよね？」

その後からピーチが啞然とした表情で扉から出てくる。

？

「そうさ、僕のもう一つの顔さ……………この姿ではシークと呼んでくれ。」

ピーチ

「え、ええ……………」

ピーチはそのままシークと名乗る青年を見つめたまま頷く。

シーク

「それはともかく、此処が何処か少し様子を伺おう。」

ピーチ

「で、でもさっきの人が大人しくしてろって……………」

シーク

「フン、あんな見ず知らずの男の言うことなんて聞く必要はない。」

ピーチ

（口調だけじゃなく性格も変わってるわ……………。）

ピーチは苦笑いを浮かべる。

シーク

「それに、少し中の様子を探るだけだから心配ない。」

ピーチ

「それもそうね…………面白そうだから私も付いて行くわ。」

シーク

「よし、それじゃ僕に付いて来て。」

ピーチ

「あら、ありがとう。」

シークはピーチの手を添えながら廊下を歩く。

シーク

「ん？これは…………。」

シークは廊下の窓口で足を止める。

ピーチ

「いい眺めね。」

シーク

「此処はあの船の中だったのか……………」

シークがそう呟くと、窓口の前に立つ。

シーク

「ピーチ、ちょっとこっちへ……………」

ピーチ

「え？何……………きゃあっ!？」

シークに呼ばれてピーチは近づくと、ピーチはシークによって抱き上げられてしまう。

シーク

「しっかり捕まって!とうっ!」

シークはピーチを抱き抱えたまま、ハルバードの外部へと飛び出す。

トトトトトトトト。

その頃、戦艦ハルバードはフォックスが操るアーウィンと激戦を繰り広げていた。

ピーチ

「外は随分賑やかな。」

ピーチはパラソルをさしながらハルバードのブリッジを歩く。

シーク

「ピーチ！勝手に歩いたら危ない！！」

シークは慌ててピーチの後を付いていく。

ズドドドドドッ。

ドガッ！

ハルバードの砲撃がアーウィンに掠る。

フォックス

「くそっ！折角スリッピーに直してもらったんだ、そう簡単に負けてたまるか！！」

フォックスのアーウィンはおもいきり旋回する。

ゴオオオオッ！！

ブリッジにある2連主砲の極太ビームがアーウィンを狙うが、間一髪避ける。

フォックス

「危なかった……………ん！？」

フォックスはコクピットの画面に目を疑う。

フォックス

「さっきのビームが発射されたのはあの大砲だな……………」

フォックスはそう呟くと、アーウィンを2連主砲へと接近させる。

ピーチ

「此処は紅茶を飲むには絶好の場所ね。」

シーク

「そんな呑気な事を言ってる場合じゃ……………ん！？」

シークは接近するアーウィンに気付く。

ズドドドドッ！

ピーチ

「きゃあっ！？」

アーウィンが2連主砲に攻撃すると爆発を起こし、ピーチはその場で伏せる。

シーク

「ピーチ！…………おのれ！浮身！！」

ボンッ！

シークは煙と共にその場から姿を消す。

フォックス

「な、何だ！？」

アーウィンの上から突然シークが現れる。

シーク

「このっ！！」

ガシャン！！

シークはアーウィンのコクピット部分の窓を破る。

ヒュユユツツ。

フォックスとシークがハルバードのブリッジに向かって落下してくる。

シュタ！シュタ！

フォックスとシークは見事に着地する。

フォックス

「おのれ、よくもやったな！！」

シーク

「それはこっちの台詞だ!!」

そう言うと、お互い一直線に駆け出す。

フォックス

「はぁあっ!!」

シーク

「しゅっ!!」

フォックスの蹴りとシークの突きが激しくぶつかり合う。

ピーチ

「ストップ!」

フォックス&シーク

「!?!」

ピーチの声で二人が振り向くと……………。

ピーチ

「暖かい紅茶が出来たの、飲んでみて。」

フォックス

「……………へ？」

ピーチの差し出した紅茶を見てフォックスは啞然とする。

シーク

「うん、いい香りだ……………」

シークはいつの間にかピーチの紅茶の匂いを嗅いでいた。

ピーチ

「さあ、狐さんもどうぞ！」

フォックス

「あ、どうも……………」

フォックスはピーチから紅茶を受け取る。

ウィーイーン！

メタナイト、ルカリオ、スネークの三人はエレベーターの中にいた。

メタナイト

「この上が操舵室だ。」

ルカリオ

「そうか……。」

スネーク

「後は舵を取ってる奴を倒して戦艦を奪還すれば任務完了だな。」

ガシヤン！！

三人が話をしてる最中にエレベーターが動きを止める。

メタナイト

「着いたぞ！」

ルカリオ

「いよいよか……。」

三人はゆっくりと操舵室を覗くと……。

スネーク

「なっ！？。」

操舵室内には真っ黒な平面人間が沢山いた。

スネーク

「へ、平面の人間がこんなに沢山……。」

メタナイト

「奴らがハルバードを奪ったんだ。」

ルカリオ

「よし！一氣に突っ込むぞ！！」

ルカリオとスネークはそのまま平面人間に向かって突っ込む。

ガシャーーン！！

ピーチ

「な、何！？」

シーク

「何かが割れた音が……。」

フォックス

「ん？何か落ちて来るぞ！」

ピー・ピー・ピー・ピー・ピー・ピー・

平面人間がピーチ、シーク、フォックスのいるブリッジに落ちてくる。

シュユユツ。

次の瞬間、六体の平面人間は溶けていき、溶けた物体が一カ所へと集結する。

フォックス

「こ、これは！？」

更に巨大なロボットのような二つの騎士の甲冑の上半身に陰陽太極図柄車輪の下半身の姿へと変化した。

ピーチ

「お、大きい……………」

シーク

「どうやら敵のお出ましのようだ。」

フォックス

「ああ……。」

シークとフォックスが構えた時……。

シュタツ！シュタ！

ルカリオ、スネークが三人の後ろへと着地する。

ルカリオ

「まさか一つに合体し、変形するとは……。」

スネーク

「しかもメタルギア並に大きいな。」

フォックス

「君達は？」

ルカリオ

「安心しろ、我々もアイツを倒しに来たんだ。」

シーク

「では、僕達の味方という事か。」

スネーク

「そういう事だ。」

ヒュユツ。

シュタツ！

次の瞬間、一機のアーウィンが通り過ぎると、上空からファルコが着地する。

ファルコ

「待たせたな、フォックス！」

フォックス

「ファルコ！来てくれたのか。」

ファルコ

「ああ、あのチビ助を送らなかつたらもっと早く来れたんだがな。」

スネーク

「これだけいれば何とかなるだろう。」

ルカリオ

「ああ、全員で掛かればどうって事はない。」

シーク

「ピーチは下がってて。」

ピーチ

「え？でも……………」

フォックス

「大丈夫！俺達が倒してやるさ。」

ファルコ

「それにしても、こりゃまた随分でかい相手だな……………」

全員が一斉に構えると、巨大な敵・デュオンは両手の双剣を振り回す。

シーク

「くられ！仕込針！！」

シークはデュオンの青い体・ソードサイドの顔に6本の針を投げる。

ズシャヤツ！！

だがデュオンは再び両方の剣を地面から上へ振り上げる。

シーク

「くつ、効かないか……………」

スネーク

「俺に任せろ。」

スネークは小型の機械を取り出す。

ルカリオ

「それは何だ？」

スネーク

「これはサイファアという飛行型偵察カメラさ。」

ファルコ

「その偵察カメラで何をするつもりだ？」

スネーク

「まあ見てろ……………」

ウィイウィツ。

サイファーは宙へと浮上する。

スネーク

「それっ！」

スネークはジャンプしてサイファーに捕まる。

フォックス

「成程、ああやって移動するのか……………」

フォックス達が見守る中、スネークは片手で手榴弾を取り出す。

ピンッ！

次にスネークは口で手榴弾のピンを外す。

スネーク

「そりゃ！」

スネークはデュオンの顔に向けて手榴弾を投げる。

ボオオオン！！

手榴弾はデュオンの顔に命中したと同時に爆発する。

スネーク

「よし！まずは一発目……………」

デュオン

「グオオオッ！」

デュオンは剣を交差させて、そのままスネークに切り掛かろうとする。

スネーク

（マズイ、この距離では逃げ切れない！）

デュオンが交差した剣を振り下ろそうとするが……。

ルカリオ

「はっ！ っ！ っ！」

バシユユツ！！

ルカリオが最大に溜めた波導の弾をデュオンの顔に命中するとデュオンは剣を止める。

ルカリオ

「間髪なかった……。」「

スネーク

「ふう、助かったぜ……。もう一発目いくぞー！」「

そう言うと、スネークは片手で細長いバズーカのような武器を構える。

スネーク

「発射!!」

ドンッ!!

スネークは構えた武器からミサイルを発射させる。

シュッ!!

デュオンは剣を振り回すが、ミサイルは方向転換して避ける。

フォックス

「どうなってんだ？ミサイルが奴の攻撃を避けてるぞ。」

ファルコ

「恐らくリモコン式のミサイルなんだろ。」

ドッカーーン!!

ミサイルは再びデュオンの顔面に命中する。

スネーク

「よっしゃ！二発目つと！！」

スネークはガッツポーズをとる。

ギューユツ。

デュオンは後ろへ回転すると、赤いガンサイドが両方の腕のガンを構える。

スネーク

「ま、まさか……………」

ズドドドドッ！！

デュオンは両手のガンを乱射する。

ガッシャーーン！！

スネーク

「うおっ！？」

ドッシーン！！

デュオンの放った光弾はサイファーに命中し、スネークはそのまま落下してしまう。

ルカリオ

「大丈夫か？」

スネーク

「ああ、俺は平気だが……だがサイファーが壊された。」

「

シーク

「おいおい、命が助かっただけマシだろ。」

スネーク

「そりゃあそうだな……。」「

フォックス

「どうやら次は俺達の出番のようだな。」

ファルコ

「よっしゃ！一丁やってやるぜ！！」

そう言うと、フォックスとファルコはブラスターを構える。

フォックス

「くられ！」

ビュッ！ビュッ！ビュッ！ビュッ！ビュッ！

フォックスとファルコはデュオンに向けてブラスターを発射する。

ファルコ

「チッ、全然効いてねえ……。」

フォックス

「なんて頑丈なんだ……。」

ズドン！！

二人が咄く中、デュオンは肩からミサイルを発射する。

フォックス

「あつちもミサイルを発射してきた!!」

ファルコ

「くそ!リフレクターで防ぐぞ!!」

パアアアッ。

フォックスはリフレクターを発動させ、ファルコはミサイルに向かってリフレクターを蹴る。

ドッカーン!!

ミサイルはフォックスとファルコのリフレクターに命中する。

フォックス

「くっ……………微かに衝撃が……………」

フォックスはその場で膝を地面に付ける。

ファルコ

「スリッピーの開発したリフレクターでも奴の攻撃を完全に防げね

えのか……………」

バババババツ。

更にデュオンは肩から沢山の爆弾をばらまく。

ドオオオオン！！

シーク

「うわっ！！」

スネーク

「ぬおっ！！」

ルカリオ

「うぐっ！！」

フォックス

「ぐわあっ！！」

ファルコ

「があっ！！」

その場にいた全員が爆発に巻き込まれる。

スネーク

「このままでは皆やられてしまう……………」。

ルカリオ

「なんとか奴の動きを止められれば……………」。

シーク

（ん？ピーチは何処へ行つたんだ？）

シークは俯せで倒れてながら辺りを見渡す。

ゴオオオオツ。

次にデュオンは頭部から青い光弾を溜め始める。

フォックス

「今度はアレを放つつもりか……………」。

ファルコ

「マジかよ……………」

デュオンは溜め終わるとフォックス達に頭部を向けた時……。

ズボッ！！

デュオンの頭部の穴に巨大な薙がすっぽりと嵌まる。

ルカリオ

「な、何だ！？」

スネーク

「誰かが野菜を投げ付けたんだ……………ムッ！？」

スネークが上を見上げると、ピーチがパラソルを広げてフワフワ浮いていた。

ピーチ

「見事にすっぽりと嵌まったわね。」

シーク

「ピーチ！？まさか君が……………」

フォックス

「なんて行動力のあるお姫様なんだ……………」

ファルコ

「いいじゃねえか、それより見るよ……………」

ファルコが指さす方を見ると……………。

ボガアアアン！！

デュオンは頭部を薙に詰まらせて暴発してしまつ。

ファルコ

「今がチャンスじゃねえか？」

フォックス

「よ、よーし！今の内に反撃だー！！」

フォックスの掛け声と共にデュオンの手が動き出す。

シーク

「させるか！鉄系舞！！」

シークは鎖を投げ付けて、デュオンの腕に巻き付ける。

スネーク

「チャンスだ！うおおおっ！！」

スネークはシークの鎖で塞がれた腕へと登り始める。

スネーク

「C4爆弾設置！！」

カチャッ。

スネークはデュオンの腕からC4爆弾を取り付ける。

シュッ。

スネークはその場から飛び降りる。

スネーク

「今だ!!」

カチッ!

ドカーン!!

スネークが空中でスイッチを押した瞬間、デュオンの腕に取り付けたC4爆弾が爆発する。

シーク

「フッ、これで左腕は使えないな。」

そう呟きながら、シークは鎖を回収する。

ルカリオ

「次は右腕を破壊する………はどつだん!!」

ルカリオはさつきよりも巨大な波導弾を放つ。

バシユユッ!!

ルカリオの放った波導弾が一撃でデュオンの右腕を破壊する。

ファルコ

「へっ！両腕がやられちゃったな。」

フォックス

「そろそろとどめといこうか……………」

そう言うと、フォックスとファルコの体から炎が上がる。

フォックス&ファルコ

「ファイアー！！」

ゴオオオオッ！！

フォックスとファルコのダブルファイアーアタックがデュオンに命中する。

シユユユッ。

次の瞬間、デュオンは段々溶けていき、先程の真っ黒で平面の人型のフィギュアだけが残る。

フォックス

「気をつける！迂闊に触れないように……………」

フォックスはフィギュアに向かってプラスターを構える。

ピーチ

「大丈夫よ。」

フォックス

「ちょ、ちよつと……………」

ピーチはフォックスを横切ってフィギュアに近づく。

ピーチ

「それっ！」

パアアアッ。

ピーチがフィギュアのプレート部分に触れると、真っ黒な平面人間

が実体化して辺りを見渡す。

ピーチ

「こらっ、悪い事しちゃ駄目でしょ!」

ピーチの優しい怒声に平面人間は俯く。

ピーチ

「……………はい!」

ピーチはパラソルを平面人間に渡すと、平面人間は嬉しそうにパラソルを持ったまま歩き出す。

ピーチ

「フッフ、可愛い子ね……………」

ピーチは平面人間を見ながら微笑む。

スネーク

「……………敵を手なずけるとはな。」

ルカリオ

「というより、奴には善悪の区別が分らないんじゃない……。」

シーク

「どちらにせよ、流石はピーチだ。」

ファルコ

「一応一件落着だな。」

フォックス

「ま、まあな……。」

残りの五人は苦笑いしながら平面人間を見つめる。

一方メタナイトは操舵室へ残っていた。

メタナイト

「どうやら終わったようだな……………」。

そう呟きながら、メタナイトは舵を握る。

メタナイト

「遂に私のハルバードを取り戻せた……………」。

そう言いながら、メタナイトはハルバードを操ると同時に今まで覆っていた真つ赤な暗雲が消え去り、空一面青くなっていく。

第十六話　エインシャント島からの脱出

サイレンが響き渡る亜空間爆弾工事内の廊下でサムスとピカチュウは駆け出していた。

サムス

「何が起ったのか分からないけど急ぎましょう!!」

ピカチュウ

「ピカッチュ!!」

一人と一匹が走っている途中で前方に扉が立ち塞がる。

サムス

「それっ!!」

ドッカーン!!

サムスがアームキャノンからミサイルを放ち扉を破壊すると同時に突入する。

ピカチュウ
「ピカッ！」

サマス
「ムッ!？」

サマスとピカチュウは辺りを見渡すと、中にはエインシャント卿と沢山の亜空間爆弾と部下のロボット達がいた。

サマス

「貴方がこの工事の親方ね！一体何が目的なの!？」

サマスはエインシャント卿に向かってアームキャノンを構えて、ピカチュウも頬っぺから電気を放ちながら威嚇する。

エインシャント卿
「……………」。

エインシャント卿は何も答えず、ただ俯くだけだった。

ピカチュウ
「ピカ?」

サマス

（何か様子が可笑しいわね……。）

サマスとピカチュウは首を傾げる。

ドカアアツ！！

ピカチュウ

「ピカピ！？」

大きな音と共に上の方からドンキーコング、ディディーコング、キヤプテン・ファルコン、ピクミン&オリマーが降りてきた。

サマス

「あ、貴方達は！？」

ドンキー

「俺達は此処にいる悪い奴らをやっつけに来た！」

ディディー

「ドンキーを誘拐したから仕返ししに来たのさ！」

ファルコン

「つまり我々は殴り込みに来たのさ。」

オリマー

「……だそうです。」

ピカチュウ

「ピカ……。」

サムス

「そ、そう……。」

サムスとピカチュウは少し苦笑いする。

ファルコン

「ところで、そういう君達は？」

ピカチュウ

「ピカピ？」

サムス

「私達はこの怪しい工事を探索してただけよ。」

オリマー

「そうですか……………では、向こうにいるあの方は？」

オリマーはエインシャント卿に向かって指をさす。

エインシャント卿

「我が名はエインシャント卿……………この島の主だ。」

ドンキー

「な、何だって!？」

エインシャント卿の言葉で全員身構える。

ファルコン

「では貴様が各地を飛び回っては可笑しな爆弾を設置していた張本人だな!」

ディディー

「それにクッパと組んでドンキーを誘拐しようとしただろ!？」

エインシャント卿

「……………すまない。」

サムス

「えっ!？」

エインシャント卿の言葉に全員驚く。

エインシャント卿

「我々はこのようない行為は行いたくはなかった……………」

ドンキー

「本当か？」

ディディー

「嘘ついたって無駄だぞ!！」

ファルコン

「その通り!口だけなら何とでも言えるからな。」

エインシャント卿

「……………」

ファルコン達の言葉を聞いてエインシャント卿は言葉を失う。

ピカチュウ

「ピカチュ……。」

オリマー

「何か嘘をついているようには見えないな。」

？

「何をしている！エインシャント卿！！」

エインシャント卿

「ガ、ガノンドロフ！？」

突然エインシャント卿の背後から全体真っ赤なガノンドロフが現れる。

ディディー

「な、何だお前は！？」

ディディーは素早く身構える。

ファルコン

「落ち着け、これは恐らく立体映像だ。」

ドンキー

「りったい……………えいぞう？」

ドンキーは頭を掻きながら首を傾げる。

サムス

「簡単に言えば、実体の無い幻よ。」

ガノンドロフ

「どうやら侵入者に我々の計画を知られてしまったようだな。」

エインシャント卿

「……………」

エインシャント卿はガノンドロフの問いに答えずただ黙る。

ガノンドロフ

「まあいい、秘密を知った者はこの島諸とも消し去ってくれる。」

エインシャント卿

「な、何だと!？」

ガノンドロフの言葉にエインシャント卿は驚愕する。

ガノンドロフ

「ロボット共よ!一斉に亜空間爆弾を起動させるのだ!！」

ロボットA

「了解!」

ガノンドロフの命令を聞いたロボット達は亜空間爆弾に近づこうとするが……………。

エインシャント卿

「待てお前達!！」

エインシャント卿が道を塞ぐかのように前に出てロボット達を制止する。

ロボットB

「ますた……………」

エインシャント卿

「そんな事したら、この島ごとお前まで巻き込まれてしまうのだぞー!」

ロボットC

「ウツ……………」

エインシャント卿の言葉を聞いたロボット達は俯く。

ガノンドロフ

「チッ、役立たずのガラクタ共め……………ならば!」

カチッ!

ガノンドロフは懷からスイッチを取り出して押す。

ギギギギギギ……………。

するとロボット達の目が赤くなり、エインシャント卿を押し退けて亜空間爆弾に近づく。

エインシャント卿

「お、おい!!」

ガシャン!!

更にロボット達は次々と亜空間爆弾を起動させる。

エインシャント卿

「お前達一体どうしたというんだ!やめろと言ってるだろ!!」

ドカツ!!

エインシャント卿は亜空間爆弾を起動したロボット二体を体当たりして吹っ飛ばす。

ガノンドロフ

「おのれ……………ロボット共!裏切り者を始末せよ!!」

カチッ!!

ガノンドロフがまたスイッチを押すと……………。

ビシュ！ビシュ！

エインシャント卿

「ぐわああっ！！」

ロボット達はエインシャント卿に向かって攻撃し、エインシャント卿の体全体が燃え上がる。

ガノンドロフ

「いいぞ！そして全員亜空間爆弾の餌食となるがいい！！ガハハハハハハ………」

ガノンドロフの笑いが響く中、ロボット達が起動させた亜空間爆弾がカウントを始める。

ドンキー

「ウホウホッ！爆弾から離れる！！」

ドンキーは亜空間爆弾からロボットを引き剥がそうとする。

ファルコン

「そりゃっ！！」

ファルコンは両手でロボットを持ち上げて投げる。

ビィィッ！！

サマス

「離れなさい！！」

サマスはアームキャノンからビームを出してロボットを掴みながら後ろから引つ張る。

ディディー

「このこの〜！離れろってば〜！！」

ディディーは爆弾を足場にしてロボットを押し出そうとする。

ガノンドロフ

「アロアロスよ！残りの奴らを始末せよ！！」

そう言い残すと、ガノンドロフの立体映像は消えて、アロアロスと呼ばれた鳥のような生物が次々と現れる。

ビシュッ!!

すると突然エインシャント卿の両目からビームが放たれ、アロアロスを一掃する。

エインシャント卿

「私はこんな所で壊れる訳にはいかない!!」

そう言いながら、エインシャント卿は燃え上がっていたローブを振り払うと、手下のロボット達より一回り大きなロボットの姿が露になる。

ディディー

「ア、アイツもロボットだったの!？」

ピカチュウ

「ピカピ!」

他のメンバーも驚きを隠せなかった。

ロボット

「クラエーろぼびーむ!!」

ビシュ！ビシュ！ビシュ！ビシュ！ビシュ！

ロボットは次々と空から襲い掛かるアロアロスをビームで打ち倒す。

オリマー

「凄い……。」「

ファルコン

「よし！あの鳥は彼に任せて、我々は爆弾を止めよう！！」

ドンキー

「よし！やってやるぞー！！」

ピカチュウ

「ピッカー！」「

ドンキー達は改めて亜空間爆弾を支えてる手下のロボット達へ駆け寄る。

ドンキー

「ウツホー！全然引き離せない！！」

ドンキーは一生懸命ロボットを引き離そうとするが、ロボットはびくともしない。

ロボット

「ミンナ……………」

ロボットは亜空間爆弾を支えている二体のロボット達を見つめる。

ロボットA

（ますたー、ココハモウ危険デス……………」

ロボットB

（私達二構ワズ逃ゲテ下サイ。）

ロボット

「……………」

部下のロボット達の心の声を聞いたロボットはそのまま目をつぶる。

ディディー

「もう駄目だ！此処から脱出しなきゃ！！」

ディディーはロボットに声を掛ける。

ロボット

「…………私ハ此処へ残リマス。」

ディディー

「な、何言つてんのさ!？」

ディディーはロボットの言葉に驚愕する。

ロボット

「部下達ヲ置イテ私ダケ逃ゲルイナンテ出来マセン。」

ディディー

「で、でも……………」

ディディーがロボットを説得している中、ファルコンは腕に付けてる機械を使って何かをしている。

ファルコン

「……………よし!」

ファルコンはそう言いながら、ヘルメットに搭載された機械を起動させた。

ファルコン

「みんな、今脱出用の船を呼んだ！急いで此処から出るぞ！！」

サムス

「分かったわ！」

オリマー

「りよ、了解！」

ピカチュウ

「ピカッ！」

ディディー

「ドンキー、このロボットをお願い！」

ドンキー

「任せとけ！！」

そう言うつと、ドンキーはロボットを掴む。

ロボット

「ハ、離シテ下サイ！！」

ロボットはジタバタと暴れる。

ファルコン

「我々が入ってきた入口まで急ぐぞ!!」

ファルコンの掛け声で一行は更に駆け足で走る。

ドンキー

「で、出口はまだか？」

ドンキーはロボットを担ぎながら進んでいる為、バテバテである。

デイデー

「まだみたいだよ。」

ピカチュウ

「……………ピカ？」

ピカチュウはその場で立ち止まる。

サムス

「一体どうしたの？」

ピカチュウ

「ピカピカ！」

ピカチュウの指さす方を見ると、大きな穴が目に見える。

オリマー

「あ、足場が無い……………」。

ファルコン

「やむを得ん……………このまま飛び降りよう!」

ディディー

「えっ? マ、マジで!?」

ファルコン

「マジだ! 行くぞ!」

そう言うと、ファルコンは穴の中へ飛び込む。

サムス

「私達も続きましょう!」

オリマー

「は、はい!」

サムスとオリマーも続いて飛び降りる。

ピカチュウ

「ピカ……ピカッチュー！」

更にピカチュウも後から飛び降りる。

ディディー

「ドンキ、どうしょ……。」

ドンキー

「い、行くしかないだろ！ウホーッ！」

ロボット

「マ、待ッテ下サイ！私ハマダ心ノ準備ガ……。」

ドンキーはロボットの言葉を無視して、そのまま飛び降りる。

ディディー

「ま、待って！オイラも行くよー！」

最後にディディーが飛び降りる。

ディディー

「うわゝ！これからどうすんのゝ！？」

全員勢い良くどンドン落下していく。

ファルコン

「よし……カモン！ファルコン・フライヤー！！」

パチッ！

ファルコンが落下しながら指を鳴らすと、突然巨大な宇宙船が現れる。

ピカチュウ

「チャッ！」

サムス

「よつと！」

全員ファルコン・フライヤーに着地する。

ファルコン

「さあ、みんな中へ乗り込むんだ！」

ファルコンの掛け声で全員ファルコン・フライヤーへ乗り込む。

ドンキー

「す、少し狭い……。」「

デイディー

「ドンキーが場所取りすぎなんだよ！」

デイディーの言う通りに、殆どドンキーが場所を取っていた。

ファルコン

「よし！発進！！！」

ファルコンが操縦桿に手を掛けると、ファルコン・フライヤーは目にも止まらぬ速さで発進する。

サムス

「凄いスピードね……。私のスターシップより速いかも……。」「

オリマー

「もしかしたら、ドルフィン初号機よりも速いかも……………」

ディディー

「ファンキーのタル型飛行船なんて目じゃないね……………」

ドンキー

「だな……………」

ロボット

「皆サン、何ノ話ヲシテイルノデスカ？」

一行は窓の景色を眺めながら呟く。

ディディー

「ウキヤッ!？」

後ろの方を覗いたディディーが奇声を上げる。

ドンキー

「どうしたディディー?」

ディディー

「この乗り物の後ろから何か付いて来るよ!!」

ピカチュウ

「ピカ？」

オリマー

「ま、まさか……………」

全員後ろの方を向く。

サムス

「あ、あれはまさか!？」

サムスは驚愕した。何故なら倒したハズのリドリーが体を半機械化して追ってくるからだ。

ピカチュウ

「ピカピカ!？」

サムス

「恐らく倒された後で何物かに改造されて、メタリドリーとなって

復活したようね……………」

ロボット

「ド、ドンドン接近シテ来マスヨ!!」

ロボットの言葉通りにメタリドリーはどんどんファルコン・フライヤーへ接近してくる。

サムス

「私が外に出て奴を迎え撃つわ!!」

そう言う、サムスは船のドアを開けて、屋根の上へと上がる。

ピカチュウ

「ピカチュウ!!」

その後にピカチュウが付いていく。

メタリドリー

「ギャアアアッ!!」

サムス

「今度こそこの手でお前を倒す!!」

ピカチュウ

「ピッカード!!」

サウスとピカチュウはファルコン・フライヤーの上でメタリドリーと対立する。

サウス

「くらえ!!」

ドンッ!!

サウスはアームキャノンからミサイルを発射させる。

ドガアアッ!!

ミサイルはメタリドリーに命中するが……。

メタリドリー

「ギャッ!!」

メタリドリーはサムスの攻撃を嘲笑うかのように雄叫びを上げる。

ピカチュウ

「ピカ!?!」

サムス

「どうやら相当頑丈に改造されたようね……………厄介だね。」

メタリドリー

「グガアアツ!!」

メタリドリーは雄叫びと共にサムス目掛けて突っ込んで来る。

ピカチュウ

「ピ〜カ〜チュ〜ツ!!」

ドガアアアン!!

ピカチュウはメタリドリーの真下から雷を落とす。

メタリドリー

「ガアアアッ!!」

メタリドリーはまたしても嘲笑うかのように雄叫びを上げる。

サマス

「ピカチュウの雷もびくともしないなんて……………こうなった……………」

サマスはチャージショットを放とうとアームキャノンからエネルギー弾を溜め始めるが……………。

メタリドリー

「グガアアッ!!」

ガシャーーン!!

メタリドリーは船体をおもいつき踏み付ける。

サマス

「うわっ!?!」

ピカチュウ

「ピカツ!？」

サムスとピカチュウは船体を揺らされてバランスを崩す。

メタリドリー

「ガアアッ!！」

メタリドリーは口から細い火球を連続で吐き出す。

ピカチュウ

「チャッ!！」

ピカチュウは電光石火で避け、攻撃が止むと同時に動きを止めるが……。

ゴオオオッ!!

メタリドリーは先程の火球よりも一回りも大きな火球を吐き出す。

サムス

「危ない!！」

サムスは急いでピカチュウを抱き抱えて間一髪避ける。

サムス

「ふう、あんなのまともに喰らったら一たまりもないわ……………」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ！」

ピカチュウはサムスの目を心配そうに見つめる。

サムス

「私なら平気よ……………それより、どうやって奴を倒すか……………」

メタリドリー

「グアアアッ！！！」

メタリドリーは先が鋭い尻尾をサムスに向けて突っ込んで来る。

ピカチュウ

「ピカッ！！！」

サマス

「し、しまった!」

ピカチュウの声でサマスは立ち上がるが、メタリドリーの尻尾は段々迫ってくる。

サマス

（速い……この距離では避けられない……もはや此処までか……。）

サマスが目を覆った時……。

ビィィッ!!

メタリドリー

「ギャアアッ!」

サマスの背後から一筋の光線が横切り、メタリドリーの尻尾の先を焼き切る。

ピカチュウ

「ピカピ!」?

サマス

「い、一体何が……。」

デイディー

「オイラ達も闘うよ！」

サマスとピカチュウの背後にはドンキー、デイディー、ピクミン＆オリマー、ロボットが立っていた。

サマス

「あ、貴方達……。」

ドンキー

「中で大人しく待ってるのは性に合わないんでね。」

デイディー

「オイラ達だってやれば出来るもんね〜！」

オリマー

「それに、同じ状況で私達だけ指をしゃぶって見てるだけなんて出来ませんしね。」

ロボット

「ダカラ我々モ闘イマス!!」

ピカチュウ

「ピカ………。」

サムス

「………分かったわ!一緒に闘いましょう!!」

デイディー

「OK!!」

オリマー

「それじゃ、一丁やりますか!」

ロボット

「了解!!」

ドンキー

「ウホーッ!!」

6人は一斉に戦闘体形へと入る。

メタリドリー

「ギャヤッ!!」

メタリドリーは再び勢い良くサ姆斯達に接近する。

サ姆斯

「みんな！私は今からエネルギー弾を最大まで溜めるから、それまで奴を引き付けて!!」

そう言うと、サ姆斯は再びアームキャノンからエネルギー弾を溜め始める。

オリマー

「引き付けばいいんですね……それっ!!」

オリマーは接近してくるメタリドリーの顔目掛けてピクミンを5匹投げ付ける。

メタリドリー

「グガアアッ!!」

ピクミン達の攻撃でメタリドリーはその場で動きを止める。

メタリドリー

「ガアアッ!!」

メタリドリーはピクミン達を振り払い、ピクミン達はそのまま落下していく。

オリマー

「ああ……………ピクミン達が……………」

オリマーはその場で膝をついて凹んでしまう。

デイディー

「畜生ッ!これでもくらえッ!」

パン!パン!パン!

デイディーはピーナッツ・ポップガンを取り出して、落花生を発射する。

メタリドリー

「グウウッ!」

落花生はメタリドリーの顔に命中する。

ディディー

「どうだ！ざまーみるー！！」

メタリドリー

「グガアアッー！！」

メタリドリーは再び勢い良く接近してくる。

ディディー

「わーっ！怒らせちゃったみたいー！！」

ディディーは慌てふためく。

ロボット

「次ハ私ガ……………ろばばーなー発動ー！！」

ゴオオオッー！！

ロボットは足元から炎を噴出させて、そのまま上昇していく。

メタリドリー

「ゲガア？」

メタリドリーは船に接近してきた時に再びその場で止まる。

ロボット

「じゃいる発射!!」

ヒュッ! ヒュッ! ヒュッ!

ロボットは小さな発射台らしき機械を出して駒のような物を次々と発射していく。

メタリドリー

「ガアアッ!!」

ジャイロと呼ばれた駒は次々とメタリドリーの全身に命中する。

メタリドリー

「グオオオッ!!」

バシッ！！

ロボット

「グワッ！！」

メタリドリーはジャイロを巨大な羽根で振り払い、更にロボットにも命中するとそのまま落下していく。

ドンキー

「おっと！危ない！！」

ドンキーは落下するロボットを見事にキャッチする。

ドンキー

「大丈夫か？」

ロボット

「ア、アリガトウゴザイマス。」

ロボットがドンキーにお礼を言つと、ドンキーゆっくりとロボットを起こす。

ドンキー

「こうなったら……スピニングコング!!」

グルグルグル。

ドンキーはスピニングコングで真上にいるメタリドリーに近づく。

ドンキー

「今だ!!」

ガシッ!!

メタリドリー

「ガアアッ!?!」

ドンキーはメタリドリーの尻尾を掴む。

ドンキー

「とおりゃっ!!」

ブンッ!!

ドンキーはメタリドリーを真下へと投げ付ける。

ドガアアッ!!

メタリドリー

「ガアアッ!!」

メタリドリーはそのままファルコン・フライヤーへと叩き付けられる。

ピカチュウ

「ピカッッッ!」

オリマー

「おっとつと………。」

船にいた全員がバランスを崩す。

ドンキー

「まだまだー!!」

ドッシーーン!!

メタリドリ

「ギャアアア!!」

更に落下してきたドンキーがメタリドリを勢い良く踏み付ける。

デイデー

「ドンキー! もう少し安全に出来ないの!？」

ドンキー

「ご、ごめん……。」

デイデーに怒られたドンキーは俯く。

オリマー

「サムスさん、大丈夫ですか？」

サムス

「ええ、何とか……。」

サムスはまだアームキャノンからエネルギーを溜めていた。

ロボット

「マダ大分掛カリマスカ？」

サムス

「後もう少しよ……。」

メタリドリー

「グガアアツ……！」

ドンキー

「ウホツ……！」

メタリドリーは勢い良く起き上がると、上に乗っかっていたドンキーを振り払う。

ディディー

「まだやる気か、モンキーフリップ……！」

ディディーはメタリドリーの顔へ飛び移り、そのまましがみつく。

メタリドリー

「ガアアアッ!!」

メタリドリーはおもいつき顔を振るが、ディディーは離されまいと必死でしがみつく。

ディディー

「サムスく、まだく?」

サムス

「……………よし!チャージ完了よ!!」

ドンキー

「ディディー!そこから離れる!!」

ディディー

「待ってました!」

ディディーはメタリドリーの顔から離れる。

サムス

「くられ!チャージショット!!」

ドゴオオッ!!

メタリドリー

「グギヤヤッ!!」

サムの放ったチャージショットが見事にメタリドリーに命中する。

デイデー

「やった〜!当たったぞ〜!!」

ドンキー

「これで奴もおしまいだろ……………」

メタリドリー

「グ…………グガア……………」

メタリドリーは身体中に電気を走らせながらゆっくりと起き上がる。

ロボット

「マダ生きテル……………」

オリマー

「なんて生命力だ。」

ガシッ！！

ピカチュウ

「ピカッ！？」

メタリドリーは素早くピカチュウを捕まえる。

サムス

「ピカチュウ！！」

ドンキー

「しまった！」

メタリドリー

「グガアアッ！」

メタリドリーはそのままピカチュウを口元へ近づける。

ディディー

「ピカチュウを食べるつもりだ！」

オリマー

「やめるー！！」

ピカチュウ

「チャーンツ！！」

ピカチュウが必死でもがいた時……………。

ファルコン

「ファルコンキック！！」

ドガアアツ！！

メタリドリー

「グガアアツ！！」

ファルコンの強力なキックでメタリドリーは船の下へと落下する。

ファルコン

「もう安心していいぞ。」

ピカチュウ

「ピカ………ピカチュウ!!」

ピカチュウは嬉しそうにファルコンの足元へ近づく。

サムス

「助かったわ、ファルコン。」

ドンキー

「お陰で助かったぜ。」

ディディー

「本当にありがとう!」

ファルコン

「いや、俺はただみんなが心配だから駆け付けただけさ。」

ロボット

「ソレデモ私達ハ貴方ニ感謝シテマス。」

ピカチュウ

「ピッカチュウ!!」

ファルコン

「そうか、俺もみんなのその気持ちは十分嬉しいよ。」

オリマー

「あの、話の途中ですが……………この船は今誰が操縦しているんですか?」

オリマー以外全員

「……………えっ!?!」

オリマーの言葉を聞いた全員の表情が凍る。

ディディー

「わ〜〜! い、急いで船の操縦しないと危ないよ〜〜!」

ファルコン

「お、落ち着け! 今操縦席へ戻る……………」

グラッ!

次の瞬間、船が揺れ動く。

ドンキー

「うわっ！お、落ちる〜！！」

サムス

「みんな！慌てないでゆっくりと船の中へ戻るのよ！！」

ロボット

「リョ、了解！！」

ガチャ。

船の扉を開けた瞬間、全員素早く乗り込む。

オリマー

「ふう、危なかった。」

ピカチュウ

「ピカ………。」

ファルコン

「す、すまなかったな……………」

ドンキー

「もういいって。」

デイディー

「そうそう、ファルコンが来てくれなかったら今頃どうなっていたか……………」

サ姆斯

「そうね、結果的にはこれで良かったわね。」

ファルコン

「そ、そうだな……………よし！急いで此処から脱出しよう！…」

ファルコンは操縦管を握り締めると、物凄いスピードで走行する。

ブオオオツ!!

ファルコン・フライヤーがエインシャント島から脱出した瞬間……。
…。

ゴオオオツ!!

亜空間が広がり、どんどんエインシャント島を飲み込んでいく。

ロボット

「アア………えいんしゃんと島ガ………。」

ロボットは船の中から亜空間に飲み込まれるエインシャント島を見つめる。

デイデー

「ん？どうしたの？」

ロボット

「イ、イイエ何モ……………」

隣にいたデイデーがロボットに問い掛けるが、ロボットは平然を装って返事をする。

ロボット

（サラバ……………我が同志達ヨ……………。）

ロボットは俯いたまま心の中で仲間達に別れを告げる。

第十七話　亜空砲戦艦撃破

溪谷で合流したマリオ、リンク、ピット、ヨッシー、カービィ、リユカ、ポケモントレーナー、マルス、アイク、アイスクライマーの二人は亜空間に飲み込まれたエインシャント島を海岸から眺めていた。

カービィ

「ぼよ……………」

マリオ

「どうやらまた亜空間爆弾が爆発したようだ。」

ピット

「あ！何かがこっちに近づいてくる。」

ピットの指刺す方を見ると、ファルコンのファルコンフライヤーが接近してくる。

マルス

「ん？向こうからも何か来ますよ。」

マルスの言う通りに、東側の方から戦艦ハルバードが接近してくる。

リンク

「アレは！？」

ヨッシー

「例の巨大戦艦だ！」

ハルバードを確認したリンク達五人は驚愕する。

リユカ

「アレって確かメタナイトさんのだって言ってたような……………」

トレーナー

「うん、言ってた。」

リユカの言葉にトレーナーは頷く。

アイク

「アイツ、上手くあの船を取り戻せたのか？」

アイクが腕を組みながら呟く。

ポポ

「あー船がこっちに着地するよ。」

ナナ

「向こうから来た巨大戦艦も……………」

ポポとナナが言った瞬間、ファルコンフライヤーと戦艦ハルバードは同時に着地する。

プシューーッ。

するとファルコンフライヤーのドアが開かれる。

ファルコン

「みんな、無事脱出出来たぞ。」

運転席からファルコンが降りてくる。

サムス

「ふう、ようやく地面を踏み締める事が出来るわ。」

ピカチュウ

「ピカピカ。」

後ろ側のドアからサ姆斯とピカチュウが出てくる。

ドンキー

「結構楽しかったな。」

ディディー

「楽しかったって………相変わらず呑気なんだから………。」

その後から、ドンキー、コングとディディー、コングが出てくる。

オリマー

「まあまあ、全員無事で済んだからいいじゃないですか。」

ロボット

「……………ソウデスネ。」

更にオリマーとロボットが降りてくる。

マリオ

「ドンキーじゃないか！何やってんだ？」

ヨッシー

「それにディディーも一緒だね。」

ドンキーとディディーを発見したマリオとヨッシーは二匹に近づく。

ドンキー

「ウホ！？マリオとヨッシーか！」

ディディー

「久しぶりだねー！」

ドンキーはマリオとヨッシーの姿を見て少し驚き、ディディーは嬉しそうに手を振る。

マリオ

「一体何をやっていたんだ？」

ドンキー

「いやー、話すと長くなるけど……………」

マリオの問い掛けにドンキーは頭を掻きながら曖昧に答える。

デイディー

「そもその始まりはクッパがドンキーをフィギュアにして誘拐したのが原因なんだ。」

マリオ

「何！クッパだって！？」

デイディーの言葉にマリオは驚愕する。

ヨッシー

「どうしてクッパはそんな事するんだらう？」

ヨッシーは首を傾げながら呟く。

ドンキー

「そう言えば、もう一人悪い奴がいたな。」

デイディー

「確か……ガノンドロフって言ったっけ？」

リンク

「ガ、ガノンドロフ!？」

ガノンドロフの名前を聞いたリンクは驚愕する。

リンク

「まさか奴も関係しているのか……………」

そう言いながら、リンクは腕を組みながら考え込む。

ガーーツ。

すると、戦艦ハルバードの入口らしき扉がゆっくりと開く。

リュカ

「あ、扉が開く……………」

トレーナー

「ん? 誰が出てくる。」

マリオ

「みんな気をつけろ、クッパや亜空軍かもしれない!」

マリオがそう言った後、全員が攻撃体制へと移る。

ピーチ

「ふっ、何か外へ出るのが懐かしいわ。」

ゼルダ

「そうですね、私達今まで閉じ込められていたんですから。」

扉から背伸びするピーチとゼルダが出てくる。

フォックス

「……………あのお姫様が俺からアーウィンを引き剥がした男だなんてまだ信じられないよ。」

ファルコ

「だが、事実なんだから受け止めるしかねえだろ。」

その後から、怪訝そうな顔をしたフォックスとファルコが出てくる。

スネーク

「これにて任務完了だな。」

ルカリオ

「メタナイト、お前の戦艦が戻って来て良かったな。」

メタナイト

「ああ、それもこれも皆のお陰だ。」

ピッ！ピッ！

更にその後から、スネーク、ルカリオ、メタナイト、謎の平面人間が出てくる。

マリオ

「あ！ピーチ姫！！」

リンク

「ゼルダ姫！！」

マリオとリンクはそれぞれの姫の名を呼びながら近づく。

ピーチ

「あら、マリオ！お久しぶり。」

ゼルダ

「リンク！どうして此処へ……………？」

ピーチはマリオに向かって呑気に手を振り、ゼルダはリンクの姿を見て驚く。

マリオ

「ピーチ姫！何処かお怪我はございませんか！？」

マリオは慌ててピーチの体を見渡す。

ピーチ

「大丈夫、私はこの通り無事よ。」

マリオ

「そうですか……………良かったです。」

ピーチの言葉を聞いたマリオは一安心する。

リンク

「ゼルダ姫もご無事で何よりです。」

リンクはゼルダの前でひざまずく。

ゼルダ

「リンクったら、折角久しぶりに会えたんですからお立ちなさい。」

リンク

「は、はい！」

ゼルダの言葉にリンクは慌てて立ち上がる。

カービィ

「ぽーぽよー！！！」

カービィは跳びはねながらメタナイトに駆け寄る。

メタナイト

「カービィじゃないか！何故此处にいるのだ？」

メタナイトは驚いたような口調でカービィに問い掛ける。

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよー！」

カービィは一生懸命メタナイトにこれまでの事を説明した。

メタナイト

「そうか……私のハルバードのせいで苦勞を掛けたな。」

カービィ

「ぼよ？」

カービィは顔を少し傾ける。

メタナイト

「いや、こつちの話だ。」

メタナイトはマントを振りかざしながらカービィに背を向ける。

ディディー

「ヤッホー！フォックスー！！ファルコー！！！」

ディディーは勢い良くフォックスとファルコの元へ駆け寄る。

ディディー

「一体今まで何処行つてたの？」

フォックス

「まあ、ちよつとな……………それより、そっちは見事ドンキーを救出したようだな。」

ディディー

「そりゃあ勿論フォックス達のお陰さ!!」

ディディーはフォックスに向かってガッツポーズをとる。

ファルコ

「まったく、元気なチビ猿だぜ……………」

ファルコは聞こえないように呟く。

ドンキー

「ディディー、この二人は誰だ？」

ドンキーは頭を掻きながらディディーに聞く。

デイディー

「えっとね、この狐さんがフォックスで鳥さんがファルコ！ドンキ
ーの救出を手伝ってくれたんだ。」

デイディーはフォックスとファルコに指を刺しながらドンキーに説
明する。

ドンキー

「そうか………どうもありがとう！」

ドンキーはフォックスとファルコに向かって深く頭を下げる。

フォックス

「いや、俺達はただ好意でやった事だからあまり気にしないでくれ。」

「

フォックスは頭を下げたドンキーを見て思わず謙遜する。

ファルコ

（本当はこのチビが強引に誘ったんだがな。）

ファルコはディディーの顔を見つめながら心の中で呟く。

ディディー

「ん？またオイラの顔に何か付いてる？」

ファルコ見つめられてる事に気付いたディディーは首を傾げながら質問する。

ファルコ

「い、いや別に……。」

ファルコはディディーから目を反らしながら答える。

マルス

「メタナイトさん、無事だったんですね。」

アイク

「溪谷で突然飛び出して行った時はどうなるかと思ったぞ。」

マルスとアイクがメタナイトに近寄ると、それぞれの心境を語る。

メタナイト

「ああ、心配を掛けてすまなかった……。」

メタナイトは少し俯きながら二人に謝る。

マルス

「いえ、貴方が無事ならそれでいいんです。」

マルスは笑顔で答える。

アイク

「でも、あまり心配掛けるなよ。」

アイクも少し口を緩めながら答える。

メタナイト

「承知した。」

メタナイトの言葉に二人は笑みを浮かべる。

ピカチュウ

「ピカ？ピカピカ？」

ピカチュウはルカリオに話し掛ける。

ルカリオ

「ん？私の名前？私はルカリオだ………お前はねずみポケモンのピカチュウだな？」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピ。」

ピカチュウは嬉しそうに俯く。

サムス

「貴方、ピカチュウの言葉が分かるの？」

サムスが不思議そうにルカリオに質問する。

ルカリオ

「ああ、私もこのピカチュウと同じポケモンだからな。」

サムス

「ポケモン？よく分からないけど、じゃあどうして貴方は人の言葉を喋れるの？」

サムスは更にルカリオに質問をする。

ルカリオ

「私はテレパシーで相手と語っているのだ。」

サムス

「成る程、テレパシーね……………」

サムスは少し納得する。

トレーナー

（あ、あれは波導ポケモンのルカリオ……………滅多にゲット出来ない珍しいポケモンだ……………。）

トレーナーは咄嗟にモンスターボールを取り出しながらルカリオを見つめる。

リュカ

「ト、トレーナーさん？どつしたの？」

トレーナー

「え！？い、いや何も……………」

リユカに声を掛けられてトレーナーは慌ててモンスターボールをしまつ。

トレーナー

（いかにいかん、ポケモントレーナーとして不意打ちでゲットなんて…………。）

トレーナーは帽子を深く被り治しながら考え込む。

ピット

「あの、話を戻しますが……………一体何がどうなってるんですか？」

ピットが話を戻すと、全員口を閉じる。

ヨッシー

「そもそも、その戦艦は亜空軍って連中の物じゃないの？」

メタナイト

「いや、これは私の所有している戦艦ハルバードだ。」

ヨッシーの質問にメタナイトが答える。

マリオ

「では、君は亜空軍の一員なのか？」

カービィ

「ぽよぽよっ!!」

マリオがメタナイトに質問すると、カービィが怒ったように否定する。

マリオ

「ど、どうしてカービィが怒るの？」

マリオはカービィの怒った顔を見て焦る。

メタナイト

「カービィ、私は別に気にしてないから心配するな。」

カービィ

「ぽよ……………」

メタナイトに宥められたカービィは大人しくなる。

ヨッシー

「カービィ、一体どうしたの？」

ヨッシーはカービィの顔を覗き込む。

メタナイト

「カービィは私が亜空軍の一員ではないと否定しているのだ。」

リンク

「それでは、何故あのような事を……………」

リンクの質問にメタナイトは少し俯く。

メタナイト

「私が目を離れた隙に……………奴らに奪われたのだ……………亜空軍にな……………」

ピット

「奪われた！？」

メタナイトの言葉にピットは驚きの声を上げる。

マリオ

「そうだったのか……………むやみに疑って悪かった。」

マリオはメタナイトに向かって頭を深く下げる。

メタナイト

「いや、もういいよ……………既にハルバードは取り戻せたのだから。」

ルカリオ

「それにしても、その亜空軍というのは一体何物なのだ?」

スネーク

「うゝむ、言われてみれば……………」

ルカリオが改めて疑問を投げ掛け、スネークは顎に手を当てる。

ロボット

「……………私が説明シマス。」

ロボットが静かに語ると、全員一斉にロボットに注目する。

ディディー

「何か知ってるの？」

サムス

「そう言えば貴方、亜空軍の一員と言ってたわね。」

ファルコン

「確か最初にエインシャント卿と名乗っていたな……………」

ファルコンの言葉にマリオ達が反応する。

マリオ

「エインシャント卿だって!？」

カービィ

「ぼよ!？」

リンク

「じゃあ、お前が各地で爆弾を……………」

ロボット

「ハイ、私ガヤリマシタ……………」

ロボットは俯きながら答える。

ヨッシー

「そう言えば、爆弾を起動させてせるあのロボットに似てるねえ。」

ピット

「どうして、そんな事を……………」?

更にヨッシーとピットの言葉でロボットは俯いてしまう。

ロボット

「……………私ノ部下達ガ人質ニサレタノデス……………ますたーはんどニ……………」

マルス

「マスターハンド?」

ロボットの言葉で全員耳を傾ける。

メタナイト

「マスターハンド…………あの巨大な左手か。」

アイク

「知っているのか？」

メタナイト

「ああ、何せ私の戦艦ハルバードを盗んだ張本人だからな。」

メタナイトの言葉に更に全員耳を疑う。

マリオ

「…………話の内容からするとそのマスターハンドって奴が黒幕という事になるな。」

マリオが腕を組みながら呟く。

ピーチ

「じゃあ、私達がいたスタジアムに襲い掛かったあの人達は何なの？」

ピーチが残ってる疑問をロボットにぶつける。

ロボット

「アレハMr・ゲーむ&うおっちサンノ体内カラ溢レ出テクル影虫デ作リダシタ怪物達デス。」

ロボットはさつきからうつろしている真つ黒な平面人間を見つめながら話す。

スネーク

「Mr・ゲーム&ウォッチってアイツの事か？」

スネークがMr・ゲーム&ウォッチに指をさしながらロボットに質問する。

ロボット

「ハイ、デモ彼自身ニ善悪ノ区別ガナイノデ……ますたーはんどハソコヲ利用シタノデス。」

ルカリオ

「随分頭の切れる奴だな……………」

ポポ

「……………ところで、これからどうするの？」

ポポが首を傾げながら皆に質問する。

ナナ

「どうするって、その悪さをしている人達を止めなきゃ……………」。

ポポ

「でも、もう爆弾を作っていた工事って破壊されたんでしょ？」

ポポの言葉にナナはハッと気付く。

ナナ

「あーそっか……………だったらもうあちこちに爆弾をバラ卷かれないんじゃない……………」。

ロボット

「イエ、ソウデモアリマセン……………」。

ロボットが再び俯きながら呟く。

リユカ

「ど、どつてっ。」

リユカが恐る恐る質問をする。

ロボット

「恐ラクがのんどろふガ例ノ最終兵器デ出陣スル筈デス。」

スネーク

「兵器？おいおい、まさかメタルギアじゃないだろうな。」

スネークが苦笑いを浮かべながら口を開く。

メタナイト

「して、その兵器とは？」

ロボット

「ソノ兵器ハ何処デモ亜空間ヲ放テル正ニ亜空軍ノ最終兵器……
ソノ名ハ亜空砲戦艦デス。」

ルカリオ

「亜空砲戦艦……………」

ロボットの言葉に全員が息を飲む。

フォックス

「そんな恐ろしい兵器が今まさに此処にやって来るのか……………」

ファルコ

「だったら、此処でいつまでも喋ってる場合じゃないな。」

ファルコン

「そうだ、早くその兵器を破壊しなければ……………」

ファルコンの言葉に全員駆け出そうとするが……………。

ロボット

「マ、待ッテ下サイ！何力作戦ヲ考エナイトコチラガヤラレテシマ
イマス！！」

ロボットの強い言葉で全員立ち止まる。

ディディー

「で、でもこうしてる間にも奴らが……………」

メタナイト

「……………皆、私にいい考えがある。」

ドンキー

「ウホ！？本当か？」

メタナイトがゆっくりと口を開くと全員メタナイトに注目する。

メタナイト

「その前に誰か宇宙船みたいな物を所有していないか？」

ファルコン

「宇宙船？俺のファルコンフライヤーなら今此処に……………」

サムス

「私もスターシップがあるわ。」

オリマー

「い、一応私も……………社長の愛用ですが……………」

フォックス

「宇宙船ではないが、アーウィンという戦闘機ならあるが……………」

ファルコン、サムス、オリマー、フォックスが手を挙げながら発言する。

メタナイト

「そうか…………それとカービィ。」

カービィ

「ぽよ?」

メタナイトに呼ばれたカービィは慌てて近づく。

メタナイト

「前にププブランドで開催したエアライドマシンによるレースがあっただろ?そのレースで使用したエアライドマシンの中でドラゲーンというマシンのパーツを集めて来てくれないか?」

カービィ

「ぽ?ぽよぽよ!」

カービィは一度顔を傾げるが、その後跳びはねながらププブランドへと向かって走っていく。

ルカリオ

「メタナイト、何か策があるのか?」

メタナイト

「ああ、皆にも教えておこう……………」。

メタナイトは自分が考えた作戦を全員に説明した。

フォックス

「成る程、確かに良い考えだが……………」。

ファルコ

「でもそれじゃ、お前さんの戦艦が……………」

メタナイト

「また修理すれば問題ない……………それに、散々亜空軍に悪用されたこのハルバードに償いをさせてほしい。」

スネーク

「メタナイト……………」

メタナイトの重い言葉に全員頷く。

ファルコン

「分かった、早速準備しよう!」

サムス

「私もスターシップを用意してくるわ。」

オリマー

「わ、私も用意を……………」

ファルコン、サムス、オリマーの三人は一斉に駆け出す。

フォックス

「俺のアーウィンはちょっと訳あって墜落してしまっ……。」

ファルコ

「しょうがねえな、俺がアーウィンで出撃すればいいだろ？」

フォックスが申し訳なさそうに言うと、ファルコが呆れ気味になりながら駆け出す。

ゼルダ

「フォックスさん、私のせいで申し訳ありません。」

ゼルダがフォックスに向かって深く頭を下げる。

フォックス

「い、いや……もう済んだ事だから……。」

フォックスが慌てて弁解する。

メタナイト

「それでは各自、それぞれの宇宙船に待機するように……。」

ピカチュウ

「ピカッチュ！」

デイデー

「オツケーー!!」

メタナイト

「……………後は任せたぞ、カービィ。」

メタナイトは後ろを向くと小さな声で呟く。

一方、エインシャント島を飲み込んだ亜空間から巨大な大砲の先端らしき戦艦がゆっくり出てくる。

シュユツ。

大砲の先端から光が集まっていく。

ドオオオオツ！！

大砲から放たれた光が一直線に水平線までいくと……………。

ゴオオオツ！！

放たれた光から亜空間が段々広がっていき、海面を飲み込んでいく。

クツパ

「ガハハハハ！凄まじい威力だな。」

ガノンドロフ

「当然だ、何せ我が軍の最終兵器だからな。」

亜空砲戦艦の頂上でクツパとガノンドロフが先程の威力を感心しながら眺めていた。

ガノンドロフ

「ん！？あれは……。」

ガノンドロフはこちらに接近してくる戦艦ハルバードを発見する。

クッパ

「奴ら、のこのことやって来おったぞ。」

ガノンドロフ

「フッ、撃ち落としてくれるわ……………撃てーっ!!」

ガノンドロフが手を上げた瞬間、亜空砲戦艦が一斉に戦艦ハルバードに向かって発砲を始める。

ドドドドドッ!!

ハルバードは亜空砲戦艦の下へと潜り込もうとするが……………。

ドオオオッ!!

ボガアアッ!!

亜空砲戦艦の放たれた弾丸がハルバード全体を貫く。

クツパ

「やった！命中したぞ！！」

ガノンドロフ

「フフフ、たわいもない……………ムッ!?」

ハルバードが爆発する中からアーウィン、ファルコンフライヤー、スターシップ、ドルフィン初号機の四機が一斉に亜空砲戦艦に接近していく。

クツパ

「な、何だ！？あの戦艦から何か出てきたぞ！！」

クツパが焦ったようにガノンドロフに問い掛ける。

ガノンドロフ

「恐らくさっきの戦艦は罠だ……………えーい！一機残らず撃ち落とすてしまえー!!」

ガノンドロフが再び手を上げると、亜空砲戦艦は四機の宇宙船に向かって攻撃を開始する。

ドドドドドッ！！

四機の宇宙船は難無く亜空砲戦艦の攻撃を避けていく。

ガノンドロフ

「おのれ、的が増えて上手く狙いを定められん。」

クッパ

「何とかならないのか！？」

ガノンドロフ

「そういう貴様も何か考えろ！！」

クッパとガノンドロフが口論している最中に……………。

カービィ

「ぼよーっ！！」

カービィがドラグーンマシンに乗り、物凄いスピードで亜空砲戦艦に接近してくる。

クッパ

「お、おい！何か近づいて来るぞ。」

ガノンドロフ

「何っ！？」

クッパとガノンドロフが振り向いた瞬間……。

ドギユユツ！！

ドラグーンマシンが亜空砲戦艦を一気に貫く。

ボガアアツ！！

次の瞬間、亜空砲戦艦は次々と爆発していく。

ガノンドロフ

「チッ、一旦退くぞ！」

クッパ

「くっ、おのれ！」

ガノンドロフとクッパは悔しそうにしながら亜空間の中へと入っていく。

ギューユン！！

それに続いてカービィを乗せたドラグーンマシンや四機の宇宙船も一斉に亜空間の中へと入っていく。

第十七話 亜空砲戦艦撃破 (後書き)

さて、次からいよいよ亜空間へ突入です！こころご期待！！

第十八話　完全敗北

亜空間に飛び込んだマリオ、カービィ、リンク、ヨッシー、ピット、ドンキーコング、デイドーコング、ピーチ、ゼルダ、フォックス、ファルコ、サ姆斯、ピカチュウ、ファルコン、メタナイト、マルス、アイク、リュカ、ポケモントレーナー、アイスクライマー、ルカリオ、スネーク、オリマー、Mr.ゲーム&ウオッチ、ロボットは亜空間の入口らしき場所で立たずにいた。

マリオ

「此処が亜空間の中なのか……………」

カービィ

「ぼよ……………」

リンク

「何だか不思議な場所だ……………」

ヨッシー

「何て言うか……………空間が歪んでる。」

ピット

「冥府界よりも不気味だ……………」

ドンキー

「こんな所に来るのは初めてだぜ。」

ディディー

「オ、オイラ……………何か緊張してきた。」

フォックス

「ああ、流石の俺も緊張を隠せないよ。」

ファルコ

「おいおい、しっかりしろリーダー。」

ピーチ

「でも、こんな所にいたら不安にならない方が可笑しいわ。」

ゼルダ

「そうですね……………私もさっきから胸騒ぎが……………。」

ピカチュウ

「ピカ……………。」

サムス

「…………ピカチュウも不安なのね。」

ファルコン

「無理もない、何せ此処は敵の本拠地でもあるからな。」

メタナイト

「その通り、此処から先に何が起こるか見当もつかない。」

マルス

「まさに危険と隣り合わせって感じですね。」

アイク

「だが、どんな困難があろうと突っ走るのみだ。」

リユカ

「アイクさん、凄い自信だ…………。」

トレーナー

「リユカ、僕達もアイクさんを見習おう！」

ポポ

「ナナ、僕達も頑張ろう!!」

ナナ

「うん！私達アイスクライマーだもんね！！」

オリマー

「皆さん勇気あるなあ……………私もしっかりしなくては。」

スネーク

「……………どうやら俺の任務はまだ少し長引きそうだな。」

ルカリオ

「私も全力で敵を迎え撃とう！」

ロボット

「皆サン！コノ先二ますたーはんどガ待ち受ケイマスガ、皆サンガカラ合ワセレバ必ズ勝テマス！決シテ油断シナイデ下サイ！！」

全員

「おおーっ！！」

マリオ

「よーし！行くぞ！！」

マリオの掛け声でその場にいた全員が真っ直ぐに駆け出していく。

ピピピピッ！

その後からゲーム&ウォッチが効果音を鳴らしながら急いで付いていく。

クツパ

「くそ、奴らめ、覚えてろよ！」

ガノンドロフ

「……………」

クツパがブツブツと愚痴を言いながら歩き、その後からガノンドロフがクツパを睨むように黙って付いてくる。

クツパ

「この事をどうやってマスターハンドに伝えればいいのだ！」

クツパはその場でじだんだを踏む。

ガノンドロフ

「……………やはりアイツは邪魔だ。」

ガノンドロフはクツパに聞こえないように呟き、ダークキャノンを取り出す。

ドキュユン！！

ガノンドロフはクツパに狙いを定めて矢印の弾丸を放つ。

ゴトツ！

クツパがフィギュアになり、地面へと転がる。

ガノンドロフ

「フン、もうお前に用は無い！」

ガノンドロフはそう言いながら、転がってるクツパのフィギュアを軽く蹴り飛ばす。

ガノンドロフ

「マスターハンド様！おいで下さい！！」

ガノンドロフはそう叫びながら両腕を広げる。

？

「ガ、ガノン……………ドロフ……………」

すると、暗闇から白い巨大な右手が現れる。

ガノンドロフ

「マスターハンド様、申し上げにくいのですが……………」

ガノンドロフが自分の左手を胸につけながら頭を下げた時……………。

マスターハンド

「た……………助け……………て……………く……………れ。」

マスターハンドは弱々しい声でガノンドロフに告げる。

ガノンドロフ

「は？何を申して……………んっ！？」

ガノンドロフは頭を上げマスターハンドを見ると、マスターハンドの指に刺さってる金色に光る五本の鎖が目に入る。

ガノンドロフ

「あれは……………」

ガノンドロフは更に鎖の先の方を見ると、奥に半透明で巨大な人型の姿をした者を発見する。

ガノンドロフ

「そついう事が…………ハアアッ!!」

ガノンドロフはジャンプしてマスターハンドを飛び越し、人型の者に向かって一直線に襲い掛かる。

ガノンドロフ

「貴様を倒せば世界は俺の物だー!!」

ガノンドロフは人型の者に向かって拳を振りかざそうとした時………。

？

「愚か者め…………。」

人型の者がそう呟くと、周りにバリアのような囲いを覆う。

ドガアアッ!!

ガノンドロフ

「ぐおおおっ!!」

ガノンドロフはバリアに弾かれてしまう。

ドカツ!!

マスターハンド

「ぐわっ!!」

その勢いでガノンドロフはマスターハンドに当たり、ガノンドロフはフィギュアになって地面へと転がり、マスターハンドを繋いでいた鎖が一本ずつ外れ、そのまま地面へと叩き付けられる。

マスターハンド

「うう……… やつと奴から解放された。」

マスターハンドはそう呟きながら全体を起き上がらせる。

マスターハンド

「おのれ！今までよくも私を操ってくれたな!!」

マスターハンドは拳を握り締めながら人型の者に向かって突っ込む。

？

「無駄だ……………」

再び呟くと同時に、先程よりも全体的大きなバリアを囲む。

マスターハンド

「ぐわあああつー!!」

マスターハンドはそのまま弾き飛ばされ、再び地面へ叩き付けられる。

マスターハンド

「ぐうう……………おのれ……………」

マスターハンドは力尽きたかのように倒れ込む。

マリオ

「い、今の音は!?!」

マリオがマスターハンドまで駆け寄ると、次々と他のメンバーが駆け寄ってくる。

ピーチ

「あら？この大きな手は何かしら？」

ロボット

「コ、コノ巨大ナ手がますたーはんどデス！」

リユカ

「えっ！？この手のお化けが？」

ロボットの言葉に全員が驚愕する。

ピット

「でも、そのマスターハンドが倒れてるって事は……………」

ファルコ

「……………どうやら、あの半透明野郎が本当の黒幕のようだな。」

全員が人型の者に目を向ける。

マリオ

「お前は何物だ！？」

？

「我が名はタブー、この亜空間を支配する者だ。」

リンク

「タブー……………」

全員タブーと名乗る者に向かって戦闘体制へと移る。

タブー

「この世界のファイター達よ、此処まで来れた事を褒めてやろう……だが、これで終わりだ。」

そう言うと、タブーの背中から巨大な翼が現れる。

ヨッシー

「な、何をするつもりだろう？」

ファルコン

「分からないが、全員油断するなよ。」

アイク

「ああ、分かってる。」

全員一斉に駆け出そうとした時……………。

タブー

「くられ！OFF波動！！」

タブーは周りから巨大な波動を放つ。

マリオ

「ぐあっ！？」

ピカチュウ

「ピカッ！？」

タブーの放った波動が全員に命中する。

メタナイト

「ば、馬鹿な……………一瞬で……………」

サ姆斯

「しかも、まだ一撃を加えないで……………」

ルカリオ

「こ、これほどの力とは……………」

ポポ

「つ、強すぎる……………」

ゼルダ

「私達の……………完敗です……………」

カービィ

「ぽ……………よ……………」

カービィの言葉を最後に全員次々と体中から光を放ち、フィギュアとなって地面へ転がってしまう。

タブー

「たわいもない……………これで邪魔物がなくなった……………この世界が我が者になるのも時間の問題だ。」

タブーがそう呟くと、全体光に包まれている複数の巨大な球体がタブーを包むように覆い被さる。

その頃、亜空間に飲み込まれたデデデ城の内部の奥にルイージ、ネス、デデデのフィギュアが転がっていた。

パ
ア
ア
ッ。

次の瞬間、ネスの胸元とルイージの鼻に付いてるデデデ顔のブローチが光り始める。

ネス

「あ、あれ？……此処は何処？」

ルイージ

「僕どうしたんだろ？」

ルイージとネスが元の姿に戻り、辺りを見渡す。

ネス

「おじさんも気が付いたら此処にいたの？」

ルイージ

「え？う、うん……そういう君も？」

ネス

「うん、僕も気が付いたら此処へ……あれ！？」

ネスはルイージの鼻に付いてるデデデのブローチに気付く。

ルイージ

「な、何？」

ネス

「ちよつとごめん！」

スポッ！

ルイージ

「痛っ！！」

ネスはルイージの鼻に付いてるブローチを外す。

ネス

「このブローチ、いつの間にか僕の胸元に付いてるブローチと同じだ。」

ネスが手に持ったブローチを眺めてる佐中、倒れてるデデデのフィギュアに目をやる。

ネス

「この人、このブローチと同じ顔してる。」

ルイージ

「ねえ、起こして聞いてみる?」

ルイージの言葉にネスは頷く。

パアアアッ。

デデデ

「う、うん……。」

ネスがデデデのフィギュアのプレート部分に触れると、光を放った後にデデデは元の姿へと戻る。

ネス

「あ、あの……大丈夫ですか?」

デデデ

「ムムッ!?!」

ネスが恐る恐る声を掛けると、デデデは勢い良く起き上がる。

デデデ

「もしやお前達がわしを復活させたのかぞい？」

ルイージ

「えー？ま、まあそういう事になるね。」

デデデの質問にルイージが苦笑いを浮かべながら答える。

デデデ

「おー！お前達よくやったぞい！！」

ネス

「うわっ！？」

ルイージ

「おわっ！？」

デデデは嬉しそうにルイージとネスに抱き着く。

デデデ

「やはりお前達にブローチを与えて正解だったぞい！」

ネス

「えっ？どついう事ですか！？」

デデデの言葉にネスは耳を疑う。

デデデ

「あ！それより早く行くぞい！！」

デデデは何かを思い出したかのように、ハンマーを掲げながら言う。

ルイージ

「い、行くなって何処へ？」

デデデ

「決まってるぞい！世界を救いに行くぞい！！」

ルイージ

「せ、世界を？」

デデデの言葉にルイージは目を丸くする。

デデデ

「ほれ！お前達も早く行くぞい！！」

そう言うと、デデデは一足先に駆け出してしまふ。

ネス

「うーん……よく分からないけど、僕達も行ってみよう！」

ネスがデデデの後を追いかける。

ルイージ

「あ！待ってよー！！」

更にルイージもネスの後を追いかける。

第十九話　激突する二人の大王

デデデのブローチによって姿が戻ったルイージ、ネスはデデデと共に亜空間をさ迷っていた。

ルイージ

「何か不気味な所だね……………」

ネス

「此処は一体何処なんだろう？」

デデデ

「恐らく敵の本拠地に違いないぞい。」

ルイージ&ネス

「て、敵!？」

デデデの言葉にルイージとネスは耳を疑う。

ルイージ

「敵ってまさかまたクッパの仕業かな？」

ルイージは恐る恐る口を出す。

デデデ

「わしも流石に敵の正体までは分かんぞい。」

ネス

「敵……何か引つ掛かるなあ。」

ネスは頭を抱えながら歩く。

ルイージ

「ん？どうしたんだいネス？」

ネス

「え？えつとね、何か大事な事を忘れてる気がして……………」

ルイージ

「大事な事？」

ネス

「うん、でもそれが何なのか思い出せなくて……………」

デデデ

「ムッ！？向こうに何かあるぞい！」

デデデの突然の言葉にルイージとネスは辺りを見渡す。

ルイージ

「あれは……………フィギュアじゃない？」

ネス

「フィギュア……………あ！思い出した！！」

ネスの大声でルイージとデデデは驚く。

デデデ

「な、何ぞい！？急に大声を上げおって！」

ネス

「リユカ！リユカが悪いおじさんに……………」

ネスはフィギュアの方まで駆け出す。

ルイージ

「ど、どうしたのネス!?」

ルイージも慌ててネスの後を付いていく。

デデデ

「やれやれ、一体何をそんなに騒いでいるんだぞい？」

デデデは少し呆れてながら二人の後を付いていく。

ネス

「ハアハアッ……あれ?これはリュカのフィギュアじゃない。」

ネスが近付いて見つけたフィギュアはマリオのフィギュアだった。

ルイージ

「ま、待つてよネス。」

ルイージが息を切らしながら駆け寄ってくる。

ネス

「あ、ルイージさん!この人ルイージさんに似てない?」

ルイージ

「え？どれどれ……。」

ルイージはマリオのフィギュアを覗き込む。

ルイージ

「あーっ！兄さんじゃないか！！」

ルイージはマリオのフィギュアを見るなり大声を上げる。

ネス

「え？兄さん！？」

ルイージ

「うん、マリオは僕の双子の兄なんだ。」

デデデ

「おい！こっちにもフィギュアが沢山あるぞーい！！」

ルイージ&ネス

「ええっ！？」

ルイージとネスは遠くから叫ぶデデデの所まで慌てて駆け出す。

デデデ

「ほれ、あっちにもこっちにもあるぞい。」

二人が駆け寄ってくるとデデデは辺りに散らばってるフィギュアに指さす。

ルイージ

「これは一体……。」

ネス

「あ！あのフィギュアは……！！！」

ネスは転がってるリユカのフィギュアに近付く。

ネス

「やっぱりリユカだ！」

ネスはリユカのフィギュアを見て声を上げる。

ルイージ

「ねえネス、そのリユカって子は君の友達なのかい？」

ネス

「う、うん……でも出会ったのはついさっきなんだ。」

ルイージ

「え？どういう事？」

ネス

「実はね……。」

ネスは自分とリュカが出会った経緯をルイージに話した。

ルイージ

「……………成る程、そんな事があったんだ。」

ネス

「うん、あの変なおじさんに襲われた後は何も覚えてないんだ……………」

そう言った後、ネスは下へ俯いてしまう。

ルイージ

「うーん、話からすると君やリュカを襲い掛かった変なおじさんは多分ワリオだな……………」

ルイージは腕を組みながら呟く。

ネス

「あの变なおじさんの事を知ってるの？」

ネスは顔を上げてルイージに聞く。

ルイージ

「ま、まあ一応ね……。」

ルイージは曖昧に答える。

デデデ

「話の最中で悪いが、あれを見るぞい。」

いつの間にか近付いてきたデデデに言われて二人は振り向くと、階段からタブーを覆っている沢山の球体に目が入る。

ネス

「あれは何だろう？」

ルイージ

「なんか不思議だね。」

デデデ

「うゝむ…………ムツ？」

デデデは転がってるクッパのフィギュアを発見する。

デデデ

「どれどれ、この者に聞いてみるぞい。」

そう言うと、デデデはクッパのフィギュアに近付く。

ルイージ

「あーそいつはクッパっていう悪い奴で……………！！」

ルイージは慌ててデデデを止めようとするが……………。

パアアアッ。

ルイージの制止も虚しく、デデデはクッパのフィギュアのプレート部分に触れると光が放たれる。

クツパ

「……………ムムツ！？」

クツパは元の姿に戻り、意識を取り戻す。

デデデ

「あゝ、ちょっと聞きたい事があるぞい。」

クツパ

「聞きたい事だと？……………ガハハハハハ！！」

クツパはデデデの言葉を聞いて大笑いする。

デデデ

「な、何が可笑しいぞい！？」

クツパの大笑いにデデデは怒り出す。

クツパ

「フン！このクツパ大魔王様に質問するとは何とも無謀な奴だ！どうせ貴様もマリオ達と一緒にこの亜空間へ乗り込んできた仲間だろ

「!!」

デデデ

「なんの事ぞい？」

デデデは首を傾げる。

クツパ

「惚けても無駄だ！今すぐ此处で貴様を八つ裂きにしてくれるわ！
」

クツパは鋭い爪を突き付けて身構える。

デデデ

「……………仕方ない、この分からず屋に一泡吹かせてやるぞい!!」

デデデも愛用のハンマーを構える。

ルイージ

「デデデさん、クツパは強いよ!」

ネス

「僕達も加勢するよ！」

ルイージとネスはデデデに近付こうとするが……………。

デデデ

「いや！こんな奴、わし一人で十分ぞい！お前達は手出し無用ぞい！！！」

デデデの言葉で二人はその場で止まる。

ルイージ

「あんな事言ってるけど大丈夫かな？」

ネス

「…………もし危なくなったら僕達も出動しよう。」

ネスの言葉にルイージは頷く。

クッパ

「行くぞー！！」

クッパは鋭い爪をデデデに向かって振り下ろすが……………。

デデデ

「よっと！」

デデデは難無く避ける。

デデデ

「チッ、思ったより素早いな……ではクツパプレスだ！」

ゴオオオッ！！

クツパはデデデに向けて口から炎を吐き出す。

デデデ

「あちゃちゃちゃ！！」

デデデは間一髪避けるが、ガウンに燃え移って辺りを走り回る。

クツパ

「ガハハハハ！ざまーみろ！！」

デデデ

「おのれ、よくもやってくれたな。」

炎を消したデデデは馬鹿にしたクツパに腹を立てる。

クツパ

「次はこれだ！クツパドロップ！」

クツパはデデデの真上まで飛び上がる。

クツパ

「覚悟！！」

デデデ

「マ、マズイ……………」

ドシューーン！！

デデデ

「うぐっ！！」

デデデはクツパに踏み潰すされてしまう。

ルイージ

「あっ!!」

ネス

「デデデさん!!」

ルイージとネスは先程の光景に驚愕する。

デデデ

「う……………うう……………」

デデデはハンマーを杖にしてゆっくりと立ち上がる。

クッパ

「どうした? もうおしまいかな?」

デデデ

「ま、まだまだぞい……………こんなの……………カービィのストーン攻撃に比べたら……………たいした事無いぞい。」

クッパ

「フン、見えっ張りめ……………これで終わらせてくれるわ!!」

クツパは甲羅の中に手足を引っ込める。

クツパ

「スピニングシェル!!」

クツパは甲羅を高速回転させながらデデデに突っ込む。

ルイージ

「あ、危ない!!」

ルイージが叫んだ後、デデデは咄嗟にハンマーを構える。

デデデ

「今ぞい!!」

スコーーーン!!

クツパ

「ぐおおおっ!?!」

デデデはハンマーでクツパを打ち返す。

ネス

「ナ、ナイスショット……………」

ネスは口を半開きにしながら呟く。

クツパ

「お、おのれ……………これでは攻撃出来ん。」

クツパは普通の亀のようにひっくり返って起き上がれなくなってしまった。

デデデ

「さっきのお返しぞい！スーパーデデデジャンプ！！」

ドッシーーン！！

クツパ

「ぐふうっ！？」

デデデが高くジャンプした後、クツパの腹部目掛けて着地する。

ルイージ

「す、凄い……………」

ルイージも口を半開きしながら呟く。

クッパ

「ぐうう……………もう……………もう許さんぞー!!」

クッパは勢い良く立ち上がり、デデデ目掛けて突進してくる。

デデデ

「フフ、掛かったぞい。」

デデデは怪しく目を細める。

デデデ

「あがー……っ!!」

クッパ

「な、何っ!？」

デデデが大きな口を開けた瞬間、強力な吸い込みでクツパを飲み込む。

ルイージ

「ク、クツパを……。」

ネス

「飲み込んだじゃった……。」

ルイージとネスは更に啞然とする。

デデデ

「ぼわっ!!」

デデデはクツパを真上に吐き出す。

デデデ

「そろそろ仕上げぞい………ジェットハンマー!!」

ボガアアッ!!

クッパ

「ぐわあああつー!!」

デデデが機械仕掛けのジェット式ハンマーでクッパを吹き飛ばす。

デデデ

「……終わったぞい。」

ゴトツ。

デデデが背を向けて呟いた後、クッパのフィギュアが転がり落ちる。

ルイーシ

「クッパを……クッパを倒しちゃった。」

ネス

「あの人、とても強いね……。」

ルイーシとネスは今だに驚きを隠せない状態だった。

デデデ

「……………」

デデデは何も言わずにクッパのフィギュアに近づく。

パアアアッ。

デデデは再びクッパのフィギュアのプレート部分に触れ、クッパは元の姿へと戻る。

ネス

「えっ!？」

ルイージ

「な、何を……………!？」

ルイージとネスは慌ててデデデに駆け寄る。

クッパ

「ムッ!?!おのれ!さっきはよくも……………」

クッパは意識を取り戻すとすぐに、デデデに威嚇するが……………。

パチン！

クツパ

「痛っ！！」

デデデはクツパの鼻先に指を弾く。

クツパ

「貴様！何をする！？」

クツパは鼻を抑えながら怒鳴る。

デデデ

「あれを見るぞい！！」

デデデは倒れ込んでいるマスターハンドに指をさす。

クツパ

「マ、マスターハンド！？」

クツパは倒れ込んでいるマスターハンドを見て驚愕する。

デデデ

「あの大きな手はお前のボスではないのか？」

クッパ

「う、うう……………」

クッパはデデデの言葉を聞いて下へ俯いてしまふ。

デデデ

「取り合えず、他にフィギュアになってる連中にも聞いてみるぞい。」

ルイージ

「あ！そつだ、兄さん達を復活させないと……………」

ネス

「ぼ、僕も手伝うよ！」

ルイージとネスは辺りに散らばったフィギュアを集めに行く。

こうしてルイージとネスはフィギュアにされたマリオ、ピット、ドンキーコング、デイドーコング、フォックス、ファルコ、サムス、ピカチュウ、ファルコン、オリマー、リュカ、ポケモントレーナー、アイク、マルス、Mr.ゲーム&ウォッチを元の姿に戻した。

マリオ

「……………まさかルイージに助けられるとはな。」

ルイージ

「えへへ、ちょっとは見直した？」

頭を掻くマリオにルイージは笑顔でからかう。

リュカ

「あ、あの……ネス君……あの時、見捨てて……ごめんね。」

リュカが俯いたまま、途切れ途切れでネスに謝る。

ネス

「別にいいよ、それよりリュカが無事で良かったよ。」

リュカ

「ネ、ネス君……僕もネス君が無事で良かった……。」

ネスの優しい言葉にリュカは目に涙を浮かべる。

ネス

「……それより、僕の事はネス君じゃなくてネスって呼んでいいよ。」

リュカ

「え？う、うん……………ネ、ネス！」

リュカはネスの言葉に一旦口を濁らせるが、深く息を吸った後で大きな声でネスの名前を呼ぶ。

ヒモヘビ

「へえ、リュカが友達を呼び捨てにするなんて珍しいな。」

ヒモヘビがリュカの肩から顔を出して、リュカをからかう。

リュカ

「そ、そんな……………珍しいだなんて……………」

リュカはそんな事はないと言わんばかりにヒモヘビに弁解する。

ネス

「リュカったら、あんなに慌てて……………」

ネスはリュカとヒモヘビのやり取りを笑顔で眺める。

デデデ

「…………話を戻すが、お前達の話によると向こうの光に包まれている場所にタブーという本当の黒幕がいるのかぞい？」

フォックス

「ああ……………けど俺達はそいつの一撃で簡単にやられてしまったんだ。」

フォックスはそう言った後、下へ俯いてしまう。

サムス

「私達は手も足も出せなかったわ…………。」

オリマー

「あの波動が一番厄介ですね…………。」

オリマーの言葉で全員黙り込んでしまう。

アイク

「でも、このまま何もしないでいてもしょうがないだろ？俺達全員で奴に掛ければ勝てるんじゃないか？」

アイクの言葉を聞いて、デイディーが立ち上がる。

デイディー

「そ、そっだ！要するにあの攻撃を受けなきゃいいんだよね？」

デイディーの発言で全員顔を上げる。

ドンキー

「確かに、あの攻撃さえ何とかすれば勝ち目があるかも……………」。

マルス

「攻められる前に攻めろって訳ですね。」

ピット

「それに、此処まで来て今さら帰れないしね。」

トレーナー

「だったらみんなでもう一度攻めてみようよ！」

トレーナーの言葉で子供組が立ち上がる。

ファルコ

「その前に、大事な事を忘れてないか？」

リュカ

「え？大事な事って？」

ピカチュウ

「ピカピ？」

ファルコの言葉に子供組は首を傾げる。

ファルコン

「そうだな、まだメンバーが全員揃ってないな。」

ルイージ

「えっ！？兄さん達以外にまだいるの？」

ファルコンの言葉にルイージが耳を傾ける。

マリオ

「ああ、後数十人はいるな……………」

デデデ

「だったら早く残りのメンバーを捜すぞい！」

サムス

「そうね、余り時間がないわ！急ぎましようー！」

ピカチュウ

「ピカッチュー！！」

全員一斉に駆け出そうとした時……………。

マリオ

「クッパ、お前はどつするんだ？」

マリオが俯きながら座っているクッパにゆっくりと近付く。

クッパ

「うるさい！お前には関係ないだろー！」

クッパは突然怒鳴るようにマリオに言う。

マリオ

「お前らしくないな……………いつものお前なら騙された仕返しするの

に……………」

クッパはマリオの言葉を聞いて、一瞬ハツとする。

マリオ

「いつものクッパ大魔王は何処行っ たんだ！？ そんなんじゃ息子の
「Ｊ」が泣くぞー！」

クッパ

「……… ジュ、Ｊ」。

マリオの強い言葉にクッパは勢い良く立ち上がる。

クッパ

「フン！ お前などに言われなくとも、そのタブーとかいう奴にこの
クッパ大魔王様を騙した事を後悔させてくれるわ！！ ガハハハハハ
ハハハハハ……………」

クッパは高笑いしながら歩き出していく。

マリオ

「やれやれ、調子戻ったみたいだな。」

マリオは呆れながら別の方へ駆け出す。

第二十話 いざ大迷宮へ

亜空間のとある場所にカービィのフィギュアが転がっていた。

パアアアツ。

すると、カービィのフィギュアから突然光を放たれる。

カービィ

「……………ぽよ?」

カービィが元の姿へと戻る。

カービィ

「ぽ?……………ぺっ!」

カービィは口の中からデデデのブローチを吐き出す。

カービィ

「ぽよ?」

カービィはブローチを眺めながらブローチを拾った時の事を思い出す。

カービィ

「……………ぽよ？」

カービィが不思議そうに辺りを見渡すと、沢山のフィギュアが辺りに転がっていた。

カービィ

「ぽー！ぽよぽよっ！ー！」

カービィは慌ててフィギュアの所まで駆け出す。

カービィはフィギュアにされたピーチ、ゼルダ、リンク、ヨッシー、メタナイト、ルカリオ、アイスクライマー、スネーク、ロボット、ついでに偶然亜空間に引き込まれたワリオを元の姿に戻した。

ピーチ

「ありがとうカービィ、助かったわ。」

ゼルダ

「貴方には本当に助けられてばかりですね。」

カービィ

「ぽよ！」

カービィは笑顔で返答する。

メタナイト

「それより、これからどうすればいいのか……………」

ヨッシー

「あのタブーって奴の事？」

ヨッシーの言葉にメタナイトは頷く。

リンク

「もしまたあの攻撃を喰らったら……………」

ルカリオ

「また返り討ちにあうかもな。」

ナナ

「そんな……………」

しばらく撃沈が続く……………。

スネーク

「それなら、あの攻撃を受けなければいいのではないか？」

全員スネークの方を向く。

ロボット

「確力二、一番厄介ナノハアノ攻撃デスネ。」

ルカリオ

「だが、あの攻撃を受けずにすむ方法はあるのか？」

ルカリオの言葉に再び撃沈が続く。

リンク

「でも、奴を倒さなければ世界が大変な事になる……………やっぱり奴の所へ行こう！！」

リンクの言葉で全員顔を上げる。

ゼルダ

「……………リンクならそう言っていました。」

ピーチ

「フッフ、そういう所マリオにそっくりだね。」

ゼルダとピーチは笑みを浮かべる。

メタナイト

「だが、さっきルカリオが言ったように例の攻撃を……………」

カービィ

「ぽよ！ぽよぽよ！！」

カービィの突然大きな声でメタナイトは少し肩を揺らす。

メタナイト

「カ、カービィ！？」

カービィ

「ぽよぽよ？ぽよ！ぽよぽよぽよ！！」

ナナ

「……………ねえポポ、あの子何て言ってるの？」

ポポ

「……………分からない。」

ポポの返答にナナ溜め息を零す。

メタナイト

「『そんな事を言うなんてメタナイトらしくない』か……………そうだな、私とした事がすっかり弱気になってしまった。」

メタナイトはそう言いつと、ゆっくりと険を抜く。

ルカリオ

「やれやれ、どうなっても知らないぞ。」

ルカリオは溜め息を付きながらゆっくりと立ち上がる。

スネーク

「まあ、『当たって砕けろ』ってことわざがあるだろ?。」

ルカリオ

「ほう、ことわざを知っているのか?。」

スネーク

「ああ、メイ・リンということわざに詳しいオペレーターのお陰でな。」

スネークは苦笑いを浮かべながら答える。

ヨッシー

「あれ？そう言えばやけにメンバーが少くない？」

ヨッシーの発言に全員辺りを見回す。

ピーチ

「本当だ、マリオやドンキー達がいらないわ！」

ゼルダ

「何処が別の場所にいるのでしょうか？」

リンク

「急いでみんなを捜さなければ……………」。

ロボット

「デハ、手分ケシテ捜シマシヨウ！」

ロボットが言い終わると全員散り散りになって駆け出す。

ワリオ

「……………うゝん、此処は一体何処なんだ？それに俺様は今まで何を
してたんだっけ？」

ワリオは腕を組みながら考え込む。

ワリオ

「あ！思い出した！！確かファイター達をフィギュアにするんだっ
た！！」

ワリオは大声を上げて手を打ち付けながら思い出す。

ワリオ

「取り合えず、まずは後ろの連中から……………って、あれ？」

ワリオは怪しい笑みを浮かべながらゆっくりと後ろへ振り向くと、
後ろには誰もいなかった。

ワリオ

「誰もいねーじゃねーかー！！さっきまで沢山いたのに！！」

ワリオは頭を掻きむしりながらじだんだを踏む。

ワリオ

「何処だー！俺様から逃げられると思うなよーー！！」

ワリオはその場からダッシュで立ち去る。

カービィ

「ぽ、ぽよ!?!」

カービィは歩いてる途中でガノンドロフのフィギュアを発見する。

ドドドドドッ。

クッパ

「うお~~~~っ!」

クッパはダッシュで駆け寄ると、ガノンドロフのフィギュアを蹴り飛ばす。

クッパ

「おのれガノンドロフめ!よくも我輩をコケにしてくれたな~~~~!」

クッパはそう言いながらガノンドロフのフィギュアを踏み付けたり

投げ飛ばしたりした。

クツパ

「あゝ、スッキリしたのだゝ。」

クツパはガノンドロフのフィギュアをそこら辺に投げ捨てて、その場から立ち去っていく。

カービィ

「……………ぽよ？」

カービィはクツパを眺めながら首を傾げる。

デデデ

「ぬおゝ！カービィではないかゝゝ！！」

カービィ

「ぽよっ！？」

突然デデデがカービィに抱き着いてくる。

デデデ

「さあ、カービィと一緒にメンバーを探すぞい！」

カービィ

「ぽ、ぽよっっ？」

デデデはカービィの手を引っ張りながら歩き出す。

しばらくして全員揃つとそれぞれの思いを伝え合つ。

マリオ

「どうやらみんな同じ事を考えてるようだな。」

ピット

「そのようですね。」

ファルコ

「だったら早いところあの階段を上がって行こつぜ。」

スネーク

「よし、善は急げだ。」

全員階段に向かって歩き出すが……………。

リンク

「ん！？あれはもしかして……………」

リンクが何かを発見して足を止める。

ゼルダ

「どうかしましたかリンク？」

リンク

「ゼルダ姫、あれを……………」

ゼルダはリンクの指さす方を見る。

ゼルダ

「……………私も一緒にしましょう。」

そう言うと、ゼルダとリンクは別の方向へ歩き出す。

マリオ

「リンク？それにゼルダ姫も何処へ？」

階段を目指してたマリオが足を止めて質問する。

リンク

「いや、ちょっと……………先へ行つて下さい。」

ゼルダ

「すぐに行きますから……………」

マリオ

「そ、それじゃお先に……………」

マリオは改めて階段の方へ歩き出す。

メタナイト

「ん？陛下、いかがいたした？」

メタナイトが階段付近で足を止めたデデデに気が付いて声を掛ける。

デデデ

「……………まだルイージとネスが戻っていないから此処で待っておるんだぞい。」

メタナイト

「何と……………では皆を止めなくては。」

メタナイトは次々と階段を登っていく仲間を止めようとしたが………

デデデ

「いや、あの二人が来たらわしもすぐに行くからお前達は先へ行くがいいぞい。」

メタナイト

「陛下……………承知した。」

メタナイトはデデデの言葉を聞いて改めて階段を登り始める。

リンクとゼルダは転がってるガノンドロフのフィギュアの前にいた。

リンク

「ゼルダ姫。」

ゼルダ

「ええ、分かっています。」

パアアアッ。

ゼルダはガノンドロフのフィギュアのプレート部分に触れる。

ガノンドロフ

「うう………あ！貴様らは！！」

光が止むと同時にガノンドロフが頭を抑えながら起き上がるが、リンクとゼルダの姿を見るなり睨み付ける。

リンク

「今はお前と闘っている暇はない……………今の俺達の敵は奴だ。」

リンクはタブーを導いている階段に指さす。

ゼルダ

「そう、貴方も私達にとって倒すべき相手です……………でも、それ以上倒さなければならぬ者を私達は倒さなければなりません。」

そう言い残すと、リンクとゼルダは階段の方へと歩き出す。

ガノンドロフ

「今から倒さなければならぬ相手か……………確かにそうだ。」

ガノンドロフは悔しそうな表情で拳を握り締める。

ガノンドロフ

「……………いいだろう、俺にとっても奴は敵だ！俺も奴と闘うー！」

そう言うと、ガノンドロフも階段の方へと歩き出してリンクと横に並ぶ。

リンク

「まさかお前と一緒に闘う事になるとはな。」

リンクが横に並んできたガノンドロフに向かって苦笑いしながら言う。

ガノンドロフ

「フン！奴を倒したら次は貴様らの番だからな。」

ガノンドロフは不適な笑みを浮かべながらリンクに言う。

ゼルダ

「気のせいでしょうか……いつもの彼でない気がします。」

ゼルダが二人の後ろ姿を眺めながら呟く。

一方デデデは階段付近でルイージとネスを待っていた。

デデデ

「うゝむ、この先に一体何が待っているのか……………」。

デデデが階段を見上げながら呟く。

ワリオ

「おりゃっ—!!」

ボカッ!!

デデデ

「ぬおっ!?!」

突然ワリオがデデデに飛び蹴りを喰らわす。

ワリオ

「やっと獲物を見つけたぜ!ガッハハハハ!」

ワリオが高笑いを上げた時……………。

ルイージ

「デデデさ〜ん!!」

ネス

「大丈夫ですか!?!」

デデデ

「だ、大丈夫ぞい。」

慌てて駆け寄ったルイージとネスが倒れたデデデを起こす。

ワリオ

「あれ！？な、何でお前らが此処に……………？」

ワリオは口を大きく開けながら啞然とする。

ルイージ

「ワリオ！今はそんな事をしてる場合じゃないんだよ。」

ネス

「そう、世界の危機でもあるしね。」

デデデ

「お前もわしらと一緒に来るぞい！」

ワリオ

「は？一体何の話だ？」

ワリオは三人にこれまでの経緯を説明した。

ワリオ

「ふうん、でも俺様にゃあ関係ねーしな。」

ワリオは鼻をほじくりながら悪態をつく。

ワリオ

「それにこんな物騒な所早く脱出した方が……って、ありっ？」

ワリオが話しながら振り向くと、三人は階段を一段一段上がっていく。

ブロロッ!!

デデデ

「ぬおっ？」

ワリオがバイクに乗って階段を進んでいく。

ワリオ

「このまま逃げ出してもタダ働きになるしな!そのタブーって野郎にきっちり請求しとかないとな!」

そう言うと、ワリオはそのままバイクを一直線へ走らせる。

ネス

「……………何か無茶苦茶な理屈だね。」

ルイージ

「まあ、ワリオらしいというか……………」。

デデデ

「ともかく、わしらも急ぐぞい。」

残りの三人も階段を駆け上がる。

その頃、マリオ・ピット・リンク・ヨッシー・カービィはスタジアムにそっくりな場所にいた。

ピット

「此処って確かマリオさん達が闘った場所では……………」

マリオ

「ああ、まるで瓜二つだ。」

カービィ

「ぼよ……………」

マリオとカービィは辺りを見渡しながら啞然とする。

ドスーン！！

ヨッシー

「な、何の音！？」

？

「グオオオツ！！」

全員大きな音がした方を向くと、カービィが倒した筈のボスパックンと全身真っ黒のマリオ達がいた。

マリオ

「な、何故ボスパックンが！？」

リンク

「それに、あの俺達そっくりの奴らは一体……………」

ピット

「……………ともかく、奴らを倒さないと先へ進めないようだ。」

ピットは戦闘体制をとる。

ヨッシー

「僕達もやろう！」

カービィ

「ぽよぽよ！」

続いてヨッシーとカービィも身構える。

リンク

「やるしかないようだな。」

マリオ

「よし、みんな行くぞ！！！」

マリオの掛け声と共に全員ボスパックン達に向かって駆け出す。

ドンキー・ディディー・フォックス・ファルコはレックウザと闘った湖でレックウザとドンキー達の偽物と対立していた。

フォックス

「これは一体どういう事なんだ？」

ディディー

「何で前に倒したアイツやオイラ達の偽物があるんだよー！？」

フォックスとディディーは信じられないような顔で啞然とする。

ファルコ

「考えたってしょうがねえだろ。」

ドンキー

「そうそう、敵だったらやっつけるだけだ!」

ドンキーがそう言つと、レックウザ達に向かって走り出す。

ファルコ

「さて、俺達もやろつぜリーダー!」

フォックス

「よし、行こつ!」

デイデュー

「あ!待ってよ!」

ドンキーの後からフォックス達も一斉に駆け出す。

リュカ・トレーナーは荒廃した動物園でポーカーとリュカとトレーナーの偽物と対立していた。

リュカ

「ど、どっになってるの?」

トレーナー

「とにかく、闘おう！」

トレーナーは尽かさず三つのモンスターボールを取り出す。

トレーナー

「行け！ゼニガメ、フシギソウ、リザードン！」

パアアアッ。

ゼニガメ

「ゼニーー！」

フシギソウ

「フッシー！」

リザードン

「グウウウッ！」

トレーナーが一気にモンスターボールを三つ投げると、中からゼニガメ・フシギソウ・リザードンが出てくる。

リュカ

「……………よし、僕も闘う！もう前みたいに逃げたりしない！！」

リュカは戦闘体制に移る。

トレーナー

「よし！一斉に行くぞー！！」

トレーナーの掛け声でリュカと三匹のポケモンは駆け出す。

マルス・アイク・メタナイト・アイスクライマーは荒野でガレオムと自分達の偽物と対立していた。

マルス

「ガレオムだけならともかく、自分達のと闘う事になるとは……………」

「

マルスは頭を掻きながら軽い溜め息をつく。

アイク

「だが、相手は前に倒した奴と俺達の偽物だ。」

メタナイト

「そう！もはや我々の敵ではない！！」

三騎士はガレオム達に向かって走り出す。

ポポ

「ぼ、僕達も頑張ろうねナナ！」

ナナ

「う、うん!!」

その後からポポとナナも走り出す。

サマス・ピカチュウ・ファルコン・オリマー・ロボットは亜空軍の
研究施設の広い場所でリドリーと自分達の偽物と対立していた。

サマス

「これはちょっと骨が折れるわね。」

ピカチュウ

「ピカ……。」

ピカチュウはサマスの顔をチラッと見る。

ファルコン

「大丈夫、我々が力を合わせればどうって事はないさ。」

オリマー

「そ、そうですね。」

最初はオロオロしていたオリマーもファルコンの言葉で治まる。

ロボット

「皆サン！敵ガ来マスヨ！！」

ロボットの言う通り、リドリー達がこちらに向かってくる。

ファルコン

「それじゃ、手っ取り早く片付けよう！！」

ファルコンの掛け声と共に全員駆け出していく。

ピーチ・ゼルダ・スネーク・ルカリオ・Mr・ゲーム&ウオッチは戦艦ハルバードのブリッジでデュオンと自分達の偽物と対立していた。

スネーク

「こりゃまた厄介なのが一杯いるなあ。」

スネークは啞然としながら呟く。

ルカリオ

「フツ、全員私の波導の力を見せてやる！」

ルカリオは掌に青い波導を漂わせながら戦闘体制に移る。

ピーチ

「ゼルダ、私達も行ってみる？」

ゼルダ

「ええ、勿論……。」

パアアアッ。

ゼルダの体中に光が包まれると、シークへ姿を変える。

シーク

「僕達も闘おう！」

ピーチ

「フッフ、そう言うと思ったわ。」

シークの返答にピーチは笑みを浮かべる。

スネーク

「それでは任命開始といこうか！」

スネークの言葉で全員デュオン達の方へ走り出す。

ピッピッピッピッピッ。

その後からゲーム&ウォッチが慌てて走り出す。

クツパ・ワリオ・ガノンドロフは遺跡付近で自分達の偽物と対立していた。

クツパ

「ムムム、我輩の姿をしているとは生意気な……………」

ガノンドロフ

「虫ずが走るな。」

ワリオ

「よっしゃー！久しぶりに暴れるかーー！！」

ワリオは一足先に駆け出すが、途中で足を止めてクツパ達の方を向く。

ワリオ

「言っておくが、俺様の足を引っ張るなよ！」

クツパ&ガノンドロフ

（お前にだけは言われたくない！！）

クツパとガノンドロフはワリオオの言葉に腹を立てるが、抑えながら敵の方へ駆け出す。

ルイージ・ネス・デデデはデデデ城で自分達の偽物と対立していた。

ルイージ

「な、ななな何で僕達が……………」

ルイージはデデデの背中に隠れながら怯える。

デデデ

「ほれ！しっかりするぞい。」

デデデは片手でルイージを持ち上げて手前に置く。

ネス

「多分コイツらを倒せば先へ進めるんじゃないかな？」

デデデ

「それだったら素早くやるぞーい！！」

ルイージ

「うわゝ！もう離してよー！！」

ネスとルイージを掴んだままのデデデは敵に向かって走り出す。

亜空間の広い場所でタブーは宙に浮いていた。

タブー

（フッフ、果たして大迷宮の守護者達を蹴散らして此処まで来れるかな？……まあ、例え来たとしても我のOFF波動でまた返り討ちにしてくれる。）

タブーは不気味な笑みを浮かべながらファイター達が来るのを待っていた。

第二十一話 いざ最終決戦へ (前書き)

この話でソニック+αが登場します。

第二十一話 いざ最終決戦へ！

中央に大きな扉がある亜空間の広い場所に全身ボロボロのマリオ達が扉の前に立っていた。

リンク

「どうやら、この扉の奥にタブーが……………」

ヨッシー

「うう、緊張するなあ……………」

ヨッシーは胸に手を当てる。

マリオ

「ところで、全員揃ってるか？」

マリオの言葉に全員お互いいるかどうか確かめ合う。

デイドー

「こっちは全員いるよー！！」

メタナイト

「こちらにも全員いる。」

ファルコン

「どうやら全員いるみたいだな。」

マリオ

「そうか……みんな！この扉の向こうにタブーが待ち受けているから気を抜くなよ。」

クッパ

「フン！御託はいいからさっさと入るぞ！」

ピーチ

「もう、せつかちね。」

クッパの言葉にピーチは溜め息をつく。

マリオ

「それじゃ、開けるぞ……………」

ギィィッ。

マリオはゆつくりと巨大な扉を開ける。

ワリオ

「よーし！早速入るぞー！！」

ブロロッ！！

ワリオはバイクに跨がったまま扉の中へ入っていく。

フォックス

「お、おい！タブーがいるかもしれないんだから静かに入れよ！」

ルカリオ

「無謀だな……………」

マリオ

「と、とにかく中へ入ろう……………」

全員呆れながらどんどん扉の中へ入っていく。

ワリオ

「何だ、誰もいないじゃないか。」

バイクから降りたワリオは辺りを見回しながら言う。

メタナイト

「そんな筈は無い、きっと何処かへ潜んでいる筈だ……。」

タブー

「我の事を言っているのか？」

サムス

「し、しまった！上か！！」

全員慌てて上を見上げるとタブーがメンバーの頭上で浮いていた。

タブー

「我の創った大迷宮の守護者達を倒すとは中々やるな……だが、今度こそこれで終わりだ！」

そう言った後、タブーの背中に巨大な羽根が現れる。

アイク

「またあの技を繰り出す気か！？」

ファルコ

「おいおい、いきなりかよー！！」

ルイージ

「な、何？何が起こるの！？」

ルイージは訳が分からず慌てふためく。

デデデ

「まさか、皆が言ってたOFF波動を……………」

リンク

「くそっ！またこの技でやられるのか……………」

ルカリオ

「やはり何か手を打っておくべきだったか……………」

全員がOFF波動の驚異に恐れを為した時……………」

ギューイイインー！！

ファルコン

（な、何だ！？）

突然青い球体がメンバーを横切る。

パライイイツ!!

タブー

「な、何っ!?!」

青い球体はタブーの羽根に向かって突っ込み、羽根は硝子のように
砕け散っていく。

フォックス

(は、速い!!)

マルス

(何てスピードだ。)

全員謎の丸い球体のスピードに呆気にとられる。

ギューイイイン!!

パライイイツ!!

タブー

「ま、また………!!」

更にもう片方の羽根に突っ込んで、同じように羽根を砕け散っている。

ポポ&ナナ

「「凄………」」

スネーク

「あの青いボールみたいな物は何々だ？」

ピョーン。

？

「チツチツチツ、遅すぎだぜ。」

青い球体が高い足場でバウンドした後、赤い靴を履いた青いハリネズミがタブーに向かって指を左右に振る。

タブー

「き、貴様何者だ!？」

？

「俺か？俺はソニック、ソニック・ザ・ヘッジホッグだ。」

マリオ

「ソニック……………」

メンバー全員がソニックと名乗るハリネズミに注目する。

？

「おい、ソニック〜！待ってよ〜！！」

？

「プリプリ〜！」

？

「……………たく、一人で先走ってんじゃねえよ。」

マリオ達の後ろから緑色の服を着たリンクそっくりの猫目の少年と風船みたいに丸い体に大きな目が特徴の生き物とパイロットのような服装に左目に眼帯をした狼の男が駆け寄ってきた。

クッパ

「な、何だ何だ!？」

デデデ

「わしらの他にも此処に来てた者達がいたのかぞい？」

全員ソニックから駆け寄ってきた三人に注目すると……………。

ソニック

「いやゝ、悪い悪い。」

いつの間にかソニックが三人の前にいて、苦笑いしながら謝っていた。

ネス

「い、いつの間に……………」

全員ソニックの素早さに驚愕する。

ゼルダ

「あら?この子……………」

ゼルダは猫目の少年に近付く。

？

「え？な、何？」

猫目の少年はゼルダが近付いてきて慌てふためく。

リンク

「ゼルダ姫、どうかしましたか？」

リンクも思わずゼルダに近付きながら問い掛ける。

ゼルダ

「いえ、ただこの子……リンクに似ていると思います。」

リンク

「えっ！？そ、そうですか？」

ゼルダの言葉にリンクはキョトンとする。

？

「えっ！？ば、僕の名前も……リンクって言います。」

リンク

「ええっ!？」

ゼルダ

「まあ……………」

猫目の少年もリンクと名乗るとリンクは驚愕する。

スネーク

「これってつまり……………同姓同名ってやつか？」

スネークが思わず口に出す。

ガノンドロフ

（いや、この小僧にも奴と同じく勇気のトライフォースの力が微かに宿っている……………一体何者だ？）

ガノンドロフはリンク（トウーンリンク）を見つめたまま心の中で呟く。

ピカチュウ

「ピカ！ピカピカ！」

？

「プリ？プリプリ！」

ピカチュウは風船みたいな生き物に近付き、お互い嬉しそうに手を繋ぎ合う。

サムス

「……どうやらあの子、ピカチュウの友達のようなね。」

ピカチュウの光景を見てサムスは微笑む。

トレーナー

「あれは風船ポケモンのプリン………お月見山に生息しているポケモンだ。」

そう言いながらトレーナーはモンスターボールを構える。

ルカリオ

「おい、今はそんな事をしている場合じゃないだろ。」

トレーナー

「あーご、ごめん……………ついいつものクセで。」

ルカリオに制止され、トレーナーは慌ててモンスターボールをしま
う。

ピーチ

「あの子プリンって名前なのね、可愛いわね。」

クッパ

「フン！あんなボールみたいな奴全然可愛くないわ。」

ピーチの言葉を聞いてクッパは何故か怒り出す。

ルイージ

「クッパ、もしかして嫉妬してるのかい？」

クッパ

「ば、馬鹿な事を言っな！！」

ルイージの言葉を聞いてクッパは焦るように弁解する。

？

「おっ？誰かと思ったらフォックスとそのオマケじゃねえか。」

狼の男がフォックスとファルコを見つけるなり怪しい笑みを浮かべる。

ファルコ

「あゝ！？誰がオマケだあ？」

フォックス

「ウルフ………何故お前が此処にいるんだ？」

ウルフという男の言葉にファルコはキレるが、フォックスは冷静に問い掛ける。

ウルフ

「まあ、色々あってな………そういうお前らこそ何で此処にいるんだ？」

ファルコ

「俺達はタブーを倒しに此処まで来たんだ、お前みてえに遊んでた訳じゃねえんだよ。」

ウルフ

「ああ！？俺に喧嘩売ってんのか？このオマケ野郎。」

ファルコ

「んだとお！？」

ファルコとウルフはお互いの胸倉を掴み合う。

フォックス

「お、おい！喧嘩してる場合じゃないだろ！！」

フォックスが二人の間に入って制止した時……。

タブー

「き、貴様らああ！！いい加減にしろおおおおっ！！」

タブーの大きな怒声に一瞬静まり返る。

タブー

「よくも……よくも私の羽根を砕き、揚げ句の果てに我をコケにしてくれたな……許さん！許さんぞおおおおっ！！」

そう言うと、タブーは身体中から光を放つ。

ドンキー

「ま、眩しい！」

タブーの放つ光に全員目を覆う。

タブー

「こうなれば貴様ら全員始末してくれるわ!!！」

ソニック

「あゝあ、あのスケスケの全裸野郎かなりご立腹のようだ。」

ソニックが呆れたように呟く。

ピット

「それじゃ、僕達もいきますか！」

ヨッシー

「よし！絶対勝つぞ!!！」

カービィ

「ぼよぼよ!!」

全員タブーに向かって戦闘体制に移る。

「リンク

「よく分からないけど、アイツを倒せばいいんだよね?」

リンク

「ああ、奴を倒せば全て終わる。」

「リンクの不安げな言葉にリンクは強く答える。

プリン

「プリ!プリプリン。」

ピカチュウ

「ピカ、ピカッチュ!」

プリンが言った後にピカチュウが頷く。

リュカ

「……………プリンとピカチュウは何て言ったの?」

ルカリオ

「プリンは『私も一緒に闘うわ!』と言って、ピカチュウは『分かった、けど無理はしないでね!』と言ったんだ。」

ルカリオがピカチュウとプリンの言葉を通訳する。

リュカ

「そう……僕も頑張らなくっちゃ!」

リュカは改めて戦闘体制に入る。

ウルフ

「おい、お前との決着はまだ付いてねえからな。」

ファルコ

「分かってらあ、後で決着を付けてやるぜ。」

フォックス

（まったく、二人共喧嘩っ早いんだから……。）

フォックスは二人の言葉を聞いて溜め息をつく。

マリオ

「よし！みんな行くぞー！！！」

全員

「おおーっ！っ！！！」

こうして計36名はタワーに向かって駆け出していく。

第二十二話くそれぞれの世界へ（前編）く（前書き）

今回の話はマリオ達とは別に苦戦したあるキャラの外伝的なお話です……タブーとの最終決戦はもうしばらくお待ち下さい。

第二十二話　それぞれの世界へ（前編）

マスターハンド

「う……うう……。」

タブーへと導く階段の前に倒れていたマスターハンドがゆっくりと全体を起き上げる。

マスターハンド

「い……今の彼らの力では……奴には勝てない……ア……アレがなければ……。」

そう言うと、マスターハンドは手の平を広げる。

パッ！！

すると、マスターハンドの手の平から半透明の色に十字の模様が刻まれている一個の玉が現れる。

マスターハンド

「だ、駄目だ……今の私の力では何の力も持たないスマッシュボールしか造れない……。」

そう言うのと、広げていたマスターハンドの5本の指がぐったりと地面へと倒す。

マスターハンド

「このスマッシュボールに力を戻すには……………人々の思いや願う力が必要だ……………」

そう言った直後、マスターハンドはスマッシュボールに力を込め始める。

マスターハンド

「はあああぁっ!!」

パアアッ!!

力を込めて光が放たれた直後、スマッシュボールが微かに赤と青に薄く染めていた。

マスターハンド

「ハアハア……………やはり私の残りの力を注いでもまだ完全にならないか……………もつと沢山の人の願いや思いの力が必要だ……………」

パチン！

マスターハンドが指を鳴らすと、スマッシュボールは忽然と消えてしまふ。

マスターハンド

「頼む……誰がこのスマッシュボールに願いや思いを満たしてくれ。」

く天空界・エンジェランドく

パルテナ

「ピット……………今頃どうしているのでしょうか……………」

エンジェランドを収める女神パルテナは神殿のような建物の部屋の中でピットを心配していた。

？

「パルテナ様！失礼します！！」

突然頭部に翼を生やした男がパルテナのいる部屋に慌てて入る。

パルテナ

「貴方はピットが指揮している隊のイカロス隊員ですね？そんなに慌ててどうしたのですか？」

イカロス隊員

「は、はい！突然こんな物が私の前に現れたもので……………」

イカロス隊員はスマツシユボールをパルテナに見せる。

パルテナ

「これは……………」

パルテナがスマツシユボールを不思議そうに見ていると……………。

？

（誰か……………誰か答えてくれ……………。）

パルテナ

「！？だ、誰ですか？」

パルテナは突然聞こえた声に驚く。

イカロス隊員

「パ、パルテナ様？」

イカロス隊員は心配そうにパルテナに声を掛ける。

？

（私はこのスマッシュボールを送ったマスターハンドという者だ。）

パルテナ

「スマッシュボール？イカロス隊員が持っているこの丸い玉の事ですか？」

パルテナが辺りを見渡しながらマスターハンドに質問する。

マスターハンド

（そうだ、これから私の言う事を聞いてほしい。）

パルテナ

「……………分かりました、貴方の話を聞きましょう。」

パルテナは真剣な表情になり、マスターハンドの話を聞く。

マスターハンド

（今世界は大変な事になっている……………だが、彼らが世界を救おうと必死で闘っているのだ。）

パルテナ
「彼ら？」

マスターハンドの言葉にパルテナは耳を傾ける。

マスターハンド
(そう………それに、その中にピットもいる。)

パルテナ
「ピット！？ピットも闘っているのですか！？」

パルテナは声を上げながらマスターハンドに質問する。

マスターハンド
(ああ、ピットを含む36人のファイター達がタブーという悪と闘っている。)

パルテナ
「そうだったんですか………彼の帰りが遅いから何かあったのかと思っていたのですが………」

マスターハンドの言葉を聞いて、パルテナは悲しい表情を浮かべながら胸に手を重ねる。

マスターハンド

（だが、タブーの力は計り知れない……………このままでは全員負けてしまいかもしれない。）

パルテナ

「そ、そんな……………」

パルテナはマスターハンドの言葉を聞いて下へ俯いてしまう。

マスターハンド

（諦めるのはまだ早い！一つだけ奴に勝てる方法がある。）

パルテナ

「え！？そ、それは何ですか？」

パルテナは顔を上げて耳を傾けながらマスターハンドに質問する。

マスターハンド

（先程のスマッシュボールがそれぞれのファイター達の世界へ導いてくれる……………その様々な世界で沢山の人々の思いや願いを集めてほしい。）

パルテナ

「人々の思いや願い？」

パルテナはマスターハンドの

「思いや願い」という言葉に耳を疑う。

マスターハンド

（そう、スマッシュボールに沢山の思いや願いが満たされればファイター達に凄まじい力を与えられる事が出来る………そのためには君達の力が必要なのだ。）

パルテナ

「分かりました、ピットの為に………この世界の為に闘っている皆様の為に強力します。」

マスターハンド

（ありがとうございます………。）

そう言った直後、マスターハンドの言葉が聞こえなくなる。

イカロス隊員

「あ、あの～パルテナ様？さっきから誰と話を………？」

イカロス隊員が恐る恐るパルテナに質問する。

パルテナ

「イカロス隊員、貴方に緊急の任務を申し上げます！」

イカロス隊員

「えっ！？は、はい！何でしょうか？」

イカロス隊員はパルテナの言葉を聞いて、慌てて敬礼する。

パルテナ

「今貴方が持っているスマッシュボールに導かれて様々な世界へ行き、その世界の人々の思いや願いを集めてくるのです。」

イカロス隊員

「お、思いや願い……………ですか？」

パルテナの言葉にイカロス隊員は首を傾げる。

パルテナ

「あまり時間がありません！急いで行くのですー！」

イカロス隊員

「は、はい！行って参ります！！」

イカロス隊員は急いでパルテナのいる神殿から出ていく。

イカロス隊員

「……………それにしても、思いや願いを集めろってどうすればいいんだろ？」

イカロス隊員がスマッシュボールを持ちながら飛行していると………

ビヒュッ！！

イカロス隊員

「な、何だ！？ボールが勝手に……………」

突然スマッシュボールが何処かへ引つ張られるように飛んでいってしまう。

イカロス隊員

「おゝい！待ってくれ〜〜！！」

イカロス隊員は慌ててスマッシュボールの後を付ける。

くキノコ王国・キノコ城前く

？

「ハアゝツ、姫様はまだ帰って来んのう。」

キノコ城の前で白髭を生やしたキノコの老人が溜め息をついていた。

？

「大丈夫ですよキノじい、マリオさん達が一緒にいますから……………」。

「

キノじいと呼ばれる老人を後ろからキノコの少年が優しく声を掛ける。

キノじい

「キノピオよ、そうは言ってももの……………何か胸騒ぎがするんじゃないよ。」

キノじいはキノピオと呼ばれる少年の方を向いて再び溜め息をつく。

キノピオ

「全く、キノじいは相変わらず心配性なんだから……………」。

キノピオも軽く溜め息をついた時……………。

？

「おい！待ってくれ～～！！」

キノジイ

「ん！？何じゃ？」

二人は突然聞こえてきた大きな声の方を向くと……………。

イカロス隊員

「ハアハア……………や、やっと止まってくれた……………」

イカロス隊員がキノジイ達の前で止まったスマッシュボールの方まで息を切らしながらゆっくり近づく。

キノピオ

「キ、キノジイ……………アレは何でしょうか？」

キノジイ

「さ、さあ？」

キノピオとキノじいは首を傾げながらイカロス隊員を見つめる。

パアアアツ。

イカロス隊員

「うわっ!？」

キノじい

「こ、今度は何じゃ!？」

キノピオ

「ま、眩しい!！」

突然スマッシュボールから強力な光が放たれる。

キノピオ

「い、今の光は一体……あっ!？」

キノピオは目を覆った手をゆっくり退かしてスマッシュボールを見ると、スマッシュボールがマリオ達が必死でタブーと闘っている光景がテレビのように写っていた。

イカロス隊員

（こ、これは……。）

イカロス隊員は目を疑いながらスマッシュボールを見る。

キノピオ

「あっ！マリオさんやルイーダさん達がやられてる！！」

キノじい

「ピ、ピーチ姫にまでなんと惨い事を！！」

マリオやピーチ達がタブーの攻撃を受けてる光景を見た二人は驚愕する。

？

「あら？どうかしたの？」

すると突然、茶色の髪に黄色いドレスを着た女性と紫の帽子と服に黒いオーバーオールを着た手足がとても細長い髭の男と大きなピンク色のリボンを付けた恐竜みたいな生物が声を掛けてきた。

キノピオ

「あ、デイジー姫！それにワルイージさんにキャサリンさんも……」

ワルイージ

「こんな所で変な顔して何してやがんだ？」

キャサリン

「そうそう、もっと笑顔にならきゃ駄目よーん。」

キノじい

「そんな呑気な事を言っておる場合ではありませんぞー！」

キノじいの怒声に全員啞然とする。

デイジー

「……………一体何があったの？」

キノピオ

「と、取り合えずこれを見て下さい。」

キノピオに言われて、デイジー達はスマッシュボールを覗き込む。

デイジー

「！！マ、マリオ！それにピーチやルイーダまで……………」

キャサリン

「ちょっと、これってどうゆう事？」

キノピオ

「さあ、僕達も何が何だか……………」

キノピオはただ首を傾げるしかなかった。

ワルイーダ

「ガハハハハ、コイツらいい気味だ！この俺様を差し置いて冒険なんか出掛けるからだ。」

ワルイーダが高笑いを上げていると……………。

ボカツ！！

ワルイーダ

「いてっ！！」

突然キノじいが持っていた杖でワルイージの頭を叩く。

ワルイージ

「ジジイ！いきなり何しやがる！！」

キノじい

「マリオ殿や姫が大変な思いをしておるというのに何という事をおっしゃいますか！！」

キノピオ

「キノじい、少し落ち着いて……………」

キノピオは頭から煙を上げて怒っているキノじいを宥める。

デイジー

「それにしても、何でこんな事に……………」

？

「おい！お父さんは何処だー！！」

突然巨大な飛行船が上空に現れて、船からクッパを小柄にしたような亀やクリボーやノコノコ等の数十匹がキノピオ達の前へ飛び込んでくる。

キノじい

「お、お前達はクツパ軍団の……………」

キノピオ

「それにクツパの息子のクツパーも……………」

クツパー

「お前達！お父さんを見なかったか？数日前に出掛けたきり帰って来ないんだ！」

キャサリン

「貴方のパパなら此処にいるわ。」

クツパー

「ん？……………こ、これは!？」

クツパー・やノコノコ達はスマッシュボールに写ったクツパの姿を見て驚愕する。

クツパー

「そ、そんな……………お父さんがやられてるなんて信じられない。」

ワルイージ

（おいおい、クッパも手も足も出せないなんてどんだけ強いんだよ。）

デイジー

「このままでは全員やられてしまうわ。」

キノじい

「一体どうすれば……………」

イカロス隊員

「…………祈って下さい。」

キノピオ

「え？」

イカロス隊員の言葉に全員耳を傾ける。

イカロス隊員

「全力で祈って下さい……………そうすれば絶対彼らに届く筈です。」

キノピオ

「祈る……皆さん、マリオさん達の為に祈りましょう!!」

デイジー

「そうね、何もしないよりはマシよね!」

キャサリン

「そ・れ・に、何かロマンチックよね。」

キノじい

「よし、じいは全力で祈りますぞ!!」

ワルイージ

「アホくさ、俺はごめんだ……………」

ワルイージがその場から立ち去ろうとした時、クッパ軍団がワルイージを睨みつける。

ワルイージ

「……………と思ったが、気が変わったから祈ってやるか。」

クッパ Jr.

（調子の良い奴……………。）

キノじい

「そうじゃ！キノコタウンの住人達にも強力して貰おう！」

キノピオ

「それじゃ僕、早速みんなに声を掛けて来ます！」

キノピオはキノコタウンに向かって走り出す。

クツパ「」

「よし、城にいる残りのクツパ軍団も此処に集めて来るんだ！急げ～～！！」

パタパタ

「ハハッ！！」

数匹のパタパタがクツパ城に向かって飛んでいく。

イカロス隊員

（そうか、スマッシュボールは今闘っている者達をよく知る者達の所まで導いてくれたんだ……願いや想いを集めるってこういう事だったのか。）

数分後、キノコ城の前には数十人のキノピオやクッパ軍団が集まっていた。

キノじい

「皆の集！ 姫やマリオ殿達の為に心からお祈りするのじゃ！！」

クツパ」r・

「お前達もお父さんの為に全力で祈れ!!」

「おお~~~~っ!!」

掛け声と共に全員が手を合わせながら祈り始める。

パアアアツ。

すると、スマッシュボールから光が放たれる。

イカロス隊員

「な、何だ!？」

すぐに光が止むと、半透明だったスマッシュボールが薄い赤色に染まっていた。

イカロス隊員

（スマッシュボールに色が……皆さんの祈りが届いた証ということか。）

キノじい

「な、何が起こったんじゃ？」

周りにいた全員が騒ぎ始める。

イカロス隊員

「落ち着いて下さい！皆さんの祈りは確かに届きましたよ！！」

キノピオ

「本当ですか！？」

キノピオの言葉にイカロス隊員は頷く。

デイジー

「良かった…………。」

キャサリン

「私が心を込めて祈ったんだからちゃんとマリオ達に届けなさいよ。」

「

イカロス隊員

「はい！必ず届け……………わっ！？」

イカロス隊員は突然飛び出したスマッシュボールに引っ張られる。

ワルイージ

「お、おい！何処へ行くんだよ！？」

イカロス隊員

「自分でも分かりません！このボールが導いてくれるので……………」
それでは失礼します！！」

イカロス隊員はそのまま飛び去ってゆく。

キノピオ

「……………行っちゃいましたね。」

クッパ」」・

「アイツは一体何だったんだ？」

キノじい

「うむ……………ともかくわしらが出来る事はやったんじゃない。後はマリ
オ殿達を信じよう。」

キノじいの言葉に全員が頷く。

「ジャングルガーデン」

イカロス隊員は木々が多いジャングルの上空を浮上していた。

イカロス隊員

「次は何処へ連れていくんだ………おっと!？」

イカロス隊員は突然急降下するスマッシュボールに引っ張られてゆく。

イカロス隊員

「ふう、凄い力だ……それにしても、こんな所に人なんているの
だろうか？」

地面へ着地したイカロス隊員は周りに木や草しかないジャングルを
見渡す。

？

「お前誰だ？」

イカロス隊員

「えっ！？」

イカロス隊員は慌てて後ろを振り向くと、目の前には緑色のオウム
がいた。

イカロス隊員

「と、鳥が喋った！？」

？

「鳥じゃない！俺はオウムのスコークスだ！！それよりお前、クレ
ムリン軍の一味か？」

イカロス隊員

「え？な、何ですかそれは？」

イカロス隊員はスコークスと名乗るオウムの言葉に首を傾げる。

スコークス

「その様子だと違うようだな……………ところで、此処へ何しに来た？」

イカロス隊員

「あ、いや。此処ら辺に人はいないかなあと思って……………」

スコークス

「人はいないが、コングファミリーならいるぞ。」

イカロス隊員

「コングファミリー？……………ではその皆さんを呼んできてくれますか？」

スコークス

「分かった、ちょっと待ってろ……………ガァー！ガァー！お客さんだぞー！！！」

スコークスは大声で呼び掛ける。

イカロス隊員

（す、凄い声……………。）

イカロス隊員は両耳を塞ぎながら啞然とする。

？

「何じゃ？騒々しいのお……………」

？

「何かあったの？スコークス。」

草むらから白い髭を生やした年寄りの猿やポニーテールの髪型をした雌猿やバンダナやサングラスを付けた雄猿や金髪でプロポーション抜群の雌猿が続々と現れる。

イカロス隊員

（み、みんな猿……………。）

スコークス

「紹介しよう、この口煩い年寄りは克蘭キーコングでポニーテールの髪をした奴はデイクシーコングでサングラスをかけてる奴がフアンキーコングでスタイルのいい女がキャンディーコングだ。」

克蘭キー

「これ！口煩いは余計じゃろー！」

スコークスの言葉に克蘭キーは怒り出す。

デイクシー

「まあまあ、少し落ち着いて。」

デイクシーは克蘭キーを宥める。

キャンディー

「ところでスコークス、その人は誰？」

ファンキー

「ハイ！まさかクレムリン軍の一味じゃ……………」。

スコークス

「いや、恐らく違うと思うぞ。」

イカロス隊員

「わ、私はイカロスと申しまして……………皆さんに見てもらいたい物があります。」

ディクシー

「見せたい物？」

イカロス隊員の言葉にディクシーは首を傾げる。

克蘭キー

「一体何じゃ？勿体ぶらずにさっさと見せんかい！」

スコークス

「おいおい、そんなに急かせるなよ。」

イカロス隊員

「わ、分かりました。」

イカロス隊員は急いでスマッシュボールを取り出す。

ファンキー

「ホワッツ？その大きな玉は何だい？」

ファンキーがスマッシュボールを指さした時……………。

パアアアッ。

キャンディー

「キャッ！！」

突然スマッシュボールから光が放たれる。

スコークス

「い、いきなり何が………あっ！？」

スコークスは目を疑った。何故ならスマッシュボールに無残にやられていたドンキーとディディーが写っていたからだ。

キャンディー

「ド、ドンキー！！」

ディクシー

「ディディー！！」

キャンディーとディクシーは口を手に覆いながら驚愕する。

ファンキー

「あいつら、ボロボロじゃないか……………」

克蘭キー

「これは一体どういう事なんじゃ!？」

イカロス隊員

「私も詳しい事は分かりませんが、今分かっている事は貴方達のよく知る人が強大な敵と闘っているという事だけです。」

イカロス隊員の言葉にコングファミリーは息を呑む。

デイクシー

「私達は…………私達はただ待ってるしかないの?」

キャンディー

「デイクシー……………」

俯くデイクシーにキャンディーは優しく肩に手を置く。

イカロス隊員

「祈って下さい。このボールに心を込めて祈って下さい。」

ファンキー
「祈る？」

キャンディー

「……………そうね、今私達に出来る事はドンキーやディディーが負けないように祈る事よね。」

キャンディーの言葉を聞いたディクシーは顔を上げる。

ディクシー

「私も祈る！ドンキーとディディーのピンチに落ち込んでられないもん。」

ファンキー

「ヘイ！それじゃ、このジャングルの連中も声を掛けてやろうぜ！」

克蘭キー

「スコークス！急いでこのジャングルの住人を此処へかき集めて来い！！！」

スコークス

「OK！そんじゃ行ってくるわ！！！」

スコークスは急いで飛び立ってしまう。

イカロス隊員

（よし、急いで皆さんの願いや想いを集めないと……。）。
（

イカロス隊員は内心焦りながら黙り込む。

トアル村

イカロス隊員はジャングルを後にして小さな村の上空を飛んでいた。

イカロス隊員

（スマツシュボールによると次はこの村でいい筈だけど……………。）

イカロス隊員がゆつくりと村の牧場らしき場所に着地した時……………。

？

「おい！お前何者だ！！」

イカロス隊員

「えっ！？」

イカロス隊員が声がした方を向くと、三人の少年と一人の少女が立っていた。

？

「トアル村へ何しに来た！？怪しいモンスターめ！！」

木刀を持った少年がイカロス隊員に向かって木刀を掲げながら言う。

イカロス隊員

「ま、待つて……………私はモンスターじゃ……………」

？

「……………どう見てもモンスターだろ。」

木刀を持った少年の隣にいる小さな少年が呟く。

イカロス隊員

「いや、だから私は決して……………」

？

「嘘おっしやい！また私達を誘拐しに来たんでしょ！？」

小さな少年の隣にいる少女が睨みながら言う。

イカロス隊員

「ゆ、誘拐つて……………」

？

「タロ、マロ、それにベスも少し落ち着こうよ……………それにこの人前に僕達を誘拐したモンスターと全然違うし…………。」

少し気弱そうな金髪の少年が他の少年や少女を宥める。

タロ

「何言っただよコリン！コイツはきつと奴らの仲間が決まってる！！！」

ベス

「タロ！やっつけちゃって！！！」

マロ

「やっちなえ…………。」

タロは持っていた木刀をイカロス隊員に向かって振り下ろそうとした時…………。

？

「みんな、何騒いでいるの？」

コリン達の後ろから一頭の馬を引き連れた少女がいた。

コリン

「あ、イリア姉ちゃんにエポナ……………」。

ベス

「気をつけて！またモンスターが私達を誘拐しに来たの！！」

イリア

「え、モンスター？」

イリアはベスの言葉を聞いて首を傾げながらイカロス隊員を見つめる。

イカロス隊員

「ち、違いますってば！これを皆さんに見せたくて……………」。

パアアアツ。

ベス

「きゃっ！？」

タロ

「うわっ、何だ!？」

マロ

「ま、眩しい……………」

イカロス隊員がスマッシュボールを取り出した瞬間に強力な光が放たれる。

コリン

「う、うゝん……………あ!これは!！」

イリア

「リンク!！」

コリン達はスマッシュボールに写ったリンクの姿に目を疑った。

ベス

「こ、これってどういう事!？」

イカロス隊員

「落ちて置いて下さい!ちゃんと説明しますから……………」

イカロス隊員はイリア達に説明した。

コリン

「そんな……………リンクが今そんなに大変な事に……………」

イリア

「リンク……………」

全員俯いたまま重苦しい空気となる。

イカロス隊員

「皆さん！リンクさんの為にも祈って下さい！！」

ベス

「祈る？」

イカロス隊員

「そうです！この玉に沢山の想いを込めてそれをリンクさん達の変えるのです。」

マロ

「想いを力に変える……………」

タロ

「……………何かカッコイイな。」

イリア

「それなら、村の人全員にもこの事を伝えなきゃ……………ね？エポナ。」

エポナ

「ヒイイイン!!」

エポナは嬉しそうに前足を上げながら鳴く。

コリン

「ぼ、僕お父さん達呼んでくる!」

タロ

「俺様も行くぜ!」

子供達は一斉に村の方向へ走り出す。

イリア

（リンク、私達の想いが必ず届きますように……………。）

イリアはその場でただ一人祈りを込めていた。

く
プ
プ
プ
ラ
ン
ド
く

？

「本当なのか？ワドルドウ隊長。」

ハムスターの姿をした生物が大きな一つ目から大粒の涙を流すワドルドウと後ろで宥める沢山のワドルディに聞いたです。

ワドルドウ

「は、はい……我々だけおめおめ逃げていきました……。」

？

「それにしても、大王の城が奇襲されるとは……。」

フクロウの姿をした鳥が唸りながら考え込む。

？

「日頃の行いが悪いからじゃないの？」

小さな池から顔を出してるマンボウの姿をした魚がゆったりとした口調で話す。

？

「それは一利あるな。」

？

「あの大王なら人から恨みを買っても不思議ではない。」

？

「ちょっとリック、クー、カインったら……そんな言い方したら

可哀相だよ。」

ベレー帽を被った少女が高笑いするリック（ハムスター）・クー（フクロウ）・カイン（マンボウ）に注意する。

ワドルドウ

「ううっ……………アドレーヌ殿は何とも優しい……………」

ワドルドウは涙を貯めながらアドレーヌと呼ばれた少女を見つめる。

リック

「や、やだな〜！冗談だよ冗談。」

リックが苦笑いしながら弁解しようとした時……………。

？

「あの〜、すいませ〜ん！！」

クー

「ん？」

クーが声がした方へ振り向くと、ゆっくりと上空から近づいてくる

イカロス隊員が目に入った。

カイン

「何かがこっちに来るよ。」

アドレーヌ

「本当だ………あ！着地した。」

イカロス隊員はリック達の近くへゆっくりと着地する。

イカロス隊員

「突然現れてすいません。実はこれには訳があって………。」

クー

「そ、そんな事よりお主は何物なんだ？」

イカロス隊員

「詳しい事は後で………これを見て下さい。」

イカロス隊員はスマッシュボールを取り出す。

パアアアッ。

すると突然スマッシュボールから光が放たれる。

リック

「な、何だ!？」

クー

「眩しくて何も見えない……………」

しばらくすると段々光が止んでいき、スマッシュボールに必死で闘っているカービー達が写り出す。

カイン

「あれ?これってもしかして……………」

アドレーヌ

「カーくん!それにメタナイトさんにデデの旦那も……………」

ワドルドゥ

「へ、陛下!！」

全員目の当たりにした映像に驚愕した。

イカロス隊員

「やはりこの中に貴方達の友達がいるようですね。」

リック

「おい！こりやどついう事なんだよ！？」

イカロス隊員

「お、落ち着いて下さいよ！きちんと説明しますから……………」

イカロス隊員はリック達に説明した。

クー

「そうか…………カービイ達はそんなとんでもない奴と闘ってるのか。」

「

イカロス隊員

「そうなんです…………それで私が今闘っている皆様のお仲間から『負けなさい！』という想いを沢山集めているのです。」

カイン

「…………何かそれはそれで大変だね。」

アドレーヌ

「話は分かったわ、私達もカーくん達の為に祈りましょう！」

リック

「でも、どうせだったらププブランドの住人全員集めてからの方がよくないか？」

ワドルドウ

「それなら我々が……皆の者！陛下達の為に直ちにププブランドの住人を全て此処へ集めるのだ！！」

ワドルドウの掛け声と共にワドルディ達は辺り一面に散らばる。

クー

「ワドルドウ隊長、張り切ってるな……………」

カイン

「あの勢いならすぐに集まりそうだね。」

アドレーヌ

「そうだね……………」

イカロス隊員

（良かった、上手く事が運んで……。）

イカロス隊員はホッと胸を撫で下ろす。

「惑星コーネリア」

町の上空で二機のアーウィンが飛行していた。

「？」

「スリッピー、クリスタル、フォックスとファルコは見つかったか？」

アーウィンの操縦席に搭載している画面から写った兎ヘッピーが操縦している蛙スリッピーと雌狐クリスタルに聞く。

クリスタル

「いいえペッピー、二人は何処にもいないわ。」

スリッピー

「可笑しいな、何処へ行っちゃったんだろ？」

「？」

「タ、大変デスー！」

ペッピー

「ん？どうしたナウス！？」

ペッピーの隣にいたロボット（ナウス64）が突然声を上げる。

ナウス

「二人ノあーういんニ接近シテクルニ機ノ戦闘機ヲ確認シマシタ。」

ペッピー

「な、何じゃと！？聞いたか二人共！気をつけるんじゃ！！」

クリスタル

「了解！」

スリッピー

「な、何が来るんだろう……………」

スリッピーが震える中、アーウィンそっくりの戦闘機がどんどん接近してくる。

クリスタル

「あれ？あの戦闘機は……………」

？

「これはこれはクリスタル、君に会えるなんて光栄だな。」

クリスタル

「その声はパンサーね。」

？

「フツ、誰かと思ったらスターフォックスか。」

スリッピー

「そしてこの声はレオンだ！何でスターウルフが！？」

そう、アーウィンそっくりの戦闘機ウルフェンに乗っているのはウルフ率いる
スターウルフのメンバーのレオン・ポワルスキーとパンサー・カル
ロツソであった。

レオン

「生憎だが、今はお前達と遊んでいる暇はない。」

パンサー

「そうそう、先にウルフを捜すのが先決だ。」

スリッピー

「え？ウルフがどうかしたの？」

レオン

「お前達には関係ない！」

クリスタル

「……ん？また何かこっちへ接近してくるわ。」

パンサー

「何っ？」

クリスタルの言葉を聞いた全員が探知レーダーで確認する。

スリッピー

「ほ、本当だ………今度はなんだろう？」

スリッピーが再び震えていると、スマッシュボールを持ったイカロス隊員がどんどん接近してくる。

スリッピー

「な、何だアレは？」

パンサー

「少なくとも鳥ではなさそうだ。」

レオン

「フッフ、粉々にしてくれるわ。」

レオンとパンサーのウルフェンがイカロス隊員に向けてビームを放とうとするが……。

イカロス隊員

「ちょ、ちょっと待って下さい！私は敵ではありません！！」

イカロス隊員は慌てて弁解しようとした時……。

パアアアッ。

スマッシュボールから強力な光が放たれる。

クリスタル

「な、何！？」

スリッピー

「眩しいよ～～!!」

しばらくして光は静かに止んでいく。

パンサー

「ん？玉に何か写ってるぞ。」

レオン

「こ、これは!?!」

スマッシュボールにはボロボロ姿のフォックス・ファルコ・ウルフが写っていた。

クリスタル

「フォックス！それにファルコも……………」

スリッピー

「うわゝ、二人共ボロボロだよ。」

パンサー

「ま、まさかウルフまで……………」

レオン

「あのウルフがコテンパンにされるとは……。」「

全員信じられないような目で見ていた。

イカロス隊員

「この方達を救うには貴方達の力が必要なんです！ 強力して下さい
！！」

クリスタル

「……………分かったわ！ 貴方を信用するわ。」「

スリッピー

「ペッピー、今の聞こえた？」「

ペッピー

「勿論じゃ！ たった今コーネリア防衛軍に応援を頼んどいたぞ。」「

レオン

「フツ、余計な物呼びおって……………」

パンサー

「まあ今回はウルフの為にも仕方ないだろう。」「

イカロス隊員

(……………よく分からないけど人が集まってくれらならありがたい。)

「ギルド基地前」

しばらくしてイカロス隊員は再びスマッシュボールに導かれるままに飛行していた。

イカロス隊員

（今度は一体何処へ……………ん？）

スマッシュボールは小さなテントの前までイカロス隊員を引っ張る。

イカロス隊員

（この中にいるのか？）

イカロス隊員がテントの前にある網に足を着いた時……………。

？

「ポケモン発見！ポケモン発見！誰の足跡？誰の足跡？」

イカロス隊員

「うわっ！？じ、地面から声が……………」

イカロス隊員は突然聞こえた声に驚いて、その場から飛び上がる。

？

「……………」。

？

「おい、どうしたディグダ！誰の足跡だ？」

イカロス隊員

（べ、別の声から……………」。

イカロス隊員は地面の網に耳を当てる。

ディグダ

「……………」分からない。」

？

「おい！分からないってどういう事だ！？」

ディグダ

「だって、こんな足跡のポケモンなんて見た事ないもん。」

ディグダと呼ばれた声が弱々しく答えた後でしばらく静寂が流れる。

イカロス隊員

（急に静かになった……………。）

バツ！！

イカロス隊員

（こ、今度は何だ！？）

テントの扉が開かれ、中から見たことない生物ポケモンが次々と現れる。

？

「うゝむ、確かに見たことないポケモンだな。」

真ん中の音符のような形の頭のポケモン（ペラップ）が首を傾げながらイカロス隊員を見つめる。

？

「……………ってゆうか、コイツはポケモンなのか？」

？

「ポケモンには見えませんわ。」

真ん中から右隣りにいるスピーカーのような耳をしたポケモン（ドゴーム）とひまわりの姿をしたポケモン（キマワリ）がヒソヒソと話す。

ディグダ

「ね？ 僕の言った通りでしょ？」

？

「ああ、確かに……。」

地面から顔を出すモグラのようなポケモンのディグダが隣の三つのモグラの頭を持つポケモン（ダグトリオ）が耳打ちしながら話す。

？

「怪しいでゲスね。」

？

「ハイハイ！ 引っ捕らえようぜ。」

？

「グヘヘ、そうしよう……。」

真ん中から左隣りにいるビーバーのようなポケモン（ビツパ）とザリガニのようなポケモン（ヘイガニ）と二足歩行の蛙のようなポケモン（グレッグル）がイカロス隊員に近づく。

？

「まあまあ皆さん、少し落ち着いて下さい。」

風鈴の姿をしたポケモン（チリーン）がビツパとヘイガニを制止する。

？

「みんな、外で何やってるの？」

突然テントの中から耳が長いピンク色の丸っこい体型のポケモン（プクリン）が現れる。

ペラッ

「親方様！実は見知らぬポケモンが……………」

プクリン

「ん？」

プクリンは大きくてつぶらな瞳でイカロス隊員を見つめる。

イカロス隊員

「と、取り合えずこれをご覧下さい。」

イカロス隊員はスマッシュボールを差し出す。

パアアアツ。

プクリン

「わっ！眩しいー！」

ペラッパ

「フラッシュ攻撃か！？」

強い光はしばらくすると静かに止んでいく。

キマワリ

「あれ？何か写ってますわ。」

プクリン達はスマッシュボールに写っているピカチュウ・プリン・

ルカリオ・トレーナーのポケモン達に注目する。

ビツパ

「ありゃー、あのポケモン達スタボロにやられてるでゲスね。」

ペラップ

「おや？確かこのピカチュウは最近我がギルドへ入った……………」

ドゴーム

「ああ、間違いねえ！あのピカチュウだ！！」

ヘイガニ

「ヘイヘーイ！このままじゃヤバイぜ。」

チリーン

「何とかしなきゃ……………」

イカロス隊員

「そこで皆さんにお願いが……………」

ダグトリオ

「お願い？」

イカロス隊員

「出来るだけ沢山の人……………じゃなくてポケモンを集めて下さい。」

ディグダ

「沢山集めればいいの？」

ブクリン

「よーし……………みんな！急いでトレジャータウンにいるポケモン達を此処へ集めてきて！ー！」

ペラップ

「は、はい！ー！」

ドゴーム

「うおおお！片っ端から呼び集めるぜー！ー！ー！」

キマワリ

「何だか燃えてきましたわ！ー！」

ビッパ

「頑張るでゲス！ー！」

ヘイガニ

「ヘイヘーイ!!」

チリーン

「気合い入れて行きましょう!」

グレッグル

「グヘヘ……………」

ダグトリオ

「行くぞ息子よ!」

ディグダ

「うん!!」

こうしてプクリン以外のポケモン達はその場から走り出していった。

イカロス隊員

（こうしている間にもピット隊長達は厳しい闘いを……………急いでこのボールに沢山の『想い』を集めなければ……………。）

イカロス隊員の旅はまだまだ続く……………。

第二十三話くそれぞれの世界へ（後編）く（前書き）

前編に続いて今回もイカロス隊員が他の（ゲームの）世界へ飛び回りますが……正直グダグダかもしれませんが……ご注意を……。

第二十三話　それぞれの世界へ（後編）

～ミューンシティ・レース場～

ゴオオオツ。

亜空間にどんどん飲み込まれていく中、巨大なレース場を多くの出場者達が遠くから眺めている。

？

「これではレースは無理だな……………」

黄色いパイロット服を着た男性ドクター・スチュワートが呟く。

？

「そうね……………それにしてもファルコンはどうしてるかしら？」

白とピンク色が特徴の女性ジョーイ・サマーがスチュワートの隣で心配そうにしていた。

スチュワート

「そう言えば、あれから姿を見まないな……。」

？

「おい！上に何かいるぞ！！」

亀のような姿の男（ヒコ）が大声で叫ぶ。

ジヨディ

「ん？あれは……。」

その場にいた全員が一斉に見上げると、スマッシュボールを掲げたイカロス隊員がこちらへゆっくりと着地しようと浮遊していた。

ピコ

「あんな奴、撃ち落としてくれる！」

ピコはイカロス隊員に向かって銃を構えるが……。

イカロス隊員

「ちょ、ちよつと待って下さい！撃たないで下さい！！」

イカロス隊員が両手をブンブン振り回した時、スマッシュボールが

ゆっくりとイカロス隊員が離れていき……………。

パアアアッ。

ピコ

「うわっ！？眩しい！！」

スマッシュボールの放たれた強力な光によって、辺り一面明るくなる。

スチュワート

「……………ん？何か写ってるぞ。」

ジョディ

「あれは……………ファルコンじゃない？」

そう、スマッシュボールにはタブーと必死に闘っているキャプテン・ファルコンが写っていた。

？

「間違いない！キャプテン・ファルコンだ！！」

『激』と書かれたシャツを着ている男がサムライ・ゴロー大声を上げる。

スチュワート

「これは一体どういう事なんだい？」

イカロス隊員

「見ての通り、皆さんの知り合いの方が強大な敵と闘っています！
奴に勝つには皆さんの力が必要です！！」

ジョディ

「私達の……どうすればいいの？」

イカロス隊員

「この方が負けないように祈って下さい！皆さんの祈りが今闘っている方々の力となります！！」

スチュワート

「祈る……今の僕達にはそれしか出来ないのか。」

スチュワートは下へ俯いたまま呟く。

ジョディ

「仕方ないわ、彼を信じましょ……………」

ジヨディはゆつくりと手を合わせながら祈り始める。

ゴロー

「ファルコン！お前とはレースで決着を付けたい！だから絶対負けるんじゃないぞー！！」

ピコ

「それに、お前に勝ってもらわないとレースも開始出来ないからな。」

スチュワート

（頼むぞ、ファルコン……………。）

数十人いる出場者達は一斉に祈り始める。

イカロス隊員

（スマッシュボールが最初の頃より色が濃くなってる……………あと少しだ。）

「イーグルランド・オネット」

？

「ネス、遅いね……。」

金髪の女の子が家の壁に寄り掛かりながら呟く。

？

「一体何処行つたんだろ……。」

眼鏡を掛けた少年^{ジェフ}がしゃがみながら呟く。

？

「まさか、ネスの身に何かあったのでは……。」

白い道着に弁髪^{プー}の少年が腕を組みながら呟く。

ポーラ

「そ、そんな……。」

ジェフ

「プー、縁起でもない事言つなよ。」

プー

「す、すまん……。」

三人がネスについて話していた時……。

？

「すいませ〜ん……。」

三人

「えっ？」

ポーラ達が声がした方を向くと、イカロス隊員が立っていた。

ポーラ

「あ、あの……貴方は？」

イカロス隊員

「その前にこれをご覧下さい。」

イカロス隊員は既に映像が写し出されているスマッシュボールを差し出す。

ジェフ

「ん？……あ！ネスだ！！」

プー

「しかも、ボロボロじゃないか……。」

映像を見た三人はそれ以上何も言えなかった。

イカロス隊員

「そこで、皆さんにお願いが……。」「

イカロス隊員はポーラ達に訳を話した。

ポーラ

「……………分かったわ、私達も強力する。」「

プー

「でも、どうせなら町中の人達にも呼びかけよう!」「

ジェフ

「よし!早速始めよう。」「

そう言うと、三人は輪になってお互い手を繋ぎ合う。

イカロス隊員

「あの……………それは何ですか?」「

イカロス隊員は首を傾げたまま尋ねる。

ポーラ

「私達のPSIで今まで出会った人達に語りかけているの。」「

ジェフ

「僕達だけじゃ力不足だしね。」

プー

「だから、もっと沢山の人々の力が必要なんだ。」

イカロス隊員

「成程………それでは宜しく願いします。」

ポーラ

（お願い、私達の想いを受け取って………。）

「アカネイア大陸・タリス王国」

イカロス隊員はこの国の城に集まった国中の人々から『想い・祈り』を集め終えた。

イカロス隊員

「ありがとうございます！貴方のお陰で助かりました。」

？

「いえ、これもマルスや闘って下さってる方々の為です。」

この国の王女は微笑みながら語る。

イカロス隊員

「それでは、私はこれで……………」

イカロス隊員は飛び立とうとした時……………。

シーダ

「貴方も頑張ってくださいね。」

イカロス隊員

「は、はい……………」

シーダの優しい言葉を聞いて、イカロス隊員は顔を真っ赤にしたまま飛び立ってしまう。

イカロス隊員

（そんな言葉、始めて言われた……………。）

グイツグイツ。

イカロス隊員

（おっと、またお呼びのようだ……………。）

イカロス隊員はスマッシュボールに引っ張られるがままに飛んでいく。

く テリウス大陸・クリミア王国 く

荒らされて静まり返った町に数十人の男女がいた。

？

「ふう、何とか納まりましたね……………」

この国の王女が胸を撫で下ろしながら一息着く。
エリンシア

？

「あれだけの大群を相手にしたのは一年前の侵略以来ね。」

長い赤髪ディアマトの女性が付け足すように呟く。

？

「それにしても、お兄ちゃんは何処へ行ったんだろ……………」

茶髪ミストの少女が心配そうに呟く。

？

「心配すんなよミストちゃん、アイクなら無事に帰ってくるって！」

ごつい体型で斧を持った男性^{ボーレ}が下に俯くミストを励ます。

ミスト

「う、うん……ありがとうボーレ。」

ボーレの言葉にミストは顔を上げる。

？

「あれ？何かこっちへ近付いて来るよ？」

弓を持った少年^{ヨフア}が空へ指をさす。

？

「あれは……ラグズか？」

長い槍を持った緑色の髪の男性^{オスカ}がこちらへ近付いてくるイカロス隊員を見ながら呟く。

イカロス隊員

「すいません、ちょっと宜しいですか？」

？

「な、何でしょうか？」

白い服を着た男性キルロイが恐る恐る尋ねる。

イカロス隊員

「まずは、こちらをご覧ください。」

パアアアッ。

ミスト

「わっ！何っ！？」

ヨファ

「眩しくて何も見えないよう！」

一瞬強力な光が放たれた後、スマッシュボールには息を切らすアイクが写し出された。

ティアマト

「これは……アイクじゃないの！？」

オスカー

「ああ、間違いない……………アイク団長だ。」

アイクが写し出されたスマツシユボールを見た全員が目を疑った。

？

「これは一体どういう事なんですか？」

黄緑色の服を来た長髪の青年が内心驚きつつも冷静に尋ねる。
セネリオ

？

「まさか、此処で俺達の団長がやられる様子を伺えって言うんじゃないかねえだろうな？」

更に髪を縛った弓を持った男性が憎まれ口にした口調で尋ねる。
シン

イカロス隊員

「ち、違いますよ！実はこれには深い訳が……………」

イカロス隊員はミスト達に説明した。

？

「……………まさか団長がそんな辛い闘いをしていたとは。」

？

「私達も団長の力になりたいな……………」。

説明を聞いた青い甲冑を身につけた男性ガトリと長髪ワユの少女が呟く。

イカロス隊員

「力になりますよ！皆さんが全力で祈ってあげれば、きっとこの方の力になりますよ！！」

キルロイ

「祈る……………」。

シノン

「フッ、まるでおとき話みたいだな。」

ワユ

「でも、何かロマンチックね。」

ティアマト

「とにかく、今私達に出来る事は団長の為に祈るだけね。」

ボーレ

「よーし！そうと決まれば早速……………」

エリンシア

「待って下さい！」

ボーレが気合いを入れようとした時、エリンシアが皆を呼び掛ける。

エリンシア

「どうせなら、このクリミア王国に住む住民にも御協力をお願いしましょう！」

ガトリー

「成程、それは良い考えです王女様！」

オスカー

「それではまず国中の人々を集めなければ……………」

ティアマト

「全員で手分けして行きましょう！！！」

ミスト以外その場を後にした。

ミスト

（お兄ちゃん、負けないでね……………。）

ミストはその場で祈り始める。

イカロスはスマッシュボールが導かれるがままに飛んでいく……
ある時は島へ。

くノーウェア島・タツマイリ村く

？

「何だつて！？リュカがそんな大変な闘いに巻き込まれているのか
！？」

村のとある家の前でイカロス隊員から説明を聞いたカウボーイハッ
トを被った男性フリントが大声を上げる。

？

「中々戻って来ないと思ったらそんな事に……。」

？

「リュカの奴、大丈夫かな……。」

フリントの横で聞いてた茶髪ダスターの青年と赤毛クマトラの少女がリュカの安否を
心配しながら俯く。

イカロス隊員

「ですから、その子が負けないように祈ってあげて下さい！」

フリント

「でも、リュカはまだ子供だ……もしあの子の身に何かあったら俺は……。」

フリントは帽子を深く被り直しながら呟く。

？

「ワンワン!!」

フリント

「ボ、ボニー!？」

茶色の犬の鳴き声でフリント達は顔を上げる。
ボニー

ボニー

「ワン!ワンワン!!」

ダスター

「どうしたんだボニー？」

クマトラ

「まさか、俺達に『元気を出せ』って言ってるのか？」

ボニー

「ワン!!」

クマトラの言葉にボニーは嬉しそうに頷く。

フロント

「そうだな……リユカが頑張ってたから、親である俺がしつかりしないでどうするんだ。」

クマトラ

「それに、俺達だってリユカと一緒に冒険した仲間だ……簡単に諦めちゃ駄目だよな。」

ダスター

「そうだな……。」

ボニー

「ワンワン!!」

ボニーは嬉しそうに尻尾を左右に振る。

フリント

「よし！どつせなら村の皆にも声を掛けよう。」

そう言うと、フリントはその場から駆け出していく。

クマトラ

「ダスター、俺達も行こう！」

ダスター

「おう！」

更にダスターとクマトラもボニーを残して駆け出していく。

ボニー

「クウーン……………」

ボニーは寂し気にリュカが写るスマッシュボールを見つめる。

そして、またある時は大都会へ……………。

くダイヤモンドシティく

？

「ワ、ワリオのおじ様がそんな事に……………」

？

「Hey！てつきりまた宝探しにでも行つてたかと思つたYO。」

都会の中心地でイカロス隊員は数人を集めてこれまでの経緯を説明した。それを聞いた女子高生くらいの少女とアフロヘアの男性が口を開く。

イカロス隊員

「そこで皆さんの力が必要で……………」

？

「うゝん、でもワリオを助けるんやろ？」

？

「そうでんな、普段の行いが悪いからあまり助ける気あらへんな」。

タクシードライバーの服を来た小さな猫の男と大きな犬の男が溜め息混じりに呟く。

モナ

「ドリブルさんにスピッツさん！そんな言い方しちゃ駄目ですよ！
」

ドリブル達の言葉を聞いてモナは怒り出す。

ドリブル&スピッツ

「す、すんまへん……………」

二人（？）は申し訳なさそうに軽く頭を下げる。

？

「それに僕ちん、ワリオの作ったゲームが好きだし……………」

？

「もしワリオがやられたら新しいゲームが作れんですたい。」

パトヘルメットを被った小さな少年と2cm位の大きさの体格の少年が小さく唸りながら考え込む。
インボルト ナインボルト エイティ

？

「やっぱりほっとけないでち。ね？アナ。」

？

「そうでちね。」

同じ顔と背丈の忍者みたいな服装した双子の姉妹（カット＆アナ）がお互い顔を合わせながら話す。

？

「やっぱり、イカロスさんの言う通りにした方がいいんじゃないんでしょうか？」

三つ網の髪形に眼鏡を掛けた少女^{ペニー}が皆に提案する。

？

「うむ、確かにペニーの言う通りじゃな……それにあやつには色々ワシの発明に付き合って貰わなければなあ。」

顔半分を機械化させてる男（Dr・クライゴア）が唸りながら考え込む。

？

「ハハハ、自分ノ為デスカ……………」

黒いサングラスを掛けた全身真っ白の小柄な宇宙人^{オービュロン}がクライゴアの

答えを聞いて苦笑いを浮かべる。

？

「と、とにかく急いでこの都市の人達を沢山集めるツスよ！ですよ
ね？師匠。」

？

「勿論じゃ。」

青いチャイナ服を着た青年の言葉に髭を生やした老人が静かに傾く。
ヤングクリケット マスターマンティス

ジミー

「よーし！それじゃ、踊りながら行っちゃおうかな？」

モナ

「いや、踊る必要は無いと思うけど……………」

モナはジミーの発言に苦笑いしながら答える。

？

「なあアシュリー、こないな場所で祈っててええんか？」

？

「別に………平気。」

モナ達がいる場所から少し離れた所の街角から赤い小鬼レッドと赤い服を着た少女が静かに祈っていた。

レッド

「まあ、アシュリーがそう言うなら別にええけど……ホンマはみんなと一緒に祈りたいのに相変わらず素直やあらへんなあ。」

アシュリー

「レッド、今何か言った？」

アシュリーは髪を白に染めて髪型を変形させてレッドを睨む。

レッド

「い、いや……何も言ってへんよ!」

アシュリー

「……………そう。」

そう言うと、アシュリーは髪の色と形を元に戻す。

レッド

（ふっっ、アシュリーが怒るとめっちゃ怖いなあ。）

レッドはホッと胸を撫で下ろす。

またまたある時は宇宙のとある惑星へ………。

くホコタテ星・ホコタテ運送く

？

「な、何と！？オリマー君が今そんな大変な事に……………」

？

「…………オリマー先輩。」

イカロス隊員が事情を聞いたホコタテ運送の社長と後輩のルイーは
啞然とする。

イカロス隊員

「とにかく、ご協力をお願いします！」

社長

「わ、分かった…………ルイー君！すぐに全社員を此処へ呼んできて
くれたまえ！！」

ルイー

「へ？で、でも今日出勤してるのは僕だけですけど……………」

社長

「だったら急いで連絡して此処へ集合させなさい！！」

ルイー

「は、はいっっ！！」

ルイーは慌てて駆け出していく。

社長

「……………うゝむ、こんな事なら、また宝探しに差し向けるんじゃないかなかった。」

社長は深いため息をつく。

またまたある時は大海原へ……………。

くテトラ海賊団の上

？

「何だって！？リンクが今そんな状況に……………」

イカロス隊員から説明を聞いた海賊の頭の少女とその手下達は驚愕する。

イカロス隊員

「でも、皆さんが彼を心から応援すればきっと奇跡が起こります！」

テトラ

「奇跡か……………よし、みんな！心の底からリンクを応援しようじゃ

ないか！」

海賊達

「おおーっ！っ！」

更にある時はある場所に連絡し……………。

COOL! COOL!

メイ・リン

「はい、こちら通信オペレーター担当のメイ・リンです。」

イカロス隊員

「あゝ、こちらイカロス隊員……………ちょっとお願いがぁあります……………」

メイ・リン

「……………え？」

イカロス隊員

「あゝ、こちらイカロス隊員……………ちょっとお願いがぁあります……………」

メイ・リン

「……………え？」

オタコン

「メイ・リン、どうかしたのかい？」

大佐

「何かあったのか？」

メイ・リン

「あ！エメリツヒ博士にキャンベル大佐、実は変な通信が入ってきて……。」

イカロス隊員

「それより今から私の話を聞いて下さい。」

イカロス隊員は三人に説明をした。

大佐

「成程、要するに君はスネーク達の為に世界を回っている訳だね。」

イカロス隊員

「そうです、ですから皆様の協力もお願いしたいのです。」

オタコン

「分かった、我々もスネークやみんなの為に協力するよ。」

イカロス隊員

「ありがとうございます！ご協力感謝します。」

メイ・リン

「……ところで、ちょっと質問していい？」

イカロス隊員

「え？な、何でしょうか？」

メイ・リン

「どうやって此処の無線番号を把握したの？」

イカロス隊員

「そ、それは………秘密です。」

そして最後は……………。

「グリーングリーンズ」

？

「えっ！？ソニックがそんな事に……………」

2本の尻尾を持つ黄色い狐テイルス・バウアーがイカロス隊員の説明を聞いて驚愕する。

？

「もう、ソニックったら……だから勝手にウロチヨロしないで！
っていつも言ってるのに。」

？

「ったく、相変わらず自分勝手な奴だ。」

赤い服を着たピンク色のハリネズミの女の子と真つ赤な身体のハリ
モグラの少年が半ば呆れながら答える。
エミー・ローズ
ナックルズ・ザ・エキドゥナ

？

「ソニックさん、今頃大変な思いをしているハズです。」

？

「チャオチャオ！」

ウサギの少女とペットのチャオ（チーズ）は心配そうな表情を浮か
べる。
クリーム・ザ・ラビット

ティルス

「大丈夫だよ……ソニックならきつと無事に帰ってくるよ。」

エミー

「そうね！私のソニックはそう簡単には倒されないわ。」

ナックルズ

「おい、いつからソニックがお前の物になったんだよ？」

クリーム

「そ、それより他の皆さんも呼び集めましょうよ。」

チーズ

「チャオ！」

エミー

「そうよね。みんな！ソニックの為に沢山集めるわよ！」

ナックルズ

「ケッ、お前に言われなくても分かってらあ！」

テイルス

「まあまあ……ソニック、待っててね。」

そう言うと、テイルス達はその場から駆け出していった。

？

「ねえ、私達も協力した方がいいんじゃない？」

？

「フン、くだらん。」

イカロス隊員やテイルス達がいた場所から遠く離れた高い足場からソニックそっくりの黒いハリネズミの男と露出度の高い衣装を着たルージュ・ザ・バットコウモリの女が眺めていた。

シャドウ

「奴がどうなろうと僕には関係ない。でも……………」

ルージュ

「でも？」

シャドウ

「僕との決着を着ける前に死なれては困る……………だから今回だけは協力してやろう。」

ルージュ

「フフ、素直じゃないんだから。」

シャドウの言葉を聞いてルージュは笑みを浮かべる。

く天空界・エンジェランドく

イカロス隊員

「パルテナ様！只今戻りました！！」

イカロス隊員は完全に色を取り戻したスマッシュボールを抱えながらパルテナのいる神殿に慌てて入ってきた。

パルテナ

「そうですか……………」ご苦労様です。」

イカロス隊員

「はい！ところで、コレをどうすれば……………」。

シュツ！

すると、スマツシュボールはイカロス隊員の手元から消えてしまった。

イカロス隊員

「あ、あれ！？スマツシュボールが消えた！？」

パルテナ

「落ち着きなさい。きっと彼がピット達へ届けたのでしょぅ。」

イカロス隊員

「か、彼……………ですか？」

イカロス隊員はパルテナの言葉に首を傾げる。

パルテナ

（ピット、それに今闘っている皆さん……私達の想いを受け取って下さい。）

パルテナはゆっくりと目を閉じながら祈り続ける。

第二十三話くそれぞれの世界へ（後編）く（後書き）

……という訳で、これにてイカロス隊員の冒険は終わりです。
そして、これから本当にタブーとの最終決戦に突入しますのでお楽しみ下さい！

第二十四話　決して諦めない心

タブー

「はぁぁあっ！！」

ドドドドドッ！！

マリオ

「うわぁぁあっ！！」

タブーは手の平からビームを連射して、マリオ達に命中させる。

リンク

「くっ……………これでもくらえ！！」

ビュユッ！！

リンクはタブーに向かって疾風のブーメランを投げると、ブーメランは風を纏いながら一直線に飛ぶ。

タブー

「……………フン。」

バシッ！！

タブーは向かってきたブーメランを叩き落とす。

リンク

「そ、そんな……………」

リンクはブーメランを簡単に叩き落とされて啞然とする。

タブー

「ブーメランにはブーメランでお返しだな。」

ブンッ！！

タブーは巨大な車輪状のブーメランを取り出して、すぐにリンクに向かって投げ付ける。

メタナイト

「危ない！！！」

バサッ！！

リンク

「わっ！？」

メタナイトは翼を出して、間一髪リンクを掲げ上げてタブーの巨大を回避させる。

リンク

「あ……ありがとう。」

メタナイト

「奴は手強い……油断するな。」

そう言うと、メタナイトはゆっくりとリンクを降ろす。

メタナイト

「次はこちらから行くぞ！シャトルループ！！」

マルス

「ドルフィンスラッシュ！！」

アイク

「天・空！！」

メタナイト、マルス、アイクはタブーに向かって技を繰り出すが……。

シュッ

タブーはその場から姿を消した。

アイク

「なっ！？」

マルス

「き、消えた！？」

メタナイト

「気をつける！奴は何処かに……………」

タブー

「もう遅い。」

三人

「！！！？」

いつの間にかタブーは三人の背後にいた。

タブー

「くらえ！！」

ザシュッ！！

マルス

「うわっ！！」

タブーは腕をブレード状にして、三人に突っ込んで切り裂く。

アイク

「な、なんて奴だ……………」

メタナイト

「私とした事が……………」

三人が全身切り傷を覆いながらゆっくりと立ち上がると……………。

カービィ

「ぽよーっ!」

カービィがダッシュしてタブーに近付く。

メタナイト

「よせカービィ! むやみに近付くな!」

タブー

「愚かな……ハッ!」

ヒュンッ!!

カービィ

「ぽ、ぽよ!」

メタナイトの制止も空しく、タブーは光の鎖をカービィに巻き付ける。

タブー

「そりゃっー!!」

カービィ

「ぽよ~~~~っ!!」

ドオオオオン!!

タブーがカービィを巻き付けた鎖をおもいつきり上に持ち上げて地面へ叩き付けた。

デデデ

「カービィ!大丈夫かぞい!?!」

カービィ

「ぽよ~~~~~~~~。」

デデデが慌てて駆け寄ると、カービィはゆっくりと立ち上がる。

ピーチ

「酷いわ……………こんな子にも容赦ないなんて……………」

ゼルダ

「ええ…………許せん！」

パアアアッ

ゼルダはシークへとチェンジした。

シーク

「何が何でも奴を倒さなければ…………。」

シークは針を構えながらタブーへ突っ込もうとするが…………。

フォックス

「待て！シーク。」

フォックスがシークを制止する。

フォックス

「奴に接近戦で挑むのは危険だ…………飛び道具で応戦しよう。」

シーク

「…………分かった。」

フォックスの言葉を聞いて、シークはゆっくり頷く。

ファルコ

「そんじゃ、早速ブラスターで応戦すつか。」

ウルフ

「フン、そんな安物の銃で大丈夫かよ?」

ファルコ

「ケツ、銃は性能じゃなくて腕で決まるんだよ!」

フォックス

「……………そんな事より、飛び道具を持つてる奴は構えてくれ!」

スネーク

「よし!俺のリモコンミサイルの出番だな。」

ロボット

「私モビーもデ応戦シマス!」

トレーナー

「みんなも攻撃の用意だ！」

ゼニガメ

「ゼニゼニ！」

フシギソウ

「フシフッシ！」

リザードン

「グアアアッ！」

フォックス

「それじゃ一斉に行くぞ………発射!!」

ビュッ!ビュッ!ビュッ!ビュッ!ビュッ!

フォックスとファルコはブラスターでウルフはクローブラスターで連射する。

スネーク

「こっちも発射だ!!」

ドンッ！！

スネークはリモコンミサイルを発射した。

ロボット

「ろぼびーむ！！」

ビィィッ！！

ロボットもロボビームで応戦する。

トレーナー

「ゼニガメ！フシギソウ！リザードン！それぞれ攻撃開始！！」

ゼニガメ

「ゼニーーッ！！」

ブシュウウッ！！

フシギソウ

「フシーーッ！！」

ボボボボッ！！

リザードン

「ガアアッ！！」

ボオオオオッ！！

トレーナーの指示でゼニガメは水鉄砲を、フシギソウはタネマシンガンで、リザードンは火炎放射で攻撃する。

ディディー

「オ、オイラだってやるぞー！！」

パン！パン！パン！パン！パン！パン！

ディディーもピーナッツ・ポップガンで応戦する。

ネス

「リュカ、僕達もPKサンダーで……………」

リュカ

「う、うん！」

ネス&リユカ

「PKサンダー！！」

バリバリッ！！

ネスとリユカはPKサンダーを放つ。

ファルコ

「どうだ！これだけ攻撃を受けりや……………」

タブー

「…………効かな。」

ウルフ

「何っ！？」

全員タブーの方を見上げると、タブーの身体にはかすり傷一つ付いていなかった。

フォックス

「ま、まさか………傷一つ付いてないのか？」

スネーク

「見た目より頑丈なボディだな………。」

ロボット

「すねーくサン、感心シテル場合ジャアリマセンヨ。」

タブー

「その程度の攻撃では我を倒せんぞ。」

サムス

「あらそつ、じゃあ………。」

ルカリオ

「この攻撃は耐えられるか？」

サムスはチャージショットを放つ体制をして、ルカリオは掌に巨大な波導を溜めながら構えていた。

サムス

「くらないさいー!!」

ルカリオ

「受けてみよ!!」

ドオオオッ!!

サムのチャージショットとルカリオのはどうだんが同時に放たれた。

タブー

「ハッ!!」

タブーは掌でサムスとルカリオの攻撃を受け止めた。

サムス

「そ、そんな……………」

ルカリオ

「私達の攻撃を意図も簡単に……………」

タブー

「そろそろ終わりにしてやるっ……………」

そう言うと、タブーは同じ姿の分身を次々と沸いて出てくる。

クッパ

「な、何だ！？タブーが分裂したぞ！？」

ガノンドロフ

「フン、全て消し去ってくれるわ！！」

ファイター達は分裂したタブーにそれぞれ接近する。

ファルコン

「ファルコンパンチ！！」

スッ。

ファルコンが一体のタブーに攻撃した時、タブーはその場からスッと消える。

ファルコン

「き、消えた！？」

ガノンドロフ

「他の奴はダミーか……くだらん真似を……。」

クツパ

「こうれば全員丸焼きにしてくれるわ!!」

ゴオオオッ!!

クツパは辺り一面に炎を吐き出す。

ワリオ

「わちゃちゃちゃ!俺様の所にも炎が来たぞ!!」

ワリオのお尻にクツパの炎が燃え移り、辺りを走り回る。

ガノンドロフ

「フン、がむしゃらに攻撃しても力を無駄に使っただけぞ。」

クツパ

「何だと!？」

クツパは攻撃を止めて、ガノンドロフを睨みつける。

ソニック

「おいおい、仲間割れしてる場合じゃないだろ？」

クッパ

「仲間！？こんな自分勝手な奴は仲間ではない！！！」

ガノンドロフ

「貴様に言われたら、おしまいだ。」

ソニック

「はぁ、もういいや……………」

ソニックは溜め息をついた後、沢山のタブーを見つめる。

ソニック

「それじゃ一丁行くか………… スピンチャージ！！！」

ソニックは突然球体になり、物凄い速さで回転しながら沢山のタブーに体当たりを繰り返す。

オリマー

「…………早過ぎて全然目が着いていけない。」

ファルコン

「音速を越える速さだな…………。」

数人がソニックの音速に咂然とする中、攻撃を終えたソニックが動きを止める。

ソニック

「チッ、全員ダミーだったか…………一匹のどれかは本物だと思ったんだけどなあ。」

ソニックは頭を掻きながら苦笑いする。

ワリオ

「それより、奴は何処へいった!?!」

オリマー

「そう言えば何処にも…………。」

全員辺りを見回すが…………。

タブー

「我はさつきから此処にいるぞ。」

ルイージ

「え？………うわぁっ！？」

ルイージが真上を見上げると、巨大な顔だけのタブーが浮いていた。

ヨッシー

「で、でか過ぎだよ！」

ルイージ

「一瞬ワリオかと思ったよ！」

ワリオ

「それはどついう意味じゃ～～～！！！」

ルイージの言葉にワリオは怒り出す。

タブー

「お喋りはここまでだ！くらえええっ！！！」

ビィィッ!!

タブーは目からビームを放って連射する。

ルイージ

「うわあああっ!!」

ヨッシー

「よ、避けられないよっっ!!」

タブー

「我にばかり集中していると命取りになるぞ。」

ネス

「え?」

ソニック

「ホワッツ? 何だアレは!?!」

タブーの言葉にソニックは左右の隅にある装置を発見する。

タブー

「とどめだ………発射!!」

ビィィィッ!!

「うわあああッ!!」

左右の装置から太いビームがファイター全員に命中する。

「数分後」

タブーの猛攻を受けた殆どのファイターはもはや立てない状態であった。

ピカチュウ

「ピ……ピカ……。」

プリン

「プリ……プ……。」

ポポ

「ナナ……大丈夫？」

ナナ

「う、うん……なんとか……。」

ビット

「強い…………強過ぎる…………。」

アイク

「お、俺達の敵が…………これほど強敵なのか。」

タブー

「分かったか？我と貴様らとでは像と蟻なのだよ。」

フォックス

「な…………んだと！？」

フォックスは立ち上がろうとするが、身体がボロボロなので立ち上がれない。

ドンキー

「ウホ…………か、身体が…………動けない。」

クッパ

「こ、ここまで…………なのか。」

？

(…………諦めるな。)

マリオ

「え？」

マリオは辺りを見回す。

ルイージ

「兄さん……………どうかした？」

マリオ

「い、いや……………さっき誰かの声が聞こえたような……………」

リンク

「マリオさんも？実は俺も聞こえたんです。」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ！」

メタナイト

「カービィも聞こえたと言っのか？」

ピーチ

「一体どうなってるのかしら？」

？

（決して諦めるな！この世界を救えるのは君達だけだ。）

トリंक

「あつ！僕にも聞こえてきた！」

今度は全員が謎の声に耳を傾ける。

クツパ

「この声は……マスターハンドか！？」

マスターハンド

（そうだ……残り少ない力で君達の心の中に語りかけているのだ。）

リュカ

「心に？テレパシーみたいなもの？」

ネス

「そうかも……………」

マスターハンド

（それより、この世界を救ってくれ……………これは私やこの世界に住む者達全ての願いだ。）

マルス

「世界に住む者達全ての……………願い？」

マスターハンド

（そう、君達の大切な者達は今でも祈っている……………君達が奴に負けないように。）

アイク

「大切な者……………まさかミストや傭兵団のみんなが……………」

リンク

「イリアやトアル村のみんなも……………」

マスターハンド

（勿論だとも……………頼む！その者達の為にも諦めずに期待に答えてくれ！！）

マリオ

「マスターハンド……………分かった！」

そう言うのと、マリオはゆっくりと立ち上がり、その後から他のメンバーも次々と立ち上がる。

タブー

「ほお、まだ立てる力があつたか……………」

タブーが感心してる中、マリオはみんなの方を向く。

マリオ

「みんな！僕達が此処で諦めたら僕達の為に祈っている人達に申し訳ない……………だから最後まで全力でタブーに立ち向かおう！！」

ピーチ

「そうね！最後まで頑張りましょう。」

ルイージ

「流石は僕の兄さん……………誇らしいよ。」

クッパ

「フン！貴様に言われなくとも我輩を利用した奴は八つ裂きにして

くれるわ。」

ヨッシー

「よし、僕もスーパードラゴンの名に賭けて頑張るぞー!!」

ドンキー

「デイディー、俺達もまだまだやれるよな？」

デイディー

「当ったり前じゃーん!だってオイラはドンキーの相棒だもんね!」

ワリオ

「ガーハツハツハ!俺様は不死身だからまだまだいけるぞー!!」

リンク

「俺もトアル村や今まで出会った人達の為に負ける訳にはいかない
!!!」

シーク

「フツ、君らしいよリンク……………」

Tリンク

「僕もテトラや島にいるお婆ちゃんやア ril の為に頑張らなくっち

「や！」

ガノンドロフ

「この世界はいずれ俺が支配する……………だからこんな奴に負けてたまるか！」

カービィ

「ぼよぼよ……！」

メタナイト

「ああ、ププランドの皆が待っている……………私達もそれに答えねばな……！」

デデデ

「なんの！わしも負けずにやってやるぞい……！」

ピカチュウ

「ピカピカ！ピカピカッチュ……！」

プリン

「プリュ！プリプリン……！」

ルカリオ

「私も波導の底力を見せてやろう!!」

トレーナー

「ゼニガメ、フシギソウ、リザードン、お前達ばかりに苦勞を掛けるけど……後もう一息頑張ってくれ。」

ゼニガメ

「ゼニーツ!!」

フシギソウ

「フシフーツ!!」

リザードン

「グワアアッ!!」

ファルコン

「レース以外でこんなに熱くなれたのは初めてだな。」

サムス

「私もバウンティハンターとして絶対に勝つ!」

オリマー

「私がとある惑星に墜落した時はピクミン達がいたから頑張れた…

……そして今回も皆さんがいるからこんな私でも頑張れる。」

フォックス

「俺も死んだ父さんや待つてくれている仲間の為に全力を尽くすぞ
！！」

ファルコ

「やっぱお前は俺らのリーダーだぜ。」

ウルフ

「ヘッ！その粹でなきゃ俺のライバルとは呼べないぜ。」

ネス

「家族や友達が僕の帰りを待つて……それを聞いて尚更負けられないよ！」

リユカ

「母さん、クラウド兄ちゃん……僕は新しい友達と一緒に頑張るよ。」

ヒモヘビ

「そうだ！お前の父ちゃんやクマトラ達もお前の帰りを待つてるぞ。」

マルス

「みんな、見ていてくれ……………僕は此処で負ける訳にはいかないんだ。」

アイク

「俺は守るべきものの為に闘うだけだ。」

ピット

「パルテナ親衛隊長の名の元に命を賭ける!!」

ポポ

「ナナ、僕達も頑張ろうね!!」

ナナ

「うん!だって私達アイスクライマーだもん!!」

ロボット

「沢山犠牲ニナッタ同士達二代ワツテたぶーヲ倒シマス!!」

ピリリッ!!

ゲーム&ウォッチは真っ黒なアラムを 鳴り響かせる。

スネーク

「俺も不可能を可能にする男だ！任務は最後までやり遂げる！！」

ソニック

「ノープログラム！まだまだ遊んでやるぜ！！」

マスターハンド

（……………君達ならそう言っていると信じていた。）

パアアアッ！！

マスターハンドが言い終わったと同時に辺り一面が光に包まれていく。

マリオ

「な、何だ！？」

ヨッシー

「眩しいよー！」

ピーチ

「……………あら？これは何かしら？」

光が止むと、ピーチの目の前にスマッシュボールがあった。

ディディー

「何これ？ボール？」

リンク

「それに十字のマークが刻まれてるような……………」

タブー

「何が起こったか知らないが、これで本当に終わりだー！」

タブーは背中に羽根を生やす。

ソニック

「おいおい、その技はもう使えないんじゃないのか？」

タブー

「確かに貴様のお陰で威力は低くなったが、今のボロボロな貴様らを始末くらいの威力はあるう。」

メタナイト

「くっ、万事休すか……………」

フォックス

「何とかならないのか……………」

ピーチ

（どうしよう。タブーの動きを止められれば……………せめてみんなの体力を回復出来れば……………。）

ピーチがそう思った時……………。

スッ

ピーチ

「えっ!？」

スマッシュボールがピーチの体の中へ入っていった。

ポポ

「わっ!またあの技が出てくるっ!」

ナナ

「だ、誰か……………」

タブー

「もはやジタバタしても遅い！！くらえ！OFF波ど……………」

その時！！

~~~~~

突然ロマンチックな曲が辺りに響き渡る。

タブー

「な、何だ！？この変な曲は……………ううっ。」

タブーは一瞬驚くが、曲を聴いている内に段々と意識が朦朧<sup>もうろう</sup>としていく。

タブー

「な、何故だ……………突然強力な眠気が……………んぐううっ。」

タブーは苦しむように頭を抱えていると、そのまま眠ってしまった。

ピーチ

「こ、これはどういう事なの……………えっ!?!?」

ピーチは戸惑いながらマリオ達の方を向くと、ピーチ以外全員眠っていた。

ドンキー

「んごお〜っ。」

ワリオ

「んがぁ〜っ。」

カービィ

「すう……すう……。」

ピーチ

「みんなあの曲を聴いて眠ってしまったわ……みんな！起きて！！」

突然眠ってしまったタブーやマリオ達！果たして何か起こったのか  
！？

いよいよ次回はクライマックスなので楽しみに！！

## 第二十五話、最後の切り札（前書き）

突然眠ってしまったタブーとマリオ達……果たして何が起こったのか！？

## 第二十五話　最後の切り札

数分後、ピーチは突然眠ってしまつてマリオ達を何とか起こした。

ドンキー

「ふわぁ〜っ……………眠いなぁ〜。」

ルイージ

「でも、僕達いつ眠つたんだろ？」

ピーチ

「私もよく分からないけど、タブーが攻撃をしようとした時に突然曲が流れてきて……………」

ネス

「そうだ！その曲を聴いた途端にいきなり眠気が襲ってきたんだ。」

ルカリオ

「あの曲にはプリンの『うたう』と同じ効果があるのか？」

プリン

「プリ？」

ルカリオの言葉にプリンは顔を傾ける。

カービィ

「ぽっよっ！」

メタナイト

「ん？どうしたカービィ。」

カービィは大きな桃を持ちながらメタナイトに近付いてきた。

デデデ

「何ぞい？桃にしか見えんぞい。」

ヨッシー

「桃？それじゃ、いただきます！」

パクッ

ヨッシーは長い舌で桃を巻き付けて、そのまま食べてしまった。

アイク

「おい、いきなり食うなよ……………」

リンク

「毒とか入ってたらどうするんだ？」

ヨッシー

「うゝん…………んっ!？」

桃を食べてる最中のヨッシーが突然口を動きを止める。

マリオ

「どうした!？まさか本当に毒が……………」

ヨッシー

「い、いや…………この桃凄く美味しいよ!…」

ファルコ

「何だよ…………紛らわしいリアクションするんじゃないよ。」

ヨッシー

「ごめんごめん…………あれっ!？」

ディディー

「今度は何？」

ヨッシー

「えっとね、気のせいか体力が回復したよな……………」

リユカ

「ま、まさか……………」

カービィ

「ぽよ、ぽよぽよ？」

メタナイト

「何？『まだ向こうにも沢山落ちてたから食べてみたら？』だと？」

カービィ

「ぽよ！」

カービィは頷く。

ワリオ

「そういう事は早く言わんか！俺様もその桃を頂くぞ〜！！」

トリック

「あーずるいー!!」

ディディー

「オイラ達も早く食べなきゃー!!」

ワリオが駆け出した後、全員桃が落ちてる場所へ走り出す。

こうして、マリオ達は不思議な桃を食べて体力を回復した。

ポポ

「本当に回復したみたいに体が楽になったね。」

ナナ

「それに、この桃とても甘くて美味しかったね。」

マリオ

「でも、この桃は一体……。」

マスターハンド

（それはピーチの『最後の切り札』が発動した効果だ。）

ピーチ

「え？私の『最後の切り札』って……。」

マスターハンド

（スマッシュボールがピーチの中に入り、ピーチに秘められた力が発動したんだ。）

ピーチ

「私の……………秘められた力？」

サムス

「じゃあ、私達が眠ってしまったり食べたら回復する桃が落ちていたのもピーチの『最後の切り札』が発動した証拠なの？」

マスターハンド

（その通りだ。）

クッパ

「では、我輩達もその『最後の切り札』が使えるのか？」

マスターハンド

（勿論だとも……………ただし、『最後の切り札』は己<sup>おのれ</sup>自信ですら予想出来ない力が発揮される恐れがあるので注意してくれ。）

ガノンドロフ

「フン！自分をコントロール出来ん程俺は愚か者ではない。」

ロボット

「ソレヨリ、ソノカデたぶーヲ倒セルカモシレマセン。」

ウルフ

「だったら今がチャンスじゃねえか？あの野郎まだ気持ち良さそうに眠ってやがるぜ。」

ウルフの言う通り、タブーは宙に浮いたまま眠っていた。

トレーナー

「本当だ………やっぱり凄い力なんだ。」

スネーク

「だが、あの玉がなきゃ力を発揮出来ないんじゃないか？」

シーク

「いや、その心配は無さそうだ。」

ソニック

「ホワッツ！？それは何故だい？」

シーク

「また例のスマッシュボールが突然現れたからね。」

シークが指を刺しながら言うと、空中にスマッシュボールが漂っていた。

マスターハンド

（私の残された最後の力で複数作っておいた……後は君達の力次第だ。）

マリオ

「……………分かった！僕達が必ずその力でタブーを倒してみせるよ！」

ワリオ

「いいや！俺様一人でタブーの野郎を……………」

ヨッシー

「それは無理みたいだよ。」

ワリオ

「何っ！？」

スマッシュボールはゆっくりとオリマーに近付いていく。

オリマー

「え！？わ、私から？」

オリマーが驚く中、スマッシュボールはオリマーの中へ入っていく。

オリマー

（おっ！？な、何か身体の底から力が湧いてくるような……………。）

ボンッ！！

オリマー

「うわっ！？」

突然オリマーが使用していたロケット・ドルフィン初号機が現れた。

ファルコン

「あれはオリマーのロケット！」

オリマー

「……………これでタブーに突撃しろって事か？」

オリマーはしばらく考え込むが……………。

タブー

「んっ…………んん…………。」

タブーが微かに動く。

ファルコン

「考えてる時間は無い！行け！キャプテン・オリマー！！」

オリマー

「は、はい！！」

ファルコンの言葉にオリマーは慌ててドルフィン初号機に乗り込む。

オリマー

「発進！！」

ドキュユン！！

ドルフィン初号機はタブーに向かって一直線に跳ぶ。

ドガッ!!

タブー

「ぐはっ!?!」

ドルフィン初号機の先端がタブーの腹部に勢い良く命中する。

タブー

「し、しまった……………いつの間にか眠っていたか……………」

バッターーン!!

タブーはそのまま地面へ落下してしまう。

タブー

「あ、おのれ……………」

タブーはゆっくりと立ち上がるが……………。

ファルコン

「まだオリマーの攻撃は終わっていないぞ。」

タブー

「な、何だと？」

ファルコンの言葉を聞いてタブーは真上を見上げると……………。

オリマー

「着地しまーすー!!」

ドオオオオン!!

タブー

「ぐわあっ!!」

ドルフィン初号機はタブーを下敷きにして着地した。

オリマー

「や、やったー! やりましたー!!」

ドルフィン初号機が消えた瞬間、オリマーは慌ててその場から逃げ出す。

タブー

「ぐっ…………この程度で…………やられるものか！」

タブーは勢い良く立ち上がる。

ファルコン

「やはりこれくらいではやられないか……………だったら倒れるまで我々は攻撃を続けるぞ……！」

そう言うと、スマッシュボールがファルコンの中へ入っていく。

ビューーン……！！

タブー

「な、何だ！？」

タブーの横をファルコンのブルーファルコンが猛スピードで横切る。

ファルコン

「行くぞ、俺のブルーファルコン……！」

ファルコンは素早くブルーファルコンに乗り込む。

ディディー

「わっ！？めちゃくちゃ速い！！」

マルス

「まさに目にも止まらぬ速さだ……………」

全員ブルーファルコンの速さに驚く佐中、ブルーファルコンはウターンしてタブーに向かって一直線に進める。

ファルコン

「覚悟おっ！！」

ドガアアッ！！

タブー

「がはっ！？」

またしてもタブーの腹部に命中した。

タブー

「うぐっ……。」

タブーはお腹を抑えながら苦しむ。

フォックス

「さ、流石に二回も腹に攻撃されたら効くな。」

ファルコ

「へっ、やっとあの野郎に一泡吹かせてやったってところか。」

サムス

「いいえ、もっと一泡吹かせてやりましょう！」

そう言うと、サムスはタブーに向けてアームキャノンを構える。

タブー

「ま、まさか貴様も……。」

サムス

「ええ、そのまさかよ！ゼロレーザー発射！！」

ビィィイツ!!

タブー

「ぐわあああつ!!」

サムのアームキャノンから放たれた極太のビームがタブーを飲み込む。

オリマー

「す、凄い……………」

Tリンク

「あんな攻撃、絶対に避けきれないよ。」

サムのゼロレーザーに数名が啞然とする中……………。

バラバラッ

サマス

「あつ!?!」

サマスが着ていたパワードスーツがバラバラに崩れ落ちてしまい、

サムスはゼロスーツ姿になった。

ピカチュウ

「ピカ!?!」

サムス

「……………どうやらビームの威力が強すぎてパワードスーツが壊れてしまったようね。」

ピカチュウ

「ピカピカ?」

ピカチュウが心配そうにサムスに問い掛ける。

サムス

「大丈夫、私は大丈夫だから……………」

タブー

「うぬぬ……………おのれよくも……………」

タブーはフラフラしながら近付いてくる。

ウルフ

「チッ、まだ生きてやがるのか。」

ルイージ

「しぶといなあ。」

タブー

「この程度で我がやられるかああ!!」

そう叫ぶと、タブーは宙へ浮かび上がる。

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ!」

ピカチュウはダッシュでタブーに接近する。

サムス

「ピカチュウ! むやみに接近したら……………」

サムスが慌てて後を追っかけようとしたが……………。

ファルコン

「大丈夫だ。恐らくピカチュウも……。」

サマス

「！……………そうね。」

ファルコンの言葉にサマスはハッと気付き、動きを止める。

タブー

「フッ、わざわざ死にに来たか……………」

ピカチュウ

「ビィ〜ガァ〜……………」

バチバチ！バチバチ！

ピカチュウの頬から大量の電気が流れた時……………。

ピカチュウ

「チュユツ！！！！」

バリバリバリバリ！！

ピカチュウが大きな電気の塊かたまりになる。

トレーナー

「こ、これはまさか……………ボルテッカー!？」

ルカリオ

「ボルテッカーは電気ポケモンの究極技だが……………こんなに大きなボルテッカーは初めて見た。」

ビリビリビリビリッ!!

タブー

「ぐはあああつ!!」

ピカチュウのボルテッカーはタブーに体当たりすると、タブーの全身に何万ボルトの電気が通る。

プリン

「プリプ……………」

リユカ

「迂闊に近付くと僕達も痺れちゃいそう……………」

シュユツ

ピカチュウのボルテッカーが止むと、元の姿へと戻る。

タブー

「うぐぐ……か、体が痺れて……。」

タブーはピカチュウの電撃により体の自由が効かなくなる。

ディディー

「ドンキー！今の内だよ！！」

ドンキー

「ウツホー！！」

ディディーの掛け声と共に、ドンキーの目の前にコンガが現れる。

ルイージ

「コ、コンガ！？」

デイディー

「そう言えばドンキーはコンガが上手なんだ。」

マリオ

「いや、だからって…………。」

デイディーの言葉に一同苦笑いを浮かべる。

ドンキー

「それでは…………ミュージックスタート!!」

ボン！ボン！ボボボン！ボン！ボボンボン！

タブー

「ぐおおっ!!あ、頭が…………。」

ドンキーのコンガの高音に頭を抑えながらもがく。

ピーチ

「うう……………凄い音ね…………。」

デイディー

「でも……とても上手でしょ？」

ピット

「そ、そっいつ問題じゃ……………」

ディディーを含むファイアー達も耳を抑えていた。

数分後

ドンキー

「…………ふう、すっきりした。」

ドンキーはコンガの演奏を終えると同時にコンガが一瞬で消えてしまふ。

タブー

「こ、今度は頭が……………」

タブーは頭を抱えながらふらつく。

ディディー

「よし！今度はオイラの番だー！！」

そう言うと、ディディーの背中にはバレルジェットを背負わせて、両手にはピーナッツ・ポップガンを構えていた。

ディディー

「行つくぞ〜〜!!」

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！

ディディーは両方のピーナッツ・ポップガンをあちこちに連射する。

タブー

「ぐがああつ!!」

何発かの落花生はタブーに命中して爆発するが…………。

フォックス

「お、おいディディー！俺達の所にも落花生が来てるぞ!!」

ファルコ

「ちゃんと狙いを定めてから撃てってんだ!!」

何発かはフォックス達の方へ向かって爆発したが、フォックス達は間一髪避ける。

ディディー

「ご、ごめ〜ん！オイラも何だか訳が分からなくなって……………」

そう言うと、ディディーの背負っているバレルジェットと両手に持っているピーナッツ・ポップガンが消える。

ディディー

「あ、あれ？もうおしまいなの！？」

ディディーは混乱しながら地面へと着地する。

ウルフ

「ったく、これだから素人は困るんだよ。」

ファルコ

「まったくだぜ。」

フォックス

「まあ、そう言うな……………それより次は俺達の出番だ！！」

そう言い終わると、フォックス、ファルコ、ウルフの三人はタブーの前に立ち上がる。

ウルフ

「今まで痛めつけた借りを倍にして返してやるぜ！」

ファルコ

「覚悟しやがれ！」

フォックス

「いでよ！ランドマスター！！！」

ドッシーーン！！

フォックスの掛け声の後から、三機の戦車が落下してくる。

ファルコ

「何だよお。俺もランドマスターかよ……………それにそっちも俺らの真似っ何か？」

ウルフ

「うるせえ！このランドマスターはお前らのとは性能が全然違うんだよ！！！」

ファルコ

「んだとお！だったら勝負してみつか！？」

ウルフ

「望むところだ！」

フォックス

「おい、二人共！今はタブーを倒すのが先決だろ！？」

ウルフ

「おっと、そうだったな……………後で必ず決着を着けてやるからな！」

ファルコ

「おうよ！そんな時は覚悟しとけよ！！」

フォックス

「やれやれ……………それじゃ発射——っ！！」

ドキユユン！！

タブー

「ぐおおおおっ——！」

三人の操るランドマスターから放たれたビームがタブーに見事命中する。

タブー

「おのれ……そう何度も喰らってたまるか!!」

パアアアッ

タブーは一面にバリアーを貼る。

ファルコ

「チッ、バリアーなんか貼りやがって。」

フォックス

「それなら……このまま突っ込むぞー!!」

ドギユユユッ

フォックスのランドマスターはそのままタブーに向かって突っ込んでいく。

ドカアアッ

タブー

「ぐはっ!!」

フォックスのランドマスターの銃口の先端がバリアーを突き破り、タブーの腹部に命中する。

フォックス

「そして、仕上げは………発射!!」

ドキュユン!!

タブー

「がはあっ!!」

フォックスはそのままランドマスターのビームを発射させた。

ウルフ

「フッ、結構やるじゃねえか。」

ファルコ

「俺達もフォックスに負けてらんねえな。」

ドギユユッ

ファルコとウルフのランドマスターもタブーに接近しようとしたが……。

スウウウッ

突然フォックス達のランドマスターが消えていった。

ファルコ

「おいおい、もう時間切れかよ。」

ウルフ

「チッ……………」

フォックス

「とにかく、俺達は一旦此处から離れよう!」

そう言うと、フォックス達はその場から急いで離れた。

タブー

「逃がすかあ!!」

タブーは鎖を取り出し、フォックス達を捕らえようとするが……。

ブシュッ!!

タブー

「むぐっ!?!」

突然タブーの背後から尖端が光に包まれた巨大な弓矢が突き刺さっていた。

シーク

「フッ、油断大敵さ。」

タブー

「き、貴様……!!」

タブーの背後には弓を持ったシークがいた。

Ｔリンク

「み、見事にど真ん中に突き刺さってる……。」

リンク

「ゼルダ姫……いや、シークは弓が上手なんだ。」

ガノンドロフ

（確かに奴は的確に狙い撃ちする……俺もあの光の矢には苦戦した。）

ガノンドロフは険悪な表情でシークを見つめる。

タブー

「くっ……こ、こんな物!!」

ザシュツ!!

タブーは腹部に突き刺さった弓矢を引っこ抜く。

シーク

「な、何と!?!」

シーク達は先程の光景に驚愕する。

タブー

「よくも私の体にこんな物を……………お返しだあつ!!」

タブーはシークに向かって弓矢を投げ付ける。

シーク

「し、しまった!今避けても間に合わない!!」

弓矢がどんどんシークに迫ってきた時……………。

ゴオオオツ!!

ガキイイン!!

タブー

「な、何だと!?!」

シーク

「こ、これは!?!」

シークの目の前に巨大な氷山が現れて、弓矢は氷山に突き刺さる。

ポポ

「ふう〜っ、間に合って良かった。」

ナナ

「あの……大丈夫でしたか？」

ポポとナナがシークに近付きながら聞く。

シーク

「……君達が助けてくれたのかい？」

ナナ

「は、はい！」

ポポ

「どうやらこれが僕達の力みたい。」

シーク

「そうか……ありがとう、助かったよ。」

シークが笑顔で二人にお礼を言うと……………。

ナナ

「い、いえ……………どう致しまして。」

ナナは顔を少し紅く染める。

ポポ

「ナナ、顔赤いけど暑いのか？」

ナナ

「な、何でもないよ！」

ポポの問い掛けにナナは慌てたように答える。

タブー

「こんな氷の塊など粉々にしてくれるわー！」

ガシヤヤン！！

タブーは右腕をブレード状にして、氷山を打ち砕く。

ナナ

「わっ！壊されちゃったよっ！！」

ポポ

「逃げろっ！！」

ポポとナナはその場から逃げ出していく。

タブー

「逃がさん！！」

タブーはポポとナナを捕まえようと接近しようとした時……。

ロボット

「次ハ私が相手ダ！！」

そう言う、ロボットはタブーの前に立ちはだかる。

タブー

「ムッ？誰かと思えばあのガラクタ共のマスター……いや、エイ  
シャント卿ではないか。」

ロボット

「ソノ名前デ呼ブナ！ソシテ……仲間達ヲ侮辱スルナ！！」

ロボットは怒鳴ると同時にタブーに向かって突っ込む。

タブー

「つくづく愚かな……ぶち壊してくれるわ！！」

パチッ

ボカアアアン！！

タブーが指を鳴らした瞬間、ロボットの周辺に爆発するが……。

ロボット

「ウオオオオツ！！」

ビイイイツ！！

爆風の中からロボットは目から拡散したビームを放ちながらそのま

まタブーに向かって突き進む。

タブー

「ば、馬鹿な…………ぐわああっ!!」

タブーはロボットの拡散ビームを体中に浴びる。

ロボット

「皆サン!私ノびーむデたぶーノ動キヲ封ジテル隙ニ誰カ攻撃ヲ…  
…。」

ピット

「わ、分かった!」

最初にピットがタブーの前に出た。

ピット

「援軍突撃!!」

ピットは上げた手を降ろすと、空から無数のイカロス隊員が降ってくる。

ドガッ！ドガッ！ドガッ！ドガッ！ドガッ！

タブー

「むぐうつ！？」

イカロス隊員達は四方八方からタブーに体当たりする。

マリオ

「ピット、彼らは一体……………」

ピット

「僕が結成したパルテナ親衛隊の隊員達です。」

ヨッシー

「この人達全員が？少なくとも百人以上いるけど……………」

数人はイカロス隊員の多さに唖然とする。

デデデ

「どれ、わしも加勢するぞい。」

そう言いつつ、デデデはピットの隣へ立つ。

デデデ

「ワドルディ軍団出撃ぞーいー!!」

ピーーッ

デデデが口笛を吹いた途端に無数のワドルディが現れる。

トトトトトトッ!!

タブー

「ぐわあああッ!!」

ワドルディ軍団はイカロス隊員と共にタブーへ体当たりする。

ルイージ

「あのちっこい奴ら、デデデさんの子分だったんだ。」

ワリオ

「俺様もコイツらにや苦戦したぜ。」

数名が啞然とする中、ルイージとワリオだけは苦笑いする。

ルカリオ

「ロボット！タブーから離れる！！」

ロボット

「エ？ハ、ハイ！！」

タブーの真上で呼び掛けたルカリオの言葉で、ロボットはビームを放つのを止めてタブーから離れる。

ルカリオ

「お前達も手下達を引っ込めるんだ！」

ピット

「は、はい！」

デデデ

「……………偉そうに命令しおって。」

二人が合図するとイカロス隊員とワドルディ軍団は攻撃をやめる。

タブー

「ハアハア……………攻撃が止んだか……………」

ルカリオ

「いや！まだ終わらないぞ！！」

タブー

「なっ！？」

タブーはルカリオの声に驚いて見上げた時……………。

ルカリオ

「波導の力を見よ！ハアアアッ！！」

ゴオオオオッ！！

タブー

「ぐわあああっ！！」

ルカリオは両手から強力な波導をタブーに放つ。

メタナイト

「よし、我々もルカリオに続くぞ！」

マルス

「はい!!」

アイク

「おう!!」

メタナイトの言葉にマルスとアイクはタブーに接近する。

タブー

「つ、次から次へと……………」

タブーが二人の気配に気付いて攻撃を仕掛けようとするが……………。

マルス

「させるものか!!」

ズバァァァン!!

タブー

「ぐはっ!?!」

マルスはダッシュで駆け寄り、素早くタブーに切り掛かる。

タブー

「な、なんて速さだ………コイツらに一体何処にそんな力が………」

アイク

「俺達の力を甘く見るなって事だ!!」

ズバアアアツ!!

タブー

「うぐっ!!」

アイクは神剣ラグネルでタブーを下から上へ切り上げる。

アイク

「大・天・空!!」

ズバツ! ドガツ! バキツ! ズカツ! ゴスツ!

更にラグネルが炎を纏ったと同時にアイクはタブーの体を連続で切り付ける。

アイク

「ハアアッ!」

ズドオオオオン!!

タブー

「ごわあああつ!」

最後にアイクはタブーをそのまま地面におもいつき叩き付けた。

タブー

「ぐうう……………ま、まだ……………こんな事で……………我は……………」

タブーはフラフラしながら再びゆっくりと立ち上がる。

メタナイト

「ならば、私達の力を嫌という程思い知れ!」

そう言うと、メタナイトは素早くタブーの目の前に現れる。

メタナイト

「見るがいい!!」

バサッ

メタナイトはタブーの顔にマントを靡なびかせると……………。

タブー

「な、何が起こったのだ!？」

突然辺りが真っ暗になってしまった。

ディディー

「暗くて何も見えないよ!!」

カービィ

「ぼよぼよ!!」

マルス

「み、みんな落ち着いて……………きつとメタナイトさんの力のせいだよ!!」

真っ暗の中で騒ぎだす子供組をマルスが宥める。

ズバァアアァン！！

タブー

「ぐはあああつー！！」

リュカ

「な、何！？何が起こったの！？」

ヒモヘビ

「リュカ、とにかく落ち着け！」

タブーの叫び声で更に子供組が騒ぎだす中……。

パァアァッ

突然周りが明るくなり、体に大きな切り傷が付いたタブーと剣を持ったメタナイトが立っていた。

オリマー

「これは……どういう事でしょうか？」

アイク

「メタナイトはあの暗闇の中で奴を切り付けたんだ。」

ファルコン

「自ら闇を作って敵を惑わせて敵を切り裂く……流石だな。」

ファイアー達はメタナイトの攻撃に感心していた。

クッパ

「……さて、次は我輩の出番だな。」

ガノンドロフ

「いや、俺がやる。」

ガノンドロフが言った後、お互い一瞬睨み合う。

クッパ

「では、どちらが先にタブーを倒すか競争するか？」

ガノンドロフ

「……………よかるう！」

そう言った途端、二人はぶつかり合いながらタブーに接近する。

マリオ

（あの二人、かなり仲悪いなあ。）

リンク

（あんなガノンドロフは初めて見た。）

マリオとリンクは呆然としながら二人を見守る。

クッパ

「それでは行くぞ！ヌオオオオツ！！」

ガノンドロフ

「ハアアアツ！！」

二人が大きく声を上げた瞬間にクッパは巨大化して、ガノンドロフは巨大な四歩歩行の魔獣の化する。

ヨッシー

「ク、クッパが巨大化した〜!？」

ピーチ

「か、かなり怖いわ。」

ルイージ

「兄さん、もしクッパがあんな姿で攻めてきたら勝てる?。」

マリオ

「……………多分無理だ。」

ルイージの質問にマリオは曖昧に答える。

シーク

「魔獣化したガノンドロフ……………久しぶりに見たな。」

リンク

「あの姿の時はかなり苦戦したなあ……………。」

トリンク

「僕が闘った時はあんな姿になってなかった。」

リンクとシークが冷静に見つめる中、リンクは少し震えながら言う。

ギガクツパ

「今まで我輩を利用した仕打ちを思い知るがいいわ!!」

ボカアアツ!!

タブー

「ぐふっ!？」

巨大化したギガクツパは巨大な拳でタブーを殴り付ける。

ガノン

「グガアアツ!!」

ドガガガガッ!!

魔獣になったガノンドロフは両方の前足でタブーを叩き付ける。

ギガクツパ

「クツパプレスー!!」

ゴオオオツ!!

ギガクツパはタブーに向かって口から炎を吐き出す。

トレーナー

「うわ……………めちゃくちゃに攻撃してる…………。」

サムス

「相当利用された事に腹が立ってたようね。」

一同は啞然となりながら二人の光景を見つめる。

ギガクツパ

「これでとどめじゃー!!」

ギガクツパがタブーに向かって鋭い爪を振りかざした時……………。

シュルルル

クッパ

「……………あ、あれ？」

クッパとガノンドロフは元の姿に戻ってしまった。

ガノンドロフ

「どうやらお互い時間切れのようだ。」

クッパ

「何？！？まだ奴を倒していないというのに……………」

クッパがその場でじだんだを踏んだ時……………。

タブー

「ふざけるな！我が貴様らなんぞに倒されてたまるか！！」

タブーは勢い良く浮かび上がる。

タブー

「今度こそ貴様をこのOFF波動で……………」

タブーは再びOFF波動を発動しようと試みるが……………。

ワリオ

「させねえよ!!」

ドンッ

クッパ

「ぬおっ!?!」

ワリオはクッパを踏み台にして高くジャンプする。

ワリオ

「この俺様をタダでこき使ったお返しをしてやる!変身!!」

ピカーーーッ

ワリオが光に包まれた後、ワリオは紫色の覆面とマントに薄紫色で所々にニンニクマークと中心にWマークが付いた服を着ていた。

ワリオ

「正義の味方・ワリオマン参上!!」

ディディー

「……………あ、あれが正義の味方？」

ネス

「……………はっきり言って趣味が悪い。」

一同はワリオの姿に啞然とする。

タブー

「我に近付くな!!」

ブンッ

タブーは巨大ブーメランを取り出し、ワリオマンに向かって投げ付けるが……………。

ボヨンッ

ワリオのメタボな腹でブーメランは跳ね返る。

タブー

「ば、馬鹿な!？」

ワリオ

「へっ! そんな物でこのワリオマンに勝とうと思ったたら大間違いだぜ!！」

ボガアアッ!!

タブー

「かはっ……………!」

ワリオはタブーに強力なボディーブローを繰り出す。

ワリオ

「おらおらおらおらおらおらおらおら……!」

ボガガガガッ!!

更にワリオはタブーの腹に連続で殴り続ける。

ワリオ

「そして仕上げは……………。」

そう言うと、ワリオはお尻をタブーの顔に向けて近付ける。

ワリオ

「くらえ！強力ワリオっぺ！！」

ブオオオオッ

タブー

「ぬおおおっ！？」

ワリオは強力なワリオっぺをタブーに喰らわせる。

シュユユッ

それと同時にワリオは元の姿に戻る。

ワリオ

「はあく、すっきりしたぜ」。

ワリオはすっきりした顔でタブーから離れる。

タブー

「ゴホッゴホッ！な、何て下品な攻撃だ……。」

タブーはワリオのオナラで噎<sup>む</sup>せる。

ピピッ！ピピッ！

ゲーム&ウォッチが効果音を鳴らしながらタブーに接近する。

ピポパピピピッ！

ゲーム&ウォッチは更に効果音を響かせると共に巨大な蛸に変身した。

ドンキー

「ウホッ、巨大なクロクトパスになった！」

リンク

「いや、あれはオクタロックだ。」

トレーナー

「え？色違いのオクタンじゃ……………」

フォックス

（それぞれ呼び名が違うようだな……………」

それぞれゲーム&ウォッチの変身に驚愕する。

ニユルルル

タブー

「うぐっ！？」

ゲーム&ウォッチが変身した大蛸の足がタブーの首を締め付ける。

ボガッ！ボガッ！

タブー

「ぐふっ！？」

更に余った足でタブーの腹部を殴り付ける。

ヨッシー

「よし、僕も変身しちゃおうかな。」

そう言うと、ヨッシーはみんなより一歩前に出る。

パアアアッ

ヨッシーに光が包まれ、光が止んだ瞬間にヨッシーの背中に大きな翼が生える。

ピーチ

「ヨッシーに翼が生えたわ!」

マリオ

「青い甲羅も食べてないのに……………」

ルイージ

「ヨッシーは今まさにスーパードラゴンになったんだね。」

ドドドドド

ゲーム&ウォッチは蛸から人の姿へ戻っていく。

タブー

「ハアハア…………ふ、ふざけた真似を…………。」

ゲーム&ウォッチの足から解放されたタブーは激しく息をする。

ヨッシー

「まだまだいくよー!」

ボンッ!!

タブー

「ぐわっ!!」

ヨッシーは口から火の玉を吐き出して、タブーに命中させる。

ポオオオオッ!!

更にヨッシーは口から炎を吐き出す。

タブー

「ぐぐぐ………図に乗るなああっ!!」

ガシッ!!

タブーの鎖がヨッシーを捕らえる。

リンク

「あ!ヨッシーが捕まった!!」

ヨッシー

「わゝ!離してよゝゝ!!」

ヨッシーはジタバタと暴れまくる。

タブー

「無駄だ。その鎖からは簡単には抜け出せ………ん?」

突然タブーは背中に違和感を感じる。

タブー

「何だ?我の背中に何かが………。」

タブーがみんなに背を向けた時……………。

全員（一部）

「あっ！？」

タブーの背中にはプリンが張り付いていた。

プリン

「プリン……………」

すると、プリンの体が風船のようにみるみる膨らんでいく。

タブー

「な、何だ……………急に体が重く……………」

タブーはふらつきながら手から鎖を離す。

ヨッシー

「ふっつ、危なっかたっつ。」

ヨッシーは慌ててタブーから離れる。

タブー

「だ、駄目だ…………耐えられん…………。」

バターーン!!

遂にタブーは地面へ落下していった。

プリン

「プリンッ!!」

グシャッ!!

タブー

「ぎゃあああっ!!」

プリンは極限まで膨れ上がり、タブーを踏み潰してしまう。

トレーナー

「す、凄い…………。」

ルカリオ

「……………プリンの大きくなるは初めて見た。」

プシユユツ

一同啞然とする中、プリンは風船のように縮んでいく。

ゼニガメ

「ゼニ、ガメガメ!!」

トレーナー

「ど、どうしたゼニガメ!?!」

突然大声を上げたゼニガメにトレーナーは驚きながら答える。

フシギソウ

「フシ、ソウソウ!!」

ルカリオ

「『僕達も攻撃してアイツを倒したい!』と言ってるぞ。」

トレーナー

「ゼニガメ、フシギソウ、リザードン……よし！やるっ！！」

リザードン

「グオオオッ！！」

トレーナーの言葉にリザードンが代表して答える。

トレーナー

「ゼニガメ！ハイドロポンプの用意だ！！」

ゼニガメ

「ゼニッ！！」

トレーナー

「フシギソウはソーラービームの用意だ！！」

フシギソウ

「フッシ！！」

トレーナー

「そして、リザードンは大文字の用意だ！！」

リザードン

「グワアアッ!!」

トレーナーの指示に三匹のポケモンは身構える。

トレーナー

「いくぞ!三位さんみ一体!!」

ドビュユッ!!

ビイイイツ!!

ゴオオオオッ!!

タブー

「ごわあああッ!!」

三匹のポケモンの大技がタブーに命中する。

リュカ

「凄い……トレーナーさんとポケモン達の心が一つになってるみた

い。」

ネス

「リュカ、僕達もやろう！」

そう言うと、ネスはリュカの手を握る。

リュカ

「……………う、うん！」

リュカはネスの手を握り返すと、二人揃ってタブーの前に立ち塞がる。

ネス

「じゃあ、PSIの中で一番最強の技をやるよ！」

リュカ

「うん！分かった！！」

リュカが答えると、二人揃って手を上に上げる。

タブー

「な、何を……………」

ネス&リュカ

「PKスターストーム!!」

ゴオオオツ!!

ネスとリュカが声を上げた後に上空から無数の流星群が落下してくる。

タブー

「ごわあああつ!!」

無数の流星がタブーに命中する。

デデデ

「ぬおっ!? こつちも危険ぞい!!」

ファルコ

「何て無茶苦茶な技なんだ!!」

ファイアー達は流星から避けるのに精一杯だった。

ソニック

「おっとっと……さてと、俺も一丁やりますか。」

ソニックは流星を避けながらタブーに接近する。

スネーク

（ムッ、あれは……。）

スネークはタブーに接近するソニックを見つけると、しゃがみ移動しながら後を追う。

ソニック

「さ〜て、決めてやる……ハアアッ!!」

パアアアッ

ソニックは金色に輝くスーパーソニックに変身した。

ソニック

「ウォー！カオスエメラルドもなしにスーパーソニックに変身できたぜ。」

ソニックは全身を見渡しながら絶賛する。

タブー

「こしゃくなああー!!」

ビビビビビビッー!!

タブーは掌からビームを放つが……………。

ソニック

「チッチッチッ、それじゃ俺を倒せないぜ。」

タブー

「何っ!?!」

ソニックはいつの間にかタブーの背後に浮いていた。

ソニック

「行くぞー!!」

ドガガガガガッ！！

タブー

「ぐおっ！がはっ！むごっ！ごえっ！」

ソニックは目にも止まらぬ速さでタブーに連続体当たりする。

スネーク

（あのハリネズミだけに任せてたまるか。）

ビュッ

スネークが高くジャンプした時……………。

ババババババッ

ピカチュウ

「ピカ！？」

サムス

「な、何の音！？」

ファルコン

「あ、あれは!?!」

ファルコンが真上を見上げると、巨大なヘリコプターに吊り橋にスネークが掴まっていた。

スネーク

(驚いたな……まさか自分の頭で描いた通りになるとはな。)

スネークは内心驚きながら銃を構える。

ズドン!ズドン!ズドン!ズドン!ズドン!

タブー

「ぐはあああつ!?!」

スネークの放った発砲が全てタブーに命中する。

ソニック

「おいおい、俺の楽しみを奪う気かよ?」

ソニックは吊り橋に掴まつてるスネークに近付いて不満気味に言う。

スネーク

「お前なあ、これは遊びじゃないんだぞ。」

ソニック

「……………まあいいさ、俺はやりたいようにやるさ。」

ソニックは再びタブーに向かおうとするが……………。

スネーク

「言うておくが、間違ってお前に命中しても俺は責任取れんぞ。」

ソニック

「別にいいさ、どうせアンタじゃ俺を当てるなんて無理さ。」

スネーク

「フッ、言ってくれるな……………」

スネークはソニックの皮肉めいた言葉を聞いて鼻で笑って再びタブーに発砲し、ソニックは素早くタブーに接近して再び攻撃を続ける。

タブー

（な、何故だ…… コイツらは私の攻撃を沢山受けたにも関わらず…… 何処にこんな力があるというのだ……。）

タブーはスネークとソニックの猛攻を受けながら疑問を持つ。

ソニック

「おっと、タイムアウトか……。」

ソニックは元の姿へと戻る。

スネーク

「…… どうやら俺も時間切れのようだ。」

ヘリコプターがゆっくり下降すると、スネークは地面へ着地する。

タブー

「も、もうこれ以上攻撃を受けたら……。」

カン！カン！カン！

タブー

「ぬおっ!？」

ザッパーーン!!

カービィがコック帽を被りながら持っていたフライパンとフライ返しを叩くと、タブーは巨大な鍋へと引っ張られるように入ってしまった。

カービィ

「ぽよ、ぽよぽよ」

カービィはおたまで煮立った鍋を掻き交せる。

ルカリオ

「……………もしかして、奴を料理してるのか？」

メタナイト

「あ、ああ……………だが、あれでもカービィは一生懸命攻撃してるからあまり突っ込まないでやってくれ。」

クッパ

（そうは言っても、ただ楽しそうに料理してる風にしか見えんな。）

それぞれ疑問を持ちながらカービィを見守る。

ポーーーーン!!

タブー

「ぐわああっ!!」

突然鍋から勢い良くタブーが出てくる。

リンク

「……よし!今だ!!」

Tリンク

「えっ!?!ば、僕も……」。

二人のリンクは飛び出てきたタブーに向かってジャンプする。

<sup>ダブル</sup>  
Wリンク

「ハアアッ!!」

二人のリンクは手の甲からトライフォースを出して、タブーを封じ

込める。

タブー

「な、何だこれは!？」

リンク

「俺は上をやるから君は下を頼む!」

Ｔリンク

「は、はい!！」

ズバババババツ!!

タブー

「ぐおおっ!？」

リンクはタブーの上半身を、Ｔリンクはタブーの下半身をマスターソードで切り付ける。

リンク

「これで……………」

Ｔリンク

「とどめだー！ー！」

ズバアアッ！！

タブー

「があああっ！！！」

二人のリンクの最後の一撃がタブーを切り上げる。

バターーン！！

タブーはそのまま地面へ落下する。

スネーク

「……………やったか？」

デデデ

「まあ、あれだけ攻撃を受ければ……………」

タブー

「う……………う……………お、おのれ……………」

タブーはゆっくりとフラフラしながら立ち上がる。

メタナイト

「ば、馬鹿な!？」

シーク

「あれだけ攻撃を受けてもまだ立ち上がるとは……………」

ウルフ

「奴は不死身かよ!？」

ワリオ

「おのれ〜!俺様の真似しやがって〜!」

ロボット

「イヤ、真似シテナイト思イマスガ……………」

タブー

「よくも…………よくも我を此処まで追い詰めたな…………この虫ケラ共があああつ!」

バリバリバリッ！！

タブーはそのまま浮かび上がり、電気を帯びながら再び巨大な羽根を出す。

タブー

「こうなれば我の全力を全て放出して……………この亜空間も世界も滅ぼしてくれるわ……！！」

フォックス

「な、何だって！？」

ソニック

「あいつ完璧にイツちやったな……………。」

ピーチ

「このままじゃ世界が……………あれ？マリオ！？」

ピーチは辺りを見回す。

タブー

「もはや後悔しても遅いわ……これで終わりにしてやる……！！」

マリオ

「……………終わりなのはお前の方だ！タブー！！」

タブー

「何！？」

タブーが後ろを向くと、マリオが力を溜めながら立っていた。

ピーチ

「マリオ！！」

ヨッシー

「いつの間にあんな所に……………」

ピット

「そう言えば、マリオさんはまだ技を出してなかったっけ……………」

メタナイト

「……………後は彼に全てを賭けよう。」

ファイター全員マリオに注目する。

タブー

「無駄だ無駄だ！！我のOFF波動の前では貴様の技など無意味だ  
あああ！！！！」

パアアアッ

タブーの羽根が光り始める。

クッパ

「マリオ！早く奴を攻撃せんか！！」

マリオ

「駄目だ………まだ奴を倒す程までパワーが溜まってない。」

リンク

「そんな……………」

デイディー

「あゝ！もう間に合わないよー！！」

タブー

「諦めろ！！貴様らごときが我を倒すなど無理だったのだ！！！！」

ルイージ

「そんな事ないさ!!」

パアアアッ

ルイージが声を上げた瞬間、タブーの周りに緑色の球状の領域が展開された。

タブー

「こ、これは一体……それより何故だ?……力が……力が抜けてゆく……。」

タブーの羽根から放った光がどんどん弱くなる。

ルイージ

「この球状の中に入った者は全ての行動がマイナスになるのさ!」

ルカリオ

「ある意味恐ろしい技だな……。」

ヨッシー

「でも、ルイーダらしい技だね……………」。

ルイーダの技に半数は苦笑いを浮かべる。

ルイーダ

「兄さん！僕がこれで時間を稼ぐから早く技を……………」。

マリオ

「ありがとうルイーダ！お陰でパワーチャージは完了だ！！」

そう言うのと、マリオは技を放つ体制に移る。

ドンキー

「行け！マリオ！！」

カービィ

「ぼよぼよ！！」

リンク

「これで決めて下さい！！」

ピーチ

「頑張つて！マリオ！！」

ルイージ

「頼むぞ！兄さん！！」

マリオ

「くらえ！！マリオファイナル！！！！」

ゴオオオオオツ！！

タブー

「ぐわあああつ！！」

マリオが放った巨大な炎の柱がタブーを飲み込む。

タブー

「そ………そんな………我が………こんな………奴らに………負け  
た………の………か………。」

ピカアアアッ

その言葉を最後にタブーは強力な光と共に消えてゆく。

「……リンク  
か、勝った。」

ルイージ

「……………兄さん、僕達勝ったんだよね？」

マリオ

「ああ、勿論さ兄弟！」

マリオは親指を上げながら答える。

デイディー

「やった〜！オイラ達勝ったんだ〜！！！」

ポポ&ナナ

「やったやったー！！！」

ピット

「パルテナ様、勝ちましたよ！」

パアアアツ。

シークはゼルダへと戻る。

ゼルダ

「全て終わったのですね……………」

ピーチ

「ええ、此処にいるみんなのお陰でね」

スネーク

「……………これで任務完了だな。」

ソニック

「あゝあ、結構楽しかったな。」

この場にいる全員が苦しい闘いに勝利した喜びを分かち合うのでした……………。

## 第二十五話、最後の切り札（後書き）

タブーを倒したマリオ達……そして次回はいよいよ最終回なので  
お見逃しなく！

## 最終回へ戻りし世界へ（前書き）

タブーを倒したマリオ達ですが、まだ何やら事件（？）が起こるようないな……。うな……。

## 最終回へ戻りし世界へへ

へ亜空間へ

タブーの驚異に打ち勝ったマリオ達は休戦していた。

ルイーダ

「僕………まだ闘いに勝ったなんて信じられないな。」

マリオ

「どうしてだ？」

ルイーダ

「だって、タブーはあんなに強かったんだよ？本当によく勝てたよね。」

メタナイト

「まあ、実感が沸かないのも無理はない………現に私もまだ今の現状を受け入れられない。」

マルス

「その気持ちは分かります………僕も祖国を失って国を取り戻す為

に敵と激戦を挑んでやっと勝利した時、受け入れるまで時間が掛かりました。」

アイク

「それは俺も同感だ。」

リンク

「それでも俺達はタブーを倒して世界を救った事には変わりありませんよ。」

マスターハンド

「その通りだ。」

突然マリオ達の前にマスターハンドが現れた。

クッパ

「マ、マスターハンド!?!」

ゼルダ

「もう動いても宜しいのですか?」

マスターハンド

「ああ、私ならもう大丈夫だ………それより、君達には本当に感謝

している。」

カービィ

「ぽよ？」

マスターハンド

「君達の活躍により亜空軍は壊滅して世界は平和を取り戻した……  
…本当にありがとう。」

ヨッシー

「いやゝ、僕達はただ当然の事をしただけだよ。」

マスターハンド

「それから、亜空軍によって切り裂かれた各場所はタブーの消滅と共に無くなったよ。」

マリオ

「じゃあ、カービィと闘ったスタジアムも……………」

リユカ

「ワリオさんと闘ったあの遺跡も……………」

ロボット

「私ノ島モ戻ッテルンデスカ？」

マスターハンド

「勿論だとも。」

ロボット

「ヨ、良カッタ……。」

マスターハンドの言葉を聞いたロボットは胸を撫で下ろす。

ピカチュウ

「ピカ………。」

ピカチュウは寂しそうな表情でサムスを見つめる。

サムス

「どうしたの？私の顔に何か付いてる？」

ピカチュウ

「ピカピカ。」

ピカチュウは首を横に振る。

サムス

「じゃあ、どうして？」

ピカチュウ

「ピカピカ、ピカピカツチュピカ。」

ルカリオ

「ピカチュウはお前のパワードスーツが壊れて落ち込んでいるようだ。」

サムス

「ピカチュウ……………」

サムスは落ち込んでいるピカチュウの頭を優しく撫でる。

サムス

「ありがとうピカチュウ……………でも貴方やみんなが無事なら私はそれでいいのよ。」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

マスターハンド

「心配はいらない。」

パチッ

マスターハンドが指を鳴らすと、サムスの前にスマッシュボールが現れる。

オリマー

「スマッシュボールで何を……………？」

スッ

スマッシュボールがサムスの中へと入っていく。

パアアアッ

すると突然サムスの全身が光り出す。

フォックス

「な、何だ!？」

シユユツ

ネス

「あっ!!」

光が止むと、パワードスーツを装着したサムスが立っていた。

サムス

「こ、これは!？」

サムスは自分を姿を見回して驚く。

マスターハンド

「私からのせめてものお礼だ。」

ピカチュウ

「ピカピカア!!」

ピカチュウは嬉しそうサムスに飛び移る。

サマス

「ピカチュウつたら……。」

ピカチュウ

「ピカッチュ！」

ファルコン

「これで全て一件落着だな。」

ドンキー

「おい！みんな〜！〜！」

ディディー

「オイラ達こんな物拾ったんだけど〜！」

ドンキーは二つのフィギュアを抱えて、ディディーは小さなフィギュアを持ち上げながらマリオ達に近付いてくる。

ファルコ

「こりゃフィギュアだな……。まさか俺達以外にいたとはなあ。」

ピーチ

「とにかく、早く復活させましょう。」

最初にピーチが赤い髪に剣士のような格好した少年のフィギュアのプレートに触れる。

パアアアッ

？

「う……うん……。」

クッパ

（ムムッ！？確かコイツは……………。）

クッパは再起動した少年を見て目を疑った。

？

「あれ？此処は一体何処だ……………？」

マルス

「君、自分が誰だか分かるかい？」

？

「は、はい……………俺はリキア地方のフェレ喉爵家の王子のロイです。」

「

アイク

「リキア地方……聞いた事ないな。」

クツパ

（マ、マズイ……あいつは我輩がフィギュアにして連れてきた小僧だ。）

クツパは忍び足でこの場から逃げ出そうとするが……。

ロイ

「ん？……あつ！お前は！！」

クツパ

（ギクッ！！）

ロイはクツパの姿を見ると大声を上げる。

ロイ

「あの時はよくもやってくれたな！！」

ロイは剣を抜いて、クッパに切り掛かろうとするが……。

アイク

「お、落ち着け！」

マルス

「そうそう、少し冷静になって！」

マルスとアイクがロイを抑える。

マリオ

「クッパ、あの子に何をしたんだ？」

クッパ

「い、いや……これには深い事情があつてだな……。」

クツパはマリオ達に事情を話した。

ルイー  
ジ

「……………成程、それじゃロイが怒るのも無理ないね。」

クツ  
パ

「だ、だが我輩はただマスターハンドの命令に従っただけであつて……………」

マスター  
ハンド

「そうだ、全て私の責任……………すまなかった。」

ロイ

「い、いや……………そういう事なら俺はもう何も言いませんよ。」

ネス

「それに、本当に悪いのはマスターハンドを操ってたタブーだしね。」

ルイージ

「それより、残りのフィギュアも起動させようよ。」

そう言うと、ルイージはミュータントみたいな生物のフィギュアとピカチュウより小柄な黄色いネズミのフィギュアのプレートに触れる。

パアアアッ

？

「ピ……………ピチュ？」

ピカチュウ

「ピカ！ピカピカ！！」

？

「ピ？ピチュピー！」

ピカチュウと小さな黄色いネズミはお互いに抱き合う。

サムス

「あの子、ピカチュウにそっくりね。」

ルカリオ

「そりゃそうだ。あの子はピカチュウの弟のピチューだからな。」

ピーチ

「あら、そうなの？……どうりでピカチュウに似てると思ったわ。」

？

「んんっ……私は今まで何を……。」

ミュータントのような生物は頭を抑えながら起き上がる。

トレーナー

「ま、まさか……。」

トレーナーがミュータントを見て驚愕する。

リユカ

「トレーナーさん、どうかしたの？」

トレーナー

「い、いや……な、何でもない。」

トレーナーは明らかに動揺していた。

トレーナー

（まさかこんな所でミュウツーに遭遇するとは……これはゲットするチャンスだ。）

トレーナーはモンスターボールを持ちながら近付く。

ミュウツー

「……………私をゲットしようとしても無駄だ。」

トレーナー

「えっ!？」

ミュウツーは背後にいるトレーナーに言う。

トレーナー

「そ、そんな……………僕は別に……………」

ミュウツー

「では、その手に持つてるモンスターボールは何だ？」

ミュウツーはトレーナーの持つてるモンスターボールに指さす。

トレーナー

「い、いやあの……………これは何も……………」

ヒモヘビ

「おい、トレーナーの奴どうしちゃったんだ？」

リュカ

「さ、さあ……………」

動揺してるトレーナーにリュカとヒモヘビは呆然とする。

ピチュー

「ピチューピー！」

ピチューはミュウツーに近付く。

ミュウツー

「ピチュー、無事だったのか。」

ピカチュウ

「ピカ？ピカピー！？」

ミュウツー

「……………ああ、下品な男に襲われたところを助けようとしたんだが  
返り討ちにあってな。」

マリオ

「下品な男つてもしかして……………」

全員ワリオを見る。

ワリオ

「な、何だ？やっと俺様のカッコ良さに気付いたか？」

ミュウツー

「貴様……………あの時はよくも……………」

フワッ

ワリオ

「わゝ！！な、何だ何だゝゝ！？」

ミュウツーが片手を上げると、突然ワリオが空中へ浮かび上がる。

ネス

「こ、これってまさかPSI！？」

ルカリオ

「いや、ただの念力だ……………それより早く止めなければ！」

〈数分後〉

ミュウツーはマリオ達からこれまでの事を全て聞いた。

ミュウツー

「……………成程、私が眠っていた間にそんな大変な事になっていたのか。」

ルカリオ

「ああ、だが我々が事件の黒幕を倒したからもう安心だ。」

ピカチュウ

「ピカピカ……………」

ピカチュウは恐る恐るミュウツーに喋る。

ミュウツー

「何だ？」

ピカチュウ

「ピカピカピ！」

ミュウツー

「フツ……………別に対した事はしてない。」

そう言うと、ミュウツーはピカチュウに背を向ける。

リユカ

「ルカリオさん、ピカチュウは何て言ったの？」

ルカリオ

「『弟を助けようとしてくれてありがとう』と言ったんだ。」

ヒモヘビ

「へえ、ちゃんと礼儀を分かってんだな。」

トレーナー

「誰かさんとは大違いだね。」

ヒモヘビ

「何だと！？俺が礼儀知らずだってか！？」

トレーナーの言葉にヒモヘビは怒り出す。

リュカ

「ヒモヘビ、少し落ち着いて……………」

リュカはヒモヘビを宥める。

マスターハンド

「…………さて、そろそろこの場所から出ようか。」

パチッ

マスターハンドが指を鳴らした瞬間、全員その場から消えてしまった。

ファイアー達は海が見える崖の上に立っていた。

マリオ

「…………丁度夕方か。」

ピーチ

「夕日が綺麗ね。」

ピット

「もし僕達がああに負けてたらこの綺麗な夕方も見れなかったかもしれない。」

カービィ

「ぽよ…………。」

ゼルダ

「そう考えると恐ろしいですわ…………。」

ガノンドロフ

「フン、いずれ俺がこの世界を支配したら、この夕日も見納めだな。」

リンク

「そんな事は俺が絶対にさせないさ。」

クッパ

「ガハハハ！そうとも、この世界は我輩が頂くのだ！！」

ルイージ

「……………どうせ兄さんに阻止されるよ。」

トリンク

「なんか海を見てると何故か懐かしい感じがする……………」

ヨッシー

「そうかな？僕は何かお腹が減ってくるんだけどなあ。」

ドンキー

「実は俺も……………」

デイディー

「ドンキー、何か情けないよ……………」

デデデ

「まったく、まるでカービイみたいな連中ぞい。」

メタナイト

「陛下、貴方も人の事は言えないのでは……。」

ピカチュウ

「ピカピ。」

ピチュー

「ピチューピ。」

プリン

「プリプリ。」

ルカリオ

「ああ、確かに美しいな……。」

ミュウツー

「……………フツ。」

トレーナー

「みんな、綺麗な夕日だね。」

ゼニガメ

「ゼニゼニ。」

フシギソウ

「フシフツシ。」

リザードン

「グウウツ。」

サムス

「この星はとても美しいわ。」

オリマー

「私の星なんて比べ物にもなりませんよ。」

ファルコン

「そう言えば、こうやって景色を眺めるのは久しぶりだな。」

フォックス

「宇宙船から眺める星も綺麗だけど、こういうのも悪くないな。」

ファルコ

「俺は空から眺めた方がいいと思うがな。」

ウルフ

「ケツ、くだらねえ。」

ワリオ

「せめてあれ位に美しい金とかだったら拝みたいものだ。」

ヒモヘビ

「ったく、ぶち壊すよなあ。」

リュカ

「そ、そうだね……。」

ネス

「……………こんなに近くで見たの初めてだ。」

マルス

「こうやって夕日が見れるのもみんなの協力があつてこそなんだね。」

「

アイク

「そついう事だな。」

ロイ

「…………俺もみんなと早く出会いたかった。」

ポポ

「ナナ、綺麗だね。」

ナナ

「そうだね。」

ピピピピッ！

ロボット

「ゲーむ&うおっちサンモ綺麗ダト言ッテルノデスネ。」

スネーク

「任務の後の見る景色は絶景だな。」

ソニック

「まさにビューティフルだぜ。」

合計42名のファイター達はそれぞれ景色を見て感想を言う。

マスターハンド

(マリオ、ルイージ、ピーチ、クッパ、ドンキーコング、デイド  
ーコング、ワリオ、ヨッシー、リンク(トウーン含む)、ゼルダ、  
ガノンドロフ、カービィ、メタナイト、デデデ、ピカチュウ、プリ  
ン、ピチュー、ポケモントレーナーのゼニガメ、フシギソウ、リザ  
ードン、ルカリオ、ミュウツー、サ姆斯、キャプテン・ファルコン、  
キャプテン・オリマー、フォックス、ファルコ、ウルフ、ネス、リ  
ユカ、マルス、ロイ、アイク、ピット、アイスクライマー、ロボッ  
ト、Mr.ゲーム&ウオッチ、スネーク、ソニックよ………いずれ  
また全員で会える事を祈っているぞ。)

スーッ

マスターハンドはそのまま姿を消してしまう。

END?

## 最終回へ戻りし世界へ（後書き）

という訳で、大乱闘スマッシュブラザーズX・亜空の使者の小説は完結しました！こんな駄作を応援してくれた皆様には本当に感謝しております！

尚、この小説はゲーム本編のムービーシーンを基準に書いてましたが、戦闘シーン等は作者がイメージして書いてますのでご了承下さい。

それから、この話の後の話を制作中……かも。

何はともあれ、これからもこの知蔵の小説を宜しくお願い致します  
！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9955e/>

---

大乱闘スマッシュブラザーズX～亜空の使者・本編～

2010年10月19日20時07分発行